



地質調査所報告

第四十二號

井上禧之助

本報告は、
地質調査所
の報告である

天文學會

LIBRARY

地質調査所報告第四十二號

大正二年十二月

目次

本邦ニ於ケル石炭

一頁

本邦産石炭ノ分類及品質

二八七頁

本邦ニ於ケル石炭

本邦ニ於ケル石炭

目次

緒言	一頁
第一章 總說	五頁
一 石炭鑛業ノ發達一斑及石炭ノ產出額	五頁
二 世界ニ於ケル石炭ノ產出額ト本邦ニ於ケル石炭ノ輸出入額	一一頁
三 石炭ノ分布	二四頁
四 石炭ノ品質	三〇頁
五 炭量	三三頁
六 結章	五七頁
第二章 炭田概觀	五九頁

A. 中生代ニ於ケル石炭……………五九頁

大嶺炭田……………五九頁

天草炭田……………六四頁

其他ノ炭田……………七三頁

B. 第三紀ニ於ケル石炭……………七九頁

一 樺太……………七九頁

中部炭田即チ内淵炭田……………八〇頁

能登呂炭田……………八八頁

幌内炭田……………九二頁

東海岸ニ於ケル石炭……………九三頁

西海岸ニ於ケル石炭……………九四頁

二 北海道……………九六頁

石狩炭田……………九六頁

	(一)	蘆別炭田	一〇四頁
	(二)	歌志内炭田	一〇七頁
	(三)	奈井江美唄炭田	一〇九頁
	(四)	幾春別炭田	一一一頁
	(五)	幌内炭田	一一三頁
	(六)	夕張炭田	一一六頁
	(七)	穗別炭田	一二一頁
		茅沼炭田	一二二頁
		雨龍留崩炭田	一二四頁
		羽幌炭田	一三二頁
		幌延炭田	一三五頁
		宗谷炭田	一三八頁
		釧路國	一四〇頁

	十勝國	一四五頁
	日高國	一四七頁
三	本州	一四八頁
	常磐炭田	一四八頁
	油戸炭田	一五八頁
	濃尾炭田	一六一頁
	熊野炭田	一六六頁
	小野田炭田	一七〇頁
	本州東北部ニ於ケル石炭	一七四頁
(一)	陸奥國	一七四頁
(二)	陸中國	一七六頁
(三)	陸前國	一七八頁
(四)	羽後國	一八一頁

	(五)	羽前國	一八四頁
	(六)	岩代國	一八五頁
	(七)	磐城國	一八五頁
		本州中部ニ於ケル石炭	一八七頁
		畿内ニ於ケル石炭	一九七頁
		中國及瀬戸内海諸島ニ於ケル石炭	一九八頁
	四	九州及琉球	二〇三頁
		筑豊炭田	二〇三頁
	(一)	小倉區域	二一〇頁
	(二)	遠賀川區域	二一一頁
	(a)	遠賀區	二一一頁
	(b)	鞍手田川區	二一五頁
	(c)	鞍手嘉穗區	二二三頁

	(d)	嘉穗區	二二八頁
	(三)	宗像區域	二三二頁
	(四)	福岡區域	二三三頁
		三池炭田	二三五頁
		唐津炭田	二四一頁
		佐世保炭田	二四八頁
		崎戸炭田	二五五頁
		松島炭田	二五八頁
		高島炭田	二六一頁
		日向ノ南東部ニ於ケル石炭	二六六頁
		八重山炭田	二六七頁
五		臺灣炭田	二六八頁
		臺灣炭田	二六九頁

本邦ニ於ケル石炭

農商務技師 井上禧之助

緒言

石炭ハ本邦ニ於ケル最モ重要ナル鑛産物ナルモ其鑛業ノ急激ナル發達ハ近年ノコトニ係レリ、約三十年前ニ於テハ幼稚ナル古法ニ依リ採掘セラレ其產出額隨テ甚タ僅少ナリ、蓋シ本邦ニ於ケル石炭鑛業ノ開發ハ往昔ニ溯ルコトヲ得ヘキモ炭田ノ地質調査ハ他ノ鑛產地ノ地質調査ト共ニ棄テ、之ヲ顧ミルモノナシ、近時一般鑛業ノ發達ハ地質ノ精調査ヲ促進スルニ至レトモ之ヲ完成セルノ地ハ僅ニ一小部分ニ止マリ、隨テ正確ニ炭層賦存ノ狀態ト炭量ノ多寡トヲ極ムルニ至ラサルハ遺憾トスル所ナリ

本邦ニ於テ始メテ地質調査ヲ施行シタルハ北海道ニシテ實ニ明治五年ナリトシ、ライマン氏其助手ト共ニ之ニ從事シタリ、爾後四年間ニ於

テ北海道主要炭田ノ豫察地質調査ハ概ネ完了シタリ、蓋シ其當時ニ於テハ炭田ノ踏査ハ甚タ困難ナルノミナラス炭層ノ露頭ヲ發見シ若クハ之ヲ追跡スルコトハ至難ノ業ニ屬シ加フルニ食料運搬ノ不便ト野營ノ困苦アリ、而モ此短日月ニ此事業ヲ結了シタル諸氏ノ功績ヤ沒スヘカラサルモノアリ、明治十二年本邦ニ於ケル地質調査ノ基礎成リ同十五年本所ノ創設セラレテヨリ以來主要ナル炭田ノ地質調査ハ他ノ鑛產地ト共ニ本所技師ニ依リ施行セラレタリ、即チ筑豊及大嶺兩炭田ハ鈴木敏氏、常磐炭田ハ大塚專一氏、天草炭田ハ金原信泰氏、小野田炭田ハ野田勢次郎氏、唐津及佐世保兩炭田ハ大築洋之助氏等之ヲ調査シタリ、然レトモ是等調査施行後既ニ幾多ノ年月ヲ閱シ今ヤ探掘ノ進捗ニ依リ明瞭トナレル地質構造ヲ研究シ及各炭田ノ炭量ヲ計算スヘキ正確ナル材料ヲ得ル爲メ更ニ精調査ヲ施行スルノ必要アルモ未タ之ニ着手スルニ至ラス、而シテ本所ハ現ニ北海道ノ鑛物調査ニ從事シ雨龍、留萌炭田ハ山根新次氏、宗谷炭田ハ岡村要藏氏、幌延炭田ハ小林儀一郎

氏之カ調査ヲ施行セリ

石狩炭田ノ地質調査ハ鑛山監督署技師大井上義近氏之ヲ施行シタリ、而シテ同氏ノ特ニ同炭田ノ炭量計算ニ關シ有益ナル助力ヲ與ヘラレタルハ感謝スル所ナリ、明治三十六年鑛山局技師木戸忠太郎、福岡鑛山監督官松田繁兩氏ハ筑豊炭田ノ精調査ヲ施行シタリ、此外本炭田ニ關シテハ各炭坑ノ技師其必要ニ應シ特ニ調査セル處アリ、臺灣ノ本邦併合後其北部ニアル炭田ハ官民ノ注意スルトコロトナリ其概調査ハ十三年前ニ完結シ、近時福留喜之助氏監督ノ下ニ更ニ再調査ヲ開始シタリ、而シテ同氏ノ同炭田ノ炭量計算ニ關シ有益ナル助力ヲ與ヘラレタルハ感謝スル所ナリ、明治三十九年ヨリ同四十一年ニ至ル三年間樺太炭田ハ樺太廳技師川崎繁太郎氏ニ依リ調査セラレ同廳囑託片山量平氏亦調査ニ從事シ此外鑛山局技師西和田久學氏、本所技師大築洋之助氏一部ノ炭田ノ調査ニ從事シタリ

以上調査ノ結果ハ本所出版ノ要報、報告、説明書等ニ記述セラレ又ハ政

府、學會等ノ種々ノ印刷物ニ公ニセラレタルモ其一部ハ之ヲ得ルニ難キモノアリ

以上調査ノ結果ハ一二ノ場合ヲ除ケハ本邦ニ於ケル炭量ヲ正確ニ計算スルコト能ハサルナリ、然レトモ之ニ依リ炭田ノ地質構造ヲ概察シ炭量ノ概數ヲ計算スルニ足レリ、實ニ多數ノ炭田ハ調査後年月ヲ經タルコト既ニ久シキモノアリ、或ハ僅ニ豫察調査ヲ施行シタルニ止マレルモノアリ、蓋シ本州、九州及四國ノ炭田ハ三四十年前ヨリ世人ノ注目スルトコロナリ、隨テ將來ニ向テ此地域ニ於テ大ナル炭田ヲ發見スルコトナカルヘシ、故ニ今後ニ於ケル調査ハ地下ノ深所ニ於ケル炭層賦存ノ有無ヲ考察シ及其賦存ノ状態ヲ明ニシ地質構造ヲ研究スルト共ニ未調査區域ノ精調査ヲ施行スルニアリ、樺太、北海道ニ於テハ炭田ノ一半僅ニ豫察地質調査ヲ經タルノミニシテ他半ハ未調査區域ナリトス、隨テ將來或ハ新炭田ヲ發見シ或ハ既知炭層ノ連續セル新炭田區域ヲ發見スルコトアルヘシ、茲ニ在來ノ不完全ナル調査材料ニ基ツキ本

邦ニ於ケル石炭ノ供給如何ヲ論スルハ其當ヲ得タルモノニアラサル
ヘシト雖モ而モ是ニ由テ以テ本邦ニ於ケル石炭賦存ノ状態ヲ察スル
コトヲ得ン

本篇ヲ草スルニ當リ鑛山局長并ニ鑛山監督署員ハ特ニ坑内圖等ヲ閱
覽スルノ便ヲ鑛山會社ニ於テハ有益ナル資料ヲ供セラレ調査上便益
ヲ得タルコト尠少ナラス、茲ニ感謝スル所ナリ

第一章 總說

一 石炭鑛業ノ發達一斑及石炭ノ產出額

石炭鑛業ノ發達一斑 石炭鑛業ノ沿革ニ關シテハ記錄ナキヲ以テ之
ヲ詳ニスルヲ得サレトモ九州ニ於テハ石炭ハ數百年間其地方ノ需用
ニ應スル爲メ探掘セラレタリト云フ、蓋シ明治維新前ニ於テハ石炭ハ
家事用ノ薪炭ニ代用セラレ又ハ製鹽用ニ使用セラレ一部僅ニ輸出若
クハ外國船ノ燃料ニ供用セラレタリ、其當時ニ於ケル鑛業ハ甚タ幼稚
ニシテ產出額隨テ甚タ僅少ナリ、九州ニ於ケル筑豊、三池、唐津、高島ノ諸

炭田、本州ニ於ケル常磐炭田、北海道ニ於ケル茅沼及白糠炭田ノ如キ其當時ニ開發セラレタリ、明治維新後開發ノ機運到來シ同元年高島炭坑ニ於テ本邦最先ノ鑿坑外國ノ技術家ニ依リ掘下セラレタリ、六年後外國人ニ依リ種々改良セラレタル高島、三池、兩炭坑ハ帝國政府ノ有ニ歸セリ、爾來各炭田ニ於テ石炭鑛業ヲ促進スヘキ企圖アリテ特ニ筑豊炭田ニ於テ著シカリシモ殊ニ大ニ發達セルモノナク唯僅ニ年々產出額増加セルノミ、明治十九年ヨリ同二十三年ニ至ル五年間ハ本邦ニ於ケル石炭鑛業ノ一新紀元ヲ劃シ大規模ノ鑛業計畫企圖セラレ運搬鐵道布設セラレ築港ノ計畫徐々ニ成ラントセリ、日清戰爭後鑛業ハ甚シク活氣ヲ呈シ產出額ハ其翌年ニ於テ著シク増大シタリ、日露戰爭モ亦石炭鑛業ニ於ケル一新紀元ヲ劃シ明治三十九年即チ戰爭ノ翌年ニ於テハ石炭鑛業ハ未曾有ノ活況ヲ呈シ鑛業上設備ノ改良及大規模ノ鑛業ノ企畫ハ大炭田ニ於ケル炭坑ニ依リ施行セラレ產出額著シク増加シタリ、斯ク近年ニ於ケル石炭鑛業ノ勃興ハ工業ノ急激ナル進歩、交通ノ

發達并ニ石炭ノ外國輸出ノ増加ニ歸スヘク其發達ニ關シテハ他日ヲ期シテ更ニ詳細ニ記述スル所アラントス

石炭ノ產出額 往昔ニ於ケル石炭ノ產出額ハ之ヲ知ルヲ得ス、明治維新前ニ於ケル產出額ノ甚タ少ナカリシハ疑ヲ入レス、明治維新後ノ七年間ハ統計ノ以テ據ルヘキナク同七年政府ニ於テ始メテ統計ヲ發表シタリ、同年以後ノ產出額次ノ如シ

年 別	產 出 額	年 別	產 出 額	年 別	產 出 額
明治七年	二〇九、五一五 <small>噸</small>	明治十四年	九三三、四一五 <small>噸</small>	明治二十一年	二、〇三八、七四七 <small>噸</small>
明治八年	五七一、六四五	明治十五年	九三六、四六一	明治二十二年	二、四〇七、二四五
明治九年	五四九、二一〇	明治十六年	一、〇一一、三四七	明治二十三年	二、六二八、六二九
明治十年	五〇二、九九九	明治十七年	一、一四八、八二九	明治二十四年	三、二〇〇、六一六
明治十一年	六八五、〇〇九	明治十八年	一、三〇三、七六八	明治二十五年	三、二〇〇、四四〇
明治十二年	八六四、二一八	明治十九年	一、三八四、九二八	明治二十六年	三、三四五、四九四
明治十三年	八八八、九三五	明治二十年	一、七五九、九一七	明治二十七年	四、三〇五、四二六

明治二十八年	四八〇九、八八一	明治三十四年	九〇九〇、三五五	明治四十年	一四、〇一〇、〇七四
明治二十九年	五、〇五八、八四三	明治三十五年	九、八四〇、〇五五	明治四十一年	一五、〇六二、六一三
明治三十年	五、二四八、〇五〇	明治三十六年	一〇、二一九、八八八	明治四十二年	一五、三三〇、六五〇
明治三十一年	六、七九七、五四九	明治三十七年	一〇、八五四、七二四	明治四十三年	一六、〇一二、九九八
明治三十二年	六、八〇四、二七九	明治三十八年	一一、六八八、二四三	明治四十四年	一七、八八七、五八〇
明治三十三年	七、五二九、七七八	明治三十九年	一三、一五四、六五九		

本表ニヨリ明治十五年ヨリ同四十四年ニ至ル間毎十年ノ産出額及毎十年間ノ總産出額并ニ其増加率ヲ見ルニ次ノ如シ

年 別	産 出 額	増 加 率
明治十五年	九三六、五 <small>千噸</small>	三四
同二十四年	三、二〇〇、六	二、八強
同三十四年	九、〇九〇、四	二、〇弱
同四十四年	一七、七八八、九	

年 別	各十年間ニ於ケル産出額	増 加 率
自明治十四年至同三十四年	一七、八二〇、四 <small>千噸</small>	三、二弱
自同三十五年至同四十五年	五六、一九〇、一	二、四
自同四十六年至同五十五年	一三三、九六三、〇	

以上増加ノ趨勢ノ今後永續スヘキモノナルヤ否ヤヲ攻究スルハ甚タ緊要ノ事項ニシテ本邦ニ於ケル石炭鑛業ノ將來ヲトスヘキモノナレトモ之ヲ解決スルニハ本邦ニ於ケル炭田地質ノ精調査ヲ遂ケテ炭層賦存ノ狀態ヲ詳ニシ正確ナル炭量ヲ計算シ太平洋沿岸諸國殊ニ支那ノ炭田地質ノ精査ヲ遂ケ東洋ニ於ケル石炭市場ト工鑛業發達ノ趨勢ヲ研究セサルヘカラサルナリ

此ノ如ク石炭ノ產出額ハ急激ナル増加ノ趨勢ニアリト雖モ年ニヨリ增加率ニ差異アルハ固ヨリ時ニ產出額ノ減少スルコトアリ、其主要ナル原因ハ工業并ニ運輸業ノ不況、炭價ノ下落、炭坑ノ變災、輸出ノ減退等ニアルヘク此等事項ニ關スル調査ハ他日ヲ期セン

明治二十八年以來筑豐炭田ハ本邦石炭總產出額ノ過半ヲ產出シ三池、常磐、石狩及唐津ノ諸炭田ハ百分ノ十乃至十五ヲ產出セリ、即チ以上ノ諸炭田ハ本邦石炭總產出額ノ百分ノ九十以上ヲ產出シ、其他ノ小炭田ハ僅ニ小額ヲ產スルニ過キス、而シテ以上諸炭田ヨリ產出セル石炭ハ

殆ント全ク有煙炭ニ屬シ無煙炭并ニ褐炭ノ產出額ハ僅ニ總產出額ノ百分ノ一乃至一、五ナリトス

石炭鑛業ノ中心 現時ニ於ケル石炭鑛業ノ中心ハ北部九州ニシテ主要ナル炭田ハ多ク此地方ニ集マリ良質ノ石炭ヲ埋藏シ本邦石炭總產出額ノ三分ノ二以上ヲ產出ス、近時北海道ノ炭田ハ世人ノ注意スル所トナリ新炭田ヲ開發スヘキ大規模ノ鑛業ハ現時各所ニ於テ企畫セラレ加フルニ水陸ノ交通ヲ促進セントスルノ機運ニ際セリ、最モ豐富ニシテ最モ重要ナル炭田ハ即チ筑豊炭田ニシテ現時其盛ヲ極ム、三池炭田ハ築港完成ノ結果其產出額急ニ増加シ產出額筑豊炭田ニ亞クニ至レルモ兩者ノ間尙甚シク逕庭アリ、然レトモ一炭坑トシテ其產出額ニ於テハ遙ニ他ノ炭坑ヲ凌ケリ、將來ニ於ケル開發ハ北海道ナリト稱セラル、現時ハ僅ニ百五十萬噸内外ヲ產出スルニ過キサルモ數多ノ有望ナル炭田ハ鐵道運搬ノ不便ト并ニ港灣ノ設備不完全ナル爲メ未タ開發セラル、ニ至ラス、常磐炭田、唐津、佐世保等肥前ノ諸炭田ノ地下深所

ニ於ケル石炭賦存ノ状態ヲ知ルノ必要上試錐ノ必要アリテ此等諸炭田將來ノ鑛業ハ全ク其結果如何ニ關ス、樺太ハ氣候寒冷ニシテ一年間僅ニ四ヶ月乃至六ヶ月ノ航海ニ止マリ交通、運搬尙甚タ不完全ナルヲ以テ近キ將來ニ於テ北海道并ニ九州ニ於ケル石炭ト競争スルコト蓋シ困難ナルモノアラン、其他ノ炭田ニ於テハ本邦ニ於ケル石炭鑛業ニ影響ヲ及ホスヘキモノ一モアルコトナク其稼行炭層ヲ埋藏セル面積小ニシテ品質劣等ナリ

筑豊炭田ノ石炭ヲ搬出スル若松、門司附近ノ地ハ人口及富力ニ於テ近時著シク増加シタリ、九州ニ於ケル其他ノ石炭輸出港ハ唐津、長崎及三池ナリトス、北海道ノ石炭ハ小樽、室蘭ニ搬出セラレ是ヨリ汽船ニ積載ス、常磐炭田ハ東京ニ近ク鐵道ノ便アリテ石炭ハ東京ニ輸送セラル、モノ多シ

二 世界ニ於ケル石炭ノ產出額ト本邦ニ於ケル石炭ノ輸出入額

年 別	産出額	増加率
千八百八十二年	三八二・五 <small>百万噸</small>	一・四強
千八百九十一年	五五一・二	一・四強
千九百一年	七八九・五	一・四強
千九百十一年	一、一四三・七	一・四強

年 別	各十年間ニ於ケル産出額	増加率
自千八百八十二年 至千八百九十一年	四、四九一・八 <small>百万噸</small>	一・四強
自千八百九十二年 至千九百一年	六、三五九・六	一・六弱
自千九百十二年 至千九百十一年	九、九九三・三	

之ヲ本邦ニ於ケル増加率ト對照スルニ次ノ如シ

年 別	日本産出増加率	世界産出増加率
明治十五年 (千八百八十二年)	三・四	一・四強
同二十一年 (千八百九一年)	二・八強	一・四強
同三十四年 (千九百一年)	二・〇弱	一・四強
同四十四年 (千九百十一年)		

年 別	日本各十年間ニ於ケル産出増加率	世界各十年間ニ於ケル産出増加率
自明治十五年 至同二十四年 (一八八二-一八九一)	三・二弱	一・四強
自同三十五年 至同四十四年 (一九〇二-一九一一年)	二・四	一・六弱

本邦ノ産出額ノ増加ハ世界ノ趨勢ニ對シ遙ニ大ナリ、而シテ増加率ハ

稍減少ノ傾向ヲ呈シ世界ノ増加率ハ殆ト一定ス
明治四十三年ニ於ケル本邦ノ產出額ハ之ヲ世界ノ產出額ニ比スルニ
僅ニ千分ノ十三ニシテ最多ナル北米合衆國ニ比スルモ僅ニ千分ノ三
十四ニシテ英國ノ產出額ノ千分ノ五十六、獨國ノ產出額ノ千分ノ六十
七ニ當リ加奈太及支那ト伯仲ノ間ニアリ、而シテ石炭ハ本邦ニ於ケル
最モ重要ナル鑛產物ニシテ明治四十四年ニ於テ總產出價額一億八百
餘圓ニ對シ其百分ノ五十三ヲ占ム、而シテ増加ノ趨勢ハ前述ノ如シ、本
邦ニ於ケル鑛業ハ更ニ大ニ發達ヲ期セサルヘカラサルナリ
石炭ノ輸入ハ一二特殊ノ場合ヲ除ケハ僅少ニシテ將來モ亦僅少ナ
ルヘシ、蓋シ支那ヨリノ輸入ハ稍増加スルノ傾向アリ、而シテ石炭輸入
ノ次第ニ増加スルハ太平洋沿岸殊ニ支那ニ於ケル石炭鑛業ノ發達ニ
歸スヘキモノニシテ大ニ注意スヘキモノナリ、明治元年以來ノ石炭輸
入額ハ次ノ如シ

年	支	那	關東州	朝鮮	英吉利	北 合衆國	濠 太利	其他	合 計
明治元年									四、〇一〇
同二年									七、一六二
同三年									五、六八六
同四年									九、一三三
同五年									一〇、八〇八
同六年									一〇、五九四
同七年									八、九九六
同八年									一二、八四一
同九年									一九、二九九
同十年									一九、一六七
同十一年									三六、六九七
同十二年									二五、八八九

同二十六年	同二十五年	同二十四年	同二十三年	同二十二年	同二十一年	同二十年	同十九年	同十八年	同十七年	同十六年	同十五年	同十四年	同十三年
七、四六五	一、二七〇八	一、四九三四	一、一三三三	四、四二一	三、九六三				三、二七〇	九、三五七	一、二、三七〇	二、二、七九〇	一、七、九五六
	四、三三	一、四〇	二、四八	九、三	四、一一						一、二、四三	三、九六二〇、二、五一一	二、六六九
											八、六一六		一、七三六
九〇	二、八六	二〇	二二						一、〇〇四	八、〇〇四		二〇	
七、五五五	一、三、四二七	一、五、〇九四	一、一、五九三	四、五一四	四、三七四	一、四、四〇三	一〇、六八四	一、三、一二六	四、二七四	一、七、三六一	二、二、二二九	三、三、四五七	二、二、三六一

同四十一年	四一〇八	—	一、二六五	二五、〇〇一	—	—	六九八	三一、〇七二
同四十二年	三一、四四一	六、九一〇	四四、三二五	二五、八二五	—	—	八、二六三	一一六、七五四
同四十三年	七八、九九九	九、六四〇	四五、九三七	三三、四七四	—	—	七七七三	一七五、八二三
同四十四年	一三五、〇二六	二七、五六六	—	一四、三七四	—	—	七一、二一六	一八四、〇八二 *一二、四三四

* ハ臺灣ニ於ケル石炭輸入額ナリ

石炭ノ輸出 ハ明治維新前既ニ開始セラレタルモ其量固ヨリ僅少ナリ、明治初年ニ於ケル輸出額ハ一萬七千噸ナルモ其増加ハ甚タ急速ニシテ二十年ヲ經タル明治二十一年ニハ百萬噸ヲ超過シタリ、石炭鑛業ノ急劇ナル發達ニ伴ヒ輸出モ著シク増加シ八年後即チ日清戰爭ノ翌年ニ於テハ二百萬噸ヲ超過シ更ニ四年後ニ於テ三百萬噸ヲ超過シタリ、而シテ輸出ハ明治三十六年ニ於テ最多ニシテ三百五十萬餘噸ニ達セリ、明治三十八年及同三十九年ニ於テハ一般鑛業界ノ不況ノ結果輸出甚シク減退シ明治三十八年ニハ二百五十七萬餘噸、同三十九年ニハ二百五十萬餘噸ニ減セリ、實ニ明治三十三年以來輸出石炭ノ量ハ殆ト

一定シテ大ナル變化ナク而モ東洋市場ニ於ケル石炭ノ需要益盛ナリ、是レ蓋シ隣邦ニ於ケル石炭鑛業ノ發達セル爲メ本邦炭ノ需要増進セサルニ反シ本邦ニ於テハ工業ノ發達ニ伴ヒ其需要ノ増加シタル結果ナルヘシ、明治元年以來ノ輸出額ハ次ノ如シ

明治元年	一六、七七七 ^期	同十一年	二〇五、八四三 ^期	同二十一年	九九二、〇二四 ^期
同二年	三三、七五〇	同十二年	一九七、三二八	同二十二年	一、〇七一、八八七
同三年	五六、八四八	同十三年	二八八、四八三	同二十三年	一、三三四、三八六
同四年	六四、七五二	同十四年	二九九、五三五	同二十四年	一、二六一、〇二七
同五年	五九、一四六	同十五年	三二九、八八二	同二十五年	一、三二〇、九二二
同六年	一四八、五六一	同十六年	三九五、七九九	同二十六年	一、五二九、七一八
同七年	一一八、五一六	同十七年	五二七、六三〇	同二十七年	一、七二九、六二八
同八年	一三三、二六四	同十八年	五九一、〇二七	同二十八年	一、八七八、八〇七
同九年	一六六、八九一	同十九年	六八一、七九二	同二十九年	二、二四一、一二三
同十年	一六二、六〇六	同二十年	七一六、五四三	同三十年	二、一四八、九五二

同三十一年	二、二四二、九七〇	同三十六年	三、五〇二、〇八一	同四十一年	二、九六〇、四〇〇
同三十二年	二、五五三、二三七	同三十七年	二、九四四、四六〇	同四十二年	二、九二七、九四六
同三十三年	三、三三九、八九一	同三十八年	二、五七四、〇六一	同四十三年	二、八七四、三〇九
同三十四年	三、〇〇九、八〇〇	同三十九年	二、五〇一、九六一	同四十四年	三、一一四、九六五
同三十五年	三、〇一五、三六二	同四十年	三、〇一八、八八二		

輸出石炭ハ良質ノ有煙炭ニ屬ス、以上舉クルトコロニ依リ本邦ニ於ケル石炭ノ消費高ヲ推測スルニ大要左ノ如クナルヘシ

年 別	消 費 高	年 別	消 費 高
明治七年	九九九九五 <small>期</small>	同十二年	六九二、七七九 <small>期</small>
同八年	四五一、二二二	同十三年	六二二、八一三
同九年	三八四、三一八	同十四年	六六六、三三七
同十年	三五九、五六〇	同十五年	六二八、八〇八
同十一年	五一五、八六三	同十六年	六三九、八〇九

同 三 十 年	同 二 十 九 年	同 二 十 八 年	同 二 十 七 年	同 二 十 六 年	同 二 十 五 年	同 二 十 四 年	同 二 十 三 年	同 二 十 二 年	同 二 十 一 年	同 二 十 年	同 十 九 年	同 十 八 年	同 十 七 年
三、一六九、六四七	二、八六八、一三九	三、〇〇一、〇三八	二、六一三、六〇三	一、八二三、三三一	一、八九二、九四五	一、九三九、五八九	一、四〇五、八三六	一、三二九、八七二	一、〇五一、〇九七	一、〇五七、七七七	七、一三、八二〇	七、二五、八六七	六、二五、四三七
同 四 十 四 年	同 四 十 三 年	同 四 十 二 年	同 四 十 一 年	同 四 十 年	同 三 十 九 年	同 三 十 八 年	同 三 十 七 年	同 三 十 六 年	同 三 十 五 年	同 三 十 四 年	同 三 十 三 年	同 三 十 二 年	同 三 十 一 年
一、四九六、九一三	一、三、三一四、五一二	一、二、五二九、四五八	一、二、一三三、二八五	一、一、〇〇九、九三〇	一、〇、六七四、七〇五	九、四一四、六七四	八、五三七、四二〇	六、八三九、九六五	六、八九九、〇三九	六、一九四、九〇七	四、三九〇、〇四一	四、三〇三、〇三九	四、五九七、二四九

本表ニヨリ明治十五年ヨリ同四十四年ニ至ル毎十年ノ輸出額及毎十年間ノ總輸出額并ニ其増加率ヲ見ルニ次ノ如シ

年別	輸出額	増加率
明治十五年	三二九・九 <small>千兩</small>	三・八強
同二十四年	一・二六・一・〇	二・四弱
同三十四年	三〇〇・九・八	一・〇弱
同四十四年	三・一五・〇	

年別	産出増加率	輸出増加率
明治十五年	三・四	三・八強
同二十四年	二・八強	二・四弱
同三十四年	二・〇弱	一・〇強
同四十四年		

輸出額ト産出額トノ増加率ヲ見ルニ次ノ如シ

年別	總輸出額	増加率
自明治十四年 至同十五年	七・八〇・二・〇 <small>千兩</small>	二・八
自同十四年 至同三十五年	二一・八九五・〇	一・三強
自同三十四年 至同四十五年	二九・四三四・〇	

年別	各十年間ニ於ケル 産出増加率	各十年間ニ於ケル 輸出増加率
自明治十四年 至同三十五年	三・二弱	二・八
自同三十四年 至同四十五年	二・四	一・三強

即チ輸出増加率ハ比較的減退ス、換言スレハ產出増加率ハ小ナレトモ輸出増加率ハ輸入額ノ増加ニ對シ減退ス、是レ本邦ニ於ケル石炭消費額ノ増加ヲ示スモノナリ、故ニ本邦ニ於ケル石炭ノ用途ト消費量トヲ調査シ輸出地ニ於ケル狀況并ニ炭價ノ如何トヲ攻究シテ石炭鑛業ニ遺憾ナキヲ期セサルヘカラス

三 石炭ノ分布（第一版參照）

地理上ノ分布 石炭ハ本邦ノ北端樺太ヨリ南ハ臺灣ニ至ルマテ各所ニ產出ス、石炭鑛業ノ中心ナル北部九州ハ廣大ニシテ最モ豊富ナル炭田ヲ包括ス、即チ筑豊、三池、唐津、高島等ニシテ海岸ニ近ク甚タ便利ノ位置ニアリ、若クハ海岸ヨリ甚タ遠カラスシテ鐵道ニ依リ連絡シ工業ノ發達ヲ促進セリ、中部北海道亦廣大ナル炭田ヲ有シ現時交通機關即チ鐵道ノ敷設并ニ築港ニ依リ漸次發達セントス、其他ノ重要ナル大炭田ハ北海道ノ西海岸ニ近ク賦存シ其他未調査炭田數多アリ、實ニ北部九州ノ炭田ハ數十年間大資本家并ニ有名ナル鑛山技師ニ依リ稼行セラ

レタルモ北海道ノ炭坑ハ久シク之ヲ顧ミルモノナク唯僅ニ一大會社
ノ稼行ニ委シ其他ハ小鑛業家ノ經營セルモノニシテ投下セシ資本ニ
於テモ之ヲ九州ニ比ス可ラス、是レ蓋シ交通機關ノ不完全ナルト市場
ト相距ル遠キヲ以テナリ、加之此等炭田區域ニハ未タ開墾セラレスシ
テ住民ナキ森林地多ク地質調査未タ施行セラレサルナリ、近時漸ク經
驗アル鑛山技師并ニ資本家之ニ注意スルニ至レリ、其炭田ノ面積、炭層
ノ厚サ、炭質等ニ依リ北海道ノ石炭鑛業ハ將來最モ有望ニシテ或ハ九
州ニ於ケル石炭ト競争ノ位置ニ立ツニ至ルヤ未タ知ル可ラサルナリ
本州ハ炭田ノ面積ニ於テ最モ大ニシテ石炭ハ東北部ノ北端ヨリ中國
ノ西端ニ至ルマテ各所ニ散在スルモ炭質并ニ炭量ニ於テハ遙ニ九州
及北海道ニ劣レリ、太平洋沿岸ノ常磐炭田ハ本州中最大ナルモノニシ
テ中國ノ西端ニアル小野田炭田之ニ亞ク、此兩炭田ハ市場ニ近キト海
陸ノ運輸便ナルトニヨリ往昔ヨリ稼行セラレタリ
四國ニハ有名ナル炭山ナク唯品位劣等ナル薄層ノ石炭處々ニ散在ス

ルノミニシテ現時稼行セラル、モノナシ

樺太ハ其中部ニ廣大ナル炭田ヲ有スルモ北海道ニ於ケルト同シク不利ノ地ニアリ、加フルニ氣候亦甚タ不利ナリ、隨テ稼行ニ甚タ困難ナルモノアラン、二年間樺太廳ハ西海岸ニ於テ石炭ヲ試掘シタリ

臺灣ニハ北部ニ一炭田アリ、其埋藏スル炭層ハ厚サ比較的薄ク炭質亦劣等ナルモ運搬便ナルト其附近ニ石炭ナキヲ以テ往昔ヨリ小規模ニ稼行セラレタリ

石炭ノ分布ハ第一版ニ示スカ如シ

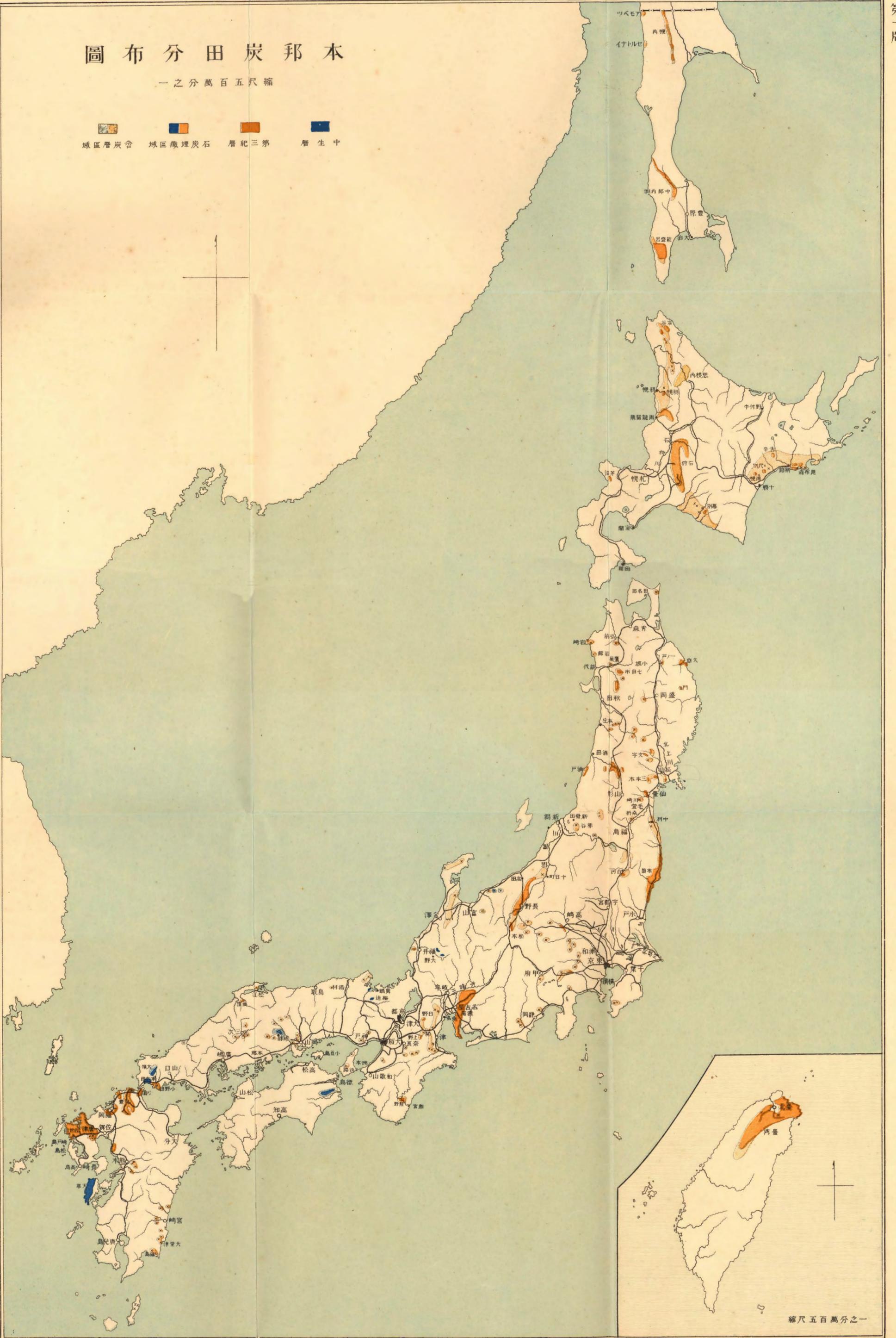
地質上ノ分布 石炭ハ本邦ニ廣ク分布シ寧ロ新期ノ地層中ニ埋藏セラル、最古期ニ屬スル石炭ハ中生層ニアリテ重要ナラス、備中ノ三疊紀層、長門ノレーチツク層ハ石炭ヲ埋藏シ其長門ニ産スルモノハ海岸ニ近キヲ以テ往昔ヨリ小規模ニ稼行セラル、中生層殊ニ中部本州、中國即チ越前、丹波、丹後、長門ノ珠羅紀ト思惟スヘキ地層中ニアル石炭ハ處々ニ小規模ニ稼行セラル、長門大嶺炭田ハ其最モ大ナルモノニシテ產出

本邦炭田分布圖

縮尺五萬分之一



 含炭層區域 石灰埋藏區域 第三紀層 中生層



縮尺五萬分之一

額亦稍大ナルモ僅ニ七萬二千三百五十四噸ニ滿タス、中部四國ニ於ケル白堊紀層ノ石炭ハ品位劣等ニシテ重要ナラス、肥後、天草、炭田ノ地質年代ハ調査未タ完カラスシテ或ハ第三紀ニ屬スヘシト云ヒ或ハ白堊紀ニ屬スヘシト稱セラル、モ茲ニハ在來ノ鑑定ニヨリ白堊紀層トナセリ、本炭田ハ沿岸便利ノ地ニアリテ產出額大嶺、炭田ニ亞ク、紀伊熊野炭田ハ永ク白堊紀層ニ屬スト思惟セラレタルモ廣瀨、大築兩氏ノ化石ノ調査ニ依リ其第三紀層ナルヲ知レリ、概言スレハ中生代ノ炭田ハ中部本州、中國、四國及九州ニ於テ古岩層上ニ小區域ニ散在シ一ニヲ除ケハ其分布ノ區域狹小ナリ

含炭中生層ハ頁岩、砂岩ヨリ成リ疊岩ヲ挾メリ、地層ニハ褶曲斷層甚タ多ク激甚ナル變動ヲ受ケタルヲ示セリ、本層ハ亦處々ニ火成岩ノ爲ニ貫通セラレ其附近ノ岩石并ニ炭層ハ接觸變質作用ヲ受ケ變質セルコト多シトス

第三紀層ハ最モ豐富ニシテ最モ重要ナル炭層ヲ埋藏ス、而シテ其下部

層ニアルモノハ上部層ニ於ケルモノヨリ甚シク重要ナリトス
下部層ハ頁岩、砂岩及蠻岩ヨリ成リ時ニ凝灰石ヲ挾ミ多量ノ石炭ヲ埋
藏ス、本層ハ變動ヲ受ケ褶曲及斷層甚タ多キモ中生層ニ於ケルカ如ク
甚シカラス、處ニヨリ火山岩ノ噴出亦甚タ多ク石炭ハ爲ニ變質作用ヲ
受ク、前述ノ如ク九州及北海道ノ炭田ハ最モ廣大ニシテ且ツ價値アル
モノナリ、常磐炭田之ニ亞キ臺灣炭田及長門小野田炭田第三位ニアリ、
樺太ノ炭田ハ廣大ナリト稱セララル、モ未タ全ク開發セララル、ニ至ラ
ス

以上各所ニ於ケル含炭層相互ノ關係ハ未タ充分明ナラサレトモ中新
期ニ屬スルモノナルヘシト云フ、近時横山博士ハ三池炭田ニ産スル化
石ニ依リ同炭田ハ始新时期ニ屬スルモノナルコトヲ證セリ、北海道及樺
太ニ於ケル最下部ノ炭層ハ甚シク白堊紀層ニ接近シ兩者ノ間ニハ蠻
岩層アリテ不整合ヲ見ス、是等ノ事實ヨリ推測スルニ本層ハ第三紀ノ
最下部若クハ白堊紀ノ最上部ニアラサルナキヤノ疑アリ、本州、九州及

四國ニ於テハ含炭第三紀層ハ直ニ古期岩層ヲ不整合ニ被覆シ北海道ニ於ケルカ如キ關係ヲ見ルコト能ハスシテ層位上ノ關係ヲ知ルコト能ハス、含炭第三紀下部層ハ植物并ニ動物化石ヲ埋藏スルモ未タ以テ其地質年代ヲ確定スルニ足ラス、實ニ今日ニ於テ各炭田ニ於ケル各炭層ノ層位ヲ比較スルコト能ハス、將來精密ナル地質調査施行セラレ本層ノ層位確定セラル、ニ至ルニアラサルヨリハ本層ハ在來ノ所說ニ從ヒ寧ロ中新期ニ屬スト思惟スルノ至當ナルヲ想フ

上部層ハ柔軟ナル砂岩及頁岩ヨリ成リ變岩及凝灰岩ヲ挾ミ、若クハ粘土、砂礫層ヨリ成リ火山灰ヲ挾メリ、本層ハ變動ヲ受クルコト少ナク隨テ緩慢ナル波狀ヲナシ斷層亦小ナリ、重要ナル炭田ハ本州東北部及中部ニアリテ羽前最上川ノ沿岸炭田、陸前仙臺附近ノ炭田、尾張美濃ニ於ケル濃美炭田等ヲ著シトスルモ之ヲ下部層ニ於ケルモノト比スヘカラス、其地質年代ハ未タ明ナラサレトモ層位上并ニ岩石上ノ關係及化石ニ依リ之ヲ見ルニ本層ハ蓋シ最新期ニ屬スルモノ、如シ

主要ナラサル炭田ニシテ第三紀上下部層ノ何レニ屬スルヤ明ナラサルモノアリ、是等第三紀層ノ多クハ其附近ノ岩層トノ關係明ナラス、又ハ其層位ヲ確定スヘキ化石ヲ埋藏セサルカ如シ
斯ノ如ク本邦ノ重要ナル石炭ハ中新紀ニ屬シ本邦ノ石炭鑛業ハ即チ之ニ據レリ、中生代并ニ最新期ノ石炭ハ品質并ニ炭量ニ於テ遙ニ前者ニ劣リ小規模ニ各所ニ稼行セラル、ノミ

四 石炭ノ品質

石炭ノ種類 ハ無煙炭、半無煙炭、半瀝青炭、瀝青炭(高度及低度)黒褐炭及褐炭ニ分ツ、其分類法ハ清水技師ノ報告ニ詳ナリ、半無煙炭ハ主ニ中生層ニアリテ甚タ稀ニ第三紀層ニ於テ之ヲ見ル、煽石及無煙炭ハ接觸變質ノ結果石炭ノ一部ノ變化ナリトス、中新紀ニ屬スル石炭ハ主ニ瀝青炭ニシテ最新統ニ埋藏セラル、モノハ全ク褐炭ニ屬ス
石炭ノ用途 無煙炭及半無煙炭ハ普通石灰、セメント製造用燃料又ハ煉炭原料ニ供セラレ若クハ家事用等ニ使用セラル、瀝青炭ハ蒸氣發生

用燃料并ニ瓦斯及骸炭原料ニ使用セラレ普通日本炭ト稱セラル、モ
ノ即チ是レナリ、褐炭ハ蒸氣發生用ニ使用セラレ其劣等ナルモノハ主
ニ製絲、製鹽等ノ小工場ニ燃料トシテ其地方ニ使用セラレ又ハ薪炭ニ
代用セラル、是等各種ノ用途ニ應スル消費高ハ次ノ如シ

年 別	船 舶 用	鐵 道 用	工 場 用	製 鹽 用
明治十九年	二三七、一三〇 <small>噸</small>	一五、三〇五 <small>噸</small>	一四六、五六九 <small>噸</small>	四五五、七九四 <small>噸</small>
同二十年	二五一、九八二	一九七六七	一六三、八〇四	三九四、九三八
同二十一年	三八八、九九八	二六、九一七	二八六、〇〇二	三八三、七七八
同二十二年	三九二、九四三	四四、〇二三	三六七、四五〇	三五八、八七一
同二十三年	四六〇、六四一	六八、八二五	四二四、〇九〇	四七六、六九五
同二十四年	四四三、九三四	九八、五九四	五二一、二四八	四五四、八五三
同二十五年	四三一、五八七	一一八、二八六	七二二、六五〇	四三九、三一七
同二十六年	四三八、〇一七	一二六、〇六三	七二八、九五六	四五七、八六四

同 二 十 七 年	五二三、六〇三	一六七、八八六	一、一〇一、三九七	五三七、四一八
同 二 十 八 年	七四六、六七六	二二二、九九一	一、一九八、〇七二	五二一、五五四
同 二 十 九 年	六九二、五八四	二六〇、〇二一	一、五六五、四二九	五五一、〇一一
同 三 十 年	八九三、一三六	八五〇、一六七	一、八四六、八九一	五〇〇、五〇四
同 三 十 一 年	七九一、一五八	三九〇、五六六	二、五四八、〇六七	六六三、一二二
同 三 十 二 年	一、二四四、七九一	四九九、九四四	二、六一五、四二六	六七四、六八〇
同 三 十 三 年	一、四六三、八一二	五〇六、九五九	二、六五二、八〇〇	六三八、六〇一
同 三 十 四 年	一、三九六、七四五	六二五、六九四	三、八四四、四三四	八一七、七二一
同 三 十 五 年	一、五三四、二七二	七〇四、〇五五	三、四七四、四六一	七八八、九九八
同 三 十 六 年	一、七四四、三四二	七三二、九九二	三、六七四、五六七	八二二、二四四
同 三 十 七 年	二、二二八、一一七	七五八、七五五	三、七〇五、二八〇	七二三、二八七
同 三 十 八 年	一、九九七、〇六九	八四一、五九一	三、七七六、三七八	四九八、八六二
同 三 十 九 年	一、八〇四、七八七	一、〇四一、八三五	三、七七四、一〇〇	六五九、九二七
同 四 十 年	二、三三三、〇四五	一、〇四三、八七四	四、四二〇、五四五	七七四、一九八

同四十一年	二,三三三,五一〇	一,二四七,一六〇	四,三二五,〇六一	八二二,一六四
同四十二年	二,四〇八,四二二	一,二三七,九〇一	四,三一九,〇七五	九〇五,五七九
同四十三年	二,〇六九,六一四	一,一三三,四,五七九	四,七七五,八〇六	七四二,四一五

石炭ノ品質ト其分布トノ關係ハ本邦ニ於テハ最モ趣味アル問題ニシテ火山岩ノ噴出ノ爲メ其甚シク變質セルコトハ明ニ之ヲ目撃スルコトヲ得ヘク而シテ地質年代ノ相違ニ依リ其炭質ニ差異アルコト亦之ヲ知ルヲ得ヘシ、而シテ同一ノ地層ト思惟スヘキ地層ニアリテモ炭質ニ稍大ナル相違アリ、其原因ヲ攻究スルコトハ最モ緊要ナルモ未タ悉ク之ヲ明ニスルコトヲ得ス、蓋シ地層ノ變動ト成層後噴出セル火山岩ノ爲ニ炭質良好トナルモノアリ、是等ノ事項ニ關シテハ更ニ攻究スルトコロアルヘシ

五 炭 量

炭量調査ノ意義 地下ニ埋藏スル礦物ハ正確ニ其量ヲ計算スルコト不可能ノ事項ニ屬スト雖モ其概數ヲ知ルニアラサレハ或ハ一國ノ礦

業政策ヲ確立シ若クハ事業經營ノ方針ヲ定ムルコト能ハサルナリ、茲ニ於テ鑛量調査ノ必要アリ、即チ鑛量ノ調査ハ二様ニ之ヲ解釋スルヲ得ヘシ、(一)一國ニ於ケル各種鑛物ノ量ヲ概算スルコト、(二)一區域ニ於ケル各種鑛物ノ量ヲ概算スルコト是ナリ、而シテ鑛物中稍正確ニ其埋藏量ヲ計算スルコトヲ得ルモノハ鐵鑛及石炭トス

一國ニ於ケル炭量ノ概數ヲ計算スルコトハ其國ニ存在スル石炭ノ多寡ヲ查察シテ將來ニ於ケル石炭鑛業ノ如何ヲ攻究スルヲ以テ目的トシ其炭量ハ固ヨリ正確ナルヲ期スヘント雖モ而モ二三割ノ差異ハ將來ノ政策ヲ定ムル所以ニ於テ大ナル影響ヲ及ホスコトナカルヘシ、一區域ノ炭量ヲ計算スルハ其區域ニ存在セル石炭ノ多寡ヲ查察シテ探掘ノ適否ヲ判定シ探掘ノ基礎ヲ定ムルモノナルヲ以テ二三割ノ差ト雖モ之ヲ忽ニスヘカラサルノミナラス、實ニ其差異ニ依リ石炭ヲ探掘シテ收益アルモノナルヤ否ヤヲ決スルコトアリ、蓋シ一國ノ炭量ヨリ之ヲ見レハ甚々小額ナリト雖モ之ヲ忽ニスヘカラサルナリ

本篇記載セル炭量ハ第十二回萬國地質學會議ノ發議ニ基ツキ其指定セル方法ニ準シ算出シタルモノニシテ唯概數ヲ知ルニ止メ二三割ノ差異ノ如キハ固ヨリ之ナキヲ保スル能ハサルナリ、想フニ本邦ニ於ケル石炭鑛業ノ状態ヲ察スルニ筑豊炭田ノ如キハ既ニ開發ノ極ニ達シ其炭量ノ如キハ各炭坑ニ依リテ詳細ニ之ヲ計算シ之ニ依テ其事業ヲ經營スルヲ以テ特ニ炭量ヲ計算スルノ必要ヲ認メサルナリ、其最モ急務トスルトコロハ精細ナル地質調査ヲ施行スルニアリ、即チ斷層ノ有無及其落差、各炭層相互ノ關係等ヲ明ニスルニ於テハ事業經營上多大ノ效果アルハ疑ヲ容レサルノミナラス其結果ハ自ラ正確ナル炭量ヲ算出スルニ至ルヘシ、之ニ反シ北海道炭田ノ如キハ今ヤ漸ク開發ノ端緒ニアリ、隨テ炭量ヲ計算シテ事業經營ノ方針ヲ定メサルヘカラス、肥前ノ各炭田、常磐炭田ノ如キ地下深所ニ於ケル炭層賦存ノ状態ヲ究ムルヲ以テ急務ナリトシ、其如何ハ直接ニ鑛業ノ盛衰ニ關係スルモノナリ、筑豊炭田ノ石炭ハ或ハ二十年ニシテ採掘シ盡サルヘシト云ヒ或ハ

三十年ニシテ盡クルト稱スト雖モ現ニ探掘セラレサル炭層ハ其數甚
タ多ク而モ之ヲ他ノ炭田ニ於ケル石炭ニ比シ敢テ劣等ナルニアラザ
ルヲ以テ近キ將來ニ於テ或ハ開發セラル、ノ時アルヘク是等ノ石炭
ヲ計算スルニ於テハ炭量蓋シ莫大ナルヘシ、而シテ之ヲ探掘スルハ本
石炭ヲ利用スルノ途ヲ講スルヲ以テ最モ急務ナリトス、現ニ此等ノ石
炭ノ一部ハ石炭探掘ノ際探掘セラレテ既ニ坑外ニ山積セルトコロア
リテ其處置ニ困難ヲ感スルコトアルニ至レリ、探掘法ノ如キモ甚タ進
歩セリト雖モ尙之ヲ改良スルノ方法ヲ講スルコト急務ナルヘク探掘
率ノ一般ニ百分ノ七十二過キサルカ如キハ大ニ注意スヘキ事項タル
ヘシ

炭田ノ調査ハ未タ甚タ不完全ナルヲ以テ炭量計算ノ基礎甚タ薄弱ナ
リ、故ニ本篇ヲ草スルニ當リ各炭田ニ於ケル炭層賦存ノ状態ヲ記述ス
ルヲ以テ主眼トシ炭量計算ノ如キハ敢テ之ニ重キヲ置カスシテ其大
要ヲ知ルニ止メ各炭田ニ依リ各其正確ノ度ヲ推測スルニ便ナラシメ

ンコトヲ方メタリ、而シテ第一種炭量ノ如キハ本邦ニ於テハ之ヲ計算
スルコト殆ント不可能ナル場合多シト雖モ而モ其計算ハ過少ニ失シ
炭量ノ是ヨリ小ナルコトナカルヘシ、第二種炭量ハ其計算ノ或ハ過大
ニ失スルモノナキヲ保セサレトモ相殺セハ本邦ノ炭量ハ或ハ之ヨリ
小ナルコトナカルヘシ

炭量計算ノ方法 炭量ノ計算ハ嘗テ鐵鑛ヲ計算セルトキト同様ノ方
法ヲ用キタリ

第一種炭量ハ實測ニ基ツケル炭量ニシテ最モ正確ナルモノナレトモ
本邦ニ於テ之ニ算入スヘキモノ甚タ少ナシ、蓋シ本邦ニ於テハ一二ノ
場合ヲ除ケハ地下深所ニ於ケル石炭賦存ノ状態ハ試錐又ハ其他ノ方
法ニ依リ之ヲ證明シタルモノ少ナク隨テ正確ニ石炭ノ埋藏量ヲ示ス
コト能ハス、而シテ試錐シタルコトナク若クハ二三ノ試錐ヲ施行シタ
ル場合ト雖モ炭層ノ露頭ノ厚サ二尺五寸アリテ稍遠距離ニ之ヲ追跡
スルコトヲ得ルトキハ其地質構造ノ如何ニ依リ地下三百尺乃至五百

尺ニ至ル迄ノ炭層ヲ計算シテ之ヲ第一種炭量ニ加ヘタリ、而シテ第一種炭量ハ安全ヲ計リ之ヲ過小ニ計算シタリ

第二種炭量ハ未タ全ク實測セラレサル炭層ニシテ地形及地質ノ關係并ニ其連續セル炭層ヨリ其分布ヲ測定シテ計算セルモノナリ、本邦ニ於テハ炭田ノ精査未タ施行セラレサル所多キヲ以テ炭量ノ計算ハ多ク概測ニ基ツケリ、即チ其材料甚タ不完全ニシテ地質上ノ關係并ニ連續セル炭層ノ關係ヨリ其分布ヲ推測シ計算シタリ、深サハ地下四千尺ヲ限レルモ地質上ノ見地ヨリ遙ニ此制限ニ達セスシテ千尺若クハ二千尺ノ地下マテ計算シタルモノ少ナカラス

石炭ノ價值 石炭ハ其賦存ノ狀態多寡等ニ關シ若クハ運搬等ノ關係上現今直ニ採掘シ得ヘキモノト否ラサルモノトアリ、即チ第一ハ現今ノ狀態ニ於テ經濟上稼行シ得ヘキ厚サト稼行シ得ヘキ深サニ賦存スルモノ、第二ハ現時ノ狀態ニ於テ稼行シ得ヘキ厚サヲ有スレトモ地下深キニアリテ現今採掘シ能ハサルモノナリ、此外種々經濟上ノ事情ア

リ、而シテ第十二回萬國地質學會議ノ規定ニ據レハ第一ニ屬スルモノハ厚サ一尺以上ニシテ地下四千尺以上ニアル炭層ヲ云ヒ海底下ニ於ケルモノヲモ包括ス、第二ニ屬スルモノハ厚サ二尺以上ニシテ地下四千尺ヨリ六千尺ノ間ニアル炭層ヲ包括ス、然レトモ本邦ニ於テ之ヲ見ルニ地下四千尺迄ノ炭層アリテ經濟上採掘シ得ヘキ炭層ハ甚タ少ナク殊ニ一二尺ノ炭層ニシテ四千尺ノ深サニ稼行シ得ヘキモノナシ、蓋シ現今ノ狀態ニ於テ筑豐炭田、三池炭田等ヲ除ケハ地下二千尺以上ノ深處ニアル炭層ニシテ採掘シテ果シテ經濟上有利ナル炭田アリヤ否ヤ、現ニ常磐炭田ノ如キハ現今ノ狀態ニ於テハ果シテ深サ千尺以上ニ採掘シ得ヘキヤ否ヤ疑ナキ能ハサルナリ、此ノ如キ狀態ニアルヲ以テ第二ニ屬スル炭量ノ如キハ之ヲ計算セサルナリ

石炭ノ埋藏量 以上記載セル方法ニ基ツキ計算シタル炭量ハ次ノ如シ

第一種炭量

炭	田	厚	サ	面	積	種	類	數	量
中生層		二尺	一三		一、四 <small>平方基米</small>				三、三〇〇、〇〇〇 <small>噸</small>
大嶺		三	一一二		〇、四	半	無煙炭		一、〇〇〇、〇〇〇
天草		四	一六		一、〇	半	無煙炭		二、三〇〇、〇〇〇
第三紀層					一六二、二	半	青煙炭		九四四、八〇〇、〇〇〇
一、樺太					三、〇				一八、〇〇〇、〇〇〇
中部					三、〇	低度瀝青炭			一八、〇〇〇、〇〇〇
「トリマオロ」					一、五				三、五〇〇、〇〇〇
内淵					一、五				一四、五〇〇、〇〇〇
二、北海道					三、三、四				三二九、三〇〇、〇〇〇
石狩					二五、二	低度瀝青炭			三〇一、六〇〇、〇〇〇
蘆別					五、〇				八六、五〇〇、〇〇〇
一					〇、五				二一、〇〇〇、〇〇〇
二					四、五				六五、五〇〇、〇〇〇

歌志内	一	三七—一七〇	一七〇	一三三	五四〇〇〇〇〇〇〇〇
	二	一〇〇—一〇五	〇六	〇四	二八〇〇〇〇〇〇〇〇
	三	三七—四七	〇三	〇三	二二〇〇〇〇〇〇〇〇
奈井江、美唄	一	一〇—一五	一三	一三	四〇〇〇〇〇〇〇〇
	二	二〇—二五	〇四	〇四	二四三〇〇〇〇〇〇〇
	三	一〇—一二	〇五	〇五	一八五〇〇〇〇〇〇〇
幾春別	一	一〇—三五	〇九	〇九	四、五〇〇〇〇〇〇〇
	二	三〇—三五	〇三	〇三	一、三〇〇〇〇〇〇〇
幌内	一	一〇—一三	三六	三六	二〇、一〇〇〇〇〇〇〇
	二	九—二四	五三	五三	三、八〇〇〇〇〇〇〇
	三	一八—二四	二三	二三	一六、三〇〇〇〇〇〇〇
	四	九—一三	三〇	三〇	三〇、二〇〇〇〇〇〇〇
	五	一八—二四	二三	二三	一八、二〇〇〇〇〇〇〇
	六	九—一三	三〇	三〇	一二、〇〇〇〇〇〇〇〇

夕張	一六—三五	八・五		八六・五〇〇・〇〇〇
一	二八—三五	五・五		六六・〇〇〇・〇〇〇
二	一六—一八	三・〇	低度瀝青炭	二〇・五〇〇・〇〇〇
茅沼	二〇—二二	〇・八		七〇〇〇・〇〇〇
雨龍、留崩	五—五八	一・九	同	一三・二〇〇・〇〇〇
「ポロニタチ ペツ」上流	三〇—五八	〇・四		七〇〇〇・〇〇〇
一	五〇—五八	〇・二		四・二〇〇・〇〇〇
二	三〇—三六	〇・二		二八〇〇・〇〇〇
「ポロニタチ ペツ」下流	七—二五	〇・五		二五〇〇・〇〇〇
一	七—一〇	〇・四		一五〇〇・〇〇〇
二	二〇—二五	〇・一		一〇〇〇・〇〇〇
「ルルモツペ」	一五—一七	〇・二		一三〇〇・〇〇〇
「オピラシ ペツ」	四—一五	〇・三		一四〇〇・〇〇〇
大和田	五	〇・五		一〇〇〇・〇〇〇

小野田	船木	小野田	熊野	濃尾	油戸	南部	中部	北部	常磐	三、本州	春鳥	別方、大阪	釧路
三一—五	三一—五	三一—二	二—三	二、五—四	四—六	三一—五	一〇—一四	二—二、五	二—一四	一、五—一四	五	二—三	二—一五
〇、五	一、四	四、一	一、〇	一、一、〇	〇、五	六、〇	七、〇	一、〇	一、四、〇	三、一、六	二、二	三、三	五、五
		黑	無	褐	低度瀝青炭				黑				低度瀝青炭
		褐	煙炭	炭					褐				
		炭							炭				
九〇〇、〇〇〇	二、三〇〇、〇〇〇	九、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、三〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	八、五〇〇、〇〇〇	三、三、五〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	四、三〇〇、〇〇〇	六、八、〇〇〇、〇〇〇	四、五〇〇、〇〇〇	三、〇〇〇、〇〇〇	七、五〇〇、〇〇〇

宇部	四—一二	二二		五、八〇〇、〇〇〇
一	四—五	一、四		二、七〇〇、〇〇〇
二	七—九	〇、三		九〇〇、〇〇〇
三	一〇—一二	〇、五		二、二〇〇、〇〇〇
松江	二、五	一、〇	黑褐炭	一、〇〇〇、〇〇〇
四、九州	三—五〇	九四、二		五二九、五〇〇、〇〇〇
筑豊	四—三三	七二、二	低度瀝青炭	四〇五、五〇〇、〇〇〇
(一) 小倉	四—六	〇、七		一、五〇〇、〇〇〇
(二) 遠賀川	四—三三	六六、〇		三八七、五〇〇、〇〇〇
遠賀	一〇—一八	六、五		三三、〇〇〇、〇〇〇
川鞍手、田	四—二五	三二、七		一四一、〇〇〇、〇〇〇
一	五—一三	一〇、〇		二五、〇〇〇、〇〇〇
二	一六—二五	七、五		四六、〇〇〇、〇〇〇
三	一一—二〇	一一、〇		六〇、〇〇〇、〇〇〇

三	(四)	(三)	五	四	三	二	一	嘉	三	二	一	穗	鞍	四
池	福	宗						穗				手	嘉	
	岡	像												
一〇——一八	八——一〇	七——八	一三——一五	一五——一八	一二——一九	一六——二六	二七——三二	一二——三三	二二——三三	一〇——一五	八——一〇	八——三三	四——二二	
八、〇	四、〇	〇、五	一、五	一、三	一、八	二、八	二、〇	九、四	一〇、〇	五、四	二、〇	一七、四	四、二	
低														
度														
漚														
青														
炭														
四八〇〇〇〇〇〇〇	一五〇〇〇〇〇〇〇	一五〇〇〇〇〇〇〇	七、五〇〇〇〇〇〇	八、〇〇〇〇〇〇〇	九、〇〇〇〇〇〇〇	二一、〇〇〇〇〇〇〇	二四、〇〇〇〇〇〇〇	六九、五〇〇〇〇〇〇	一〇六、〇〇〇〇〇〇〇	二九、〇〇〇〇〇〇〇	九、〇〇〇〇〇〇〇	一四四、〇〇〇〇〇〇〇	一〇、〇〇〇〇〇〇〇	

炭		第二種炭量		第三種炭量	
中生層	田	厚	面積	種類	數量
大嶺		三—二	六〇	半無煙炭	一八〇〇〇〇〇〇〇
		二—三	一七、六		四五七〇〇〇〇〇 <small>噸</small>
					中
					中

計	唐津	一	二	崎戸	松島	高島	香燒
	三—二	六—二	三—四	一五—一六	一二—一四	一五—五〇	一五—二〇
	八〇	五〇	三〇	二五	二〇	一五	一〇
	同		低度瀝青炭	同	同		
	一七〇〇〇〇〇〇〇	一三〇〇〇〇〇〇〇	四〇〇〇〇〇〇〇	一六〇〇〇〇〇〇〇	一〇〇〇〇〇〇〇	三三〇〇〇〇〇〇	八〇〇〇〇〇〇
							九四八、一〇〇〇〇〇〇

姊川 (三)	内淵 (二)	オトマリ (一)	中部	一、樺太	第三紀層	其他ノ炭田	津布田	舞鶴	梅迫	大野	天草	二	一
六一二	二二二七	三一六	三一四〇	三一七〇	一一七〇	—	八一〇	五一〇	二一三	一一一三	四一六	一二	三一七
一五〇	三〇〇	四〇〇	二二〇	一六二五	一、五五六、一	—	〇、五	一、三	〇、八	一、〇	八、〇	二、〇	四、〇
			低度瀝青炭			—	無煙炭	半瀝青炭	無煙炭	高度瀝青炭	半瀝青炭	無煙炭	
三九〇〇〇〇〇〇	二八〇〇〇〇〇〇	六〇〇〇〇〇〇〇	七七三〇〇〇〇〇	一、二三八〇〇〇〇〇	六、六三九、二〇〇〇〇〇	—	二、〇〇〇〇〇〇	五〇〇〇〇〇〇	一、〇〇〇〇〇〇	五〇〇〇〇〇〇	一四七〇〇〇〇〇	一〇、四〇〇〇〇〇	七、六〇〇〇〇〇
				大	多大	小	小	小	小	小	中		

二	一	夕張	二	一	幌内	二	一	幾春別	三	二	一	奈井江美唄	三
一六—一九	二八—三五	一六—三五	九—一三	一八—二四	九—二四	一〇—一三	三〇—三五	一〇—三五	一〇—一二	二〇—二五	一〇—一五	一〇—一五	三七—四七
一七、〇	二〇、〇	三七、〇	一七、〇	一一、〇	二八、〇	四五	二三	六、八	一、六	六、五	一、八	九、九	一、一
一一五、〇〇〇、〇〇〇	一二三、一〇〇〇、〇〇〇	三四六、〇〇〇、〇〇〇	六五、〇〇〇、〇〇〇	八六、七〇〇、〇〇〇	一五一、七〇〇、〇〇〇	二〇、〇〇〇、〇〇〇	二九、二〇〇、〇〇〇	四九、二〇〇、〇〇〇	七、〇〇〇、〇〇〇	六二、〇〇〇、〇〇〇	八二、五〇〇、〇〇〇	一五一、五〇〇、〇〇〇	一八、五〇〇、〇〇〇

大和田	五	二〇	四、〇〇〇、〇〇〇	
二	一三—一五	六、三	三五、〇〇〇、〇〇〇	
一	四—一六	四、二	一〇、〇〇〇、〇〇〇	
「オピラシユ ペツ」	四—一五	一〇、五	四五、〇〇〇、〇〇〇	
「ルルモツペ」	一五—一七	八、〇	五〇、〇〇〇、〇〇〇	
二	二〇—二五	二、〇	一八、〇〇〇、〇〇〇	
一	七—一〇	七、五	二八、〇〇〇、〇〇〇	
「ホロニタチ ペツ」下流	七—二五	九、五	四六、〇〇〇、〇〇〇	
二	三〇—三六	三、五	五〇、〇〇〇、〇〇〇	
一	五〇—五八	二、五	五五、〇〇〇、〇〇〇	
「ホロニタチ ペツ」上流	三〇—五八	六、〇	一〇五、〇〇〇、〇〇〇	
雨龍留萌	五—五八	三六、〇 同	二五〇、〇〇〇、〇〇〇	大
茅沼	二〇—二三	二、五	二五、〇〇〇、〇〇〇	中
穂別	六—一八	八、〇	二二、〇〇〇、〇〇〇	

日高	浦幌	尺別	舌辛	春鳥	別方、大阪	昆布森	釧路	宗谷	三	二	一	幌延	羽幌
六—七	一八	六	五	五	二—三	三	二—五	一二—二五	六—七	一三—一八	三〇—三六	六一—三六	五一—六、五
五、五	二、六	二、〇	一、七	四、〇	六、五	〇、六	一一、一	二〇、〇	四、〇	一五、〇	五、〇	二四、〇	一五、〇
黑			黑				低度瀝青炭	黑				同	黑
褐炭	—	—	褐炭					褐炭					褐炭
一五、〇〇〇、〇〇〇	二〇、〇〇〇、〇〇〇	五〇〇〇〇、〇〇〇	三五〇〇〇、〇〇〇	八五〇〇〇、〇〇〇	五〇〇〇〇、〇〇〇	七〇〇〇〇、〇〇〇	一四二〇〇、〇〇〇	一二、〇〇〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇、〇〇〇	九三、〇〇〇、〇〇〇	七二、〇〇〇、〇〇〇	一七五、〇〇〇、〇〇〇	三五、〇〇〇、〇〇〇
							中	大				大	大

其他ノ炭田	一、五二四	二四二、二			四六五、六〇〇、〇〇〇	大
三、本州	二一、一四	一〇八、〇	黒	褐	炭	大
常磐	二一、一四	一〇八、〇	黒	褐	炭	大
北 部	二一、一四	一六、〇				
中 部	一〇、一四	四〇、〇				
南 部	三、一五	五二、〇				
油 戸	四、一六	五、〇	低度	瀝	青炭	中
濃 尾	二、五、一四	二六、〇	褐		炭	中
熊 野	二、一、三	五、〇	無	煙	炭	中
小野田	三、一、二	三四、二	黒	褐	炭	中
船 木	三、一、五	一三、〇				
小野田	三、一、五	九、〇				
字 部	四、一、二	一三、二				
一	四、一、五	一、八				

鈴鹿	高崎	西條	白河	最上川	大阿仁川	七日市	仙臺	三本木	文字	門	久慈	三	二
二—四	一、五	二—二、五	二—二、五	二、五—三	六—七	八—九	二—二、五	二—四	二—二、五	四	三—三、五	一〇—一二	七—九
三、〇	七、〇	四、〇	七、五	一七、〇	二、〇	二、五	五、〇	二、〇	三、〇	〇、三	二、五	一、四	九、〇
褐炭	黑炭	低度瀝青炭	黑炭	褐炭	高度瀝青炭	無煙炭	同	同	褐炭	黑炭	褐炭		
炭	炭	炭	炭	炭	炭	炭			炭	炭	炭		
四、五〇〇、〇〇〇	四、五〇〇、〇〇〇	三、五〇〇、〇〇〇	六、〇〇〇、〇〇〇	二〇、〇〇〇、〇〇〇	六、〇〇〇、〇〇〇	九、五〇〇、〇〇〇	四、〇〇〇、〇〇〇	二、五〇〇、〇〇〇	三、〇〇〇、〇〇〇	六、〇〇〇、〇〇〇	三、五〇〇、〇〇〇	六、三〇〇、〇〇〇	三二、〇〇〇、〇〇〇
中	中	中	中	中	小	小	小	小	小	小	小		

計

一、五七三、七

六、六八四、九〇〇、〇〇〇

多大

以上擧クル炭層ノ外二尺以上ノ炭層ノ露頭數多アレトモ其連續明ナ
ラサルモノハ以上炭量ノ計算ニ編入セサルナリ、是レ蓋シ炭量ノ計算
ニ安全ヲ計リ概算セルヲ以テナリ、而シテ各炭田ニ於テ各炭層ノ延長
ハ炭田ヲ通シ同一ナラスシテ處ニヨリ厚サニ甚々大ナル相違アルコ
トアリ、隨テ炭田ヲ通シテ炭層ノ總厚ヲ知ルコト能ハサルナリ、故ニ計
算ノ基礎ヲ明ナラシメンニハ各炭層賦存ノ面積ト其平均厚サヲ擧ゲ
サルヘカラス、然レトモ此ノ如キハ甚々複雑ニシテ一見了解ニ困シム
モノアルヘキヲ以テ茲ニハ各炭層ヲ計算シテ得タル數炭層ノ總炭量
並ニ各炭層ノ賦存セル平均面積及厚サヲ記述スルニ止メタリ

六 結 章

本邦ニ於ケル石炭鑛業ハ全ク有煙炭ノ支配スル所ナリ、其最モ盛ナル
ハ北部九州ニシテ將來ニ於テモ亦最モ重要ナル地域ナルヘシ、本邦ニ

於ケル石炭ノ總產出額ハ一年千五百萬噸乃至二千萬噸ノ間ニアリテ支那、加奈太、印度ト伯仲ノ間ニアリ、近時東洋ニ於ケル工業并ニ交通ノ發達ハ石炭ノ需要ヲ促進シ其結果石炭鑛業ハ長足ノ進歩ヲナセリ、本邦ハ現ニ石炭ヲ輸出シ將來ニ於テモ之ヲ輸出スルナルヘシ、而シテ東洋市場ニ於ケル石炭競争ノ問題ハ將來最モ趣味アル事項ノ一タルヘシ

本邦ハ多量ノ石炭ヲ埋藏ス、上述ノ數字ハ本邦ニ於ケル炭量ノ全數ヲ示スモノニアラスシテ既知區域ノ炭量ニ過キサレモ本邦ニ於テ將來増進セル需要ヲ充タスニ足ルノミナラス東洋市場ニ之ヲ供給シテ餘アリ、然レトモ日本ヲ除キ太平洋沿岸諸國ノ石炭鑛業ハ將ニ長足ノ進歩ヲナシ東洋ノ市場ニ於テ激甚ナル競争ニ遭遇スヘシ、蓋シ石炭鑛業ノ繁榮ヲ決スヘキ重モナル事項ハ豐富ナル炭田ノ稼行面積、炭層ノ數及厚サ、燃料トシテノ石炭ノ適否、採掘ノ難易并ニ市場ノ遠近ニアルヤ明ナリ、實ニ支那ノ炭量ハ數世紀間世界ノ全消費額ヲ供給シ得ルカ如

ク日本ノ炭量ハ數百年間太平洋沿岸諸國ニ於ケル石炭ノ消費額ヲ充タスヲ得ヘシ、然レトモ前述ノ如ク鑛業ノ將來ニ關シテハ數多ノ重要ナル疑問ノ研究スヘキアリテ未タ樂觀ヲ許サ、ルナリ、實ニ太平洋沿岸諸國ニ於ケル石炭需給ノ問題ハ甚タ趣味アル事項ニシテ學術上并ニ經濟上最モ必要ナルモノタルヘシ

第二章 炭田概觀

A 中生代ニ於ケル石炭

大嶺炭田

大嶺炭田(第一圖參照)ハ本州ノ西端長門ノ南部ニアリテ山陽鐵道ノ一驛厚狹驛ノ北約二十基米ニ位シ支線ニヨリ連絡シ南北ノ延長約十二基米、東西約五基米ニ互レル區域ヲ包括ス、石炭ハ明治十年ニ探掘セラレタリト云ヒ明治三十七年鐵道ノ布設ト共ニ稍大規模ノ鑛業企圖セラレ從來主ニ石灰爐ノ燃料トシテ使用セラレタル本石炭ハ徳山ニ輸送シ煉炭ノ製造ニ供用セラル、ニ至レリ、產出額ハ大ナラスシテ明治

ノ露頭若クハ露頭ニ近ク開掘セラレタリ、含炭層ハ頁岩、砂岩及蠻岩ヨリ成リ中生層中珠羅紀ニ屬スルモノナルヘシ、下部ハ石灰岩ニシテ時ニ鱗狀ヲ呈シ又ハ石蓮蟲ノ化石ヲ含有シ炭田ノ東部ニアリ、其地質年代ハ未タ明ナラス、花崗岩ハ炭田ノ南部ニアリ、玢岩ハ岩脈又ハ岩床ヲナシテ含炭層ヲ貫通シ石炭ハ其接觸ノ爲メ屢燼石ニ變化ス、分析ノ結果次ノ如シ(百分中)

水	揮發物	固定炭素	灰	硫	黃	種	類
三、二九	九、二八	六六、九四	二〇、四九	〇、五八	半	無	煙炭

炭層四群アリ、内三群ハ山脈ノ東部ニ、一群ハ西部ニアリテ約南北ニ并走ス、第一群ハ最下部ニアリテ炭田ノ南東部ニ露出シ其北端ハ玢岩ニ依リ切斷セラレ南端ハ石灰岩ニ接シテ其跡ヲ失シ總延長一、二基米ナリ、層向ハ約南北ニシテ西方三十度乃至三十五度ニ傾斜ス、稼行スヘキ炭層ニアリ、厚サ區々ナルモ稼行スヘキ部分ハ概シテ上層ハ二尺、下層

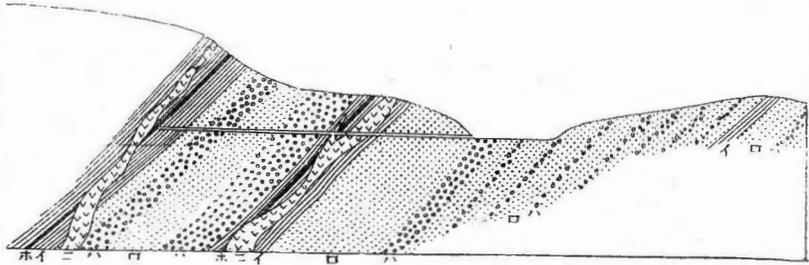
ハ五尺ナリ、兩炭層ハ南方石灰岩ニ近ク一條ニ併合シ厚サ時ニ九尺ニ達シ甚シク變動ヲ受ケ容易ニ破碎ス

第二群ハ第一群ノ西ニアリテ北方ハ玢岩ノ岩脈ニ依リ切斷セラレ南方ハ花崗岩ニ接シ總延長約十基米ナリ、斷層數多アリテ炭層爲ニ轉位セラレ玢岩ノ岩脈又ハ岩床アリテ炭層中ニ侵入スルコトアリ、而シテ一炭層ハ北方ヨリ南方ニ至ルマテ一炭層ハ中部ヨリ南部ニ至ルマテ之ヲ追跡スルヲ得、層向ハ北方ニハ約南北、南方ニハ北十度乃至二十五度東ニシテ西方三四十度ニ傾斜ス、重要ナル炭層ハ二層ニシテ厚サ區々ナルモ概シテ三尺乃至五尺時ニ九尺ニ達ス

第三群ハ最モ重要ナルモノニシテ第二群ノ西ニ位シ北方ニハ山脈ヲ横キレリ、本炭層群ハ北部ニ縮迫スルカ如ク南方ニハ花崗岩ニ接シ總延長十基米ヲ超ユ、層向ハ北方ニハ約南北又ハ北々西ナルモ南方ニハ北東ニ彎曲ス、傾斜ハ西方又ハ北西三十度ナリ、三炭層アリテ殆ント相并走シ其相互ノ距離ハ二百五十尺乃至三百五十尺ナリトス、玢岩ノ岩

第 二 圖

縮 尺 六 千 分 之 一



イ 頁 岩
ロ 砂 岩
ハ 鑿 岩
ニ 粉 岩 脈
ホ 石 炭

脈并ニ岩床甚タ多ク加フルニ數多ノ
層アリテ探掘困難ニ殊ニ中部ニ於テ
然リトナス、(第二圖參照)炭層ノ厚サハ
區々ナリ、中部ニ於テハ上層ハ一般ニ
二尺五寸、中層ハ七尺五寸、下層ハ四尺
五寸ニシテ稼行スヘキ炭層ノ總厚八
尺乃至十尺ナリ、南方ニハ厚サ稍厚キ
モ北方ニハ夾ミ次第ニ膨大シ遂ニ稼
行スヘカラサルニ至ル
第四群ハ山脈ノ西部ニアリテ延長四
基米ヲ超ユ、一炭層アリテ約南北ニ走
リ西方ニ傾斜ス、炭層ハ夾ミヲ有シ其
厚サ甚タ區々ニシテ一尺三寸乃至八
尺ノ間ニアリ、概シテ厚層ヲナストキ

ハ品位劣等ニ、薄層ナルトキハ品位良好ナリ、隨テ稼行ニ堪ユル區域ハ狭小ナリ

此外炭田ノ北西部ニ一炭層アリテ北東ニ走リ南東二十五度ニ傾斜ス、炭層ノ厚サハ一尺五寸乃至二尺ニシテ嘗テ露頭附近ニ稼行セラレタリ

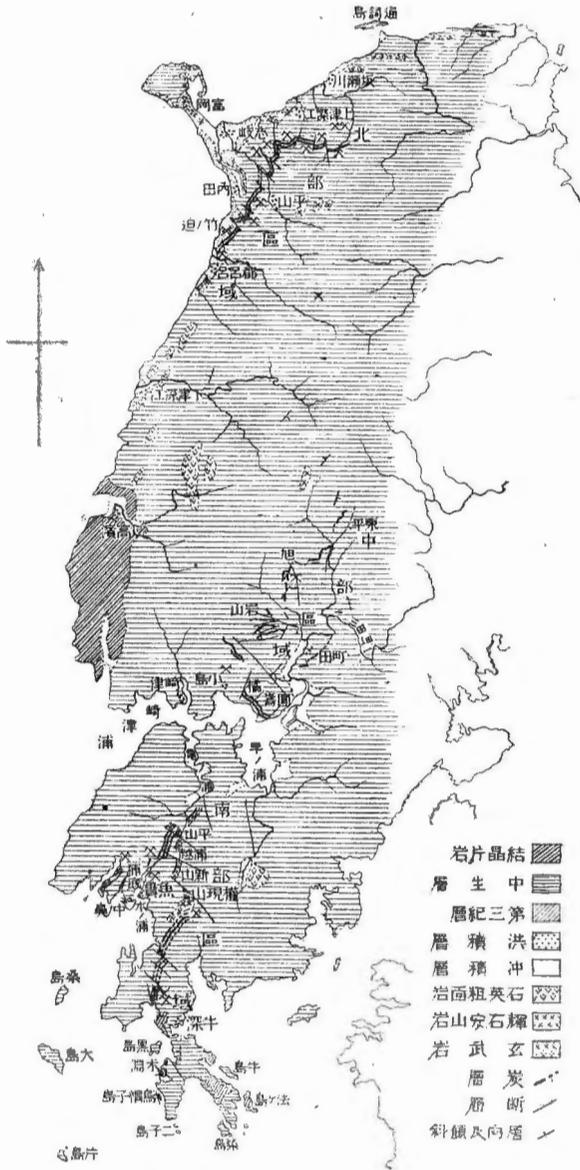
炭田ノ區域稍大ナルモ砂岩ノ岩脈及岩床甚タ多ク、加フルニ數多ノ斷層アリテ採掘上甚タ不利ナリ、隨テ炭田ノ區域ニ比シ炭量大ナラサルヘシ、石炭ハ地下千尺迄ヲ計算シタルニ其量大ナラスシテ第一種炭量百萬噸、第二種炭量千八百萬噸ナリ

石炭ハ亦嘗テ炭田ノ南部及炭田ノ東部ニアル伊佐ノ東方及南方ニ於テ採掘セラレタルコトアリ

天草炭田 (第三圖參照)

位置及沿革 肥後天草下島ノ西半ニ南北ニ互レル大ナル炭田アリ、天草炭田ト稱ス、本炭田ハ天保年間ニ開發セラレ爾來小規模ニ稼行セラ

第三圖 天草炭田 縮尺三十萬分之一



レタリ、明治十七年唧筒器械輸入セラレテヨリ鑛業ハ長足ノ進歩ヲナ

シ日清戰役後活潑ニ稼行セラレタリ、然レトモ坑内水ノ多キト掘進困難ナルト加フルニ石炭ノ價格低下セル爲メ鑛業ハ次第ニ衰退シ爾來閉山セシモノ少ナカラス、近時漸ク再興セラル、モノアルニ至レルモ産額尙小ナリ、明治十二年後ノ産出額ハ次ノ如シ

年 別	産 出 額	年 別	産 出 額	年 別	産 出 額
明治十二年	一四〇八〇 <small>噸</small>	明治二十三年	六九三〇四 <small>噸</small>	明治三十四年	四八、一二八 <small>噸</small>
同 十三年	—	同 二十四年	七〇、八二八	同 三十五年	五五、八一七
同 十四年	一一、二一七	同 二十五年	五六〇、五二	同 三十六年	四九、一五三
同 十五年	九七、五九	同 二十六年	四二、七五九	同 三十七年	四一、三〇八
同 十六年	一六、五三二	同 二十七年	四〇、六五三	同 三十八年	三九、〇八三
同 十七年	二四、六二七	同 二十八年	三五、三〇八	同 三十九年	五七、九四六
同 十八年	三一、三三七	同 二十九年	二三、七六八	同 四十年	七二、五七七
同 十九年	三三、三〇八	同 三十年	三八、四九〇	同 四十一年	九四、八〇四

同二十年	二六、七〇八	同	三十一年	三八九一二	同	四十二年	五四七七二
同二十一年	—	同	三十二年	四四、四四四	同	四十三年	四二、四六一
同二十二年	五八、九三二	同	三十三年	四七、三四二	同	四十四年	四三、九七二

地形及地質 概言スレハ天草下島ハ高サ約百米乃至二百米ノ波狀ノ臺地ヲナシ所々ニ三百米乃至四百米ノ稍高キ山嶽屹立ス、一般ニ中部最モ高クシテ海岸ニ向ヒ低下ス、山脈ノ一般ノ方向ハ北々東ニシテ地層ノ走向ニ一致スルモノ、如シ、地質ハ頁岩、砂岩及蠻岩ニシテ頁岩ハ上部ニ發達シ、中部ハ砂岩、頁岩ノ互層ニシテ炭層ヲ挟ミ下部ハ砂岩及蠻岩ヨリ成レリ、玢岩及玄武岩ノ岩脈及岩床之ヲ貫通シ又ハ玄武岩ノ爲ニ被覆セララル、コトアリ、層向ハ一般ニ北々東ナリトス、下部ニ數多ノ介殼化石ヲ含有スル層位四アリ、其研究ニ依リ本層ノ「セノニアシ」ニ屬スルヲ知レリ、上層ハ雙子葉植物ノ化石ヲ含有シ恰モ第三紀ニ屬スルカ如シ、含炭層ニハ植物化石ヲ埋藏シ、隨テ其果シテ「セノニアシ」期ニ屬スルヤ否ヤ明ナラスト雖モ植物化石ノ一部ハ歐米ニ於テ上部白堊

紀層ニ産スルモノアリ、且ツ下部ノ化石層ト不整合ヲ見サルノミナラ
 ス岩質亦著シク異ナラサルヲ以テ茲ニハ含炭層ヲ假ニ白堊紀層ニ屬
 スルモノトナセリ
 含炭層ハ主ニ下部砂岩、中部頁岩及砂岩ノ互層、上部頁岩ヨリ成リ、鳥ノ
 西部ヲ占ム、變動ノ結果地層ハ背斜層又ハ向斜層ヲナシ及數多ノ斷層
 ヲ見ル、便宜上本炭田ヲ北部、中部及南部ノ三區域ニ分テリ
 炭層ハ三層アリ、厚サハ上部ヨリ之ヲ數フレハ北部區域ニ於テハ八寸、
 一二尺及三四尺、南部區域ニハ三尺乃至六尺、一尺乃至三尺及五寸乃至
 一尺トス、即チ北部及南部兩區域ニ於テハ炭層ノ厚サ相反スルヲ見ル、
 換言スレハ北部區域ニ於テ厚キ炭層ハ南部區域ニ於テ薄シ、中部區域
 ニ於テハ中部炭層ノ稍厚キノミニシテ上部及下部炭層ハ或ハ全ク之
 ヲ缺キ或ハ其發達甚タ不完全ナリ
 炭質 石炭ハ漆黒ニシテ強キ光澤ヲ有シ容易ニ粉炭ニ破碎シ時ニ粘
 結ス、火成岩ノ接觸ノ結果石炭ハ不純ナル燧石ニ變シ北部區域ニ於テ

最モ多ク中部區域ニ於テハ尙之ヲ見ルモ南部區域ニハ之ヲ見ス、石炭ノ分析ノ結果次ノ如シ(百分中)

水	揮發物	固定炭素	灰	硫	黃	比	重	發熱量	種類
11.00	11.64	76.71	7.43	1.95	1.486	6,915	12,447	半無煙炭 半瀝青炭	

北部區域 含炭層ハ坂瀨川ヨリ西方上津深江ニ亙リ是レヨリ南々西ニ彎曲シ都呂々ニ達ス、北方ニハ傾斜ハ北方ニシテ其角度ハ二三十度ナルモ南方ニハ次第ニ急ニシテ志岐、内田ニ於テハ西北西四十度、都呂々ニ於テハ五六十度ニ傾斜ス、斷層ハ甚タ多ク玢岩ハ岩床若クハ岩脈トシテ含炭層ヲ貫通シ地質構造錯雜セリ、三炭層中上部炭層ハ薄ク厚サ概シテ一尺未滿ニシテ平均約八寸ナリ、中部炭層ハ厚サ一尺五寸乃至二尺八寸ニシテ普通二尺炭ト稱ス、下部炭層ハ厚サ三尺乃至六尺普通四尺ニシテ四尺炭ト稱ス、數多ノ炭坑所々ニ稼行スルモ大規模ノモノナク明治四十三年ニハ二千五百八噸、同四十四年ニハ八千三百八十

餘噸ヲ產出セリ

北方ニハ炭層ハ斷層ニ依リ屢切斷セラル、モ露頭及坑口ニ依リ約三基米ノ間之ヲ追跡スルヲ得、南方ニハ炭層亦數多ノ斷層并ニ火成岩ノ爲ニ切斷セラル、モ露頭及稼行炭坑若クハ廢坑ニ依リ約六基米ノ間之ヲ追跡スルヲ得ヘシ、中部ニハ四尺炭ハ厚サ屢五尺ニ膨大スルモ南部即チ竹迫以南ニハ上部二炭層ハ既ニ浸蝕シ去ラレタルカ如シ、火成岩ノ接觸ノ結果此區域ニ於ケル石炭ハ燻石ニ變シ其量約全炭量ノ半ハニ達スヘシ

中部區域ニ於テハ地層ハ一向斜層ヲナシ概ネ北々東ニ走リ一町田川涵域ハ恰モ向斜盆地ニ該當シ石炭ノ露頭ハ川ノ兩側ニアリ、數炭坑本區域ニ稼行シ明治四十三年ニハ五千九百九十九噸、同四十四年ニハ六千四百六十八噸ヲ產出セリ

南部殊ニ小島、岩山附近ニ於テハ地層ハ變動ヲ受クルコト甚シク斷層ノ結果同一ノ炭層數度露出シ層向傾斜ハ短距離ニ變化スルコト多シ、

炭層ノ厚サハ概シテ薄シ

旭炭坑ニ於テハ二尺炭層稼行セラル、其厚サハ一二尺ニシテ稀ニ二尺以上ニ達シ東方二十五度ニ傾斜ス、北方ニハ石炭ハ東平ニ至ルマテ之ヲ追跡スルヲ得ヘキモ厚サ次第ニ減少シ七寸ヨリ一尺以上トナレリ、南方ニハ炭層亦薄ク一般ニ一尺内外ナリ、激甚ナル變動ノ結果採掘困難ナルモ嘗テ小規模ニ稼行セラレタリ、小島炭坑ハ現ニ一炭層ヲ採掘ス、其厚サ約二尺ニシテ時ニ三尺ニ膨大スルモ北西ニハ薄條ニ分岐ス、圓壽及橘ノ海岸ニ近ク露出スル炭層ハ甚々薄ク重要ナラス、向斜層ノ東翼ニ於テハ炭層ハ薄クシテ一般ニ一尺内外ナリ、嘗テ數箇處ニ稼行セラレタリ

南部區域ニ於テハ地層ハ北部ニ向斜層ヲナスモ南部ニハ其西翼海中ニ没ス、斷層及火成岩ノ貫入甚々多シ、石炭ハ浦越ノ附近ニ最モ好ク發達シ上層三尺炭ハ五尺ニ、二尺炭ハ三尺ニ膨大シ向斜層ヲナス、其傾斜角ハ三十五度乃至四十五度ナリ、平山ニ於ケル三尺炭ハ既ニ殆ント

探掘シ盡サレタルモ新山炭坑ハ現時最モ盛ニ稼行シ其產出額明治四十三年ニハ三萬三千五百四十七噸、同四十四年ニハ二萬九千四百二十一噸ニシテ本炭田ノ產出額ノ約三分ノ二ニ當レリ

向斜層ノ兩翼ハ南方斷層ニ該當セル魚貫灣ノ西ニ連續ス、斷層ノ結果炭層ハ約東西ニ彎曲シ水浦ニ於テハ南々東六十度、中鼻ニ於テハ南方三十五度ニ傾斜ス、三炭層アリテ嘗テ盛ニ稼行セラレタルモ坑内水多ク現時廢業セリ、背斜并ニ斷層ノ結果炭層ハ再ヒ浦底ニ現出ス、其西方ニハ一ノ向斜層ヲナシ西翼ハ半島ノ西海岸ニ露出ス、東翼ニ於ケル傾斜ノ角度ハ六十度ニシテ西翼ニ於テハ四十度乃至五十度ナリ、東翼ニハ上部二炭層稼行セラレタルモ西翼ニハ上部炭層ハ品位甚タ劣等ニシテ中部及下部炭層稼行セララル

東翼ニ於ケル炭層ハ新山ノ南方ノ斷層及權現山ノ玄武岩ニ依リ切斷セララル、權現山ノ南側ニ露出スル三炭層中々部炭層ハ最モ良好ニシテ厚サ一尺三寸乃至二尺五寸ヲ有シ小規模ニ探掘セララル、炭層ハ是ヨリ

南西ニ走リ北西四十五度ニ傾斜シ傾斜ノ方向ニハ玄武岩ニ依リ切斷セラル、南方ニハ上部二炭層ハ薄ク品位劣等ナリ、下部炭層ハ厚サ八寸ニシテ嘗テ稼行セラレタリ、米淵ノ西方ニハ中部及下部炭層、烏帽子島ニ於テハ上部炭層嘗テ稼行セラレタリト云フ
炭量 炭層ハ稍廣域ニ互レルモ追跡シ得ヘキ延長ハ甚タ大ナラスシテ炭量隨テ大ナルヲ得ス、炭層ノ厚サハ甚タ區々ナルノミナラス地層ハ變動ヲ受ケ火成岩ノ貫通スルコト多ク探掘上不利少ナカラス、隨テ第一種ノ炭量ハ地下五百尺迄ノ炭層ヲ計算シ第二種炭量ノ計算ハ地下千尺時ニ二千尺ヲ限レリ、中部及南部區域ニハ地層ハ向斜層ヲナシ隨テ地下ノ深サハ大ナルニ至ラス、斯クシテ概算シタル炭量ハ第一種二百三十萬噸、第二種千四百七十萬噸ナリ

其他ノ炭田

越前大野附近ノ石炭 越前ノ東部ニハ中生層ハ處々ニ散在シテ古生層ヲ被覆シ花崗岩、玢岩ニ依リ貫通セラレ安山岩等ニ被ハレ頁岩、砂岩

及礬岩ヨリ成リ數多ノ化石ヲ埋藏ス、化石ノ研究ニ依リ其珠羅紀ナルヲ知レリ、石炭ハ大野ノ東方約二十四基米ナル桂高川ノ上流ニ採掘ノ企圖アルモ交通不便ナリ、地層ハ甚シク擾亂スルモ層向ハ概シテ北西ニシテ南西ニ急斜ス、石炭處々ニ露出スルモ相互ノ關係明ナラス、五炭層アリト稱セラレ厚サ一定セサルモ五寸乃至七尺アリテ三層ハ約二基米間之ヲ追跡スルコトヲ得、炭量小ニシテ概算約五百萬噸ナリ、石炭ハ黑色ノ有煙炭ニシテ膨脹粘結ス、分析ノ結果次ノ如シ(百分中)

水	揮發物	固定炭素	灰	硫黃	發熱量	種類
一、九二	二九、六三	六二、六二	五、八三	一、三八	カリ 七、五〇八	英國熱單位 一三、五一四
						青高 炭度瀝

大野ノ北西ニアル谷村附近ニハ厚サ一尺乃至一尺五寸ノ炭層北六十度東ニ走リ北々西十度乃至十五度ニ傾斜シ管テ小規模ニ稼行セラレタリ、面積狭小ニシテ安山岩ニ被ハレ炭量小ナリ、石炭ハ有煙炭ニ屬ス、丹波梅迫附近ノ石炭 梅迫ハ大阪舞鶴間鐵道沿線ノ一驛ニシテ舞鶴

ノ南方約十基米ニ位ス、石炭ハ梅迫ヨリ二基米乃至四基米ノ區域内ニアリテ明治三十年ニ探掘セラレタルモ永續セス、現時再興ノ企アリ、頁岩及砂岩ヨリ成レル中生層ハ古生層ノ小盆地上ニ成層シ高サ百米乃至三百米ノ低卑ナル丘陵ヲナス、褶曲斷層甚タ多キモ層向ハ概シテ西方ニハ東西ニシテ東方ニハ北三十度東ナリ、傾斜ハ南方ニ急ニシテ五十度乃至七十度ナリトス、三炭層頁岩中ニ介在シ中部炭層最モ厚ク厚サ四尺、稼行スヘキ部分一尺五寸アリ、上部及下部炭層ハ厚サ僅ニ一二尺ニ過キス、炭量小ニシテ概算百萬噸ヲ超エス、石炭分析ノ結果次ノ如シ(百分中)

水	揮發物	固定炭素	灰	硫	黃	種	類
二、四一	一〇、四〇	七一、二五	一五、九四	〇、七四	半無煙炭		

丹後舞鶴ノ西方ニ於ケル石炭 由良川ハ丹波ヨリ來リ舞鶴ノ西方ヲ北流シ日本海ニ注ク、石炭ハ由良川ノ西岸、舞鶴ノ西方約十基米ニ産シ

便利ノ位置ニアリ、石炭ハ明治二十年ニ始メテ探掘セラレ同二十八年ヨリ同三十二年ニ至ル間稍盛ナリシモ一日ノ産出額僅ニ十五噸乃至十八噸ニ過キス、其後休山シ近時再開ノ企圖アリ、含炭層ハ中生代ノ頁岩、砂岩及蠻岩ニシテ高サ二百米以下ノ波狀ノ臺地ヲナシ、西方ハ古生層ニ限ラレ、東方溪谷ニ向ヒ急斜ス、褶曲、斷層少ナカラス、石炭ハ頁岩中ニ介在シ露頭ハ南北約二、五基米、東西一基米ノ區域中ニアリ、層向ハ北部ニハ約東西ニシテ北方七十度ニ傾斜スルモ中部及南部ニハ南北ニシテ東方又ハ西方六七十度ニ傾斜ス、稼行スヘキ炭層三アリテ厚サ四尺乃至六尺時ニ十尺以上ニ膨大ス、石炭賦存ノ區域大ナラス隨テ炭量多カラス、概算五百萬噸ナリト云フ、石炭ノ分析ノ結果次ノ如シ(百分中)

水	揮發物	固定炭素	灰	硫	黃	種	類
一、七〇	一四、四五	六三、九二	一九九三	〇、四七	半	瀝	青炭

備中成羽附近ノ石炭 成羽附近ノ三疊紀層ハ頁岩及砂岩ヨリ成リ石

炭ヲ埋藏ス、既知ノ四炭層ハ薄ク厚サ約一尺ナリ、下部炭層ハ嘗テ稼行セラレタルモノニシテ夾ミト共ニ厚サ約二尺五寸アリ、層向ハ概ネ北西ニシテ南西ニ緩斜シ傾斜ノ角度ハ普通十度ナリ、石炭ハ品位劣等ニシテ分析ノ結果次ノ如シ(百分中)

水	揮發物	固定炭素	灰	硫	黃	種	類
五、七九	四〇三	六四、六三	二五、五五	〇、一二	無	煙	炭

津布田炭田 ハ長門ノ南海岸ニアル埴生ノ南東海岸ニアリテ、運搬甚タ便利ナリ、石炭ハ約四十年前ヨリ小規模ニ稼行セラレ主ニ四國及九州ニ於テ石灰焼成ノ燃料トシテ使用セラレタリ、産出額ハ明治四十三年ニハ二百二十三噸、同四十四年ニハ四百三十三噸ナリ、炭田ハ海岸ニ沿ヘル丘陵地ニシテ頁岩、砂岩及蠻岩ヨリ成リ「レ」チツク「紀」ニ屬スト云フ、層向ハ東北東ニシテ背斜層及向斜層ヲナシ、其角度ハ六十度乃至八十度ナリトス、數炭層中三層ノ厚サ六尺、七尺及四尺ナルモノ小規模

ニ稼行セラル、石英粗面岩噴出ノ結果石炭ハ燧石ニ變化スルコト多シ、
 區域小ナルノミナラス地層ノ傾斜甚タ急ナルヲ以テ炭量少ナク概算
 僅ニ二百萬噸ナリ、石炭ノ分析ノ結果次ノ如シ(百分中)

水	揮發物	固定炭素	灰	硫	黃	發熱量	種類
五、七八	三、四〇	七五、二四	一五、五八	〇、一七	六、五四四	一、七八〇	無煙炭
					カロリー	英國熱單位	

阿波徳島附近ノ石炭 徳島ノ南部ニアル白堊紀層ハ古生層ノ南方ニ
 東西ニ連互シ頁岩、砂岩及巒岩ヨリ成ル、層向ハ約古生層トノ境界ニ並
 行シ殆ント東西ニシテ北方ニ傾斜ス、白堊紀層ニ介在セル石炭ハ嘗テ
 海岸及勝浦川ニ沿ヒ四箇所ニ稼行セラレタリ、二三ノ炭層厚サ區々ニ
 シテ薄キハ一尺ニ充タス厚キハ三尺ニ達ス、石炭ハ有煙炭ニ屬シ概シ
 テ破碎セラレテ粉炭トナリ質劣等ナリ、分析ノ結果次ノ如シ(百分中)

水	揮發物	固定炭素	灰	硫	黃	種類
〇、九五	三一、四七	五四、五三	一三、〇五	〇、七一	低度瀝青炭	

B 第三紀ニ於ケル石炭

一 樺太

樺太ノ中央山脈ハ約南北ニ走リ白堊紀層ト思惟スヘキ中生層ヨリ成リ其兩側ニ第三紀層之ヲ被覆ス、第三紀層ハ頁岩、砂岩及蠻岩ヨリ成ル、蠻岩ハ屢最下部ニ於テ厚層ヲナシ之ニ依リ白堊紀層ニ接ス、蠻岩ニ接シテ重要ナル炭層アリ、隨テ樺太ニ於ケル主要ナル炭田ハ白堊紀層即チ中央山脈ニ沿ヒ狹長ナル區域ヲナス、此外小炭田ハ各所ニ散在ス、第三紀ノ上部ニアル石炭ハ能登呂半島ノ西海岸ニ近ク狹長ナル區域ヲ占ムルモ其品質下部ニ於ケルモノヨリ劣等ナリ

石炭ハ未タ稼行セラレタルコトナク又試錐ニ依テ其賦存ノ状態ヲ檢シタルコトナキヲ以テ厚層ノ石炭ハ地下五百尺迄ヲ第一種炭量トシテ概算シタリ、第二種炭量ニハ炭層ノ厚サ炭田ノ地質構造ニ依リ深サ二千尺乃至四千尺迄ヲ計算シタリ、然レトモ樺太ノ炭田ハ未タ全ク調査セラレサル所多ク茲ニ概算セルハ樺太ニ於ケル炭田全部ノ炭量ヲ

包括セサルナリ、而シテ概算炭量ハ中部炭田ニ於テ第一種炭量千八百萬噸、第二種炭量七億七千三百萬噸、能登呂炭田ニ於テ第二種炭量四億六千五百萬噸ナリトス、

中部炭田即チ内淵炭田

中部炭田ハ樺太ノ中部ヲ占メ西海岸ノ「トマリ」海岸ヨリ眞岡ノ東北東ニ屹立セル留多加山ノ南麓ニ達シ北部ハ「トマリ」川、中部ハ内淵川、南部ハ姉川ニ沿ヘル狹長ナル面積ヲ占メ總延長七十基米ヲ超ユ、炭田ハ河流ニ沿ヘル波狀ノ丘陵地ニシテ高サ一般ニ三百米乃至五百米ノ白堊紀山脈其東方ヲ限レリ、第三紀層ハ整合ニ白堊紀層ヲ被覆シ主ニ頁岩及砂岩ヨリ成リ緩ナル褶曲ヲナス、第三紀層ヲ分テ含炭層及上部層トナス、含炭層ハ第三紀ノ下部ヲ占メ狹長ナル區域ヲナシテ直ニ白堊紀層ヲ被覆シ頁岩、砂岩及蠻岩ヨリ成リ其厚サ九百尺乃至二千尺ナリトス、層向ハ一般ニ南北又ハ北三十度西ニシテ北部及中部ニハ一ノ背斜層及向斜層ヲナシ南部ニハ西方ニ傾斜セル單斜層ヲナス、傾

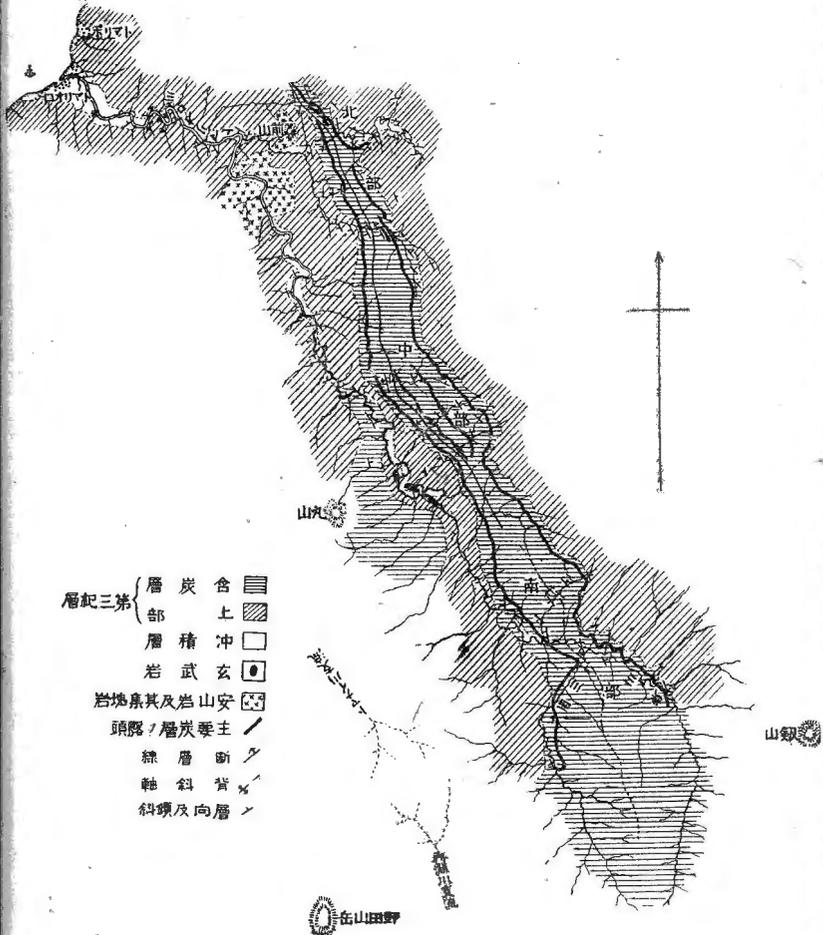
斜ノ角度ハ一般ニ二十度以下ナルモ三十度ニ達スルコト少ナカラス、本層ハ中部ニ最モ好ク發達シ北部及南部ニ次第ニ薄シ、炭層ノ數及厚サハ未タ明ナラサレトモ厚サ三尺乃至十五尺ノモノ四層以上アルコトハ疑フヘカラス、數多ノ化石アルモ未タ研究セラレス、隨テ之ニヨリ其地質年代ヲ知ルヲ得サレトモ他炭田トノ比較上本層ハ蓋シ中新紀層ニ屬スルカ如シ

本炭田ハ現時ニ於テハ運搬甚タ不便ナルモ北部ニ於テハ石炭ハ海岸ヨリ四基米以内ニアリテトマリオロ川ヨリ容易ニ達スルヲ得ヘシ、最近二年間樺太廳ハ此地ニ於テ石炭ヲ試掘シタリ、中部及南部ハ更ニ不便ナルモ内淵平原ニハ稍廣キ溪谷ヲ通シ約十五基米ニシテ達スルヲ得ヘシ、炭田ハ便宜上之ヲ北部、中部及南部ノ三區ニ區別ス
石炭ハ有煙炭ニシテ一般ニ粘結ス、分析ノ結果次ノ如シ(百分中)

水	揮發物	固定炭素	灰	硫	黃種	類
五六七	四〇、一五	四六、八六	七、三二	〇、四〇	低度瀝青炭	

圖 四 第

域區ロオリマト「田炭部中
一之分萬十二尺縮



北部即チ「トマリオロ」區域(第四圖參照)ニ於テ調査面積ハ延長約二十
二基米、幅半基米乃至五基米ニシテ漸次北方ニ狹小ナリ、含炭層ハ北部
ニ於テ殊ニ激甚ナル變動ヲ受ケタルカ如シ、數多ノ斷層アリ、中一大斷
層ハ炭田ノ北端ヨリ中部ヲ通シ南部ニ互レリ、層向ハ約南北ナルモ傾
斜ハ斷層ノ東西ニ於テ異ナレリ、即チ斷層東方ニ於テハ東方若クハ北
東四十度乃至四十五度ニシテ西方ニハ西方又ハ南西六七十度ナリ、殆
ント本斷層ニ接續シテ一ノ背斜層南部ニ連ナリ其兩翼ノ傾斜角ハ三
十度以下ナリトス、以上ノ事實及斷層ノ東西ニ於ケル炭層ノ比較ニ依
リ之ヲ見ルニ北部及中部ニ於テモ一ノ背斜層ナカルヘカラス、而シテ
其位置ハ恰モ斷層ニ該當ス
炭層ハ之ヲ三四群ニ區別ス、最上部ニアルモノ最モ重要ニシテ稍正確
ニ之ヲ追跡スルヲ得
北部ニ於テハ上群ハ斷層ノ東部ニ於テ好ク露出ヲナシ三炭層ヲ檢ス
ルヲ得、其厚サハ三四尺ニシテ相互ノ距離ハ二尺乃至七尺ナリトス、露

頭ノ延長ハ約八基米ニシテ内三基米ノ間ハ稍正確ニ之ヲ追跡スルヲ得タリ、斷層ノ西部ニハ厚サ三尺ノ一炭層好ク露出シ小距離ノ間之ヲ追跡シ得ヘク地質上ノ關係ヨリ之ヲ見ルニ四基米以上連續セルモノナルヘシ、中部ニ於テハ炭層ハ土壤ニ依リ被ハル、コト多キモ三四ノ炭層ハ斷層ノ東部ニ於テ約三基米、西部ニ於テ約四基米間追跡セラレヘシト云フ、南部ハ調査不完全ナレトモ處々ニ背斜層ノ兩翼ニ炭層ヲ露出スルモノアリ、其厚サハ二尺内外ヲ普通トス

下群ノ炭層ハ長距離ニ之ヲ追跡シ得ヘキモノナク其相互ノ關係モ之ヲ知ルニ難シ、北部ニ於テハ上群ノ下約百五十尺ニ一二尺ノ炭層斷層ノ東部ニ露出シ約二基米ノ間之ヲ追跡スルヲ得、前者ノ下約二百尺ニ厚サ三尺ノ一炭層アリテ屢斷層ニ切斷セラレ、斷層ノ西部ニハ未タ炭層ヲ發見セズ、此外河流ニ沿ヒ數多ク炭層アレトモ未タ之ヲ追跡シタルモノナシ、中部ニ於テハ主要ナル二炭層斷層ノ東部ニ露ハレ二三基米ノ間之ヲ追跡スルヲ得ヘク上層炭層ハ厚サ四尺五寸、下層炭層ハ三

第五圖
中部炭田內淵區
縮尺十二萬分之一

尺五寸ナリ、其他河流并ニ其支流ニ沿ヒ數多ノ炭層ノ露出アリ、南部ニ於テハ未タ炭層ヲ檢セス



本區域ハ高サ百米乃至五百米時ニ六百米ニ達スル丘陵地ニシテ東方白堊紀ノ山脈ニ接ス、東方ニハ地層整然トシテ成層シ概ネ西南西十五

中部即チ内淵區
域(第五圖参照)
ニ於ケル調査面
積ハ南北ノ延長
十八基米、東西幅
十基米ナリ、含炭
層ハ上部層ニ被
覆セラレ又ハ斷
層ニ切斷セラレ
テ四區ニ分離ス、

度乃至三十五度ニ傾斜シ變動ヲ受クルコト少ナシ、西方ニハ地層ハ斷層ノ爲ニ切斷セラル、コト多ク含炭層ハ三區ニ散在ス、北部區及南部區ニハ地層殆ント中部ニ於テ背斜層ヲナシ中部區ハ東方大斷層ニ依リ切斷セラル、本區域ノ中央部ハ地層殆ント水平ナルモ北方及南方ニハ一ノ向斜層ヲナス、炭層數多アルモ其相互ノ關係未タ明ナラサルモノアリ

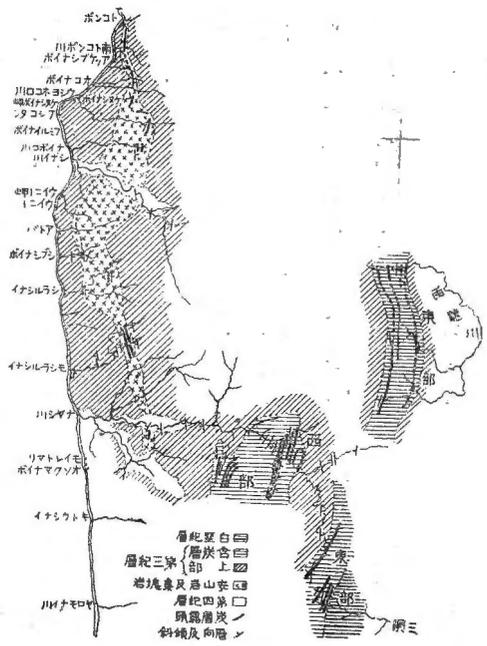
東部ニハ稍正確ニ七炭層ヲ追跡スルヲ得ヘク其平均厚サハ上部ヨリ之ヲ數フレハ三尺三寸、七尺五寸、二尺二寸、二尺五寸、五尺四寸、五尺八寸及二尺四寸ナリ、是等ノ炭層ハ中部ニ最モ好ク發達シ北部ニハ六層、南部ニハ四炭層アルノミ、其相互ノ距離ハ南方ニ小ニシテ漸次北方ニ大ナリ、西部ニハ炭層ハ三層乃至五層ヲ檢スルノミニシテ其他ハ土壤ニ被覆セラレテ明ナラス、北部區ニ於テハ第一、第二及第三ノ三炭層アリテ厚サ三尺乃至十尺ナリ、南部區ニハ第一、第二、第三、第五及第六ノ五炭層露出シ厚サ二尺乃至五尺ナリ、中部區ニハ一炭層ノ厚サ二尺ナルモ

ノアリ、其關係未タ明ナラス
南部即チ姉川區域 中調査セラレタルハ延長二十七基米ノ狹長ナル
地域ナリ、其幅ハ概ネ四千尺内外ナルモ北方ニハ上部層ニ被覆セラレ
テニニ分岐ス、含炭層ハ頁岩、砂岩及蠻岩ニシテ其總厚ハ千五百尺ヲ超
エサルカ如シ、層向ハ一般ニ南北ニシテ北部ニ於テハ緩ナル波狀ヲ呈
シ向斜層及背斜層ヲナスモ南部ニハ西方ニ傾斜ス、其角度ハ概ネ二三
十度ナルモ時ニ七十度ニ急斜シ白堊紀層ヲ整合ニ被覆スルカ如シ
北部ニハ炭層甚タ多ク其數未タ明ナラサレトモ三尺以上ノ炭層五層
ヲ下ラサルヘク五寸以上ノモノヲ數フレハ三十層以上ニ達スヘシ、厚
サハ區々ニシテ概ネ二尺乃至十尺、其總厚十五尺乃至二十五尺ナルヘ
シ、中部ハ最モ重要ナル部分ニシテ延長十二基米アリ、層向ハ南方ニ至
ルニ隨ヒ次第ニ西方ニ轉シ北二十度乃至北六十度西ナリトス、傾斜ハ
一般ニ四十五度内外ナリ、數多ノ炭層中七層乃至十層ハ重要ニシテ厚
サ三尺乃至十七尺、總厚三十尺ヲ下ラサルヘク恐テク四十尺以上ニ達

第六圖

能登呂炭田

縮尺十五萬分之一



臺地ヨリ成リ其最高點僅ニ六百米ナリ、交通不便ニシテ現時ニ於テハ本炭田ニ入ルコト困難ナリ

スヘシ、南部ハ延長約十二基米ニシテ南端ハ未タ調査セラレス、層向ハ南北ニシテ西三十度ニ傾斜ス、數多ノ炭層中三層乃至五層ハ重要ニシテ厚サ五尺乃至二十尺ノ間ニアリ、其總厚ハ二十尺ヲ下ラサルヘシ

能登呂炭田

能登呂炭田(第六圖参照)ハ能登呂半島ノ中部ニアリテ南北ノ延長約四十基米、東西約十八基米ノ區域ヲ占メ高サ百米ニ充タサル波狀ノ丘陵

能登呂半島ニ於ケル第三紀層ハ直ニ白堊紀層ヲ被覆シ下部含炭層、下部、上部含炭層及上部ノ四層ニ區別ス、下部含炭層ハ白堊紀ニ接シ直ニ之ヲ被覆シ兩者ノ間ニ變岩アリ、岩石ハ頁岩、砂岩及泥灰岩ヨリ成リ泥灰岩中ニアル數多ク植物化石ニ依リ其中新紀層ニ屬スルヲ知レリ、上部含炭層ハ西海岸ニ近ク狹長ナル區域ヲ占メ頁岩、砂岩ヨリ成ル、地質調査未タ全ク施行セラレスシテ本炭田ノ一部ニ於テ豫察調査ヲ了セ

水	揮發物	固定炭素	灰	硫	黃	比	重	種	類
一三、四七	三四、一〇	四三、四六	八九七	〇、七二	一、三三三			低度	黑褐 瀝青 炭

下部含炭層ハ下部層ニ被覆セラレテ二區域ニ分離スルモ下部ニハ相連絡シテ背斜層ヲナセルカ如シ
東部區域ハ白堊紀層ニ沿ヒ南北約四十基米ノ狹長ナル地域ヲナスモ

其北端及南端ハ未タ明ナラスシテ調査區域ハ僅ニ十二基米ニ止マレ
リ、含炭層ハ其層向南北ヨリ北三十度東ノ間ニアリテ殆ント中部ニ一
ノ背斜層ヲナシ砂岩最モ好ク發達ス、傾斜ノ角度ハ北方ニハ概テ四十
五度、南方ニハ稍急ニシテ六十度ニ達ス、數多ノ炭層ノ露頭ハ河流及支
流ニアリテ厚サ二尺乃至十五尺ノモノ三四層以上ヲ檢セルモ其延長
ハ明ナラス、雨龍川ニ沿ヒ石炭ハ十二基米ノ間處々ニ之ヲ檢スルヲ得
ヘク背斜層ノ西翼ニ於テハ厚サ北部ニハ上部ヨリ二尺、三尺及六尺五
寸ノ三炭層、中部ニハ五尺、四尺、七尺及三尺ノ四炭層、南部ニハ三尺五寸
十五尺、四尺及二尺五寸ノ四炭層アリ、東翼ニ於テハ炭層ニアリ、更ニ南
方濁川及「ナヤシ」川上流ニ於テハ調査甚タ不完全ナリ、「ナヤシ」川上流ニ
於テハ厚サ四尺ノ炭層、濁川ニ於テハ三炭層アリテ西方又ハ西北西三
十度乃至五十度ニ傾斜ス、本炭層ハ北部ニ於ケルト同一ノ炭層ナルヘ
キモ其相互ノ關係未タ明ナラス

西部區域ハ海岸ヨリ「ナヤシ」川ノ溪谷ニ沿ヒ約二十四基米ニシテ達ス

ルヲ得ヘシ、調査セル地域ハ北方ノ一部ニシテ南方ニハ大ナル未調査ノ地域アリ、含炭層ハ甚シク變動ヲ受ケ褶曲斷層多クシテ各炭層ノ層位上ノ關係ヲ知ルコト甚タ困難ナリ、炭層ハ一般ニ東方ニハ南北ニ走リ背斜層及向斜層ヲナス、其角度ハ一般ニ二十五度内外ナリ、西方ニハ層向ハ甚タ區々ニシテ或ハ急ニ斷層ニ切斷セラル、傾斜ハ急ニシテ概ネ六十度ナリ、數多ノ炭層アリ、而シテ厚サ三尺乃至七尺ノ五炭層東方ニ賦存ス、西方ニハ四尺乃至十七尺ノ五炭層アリト云ヒ斷層褶曲ノ結果尙數多ノ炭層アルカ如キ觀アリ

上部含炭層　ハ狹長ナル區域ヲナシ頁岩及砂岩ヨリ成リ直ニ下部層上ニアリ、厚サ十尺乃至二十尺ノ三炭層及四五尺ノ一炭層アリテ約南北ニ走リ西方ニ稍急斜シ中部ニ一ノ背斜層ヲナス、北部ニハ含炭層ノ幅甚タ狹クシテ十尺以上ノ一炭層西方ニ急斜ス、南方ニハ區域次第ニ廣ク厚サ上部ヨリ二十尺、十二尺、十尺及四尺ノ四炭層北二十度西ニ走リ西方三十度ニ傾斜ス、「ナイボロ」川ニ於テハ厚サ上部ヨリ十二尺、三尺、

十五尺及六尺ノ良質ヲ四炭層アリテ北二十度西ニ走リ七十度ニ急斜セル背斜層ヲナス、其南方ニハ約五基米ノ間炭層ノ露頭ヲ見サレトモ厚サ二尺乃至七尺ノ炭層再ヒ南方ニ露出シ更ニ南方ニ連續シテ東方六十度ニ傾斜ス、良質ノ炭層亦南部ニ露出スルモ地域漸ク狭シ、四炭層アリ、上層ヨリ之ヲ數フレハ厚サ七尺、十五尺、十五尺及十尺ニシテ北十五度西ニ走リ西方六十五度ニ傾斜ス

幌内炭田

幌内炭田ハ南北ニ走レル中央山脈ノ東側ニアリテ延長八十基米ニ互レル狭長ナル區域ヲ占メ高サ百米乃至二百米ノ丘陵地ヲナス、地層ハ頁岩、砂岩及蠻岩ヨリ成リ直ニ白堊紀層ヲ被覆ス、數多ノ炭層アルモ二三箇所ニ於テ之ヲ檢セルノミ、露國ノ國境ニ近ク五尺乃至十尺ノ五炭層アリ、中部ニ於ケル「ホイエ」川ニ露出スル一炭層ハ厚サ十尺ナリト云フ、南方「シツカ」川ニ沿ヒ厚サ十尺ノ一炭層北三十度西ニ走リ西南西五十度ニ傾斜ス、炭田ノ價值ハ調査不完全ナルヲ以テ明ナラサレトモ多

量ノ石炭ヲ埋藏スルカ如シ、石炭ハ主トシテ有煙炭ニ屬ス、其分析ノ結果次ノ如シ(百分中)

水	揮發物	固定炭素	灰	硫	黃	種
一〇、八九	二五、八一	五二、二八	一一、〇二	〇、五六	高度瀝青炭	類

東海岸ニ於ケル石炭

「ノボリポ」炭田 ハ東海岸ノ中部ニアリテ西方ハ火山岩ニ接ス、地ハ狹長ナル丘陵地ニシテ頁岩及砂岩ヨリ成ル、厚サ十五尺乃至二十尺ノ一炭層北々東ニ走り西北西四五十度ニ傾斜シ三基米ノ間之ヲ追跡スルヲ得ヘシト云フ、石炭分析ノ結果次ノ如シ(百分中)

水	揮發物	固定炭素	灰	硫	黃	種
一一、一三	二二、八七	五八、九一	七、〇九	〇、五三	高度瀝青炭	類

「メナペツ」川ニ沿ヘル石炭 知床半島ノ「メナペツ」川ニ沿ヘル一丘陵地ハ頁岩、砂岩ヨリ成リ厚サ五尺乃至十尺ノ二炭層ヲ挾有ス、層向ハ區々

ナルモ一般ニ北十度乃至四十度東ナリトス

西海岸ニ於ケル石炭

「アモベシ」川ニ沿ヘル石炭 露國國境ニ近ク「アモベシ」川ノ谿谷ニ厚サ二尺乃至五尺ノ二炭層北二十度東ニ走リ西方十五度乃至三十度ニ傾斜ス、含炭層ハ白堊紀層ヲ覆ヒ頁岩及砂岩ヨリ成レリ

「アラコウシナイ」ニ沿ヘル炭田 露國國境ノ南部約十二基米「アラコウシナイ」ニ沿ヒ厚サ上部ヨリ二尺、四尺及二尺五寸ノ三炭層アリテ北二十五度西ニ走リ西方ニ急斜ス

「セルトナイ」炭田 ハ北部ニアリ、沿岸ノ斷崖ニハ炭層ノ好露出甚タ多ク約五基米ノ間之ヲ追跡スルヲ得ヘシ、炭田ハ波状ノ臺地ニシテ東方ニハ火山岩ヨリ成レル高峻ナル山嶽アリ、含炭層ハ主ニ砂岩ヨリ成リ頁岩ヲ挾メリ、地層ハ變動ヲ受クルコト甚シク褶曲斷層多クシテ各炭層露頭ノ相互ノ關係ハ未タ明ナラス、層向ハ約南北ニシテ東方ニハ西方ニ、西方ニハ東方ニ傾斜シ一ノ向斜層ヲナス、傾斜ノ角度ハ三十度乃至

至六十度ナリ、而シテ上部ハ所ニ依リ浸蝕作用ノ爲メ除去セラレタリ、六炭層アリ、上部ヨリ之ヲ數フレハ厚サ六尺、五尺、三尺、五寸、二尺、四尺及十二尺ナリ、内第三層及第四層ハ安山岩ノ岩床ノ接觸變質作用ノ結果燧石ニ變ス、上部二層ハ嘗テ露西亞人ノ稼行セルモノニシテ廢坑海岸ニ近ク處々ニ散在ス、數多ノ斷層ノ結果炭層ノ延長ヲ知ルコト難クシテ炭田ノ價值ヲ定ムルコト能ハサレトモ相當ノ炭量ヲ埋藏セルナルヘシ、石炭ハ一般ニ有煙炭ニシテ粘結ス、分析ノ結果次ノ如シ(百分中)

水	揮發物	固定炭素	灰	硫	黃	種	類
四、三五	二〇、八八	六三、八三	一〇、九四	〇、九一	〇、九一	高度瀝青炭	

「ナヤシ」川中流ニ於ケル石炭 含炭層ハ白堊紀層ヲ被覆シ「ナヤシ」川中流ニ南北ニ長キ地域ヲ占メ中部ニ一ノ向斜層ヲナス、厚サ二尺及四尺ノ二炭層本層中ニ介在ス
「エストル」川中流ニ於ケル石炭 「エストル」川ノ中流ニ狹長ナル地域ヲ

占ムル含炭層ハ頁岩及砂岩ヨリ成リ南北ニ走リ西方五十度ニ傾斜ス、厚サ十三尺ノ炭層本層中ニ介在ス

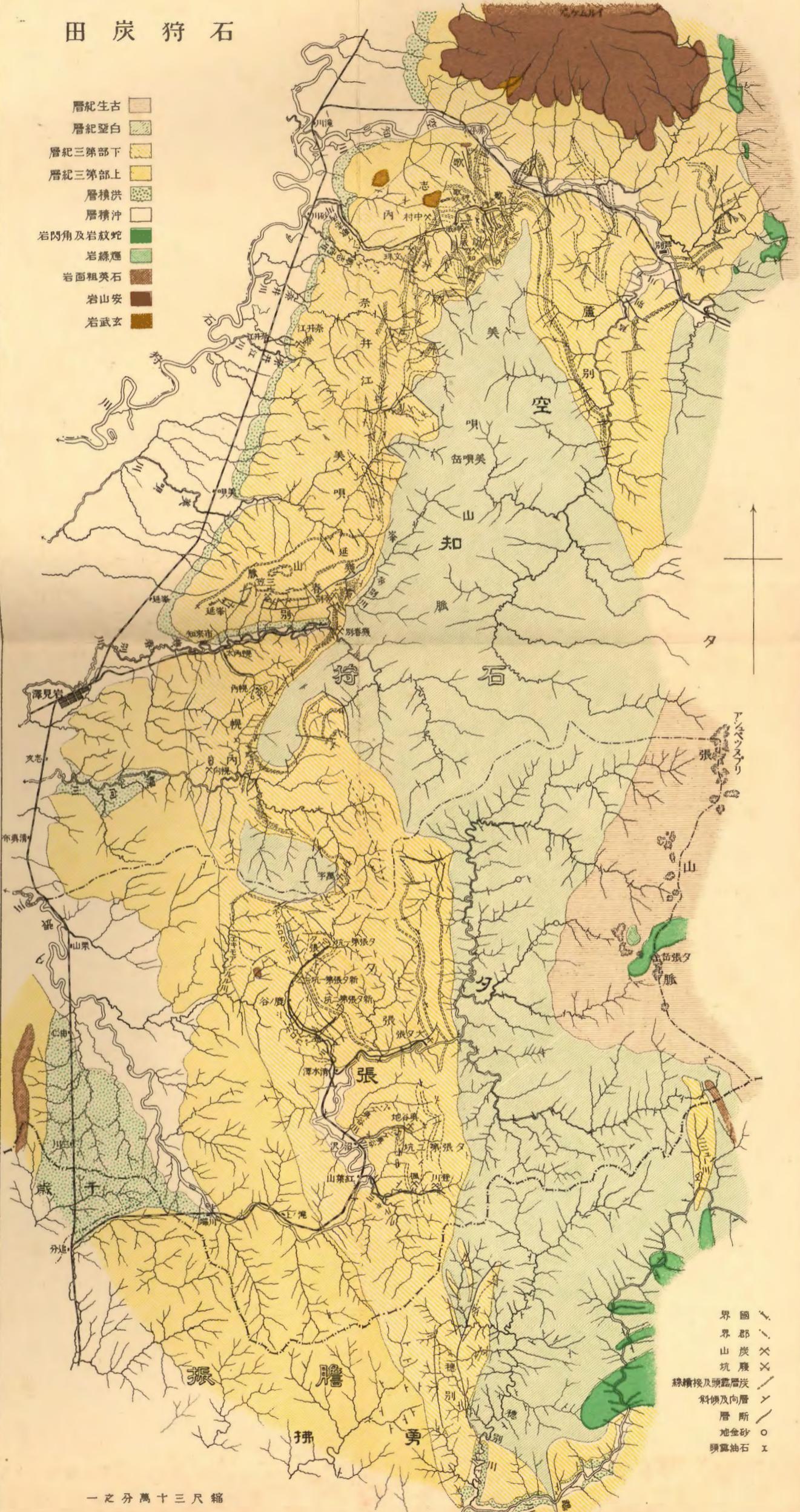
二 北海道

石狩炭田 (第二版参照)

位置及地形 石狩炭田ハ石狩川ノ東ニアル區域ヲ總稱シ石狩ノ中部ヲ南北ニ連互セリ、穂別炭田ハ膽振國ニアルモ本炭田ノ連續セルモノニシテ便宜上之ヲ本炭田ニ包括セシメタリ、炭田ハ延長七十基米、幅十五基米乃至二十五基米ノ廣大ナル面積ヲ占メ東方ハ夕張山脈ニ限ラレ西方ハ石狩川ノ大平野ニ沈降シ、北端ハ高サ約九百米ノ「イルムケツ」火山ニ依リ切斷セラレ南方ハ未ダ全ク明ナラス、夕張山脈ハ最高點ヲ「アシユペツヌプ」トシ高サ約千九百二十餘米アリ、美唄山脈ハ是ヨリ分岐シ高サ約百米ノ美唄嶽ヲ以テ最高トシ炭田ノ北部ヲ南北ニ走リ東西ノ二區域ニ分テリ、嶮峻ナル夕張山脈ノ西方ハ地形急ニ低下シテ中生代ノ山脈ニ降リ之ヨリ炭田ニ向ヒ次第ニ低下ス、炭田ハ波狀ノ

石狩炭田

- 層紀生古
- 層紀聖白
- 層紀三第部下
- 層紀三第部上
- 層積洪
- 層積沖
- 岩閃角及岩紋蛇
- 岩輝輝
- 岩面粗英石
- 岩山安
- 岩武玄



- 界國
- 界郡
- 山炭
- 坑廢
- 線續接及跡露層炭
- 斜傾及向層
- 層斷
- 地金砂
- 頭露地石

一之分萬十三尺縮

臺地狀ヲナシ最高點八百米アリ、石狩川ノ支流ハ本炭田ヲ東ヨリ西ニ
流下シ東西ニ走レル小山脈ヲナシ地形ノ單調ヲ破レリ、「イルムケツプ」
火山ハ北方ニ稍大ナル面積ヲ占メ第三紀層ヲ被覆シ炭田ノ北部ヲ限
レリ、北方ニ於ケル空知川、南方ニ於ケル夕張川ハ本炭田ニ於ケル石狩
川ノ二大支流ナリ、中部ニアル幾春別川及幌向川ハ之ニ亞キ約東方ヨ
リ西方ニ炭田ヲ横キレリ、膽振ノ鶉川ハ北々東ヨリ南々西ニ流下シテ
炭田ノ南部ヲ限レリ

沿革及產出額 北海道ノ石炭ハ殆ント全ク石狩炭田ノ產出ニ係リ其
發見ハ明治維新前ニアリト云フ、明治六年炭田ノ調査始メテ北海道廳
ニ依リ施行セラレタリ、幾春別炭田ノ幌内炭坑ヲ開發セントスル企圖
ハ明治三年ニ始マリ四年後ニ至リ採炭ニ着手シタリ、明治二十三年炭
礦鐵道會社組織セラレ鐵道ヲ敷設シテ運搬ノ方法ヲ改メ二年後主要
ナル鐵道ノ完成スルニ至リ產出額甚シク増加シ爾來交通機關次第ニ
發達シ殊ニ最近十五年間急激ニ進歩シ特ニ最近五年間ヲ然リトナス、

本炭田ノ產出額ハ次ノ如シ

年 別	產 出 額	年 別	產 出 額	年 別	產 出 額
明治二十一年	五、七三二 <small>噸</small>	明治二十九年	四六〇、六八四 <small>噸</small>	明治三十七年	一、〇七八、一六八 <small>噸</small>
明治二十二年	一、一四、一三三	明治三十年	六〇〇、八五七	明治三十八年	一、一七七、五一一
明治二十三年	一八七、八五三	明治三十一年	五九六、七四一	明治三十九年	一、四五四、〇一八
明治二十四年	二六九、五一〇	明治三十二年	六三八、三四八	明治四十年	一、三八四、三四九
明治二十五年	二二九、八九八	明治三十三年	六五九、七四二	明治四十一年	一、六〇七、三〇四
明治二十六年	三三六、五七〇	明治三十四年	八二六、八八五	明治四十二年	一、六九一、九三〇
明治二十七年	三九〇、九二一	明治三十五年	九六四、〇九六	明治四十三年	一、五九一、六九五
明治二十八年	四六〇、三九八	明治三十六年	一、〇五三、八五五	明治四十四年	一、七〇一、七四八

地質 基盤ハ古生層ニシテ綠泥石墨片岩、石墨片岩、綠泥片岩ノ如キ變
 成岩ト石灰岩、輝綠凝灰岩、角岩及粘板岩等ヨリ成リ概ネ南北ニ走リ東
 方六十度乃至八十度ニ傾斜シ急峻ナル夕張山脈ヲ形成ス、不整合ニ之

ヲ被覆セル中生層ノ山地ハ地勢古生層ニ於ケルト全ク異ナレリ、其岩石ハ主ニ上部頁岩、中部頁岩及砂岩ノ互層及下部砂岩ヨリ成レリ、蠻岩ハ中部及上部ノ間ニアルコト多ク其厚サハペンケ歌志内川上流ニ於ケル如ク時ニ五百尺ニ達スルコトアリ、層向ハ一般ニ約南北ナルモ地層屢褶曲ス、傾斜ノ角度ハ區々ニシテ一般ニ二十度乃至五十度ナリ、美唄山脈ノ北部ニハ地層ハ背斜層ヲナシ空知川ニ近ク第三紀層下ニ沈降ス、數多ノ化石ニ依リ本層ハ白堊紀ニ屬スルヲ知レリ

第三紀層ハ凝灰岩、頁岩、砂岩及蠻岩ヨリ成リ泥灰岩及炭層ヲ挾ミ白堊紀層ヲ被覆ス、層向及傾斜ハ白堊紀層ト相同シク兩者ノ間ニ不整合ヲ見ス、厚層ヲナセル蠻岩ハ常ニ第三紀層ト白堊紀層トノ間ニアリテ地形ニ變化アリシヲ示セリ、第三紀層ハ之ヲ上下ノ二部ニ區別ス、上部層ハ凝灰岩、凝灰頁岩及蠻岩ヨリ成リ、下部層ハ頁岩、砂岩及蠻岩ヨリ成リ泥灰岩及炭層ヲ挾ミ兩者ノ間ニ不整合ヲ見ス、下部層ハ東部ヲ占メ直ニ白堊紀層ヲ被覆シ上部層ハ西部ニアリ、炭層ハ下部層ニ埋藏セラレ

其ノ數百五十ヲ超エ厚サハ數寸ヨリ六十尺ニ膨大シ扁豆狀ヲナセル
モノ多キカ如シ、層向ハ一般ニ南北ナルモ北部ニハ下部ノ中生層ト同
シク伸長セル半穹窿狀ヲナシ北、東、西ノ三方ニ沈降ス、地層ハ亦處々ニ
甚シク擾亂セル所アリテ背斜層又ハ向斜層ヲナシ及斷層甚タ多キ所
アリ、數多ノ化石ハ殊ニ下部層ニ發見セラル、モ標準トスヘモノナク
其地質年代ヲ定ムルコト能ハサレトモ其化石ハ白堊紀層ニ於ケルモ
ノト全ク異ニシテ本層ハ蓋シ中新紀ニ屬スルモノナルヘシト云フ、上
部層ハ凝灰質ニシテ其時代ニ於ケル火山活動ノ激甚ナリシヲ示セリ、
洪積層ハ石狩川ノ大平野ニ沿ヒ狹キ階段ヲナシ山地ヲ繞レリ、火成岩
ハ少ナク輝綠岩及蛇紋岩ハ古生層及白堊紀層ヲ貫通シ安山岩、石英粗
面岩及玄武岩ハ白堊紀層及第三紀層ヲ貫通ス、石英粗面岩ハ第三紀層
中ニ岩脈ヲナシ空知川ノ南岸赤平ニ露出ス、安山岩ハ「イルムケツ」火山
ヲ構成スルノ外白堊紀層及第三紀層ニ岩脈トシテ數箇所ニ露出ス、玄
武岩ハ「イルムケツ」火山ノ南麓ニ露出シ及歌志内ノ西方ニ孤立ノ神威

嶽及小神威嶽ヲナス

第三紀層ハ西方ヨリ襲來セル横壓力ノ爲メ甚シク變動シ複雑ナル褶曲及衝上斷層ヲナシ斷層ハ其數多ク悉ク舉クヘカラス、斷層ノ主要ナル方向ハ南北、東西又ハ北西ニシテ、美唄山脈ノ西麓ニハ塔段斷層多シトス、而シテ地層ハ一般ニ美唄山脈ノ東方ニハ規則正シク之ヲ追跡スルヲ得ヘク層向ハ南北又ハ北西ニシテ東方ニ傾斜ス、美唄山脈ノ西方ニハ地層ハ擾亂セラレテ層向屢變化シ之ヲ追跡スルニ難キモ一般ニ亦約南北ヲ指セリ

炭層 白堊紀層ニハ扁豆狀ヲナセル炭層ヲ檢スルモ厚サ二寸乃至一尺ナリトス、主要ナル炭層ハ第三紀下部層ニアリテ現ニ盛ニ稼行セラ、第三紀上部層ニアルモノハ品位甚タ劣等ナルノミナラス厚サ亦薄クシテ五寸乃至一尺ナリ、隨テ白堊紀層及第三紀上部層ニアル炭層ハ經濟上價值アルモノニアラス

炭層ノ數ハ甚タ多クシテ薄層ヲ數フレハ百五十ヲ超ユ、炭層ハ美唄山

脈ノ北西ニ最モ好ク發達スルモ地質構造甚タ複雑ナリ、南方ニハ總テ之ヲ追跡スルヲ得スシテ炭層數甚タ減少ス、然レトモ幾春別川ノ中流及北部ニハ炭層數再ヒ増加ス、即チ炭層ノ發達ハ區々ニシテ短距離ニ變化スルモノ、如ク隨所各炭層ヲ比較スルコト困難ナリ、炭層ノ厚サハ區々ニシテ一尺ヨリ六十尺ニ膨大ス、蓋シ厚層ノ炭層ト雖モ或ハ短距離ニ縮迫シ扁豆狀ヲナシ或ハ薄條ノ稼行ニ堪ヘサル數多ノ炭層ニ分岐ス

炭質 石炭ノ物理并ニ化學性質ハ各地方及各炭層ニ於テ異ナリ、同一炭層ニアルモノト雖モ時ニ粘結シ時ニ粘結セサルコトアリ、石炭ハ一般ニ黑色ニシテ粘結シ樹脂光澤ヲ有シ容易ニ長焰ヲ發シテ燃燒シ良好ナル有煙炭ニ屬ス、分析ノ結果次ノ如シ(百分中)

歌志内	水		揮發物		固定炭素		灰	硫黃	比重	發熱量		種類
	三、三五	三六、八六	五〇〇三	九、七六	〇、四五	一、三一八				カロリー	英國熱單位	
二、三〇	三七、二一	五六〇五	四、四四	〇、七二	一、二一八	—	—	—	—	—	—	同
蘆別	三、三五	三六、八六	五〇〇三	九、七六	〇、四五	一、三一八	六、六〇六一	一、八九〇	低度瀝青炭			

奈井江、美唄	三、二五	三九、四九	四七、九〇	九、三六	〇、三八	一、三三五	七、〇二四	一、二六四	三同
幾春別	二、八一	四五、二九	四六、四〇	五、五一	〇、二七	二、二三五	—	—	同
幌内	四、八七	四〇、四一	四八、四三	六、二九	〇、四三	一、三一四	六、八一五	一、二六七	同
夕張	二、二八	四一、二〇	五〇、四一	六、一一	〇、四四	一、二八四	七、三七二	一、三二六	同
穂別	五、三一	四二、三二	四〇、九七	一一、四〇	〇、三三	一、三二二	—	—	同

炭量 本炭田ハ本邦ニ於ケル最モ重要ナル炭田ノ一ニシテ其炭量大ナルモノアリ、炭田ノ地質構造ハ甚タ複雑ナルヲ以テ隨テ炭量ヲ概算スルニハ精密ナル地質調査ヲ要スヘキモ該調査ハ未タ施行セラル、ニ至ラス、以下舉クルトコロノ炭量ハ炭層ノ厚サ及其賦存ノ區域ヲ局限シテ概算セルモノナルヲ以テ調査ノ進行スルニ從ヒ炭量増加スルニ至ルモノアラシ、而シテ第一種炭量ニ對シテハ試錐又ハ其他ノ方法ニ依リテ其賦存ノ區域ヲ確定シ其然ラサル場合ニ於テハ安全ヲ計リ厚層ニ限リ地下五百尺迄ヲ計算シタリ、之ニ依リ得タル炭量ハ次ノ如シ

地名	第一種 (單位百噸)	第二種 (單位百噸)
蘆別	八六、五	九六七、〇
歌志内	五四〇	一〇九五
奈井江美唄	二四、三	一五一、五
幾春別	二〇、一	四九、二
幌内	三〇、二	一五一、七
夕張	八六、五	三四六、〇
穂別	—	二二、〇
計	三〇一、六	一、七九六、九

(一) 蘆別炭田

蘆別炭田ハ美唄山脈ノ北東ニアリテ空知川及其支流蘆別川ニ沿ヒ南北ノ延長約二十二基米、東西幅約十六基米ナリ、炭田ノ中部ニ空知川ノ狹長ナル平野アリテ炭層ヲ二分ス、其南北ニ於ケル炭層相互ノ關係明

ナラスシテ之ヲ追跡スルヲ得サルモノアリ、數多ノ炭層ハ之ヲ上、中、下
ノ三群ニ區別スルヲ得ヘシ、而シテ本炭田ニハ未タ稼行セル炭坑ナシ
下部炭層群ハ北西隅ニアリテ伸長セル半穹窿狀ヲナシ白堊紀層ノ東
側ニ沿ヒ南方ニ連續シ蘆別川ニ達ス、層向ハ白堊紀層及第三紀層ノ境
界ニ殆ント平行ス、傾斜ハ約東方四五十度ニ傾斜スルモ北部ニ於テハ
地層半穹窿狀ヲナシ傾斜角亦一般ニ四五十度ナリ、斷層ハ穹窿狀ノ頂
部ニ殊ニ多ク南端ニハ地層甚シク擾亂シ炭質寧ロ劣等トナレリ、空知
川附近ニハ炭層甚タ多ク川ノ南部ニ於テ十七炭層、北部ニ於テ八炭層
ヲ檢セルモ南方ニハ悉ク之ヲ見ルヲ得スシテ其數減少シ南部ニ於テ
ハ唯六炭層ノ重要ナルモノアルノミ、空知川ノ北方ニアル炭層ハ河流
ニ依リ切斷セラレ川ノ南方ニハ之ヲ追跡スルヲ得ス、炭層ノ延長ハ平
均四千五百尺乃至一萬三千尺ナリトシ、各炭層ノ平均厚サハ三尺五寸
乃至十三尺ニシテ總厚ハ炭田ノ北部ニ於テ百七十尺、南部ニ於テ二十
九尺ナリトス

中部炭層群ハ略南北ニ走り空知川ニ依リ切斷セラレ其兩側ニ於ケル相互ノ關係ハ未タ明ナラス、炭層ハ又屢斷層ニ依リ切斷セラル、川ノ南部ニ於テハ傾斜ハ東方ニシテ傾斜角ハ北方ニハ十度乃至二十度ナレトモ南方ニハ急ナリ、十一炭層アリテ七層ハ之ヲ追跡スルヲ得ヘキモ四層ハ唯露頭ニ於テ之ヲ檢スルノミ、厚サハ三尺乃至十二尺ニシテ總厚五十尺ナリ、川ノ北部ニ於テハ炭層ハ北五度乃至三十度西ニ走り東方五十度乃至七十五度ニ傾斜ス、其北端ハ明ナラスシテ一部ハ縮迫シ一部ハ土壤ニ依リ被覆セラレタルカ如シ、五炭層アリテ三千五百尺乃至六千尺ノ間之ヲ追跡スルヲ得ヘク厚サハ三尺乃至十一尺ニシテ總厚三十尺ナリ

上部炭層群ハ白堊紀層ノ東部境界線ニ殆ント并走シ北方ニハ半圓形ヲナシ南方ニハ南北ニ走レリ、川ノ北部ニ於テ北方ニハ層向東西ニシテ北方二十度乃至二十五度ニ傾斜スルモ南方ニハ次第ニ彎曲ス、然レトモ中部ニ於テハ地層甚シク擾亂シ褶曲斷層多クシテ之ヲ追跡スル

ニ難シ、南方ニハ層向西方ニ轉シ再ヒ約東西ニ走レリ、傾斜ノ角度ハ甚
タ區々ナルモ概シテ三十度ナリ、數多ノ炭層アルモ七層ハ主要ナルモ
ノニシテ北方ニハ縮迫スルカ如シ、各炭層ノ平均厚サハ五尺乃至八尺
ニシテ總厚四十四尺ナリ、川ノ南部ニ於テハ層向ハ略蘆別川ニ平行シ
北方ニハ北東、中部及南部ニハ南北ニシテ傾斜ハ東方三十度乃至五十
度ナリトス、數多ノ斷層中ニ斷層ハ炭層ヲ切斷シテ西方ニ轉位セリ、主
要ナル炭層ハ六層ニシテ厚サハ五尺乃至十尺、總厚三十六尺ナリトス
以上炭層ノ外厚サ二尺五寸以上ノ炭層ノ露頭數多アレトモ其連續明
ナラス、而シテ此等ノ炭層ハ前記計算中ニ之ヲ算入セス

(二) 歌志内炭田

歌志内炭田ハ美唄山脈西側ノ北部ニアリテ空知、白威、歌神、中村、文珠ノ
五炭坑茲ニ稼行シ就中空知炭坑ヲ最大ナリトシ本炭田ノ總產出額ノ
三分ノ二以上ヲ產出ス、即チ明治四十二年ニハ三十一萬二千三百三十
噸、同四十三年ニハ二十萬四千四百五十五噸、同四十四年ニハ十五萬千

百九十三噸ヲ産出セリ

本炭田ニハ石狩川ノ二支流「ペンケ」歌志内川及「バンケ」歌志内川約東方ヨリ西方ニ流下シ其間ニ低卑ナル山嶽アリ、最高約四百米ナリトス、含炭層ハ主ニ第三紀下部層ニ屬スル砂岩、頁岩ヨリ成リ蠻岩及泥灰岩ヲ挾メリ、石狩炭田中本炭田ハ最モ地層ノ擾亂セラレタル部分ニシテ數多ノ褶曲及斷層アリテ構造最モ複雑シ地層ノ層位ヲ定ムルコト容易ナラス、褶曲軸ハ一般ニ南北ナルカ如ク斷層亦多ク南北ニ走レルカ如シ、炭層ハ本炭田ニ於テ最モ好ク發達シ薄キ炭層ヲ數フレハ其數二百ニ達スヘク二尺以上ノ炭層三十以上ヲ追跡スルヲ得ヘシ、炭層ノ厚サハ甚タ區々ニシテ薄キ炭層モ短距離ニ於テ直ニ厚層トナルコト屢ナリ、炭層ハ一二ノ場合ヲ除ケハ多少ノ夾ミヲ有ス、炭層ノ厚サ最大ナルモノハ四十尺ニ達ス、傾斜ノ角度ハ區々ニシテ時ニ急斜シ時ニ緩斜スルモ一般ニ四五度ナリトス

本炭田ニハ下部及中部炭層群アルノミニシテ上部炭層群ニ該當スヘ

キモノナシ、下部及中部炭層群ハ南方ニハ甚タ相接近シテ其距離僅ニ六七百尺ニ減シ兩者ヲ區別スルニ難シ、而シテ空知及白威兩炭坑ニ於テハ下部炭層群ヲ、中村及文珠兩炭坑ニ於テハ中部炭層群ヲ稼行ス、下部炭層群ト思惟スヘキモノハ褶曲及斷層ノ爲メ同一ノ炭層數度現出スルモ厚サ三尺以上ノ炭層三十一層ヲ數フヘク其總厚ハ約百七十尺ニ達ス、中部炭層群ト思惟スヘキモノハ空知川沿岸ニ露出シ南方ニ連續スルモ斷層ニ切斷セラレ又ハ褶曲シ地層擾亂ス、北部ニハ炭層十一アリ、南部ニハ其數尙多キカ如ク下部及中部炭層群ノ區別甚タ明ナラス、厚サハ區々ニシテ平均二尺乃至十七尺、總厚北部ニ四十七尺、南部ニ百尺以上ナリトス

(三) 奈井江、美唄炭田

奈井江、美唄炭田ハ延長南北十七基米、東西約八基米ノ狹長ナル區域ヲ占メ奈井江川、奈井川及美唄川本區域ヲ西流シ波狀ノ臺地ヲナス、奈井江炭坑ハ本炭田中唯一ノ稼行炭山ニシテ明治四十三年ニハ一萬七千

二百五十五噸、同四十四年ニハ一萬四千五十噸ヲ産出セリ、地質ハ歌志内ニ於ケルト同シキモ地質構造ハ之ニ比シ簡單ナリ、而モ小褶曲ノ外數多ノ大斷層アリテ炭層相互ノ關係ヲ知ルコト難シ、層向ハ一般ニ南北又ハ北々西ニシテ西方ニ急斜ス、一般ニ傾斜角ハ六十度ナルモ白堊紀層ニ接近スル部分ハ北東ニ轉シ傾斜ハ寧ろ緩ニシテ北西二十五度乃至三十五度ナリトス、數多ノ炭層ハ炭田ノ東部及西部ニアリ、歌志内炭田ニ於ケル炭層ハ一部分ハ南方ニ縮迫スルカ如ク該炭田ニ於ケル炭層ノ一部分ノミ本炭田ニ於テ之ヲ追跡スルヲ得、且ツ該炭田ニ於ケル二炭層群ハ相接近シテ本炭田ニ於テハ之ヲ區別スルコト能ハス、東部ニ於テハ良質ノ石炭ヨリ成レル十七炭層、西部ニハ四炭層アリ、東部ニ於ケル各炭層ノ平均厚サハ二尺五寸乃至十八尺ニシテ總厚四十七尺ナルモ最モ厚キトキハ百尺以上ニ達シ薄キトキハ二十五尺ニ縮迫ス、奈井江炭坑ハ石狩平野ニ近ク奈井江停車場ヨリ二基米ノ地ニアリテ交通不便ナラス、本炭坑ニ於ケル炭層ハ上部ニアルモノ、如ク狹長

ナル半穹窿狀ヲナス、層向ハ一般ニ南北ニシテ傾斜ノ角度ハ六十度ナリ、炭層ノ露頭甚タ多キモ重要ナルモノハ三層ニシテ總厚十四尺ナリ、石狩平野ニ近キ北西隅ニ於テハ炭層ノ露頭數多アリ、内一層ハ十尺乃至十六尺ノ厚サヲ有シ重要ナリトス

美唄川ノ中流沿岸ニハ數多ノ炭層ノ露出アリ、内二層ハ之ヲ追跡スルヲ得ヘシ、東方ニ於ケルモノハ波狀ヲ呈シ北方ニハ西方十度ニ、南方ニハ東南東二十度ニ傾斜シ一層ハ西方二十度ニ傾斜ス、平均厚サハ六尺及五尺ナリトス

(四) 幾春別炭田

幾春別炭田ハ幾春別川ノ北部ニアリテ東西約十五基米、南北八基米ノ地域ヲ占メ幾春別、奔別及三笠ノ三炭坑ヲ包括ス、幾春別及奔別兩炭坑ハ明治四十四年ニ五萬噸以上ヲ産出セリ、即チ次ノ如シ

地名	明治四十二年	明治四十三年	明治四十四年
奔別	六九〇一四噸	八七、三一〇噸	一〇六、五四九噸

幾春別川及美唄川間ノ山脈ハ殆ント炭田ノ中部ヲ東西ニ走り中央ニ最モ高シ、厚キ砂岩及頁岩ノ互層ハ整合ニ白堊紀層ヲ被覆ス、白堊紀層ハ北東部ニ露出シ斷層ニ依リ界セラル、其南方ニアル第三紀層ハ甚タ擾亂スルモ南方ニ開口セル半穹窿狀構造ヲナス、奔別川附近ニ數多ノ斷層アリテ炭層ハ爲メニ切斷セラル、層向ハ北十度乃至三十度東ニシテ其東翼ハ急斜スルモ西翼ハ寧ロ緩斜セリ、峯延山脈ヲ圍繞セル炭層ハ約東北ニ長キ二箇ノ盆地狀ヲナス、層向ハ東西ヨリ北七十度東ノ間ニアリテ一般ニ三十度ノ角度ヲ以テ傾斜ス

本炭田ニ於テハ炭層ノ數再ヒ多ク厚サ亦増大セルモ歌志内炭田ニ於ケルヨリハ寡少ナリ、八炭層ハ白堊紀層ノ境界ニ殆ント并行シテ南方ニ走り西方六十度乃至七十五度ノ傾斜ヲナセリ、各炭層ノ平均厚サハ三尺乃至八尺ナルモ主ニ四五尺トシ總厚三十五尺ナリ、炭層ハ幾春別ノ南ヨリ北々東ニ走り傾斜ハ東北東ニ急ニシテ六十度時ニ直立ス

峯延山脈ニ沿ヒ二ノ盆地狀ヲナセル炭層ハ其數甚タ多キモ各二三層ヲ重要ナリトシ稼行スルヲ得ヘシ、外部ノ盆地狀ヲナセル下部炭層ハ東西ノ方向ニ甚タ長ク南翼ハ地層擾亂ス、傾斜ノ角度ハ北翼ニ緩ニシテ十五度乃至二十度ナルモ南翼ニハ之ヨリ急ニシテ二十五度ニ達ス、北翼ニハ東部ニ數多ノ斷層アリ、炭層ノ總厚ハ隨所異ニシテ十尺乃至十三尺ナリトス、南翼ニ於テハ炭層ノ總厚ハ十二尺ニシテ嘗テ峯延炭坑ニヨリ稼行セラレタリ、更ニ南方ニ重要ナル二炭層アリテ厚サ各六尺ヲ有シ約東西ニ走り南方三十五度ニ傾斜ス、本層ハ北部ニ一ノ背斜層ヲナスカ如キモ共ニ斷層ニ依リ切斷セラレ兩端亦斷層ニ依リ切斷セラル、三笠炭坑ハ現ニ茲ニ操業ス、山脈ノ頂部ニ近キ小盆地ニハ九炭層アリ、内二層ハ約三尺ノ厚サヲ有ス、傾斜ノ角度ハ約二十五度ナリ

(五) 幌内炭田

幌内炭田ハ幾春別川ノ南部ニアリテ南北約十六基米、東西約十三基米ノ面積ヲ占メ幌内、幌向及萬字ノ三炭坑ヲ包括ス、幌内炭坑ハ一年五萬

噸以上ヲ產出セリ、卽チ明治四十二年ニハ十九萬六千七百七十六噸、同四
十三年ニハ十七萬四百十五噸、同四十四年ニハ十五萬千五百八十四噸
ヲ產出セリ

本炭田ノ東部ニハ白堊紀ノ山脊南方ニ岬角ノ如ク突出シ之ヲ被覆シ
テ第三紀層アリ、東方六十度ニ傾斜ス、南部ニハ白堊紀層稍大ナル面積
ヲ占ム、之ヲ圍繞セル第三紀層ハ二十度乃至三十度ノ角度ヲ以テ傾斜
ス、東部白堊紀層ニ接セル數多ノ炭層ハ幾春別炭田ニ於ケル炭層ノ連
續セルモノト思惟スヘキモノナリ、内八層ハ之ヲ追跡スルヲ得ヘキモ
南方ニハ甚シク擾亂シ或ハ併合シ或ハ縮迫シテ其數減少ス、更ニ南方
ニハ白堊紀層トノ境界ニ沿ヒ炭層ハ東方ニ彎曲シ其數再ヒ増加ス、茲
ニハ地質構造甚タ複雑ニシテ一條ノ背斜層アリ、其西翼ハ尙約南北ノ
方向ヲ持續シ幌向川ニ達シテ褶曲シ且ツ斷層ニ會ス、東翼ハ東方ニ彎
曲セル後再ヒ白堊紀層トノ境界ニ沿ヒ北方ニ向ヒ遂ニ斷層ニ依リ切
斷セララル、茲ニハ唯二ノ重要ナル炭層アルノミ、白堊紀層ノ西ニ南北ニ

走レル各炭層ノ平均厚サハ二尺乃至八尺ニシテ總厚ハ北部ニハ二十四尺、南部ニハ十二尺ナリトス

幌内炭坑ハ鐵道ニ依リ連續セラレ北海道ニ於テハ最初ニ開發セラレタル茅沼炭田ニ次テ開坑セラレタリ、炭層十四アリ、内五炭層ハ採掘セラル、モノニシテ厚サ二尺五寸以上ヲ有シ伸長セル穹窿狀構造ヲナス、其長軸ノ方向ハ北五十度東ニシテ延長四基米ナリ、傾斜ノ角度ハ北西翼ニ緩ニシテ十五度乃至四十度ナルモ南東翼ニ急ニシテ五十度乃至八十度ナリトス、而シテ南西部ハ斷層ニ依リ切斷セラレテ其以西ハ未タ明ナラス、本炭層ハ既述セル炭層ノ下部ニ位スルカ如ク炭層ノ總厚ハ二十尺ナリ

幌向川ノ南方ニハ炭層ハ白堊紀層ノ境界ニ沿ヒ露出ス、幌向川ニ沿ヒ重要ナル四炭層南方ニ走り東方二十度ニ傾斜シ一タヒ斷層ニ切斷セラル、南方ニハ炭層ハ東南東ニ走り北々西二三十度ニ傾斜シ萬字炭坑ノ北ニ至リ白堊紀層ノ境界ニ沿ヒ再ヒ南方ニ彎曲ス、數多ノ炭層中西

方ニ於テハ六炭層ハ稼行スヘク總厚十七尺アルモ東方ニハ其數減シ
 萬字炭坑ニ於テハ厚サ三尺及五尺ノ二炭層ヲ稼行ス
 幌向炭坑ハ幌向川支流ノ北岸ニアリ、石炭ノ露頭數多アリ、内四炭層ハ
 之ヲ追跡スルヲ得ヘク南北ニ長キ小穹窿狀ヲナシ延長二千尺ナリ、傾
 斜ノ角度ハ急ナリ、四炭層ノ總厚ハ十三尺ナリトス
 白聖紀層岬角ノ北東及東方ニ於テハ三炭層群殆ント並走シ北翼ニハ
 南方ニ、西翼ニハ東方ニ傾斜ス、數多ノ炭層中重要ナルモノハ二層ナリ
 トス、中部炭層群ハ既述セル西部即チ下部炭層群ノ上約千五百尺乃至
 二千尺、上部炭層ハ中部炭層群ノ上約二百五十尺ニアリト云フ、傾斜ノ
 角度ハ一般ニ五十度ナリトス、各炭層群ノ總厚ハ十一尺ナリ

(六) 夕張炭田

夕張炭田ハ幌内炭田ノ南方ニ隣接シ延長二十六基米、幅十基米ノ面積
 ヲ占メ鐵道ニ依リ連絡セラレ夕張川ニ依リ二分セラル、本炭田ハ北海
 道中最モ活潑ニ採掘セラル、所ニシテ明治四十四年五萬噸以上ノ產

出アル炭山ハ次ノ如シ

地名	明治四十二年	明治四十三年	明治四十四年
夕張第一坑	五〇九、六〇五 ^期	四七一、三七一 ^期	五六六、一六八 ^期
夕張第二坑	一三九、七一〇	一二八、六七八	一四八、二〇三
新夕張第一坑	一三〇、三七三	一一九、〇七一	一二八、二二六
新夕張第二坑	二五、九七四	三四、八一六	六一、八〇四

夕張川ノ北部ニハ二炭層群東部及西部ニアルモ南部ニハ相接近シ一部ハ縮迫ス

夕張川北部區域 東部ニハ高サ約七百米ノ一山脈南北ニ走り炭層ハ其兩側ニ之ヲ追跡スルヲ得、地層ハ頁岩及砂岩ニシテ蠻岩ヲ挟ミ一般ニ南北ニ走り東方三十度乃至六十度ニ傾斜スルモ北部ニハ數多ノ斷層アリテ主要ナル炭層ハ之ヲ追跡スルヲ得サルニ至リ南部ニハ炭層ハ小斷層ノ外一大斷層ニ依リ東方ニ轉位シ北二十度西ニ走り東北東

四十度ニ傾斜ス、數多ノ既知炭層ハ之ヲ三群ニ區別ス、下部ニ炭層群ハ山脈ノ東方ニアリテ白堊紀層ニ接近シ厚サ二十尺乃至四十尺ノ疊岩兩者ノ間ニ介在ス、炭層ノ厚サハ區々ニシテ之ヲ追跡スルコト難キモ疊岩ニヨリ略其層位ヲ知ルヲ得ヘシ、上部炭層群ニハ三層、中部炭層群ニハ二層アリテ厚サハ最厚十三尺ニシテ總厚六尺五寸ナリ、下部炭層群ハ山脈ノ西方ニアリテ最モ重要ニシテ大夕張炭坑ノ稼行スル所タリ、之ヲ上下ノ二ニ區別ス、東方ニ於ケルモノハ西方ニ於ケルモノヨリ三四百尺ノ高所ニアリテ主ニ二炭層ヨリ成リ厚サ四尺五寸及九尺總厚十二尺ナリ、西部ニアルモノハ南部ニハ九炭層アルモ小距離ニ於テ膨大若クハ縮迫シ其最モ厚キモノハ三十尺ニ達スルモ總厚十五尺ナリトス

西部ニハ白堊紀層ハ北端ヲ限り其外、ボンポロカペツ川ニ小區域ニ露出ス、夕張第一坑、新夕張第一坑及第二坑ハ茲ニ操業シ鐵道ニ依リ連絡ス、北部即チ白堊紀層附近ニハ層向ハ約東西ナルモ南方ニハ北西ニ變

曲シ北東三十度ニ傾斜ス、斷層ノ爲メ炭層ハ再ヒ北東ニ轉シ南東二十
五度ニ傾斜ス、斷層ハ殊ニ中部即チ新夕張第一坑附近ニ最モ多クシテ
地層ハ甚シク擾亂ス、而シテ此地ヨリ一大斷層遙ニ南方ニ走リ炭層ハ
再ヒ北西ニ轉シ北東三十度ニ傾斜ス、「シイポロカペツ」川本流附近ニハ
一背斜層南方ニ走レルカ如シ、南方夕張川ニ近ク炭層ハ一大斷層ニ依
リ切斷セラレ東方ニ轉位セリ

夕張第一坑ニ於ケル主要炭層ハ厚サ二十四尺ニシテ其上部百八十尺、
下部二百八十尺ニ厚サ各約四尺ノ一炭層アリ、是等炭層ハ隨所變動ヲ
受ケ甚タ擾亂スト雖モ南北ニ之ヲ追跡スルヲ得ヘシ、西方ニアル^ルエキ
モアナル、「川」ニ露出スル一炭層ハ南北ニ走リ南方ニハ東方ニ彎曲シ
主要炭層ニ該當スルカ如シ、茲ニハ上層及下層ヲ見ス、新夕張第一坑ニ
於テハ地層甚シク擾亂スルモ厚サ六尺、八尺及十尺ノ三炭層稼行セラ
レ一背斜層ヲナシ一斷層本區域ノ略中部ヲ通過ス、以上炭層ハ主要炭
層ニ該當スルモノ、如ク即チ主要炭層ハ南部ニハ厚キ夾ミニ依リ分

離セラレ北部ニハ夾ミ甚ク薄シ、上部及下部炭層ハ南部ニハ厚サ六尺及二尺五寸ナリ

夕張川南部區域ニハ夕張川ノ二支流眞谷川、クルキ川西流シ夕張第二坑ニ屬スル眞谷地、楓及登川ノ炭坑稼行シ鐵道又ハ輕便鐵道ニ依リテ連絡ス

稼行炭層ハ楓ニ於テ三層、眞谷地ニ於テハ六層アリ、厚サハ三尺乃至二十五尺ニシテ時ニ六十尺ニ達ス、地層ハ頁岩、砂岩及蠻岩ヨリ成リ南北ニ走レルモ西方ニハ北西ニ彎曲ス

夕張川北部區域ノ炭層ハ本區域ニ於テ互ニ相接近スルモ尙東部及西部炭層群ニ分ツヲ得ヘシ、東部炭層群ニハ主要ナル炭層六層アリテ厚サ三尺乃至十五尺アリ、然レトモ或ハ膨大シ或ハ縮小シ或ハ數多ノ薄層ニ分岐シ或ハ併合ス、其總厚ハ十九尺ヲ下ラス

中部即チ「パンク」眞谷川ニ西部炭層群ニ屬スル四炭層露出シ楓ニ連續シ更ニ南方ニ連レルカ如ク一ノ向斜層ヲナス、傾斜ノ角度ハ東翼ニハ

寧口緩ニシテ西翼ニハ稍急ニ四十度ヨリ時ニ直立スルニ至ル、上部炭層ハ最モ厚クシテ「バンケ」眞谷川ニ於テハ炭層ハ炭質頁岩ノ夾ミ(厚サ十五尺)ト共ニ厚サ三十二尺アリ、眞谷地炭坑ノ坑内ニ於テハ夾ミハ全ク石炭ニ變シ稼行スヘキ炭層ノ厚サ四十尺アリ、他ノ三炭層ハ上部ヨリ之ヲ數フレハ厚サ八尺、九尺及二尺ナリトシ總厚三十尺ナリト云フ

(七) 穂別炭田

穂別炭田ハ膽振ノ北部ニアル鶴川ノ一支流穂別川ノ支流ニ沿ヒ不便ノ地ニアリ、本炭田ハ北部夕張炭田ニ隣接シ數多ノ炭層アリト稱セラ
ル、モ厚キ土壤ニ被覆セラレテ明ナラス、五炭層アリテ第三紀層ノ下部ニ挾在スルモ品質及厚サニ於テ稼行ニ堪ユヘキモノハ二層ナリトス、東部ニ於ケルモノハ厚サ三尺乃至十尺平均六尺以上アリテ西方六十度乃至八十度ニ傾斜シ約三基米間之ヲ追跡スルヲ得ヘシ、西部ニア
ルモノハ厚サ平均六尺以上アリテ約南北ニ走り西方七八十度ニ急斜シ約四基米間之ヲ追跡スルヲ得ヘシ、其他二尺ノ炭層アルモ其連續明

ナラス

鵠川ニ露出セル二炭層ハ厚サ八尺アリテ北三十度東ニ走り西北西八十度ニ急斜ス、其北西約二十基米鵠川ノ一支流ニニユー川ニ沿ヒ厚サ二尺五寸乃至三尺ノ二炭層アルモ其延長明ナラス

茅沼炭田

茅沼炭田(第七圖參照)ハ後志茅沼ニアリテ岩内ノ北十基米海岸ヨリ約三基米ノ地ニ位シ海岸ヨリ輕便鐵道ノ布設アリ、石炭ハ安政三年ニ發見セラレ小規模ニ稼行セラレタリト云ヒ明治維新ノ戰爭ニ際シ一時採掘ヲ中止シタルモ一年後政府之ヲ再開シ明治十六年民業ニ移レリ、產出額ハ小ニシテ明治四十三年ニハ一萬五千七百七十九噸、同四十四年ニハ二萬千三百九十一噸ナリトス、地ハ高サ二三百米ノ丘陵地ニシテ海岸ニ近キ高サ約二十米ノ階段地ニ終レリ、茅沼川ハ北東ヨリ南西ニ流下シ本炭田ヲ二分ス、含炭層ハ凝灰岩、頁岩、砂岩及凝灰燧岩ヨリ成リ玢岩及石英粗面岩之ヲ貫通ス、地層ハ擾亂セラレ斷層數多アルモ一

般ノ層向ハ約南北ニシテ西方三十五度乃至四十度ニ傾斜ス、而シテ南端ニハ地層ハ東方ニ彎曲シテ北七十度西ニ走リ南々西四十度ニ傾斜

茅沼炭田
縮尺五萬分之一



ナリ、第三炭層及第五炭層ハ厚サ薄ク品質劣等ナルヲ以テ稼行セス、本炭田ニ於ケル水準以上ノ炭層ハ既ニ殆ント採掘シ盡サレ餘ストコロ僅ニ十七萬餘噸ニ過キス、試錐等ノ未タ炭層ヲ檢セルモノナク炭層賦

ス、六炭層アリテ三基米以上之ヲ追跡スルヲ得ヘシ、現時岩内及藤山兩炭坑稼行ス、炭層ハ中部ニ最モ好ク發達シ兩側ニ次第ニ縮迫ス、各炭層ノ平均厚サハ上部ヨリ數フレハ四尺、七尺、六尺、六尺、四尺及五尺ニシテ良炭部二尺五寸、四尺、三尺、五尺、三尺及三尺

存ノ區域ヲ確ムルヲ得サレトモ水準下千尺迄ハ之ヲ稼行スルヲ得ス
 ク更ニ水準下千尺ハ第二種炭量トシテ之ヲ計算セリ、即チ第一種炭量
 ハ七百萬噸、第二種炭量二千五百萬噸ナリ
 石炭ハ黑色ニシテ光輝ヲ有シ介殼狀ニ破碎ス、地層擾亂ノ結果石炭ノ
 粉碎セル所アリ、分析ノ結果次ノ如シ(百分中)

水	揮發物	固定炭素	灰	比	重種	低度瀝青炭
四、五三	三五六九	四七、二九	一二四九	一三三八		

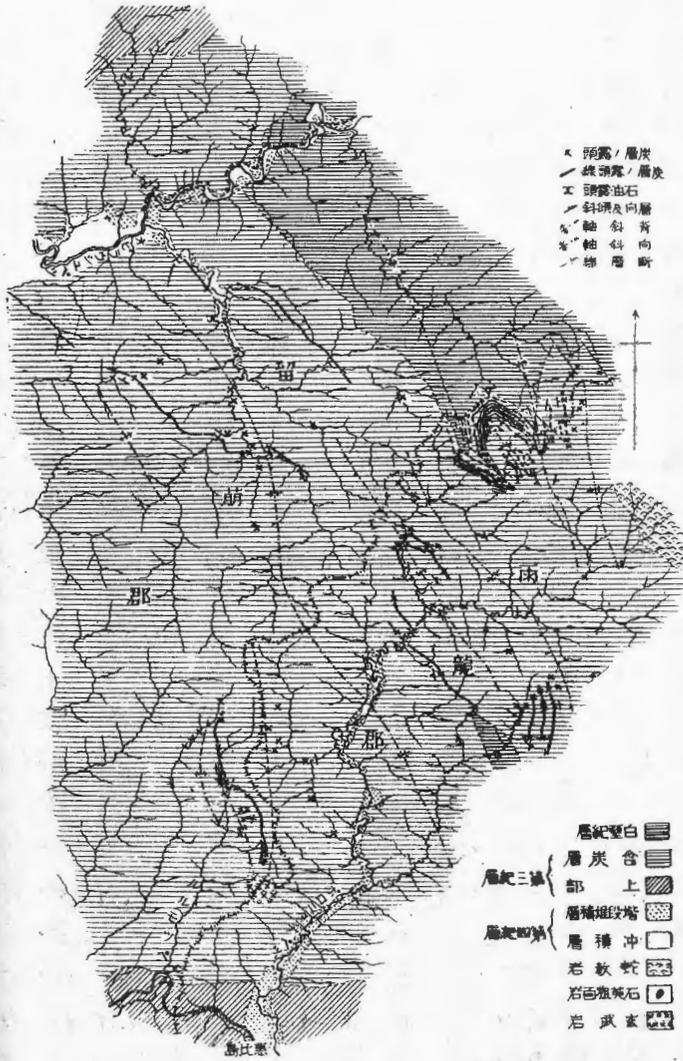
雨龍留萌炭田

雨龍留萌炭田(第八圖參照)ハ留萌ノ東ニアリテ石狩、天鹽兩國ノ境界ニ
 跨レリ、本炭田ハ波狀ノ丘陵山脈ニシテ主要山脈ハ北々東ニ走り高サ
 平均四五百米ナリ、炭田ノ北部ニ「オビラウシユベツ」川、南部ニ「ル
 東部ニ「ボロニタチベツ」川アリ
 白堊紀層ハ炭田ノ北東部ヲ占メ主ニ頁岩ヨリ成リ砂岩、蠻岩、互層ス、

第三紀層ハ上下ノ二部ニ區別ス、下部層ハ廣域ヲ占メ厚サ八千尺以上アリテ整合ニ白堊紀層ヲ被覆セルカ如キモ上部層トハ不整合ナリトス、下部層ハ更ニ之ヲ上下ノ二層ニ區別ス、下層ハ砂岩、頁岩ノ互層ニシテ蠻岩及主要炭層ヲ挾ミ其最モ好ク發達セル處ノ露頭ニ於テ之ヲ見ルニ厚サ約五千尺アリ、動植物化石アルモ其地質年代ヲ定ムルニ足ラス、蓋シ中新期ニ屬スルカ如シ、上層ハ主ニ頁岩ヨリ成リ砂岩ト互層ス、本層ニ介在セル炭層ハ皆薄クシテ重要ナラス、上部層ハ下部層ノ南北ニアリテ更ニ之ヲ上下ノ二層ニ區別ス、下層ハ北部ニアリテ頁岩及砂岩ヨリ成リ數多ノ蠻岩層ヲ挾ミ上層ハ南部ニアリ、其岩質ハ下層ト同シキモ一般ニ凝灰質ナリ、上層中ニ埋藏セラル、炭層ハ唯僅ニ留萌附近ニ稼行セラル、ノミニシテ下部層下部ニ於ケルモノニ比スレハ重要ナラス、化石ハ識別セラレタルモノ甚タ少ナキモ蓋シ鮮新期ニ屬スヘシト云フ、塔段堆積層ハ河流ニ沿ヒ狹長ナル區域ヲ占メ主ニ砂礫層ヨリ成リ砂層及粘土層ト互層ス、蛇紋岩ハ僅ニ東部ニ之ヲ見ルノミニ

第 八 圖
雨 龍 留 崩 炭 田
縮 尺 二 十 萬 分 之 一

シテ急峻ナル山脈ヲナス、石英粗面岩及玄武岩ハ白堊紀層及第三紀層



- △ 預露 / 層炭
- 煤洞露 / 層炭
- 工 鑛洞露 / 石
- 斜 傾及 / 向層
- 軸 軸 / 斜背
- 軸 軸 / 斜背
- 軸 軸 / 向斷

- 層紀白 白
- 層炭含 含
- 層部 上
- 層補垣段塔
- 層種冲
- 岩軟蛇
- 岩面激英石
- 岩武玄

ヲ貫通シ其區域小ナリ、地質構造ハ甚タ複雑ナルモ概言スレハ層向ハ北部「オビラシユベツ」川ノ北部ニ於テハ東西ニシテ北方ニ傾斜シ南部ニハ四條ノ背斜層及向斜層アリテ約北々西ニ走リ其兩翼ノ傾斜ハ一般ニ四十度乃至七十度ナリ、斷層ハ甚タ多キモ北部ニアル東西ニ走レル大斷層ヲ除ケハ稍大ナルモノハ約南北ニ走レリ
炭層ノ露頭ハ甚タ多ク厚サ三尺以上ニシテ二箇所以上ニ露出セルモノ三十七層アリ、然レトモ同一炭層ニシテ褶曲又ハ斷層ノ結果數度現出セルモノアルヘク地質調査未タ完カラサルヲ以テ悉ク各炭層ヲ比較スルヲ得ス

「ボロニタチベツ」川上流ニハ十八炭層アリテ厚サ最厚三十尺ヲ超ユ、「ボロニタチベツ」川中流ニ於テハ十炭層アルモ唯一炭層ノ甚タ厚キモノアリテ厚サ最厚二十五尺ニ達ス、「ル、モッペ」川上流ニハ五炭層アリ、内一層ハ約五基米間之ヲ追跡スルヲ得ヘク厚サ六尺乃至二十尺ナリ、「オビラシユベツ」川ニハ四炭層アリテ厚サ時ニ二十尺ニ達ス、以上炭層ニ屬セ

サル露頭ハ其數甚タ多キモ其延長明ナラス、留萌附近ニアル炭層ハ上部層ニ埋藏セラレ一層ハ稼行ニ堪ユ、石炭ハ有煙炭ニシテ一般ニ粘結ス、分析ノ結果次ノ如シ(百分中)

五九一	揮發物	固定炭素	灰	硫黃	比重	發熱量	種類
四〇、三八	四六、六一	七、一〇	〇、四七	一、三一二	六、五二三	英國熱單位	低度瀝青炭
						カロリー	
						一一、七二三	

「ポロニタチペツ」川上流區域ハ石狩、天鹽ノ國境ニ跨リテ炭田ノ東部ヲ含ム、本區域ニハ未タ開墾地ナク南方二十基米ニハ留萌ニ通スル鐵道通過スト雖モ現時ハ甚タ不便ナリ、含炭第三紀層ハ北部ニ整合ニ白堊紀層ヲ被覆シ高サ四五百米ノ稍高キ高原ヲナス、一ノ背斜軸ハ區域ノ中部ヲ約南北ニ走リ其東西ニ殆ント之ニ并行シテ各一向斜層アリ、數多ノ斷層中三條ヲ大ナリトシ内西部ノ大斷層ハ背斜軸ニ該當スルカ如シ、二ノ背斜軸ニ依リ限ラレタル中部區ハ最モ重要ニシテ十炭層ヲ埋藏ス、内上部三炭層ノ層位上ノ關係明ナラス、傾斜ノ角度ハ向斜軸附

近ニハ四五十度ニシテ東ニアル背斜軸附近ニハ稍急ニ六七十度ナリ、
炭層ノ厚サハ上部ヨリ之ヲ數フレハ平均二尺、三尺、六尺五寸、四尺五寸、
五尺、六尺、七尺五寸、十四尺五寸、三尺及八尺ナリ、第六層及第九層ハ遙ニ
東方ニ之ヲ追跡スルヲ得ヘク背斜軸ノ東部ニ連レリ、追跡シタル距離
ハ上部ヨリ〇、三基米、〇、七基米、〇、三基米、一、五基米、二、六基米、四、七基米、二、
五基米、二、六基米、三、八基米及二、五基米ナリ、向斜軸ノ直下ニ於ケル第六
層ノ深サハ傾斜ニ依リ之ヲ計算スルニ海水準下約一千尺ナリ、中部區
即チ背斜軸ノ東方ニハ三炭層アリ、下部炭層ハ中部ノ第五炭層ノ連續
セルモノナルカ如シ、上部炭層ハ一般ニ東七十度ニ傾斜シ二基米間之
ヲ追跡スルヲ得ヘク厚サハ平均二十五尺良炭部十九尺ナリ、中部炭層
ハ僅ニ〇、五基米ノ間之ヲ追跡スルヲ得ヘク東方四十五度乃至七十五
度ニ傾斜ス、斷層以西即チ中部區ノ西方ニハ六炭層アリテ一般ニ南々
西七八十度ニ傾斜シ時ニ直立ス、炭層ノ平均厚サハ上部ヨリ三尺、十尺、
七尺、八尺、三尺五寸及四尺ニシテ追跡セル延長ハ〇、二基米、一、五基米、一、

六基米、一、二基米、一、二基米及○、九基米ナリ

「ボロ」ニタチベツ「川」中流區域ハ上流區域ノ南西ニ隣接ス、含炭層ハ一ノ背斜層及向斜層ヲナシ北々西ニ走レリ、傾斜ノ角度ハ區々ニシテ四十九度乃至七十度時ニ八十度ニ達ス、炭層ノ露頭ハ甚タ多キモ厚サ及炭質ニ於テ上流區域ニ比シ重要ナラス、十炭層中六層ハ北部ニ、四層ハ南部ニアリ、其相互ノ關係明ナラス、北部ニ於ケル炭層ノ平均厚サハ西部ヨリ之ヲ數フレハ八尺五寸、三尺五寸、三尺五寸、三尺五寸、十尺及六尺五寸ナリ、南部ニハ上部ヨリ之ヲ數フレハ四尺五寸、三尺五寸、八尺五寸及七尺ナリトス、北部ニ於テ追跡セル延長ハ三、四基米、○、八基米、○、八基米、○、六基米、一、五基米及○、五基米ニシテ南部ニアルモノハ一、八基米、一、三基米、一基米及○、四基米ナリトス

「ル、モツ」區域ハ中流區域ノ南西ニアリテ峠下停車場ヲ距ルコト約八基米ニシテ炭田中最モ便利ナル地域ニ位ス、地層ハ局部ニ於テ擾亂スト雖モ構造ハ寧ろ簡單ニシテ一ノ背斜軸ハ穹窿狀ヲナシ北部ヨリ南

部ニ走レリ、一斷層地層ヲ切斷シ北部ニ轉位セリ、五炭層中最下炭層ハ最モ重要ニシテ五基米間之ヲ追跡スルヲ得ヘク東方又ハ北東ニ傾斜ス、傾斜ノ角度ハ斷層ノ南部ニハ一般ニ五十度ニシテ北方ニハ之ヨリ急ナリ、厚サハ六尺乃至二十尺ニシテ平均十二尺ナリ、其他ノ四層ハ延長大ナラスシテ○、二基米乃至○、四基米ニ互レルノミ、厚サハ一般ニ三尺五寸ナリ

「オビラシ」ベツ「區域」ハ炭田ノ北部ヲ占メ高サ三四百米ノ山地ヲナス、一大向斜層ハ本區域ヲ南北ニ通過シ一大斷層ハ北部ニ於テ東西ニ走レリ、四炭層ハ斷層ノ南部ニアリテ北々西ニ走レリ、炭層相互ノ關係ハ明ナラサレトモ一層ニアラサルヤノ疑アリ、向斜層ノ東方ニハ主要ナル炭層一アリ、其延長三、七基米、厚サ六尺ナリ、向斜層ノ西ニアルモノハ二三層ニ分岐シ平均厚サ十五尺ナリ、其他ノ二層ハ延長一基米及○、六基米ニシテ厚サ三尺及六尺五寸ナリ

此外良好ナル石炭ノ露頭數多アルモ其延長詳ナラサルヲ以テ茲ニ之

ヲ舉ケス

留萌區域ハ留萌ノ南東四基米ノ地ニアリ、本區域ノ炭層ハ上部層ト思惟スヘキ地層中ニ介在スル唯一ノモノニシテ大和田炭坑之ヲ稼行ス、大和田炭坑ハ留萌ノ南東約六基米同名ノ停車場ノ附近ニアリテ小規模ニ稼行ス、地層ハ頁岩、砂岩ヨリ成リ蠻岩ヲ挾メリ、現時稼行ノ一炭層ハ北六十度西ニ走リ北東三十度ニ傾斜シ厚サ平均五尺アリテ一基米ノ間之ヲ追跡スルヲ得ヘシ、三斷層アリ、東方ニアルモノヲ大ナリトス、本炭田ニ於テハ試錐ニヨリ炭層ヲ檢セルコトナク留萌區域ヲ除ケハ未タ稼行セラレタルコトナキヲ以テ炭層賦存ノ區域ヲ知ルニ難シ、然レトモ炭層厚クシテ其數多ク地下五百尺迄ハ確實ニ其賦存セルモノト思惟シ之ヲ以テ第一種炭量ヲ概算セリ、但シ延長ハ追跡セルモノニ限レリ、斯クシテ概算シタル第一種炭量ハ千三百二十萬噸、第二種炭量ハ二億五千萬噸ナリトス。

羽幌炭田

部ニ於テ之ヲ見ルノミ、數炭層中二層ハ約四基米間之ヲ追跡スルヲ得
 ヘク厚サ三尺乃至五尺ナリ、西部背斜ニ沿ヒ二ノ重要ナル炭層東翼ニ
 露出ス、北方ニハ炭層東北東三十五度ニ傾斜シ厚サ上部炭層一尺五寸
 及下部炭層八尺ナリ、鷲峯炭坑ハ羽幌ノ東約十六基米ニアリ、主要ナル
 炭層ニアリ、羽幌川ノ北ニアルモノハ北東四十五度ニ傾斜シ一基米以
 上之ヲ追跡スルヲ得ヘク厚サ十三尺五寸、良炭部六尺五寸アリ、羽幌川
 ノ南ニアルモノハ西方三十度乃至五十度ニ傾斜シ一基米ノ間之ヲ追
 跡スルコトヲ得ヘク厚サ十二尺五寸、良炭部五尺五寸ナリ、本炭層ハ再
 度斷層ニ依リ切斷セラル、蓋シ以上二炭層ハ同一ノモノ背斜層ノ兩翼
 ニ露出セルナラン、交通不便ナルヲ以テ產出額甚々僅少ニシテ僅ニ明
 治四十三年ニ四十噸、同四十四年ニ七十五噸ナリ、炭層賦存ノ區域稍大
 ニシテ炭量概算三千五百萬噸ナリ
 石炭ハ光澤ナキ黒色ヲ呈シ粘結セス、分析ノ結果次ノ如シ(百分中)

水

揮發物

固定炭素

灰

硫

黃

發

熱

量

種

類

カロリ
 英國熱單位

一四二〇

四〇二〇

三八七六

六八四

〇二八

五三五八

九六四四

黒

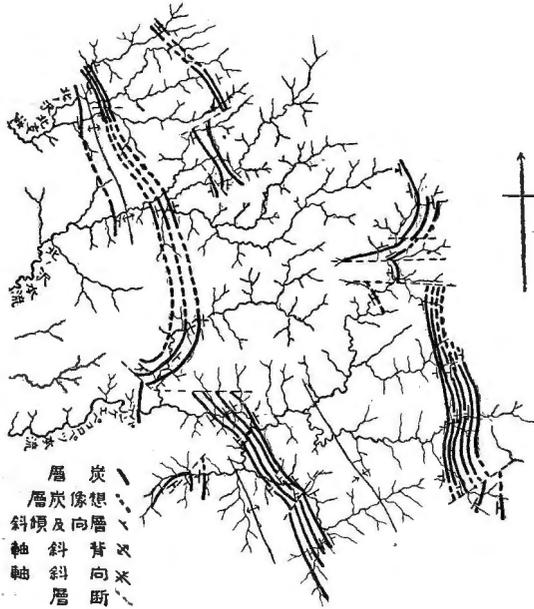
褐

炭

幌延炭田



第十圖
幌延炭田
縮尺十萬分之一



ノ分析ノ結果次ノ如シ(百分中)

幌延炭田(第十圖参照)ハ
 天鹽ノ北部ニアリテ「バ
 シンケ」エペコロベツ川上
 流ニ位シ北方宗谷炭田
 ニ連續ス、本炭田ハ低卑
 ナル丘陵地ニシテ高サ
 二百米ヲ超ユルコト稀
 ナリ、五年前幌延炭坑此
 地ニ小規模ニ石炭ヲ採
 掘セルモ運搬不便ノ爲
 メ直ニ中止シタリ、石炭

水	揮發物	固定炭素	灰	硫	黃	比	重	發熱	種
一一、五一	三九、一九	四〇、三九	八、三一	〇、四七	一、三六一	五、三七二	九、六六九	英國熱單位	類
								カロリー	黑
									褐
									炭

第三紀層ハ頁岩、砂岩及蠻岩ヨリ成リ廣域ヲ領ス、含炭層ハ主ニ砂岩及蠻岩ニシテ頁岩ヲ挾ミ第三紀下部層ニ該當ス、層向ハ約南北又ハ北々西ニシテ東又ハ西ニ傾斜シ一ノ向斜層及背斜層ヲナス、傾斜ノ角度ハ一般ニ四五十度ナルモ時ニ七八十度ニ急斜スルコトアリ、數多ノ斷層アリテ炭層ヲ切斷シ之ヲ東方又ハ西方ニ轉位ス、三大斷層東部ニアリ、西部ニハ四斷層ヲ大ナリトス

炭層ハ其數十層ヲ超エ一般ニ頁岩中ニ稀ニ砂岩中ニ介在ス、主要ナル六炭層ハ東部ニアリ、其南北ニ斷層ニ切斷セラレテヨリ僅ニ二三ノ炭層ヲ追跡スルヲ得ルノミ、厚サハ上部ヨリ之ヲ數フレハ三尺、七尺、八尺、六尺、五尺及七尺ニシテ延長ハ上部ニ炭層ハ一、五基米、第三炭層ハ一基米、下部ニ炭層ハ各半基米ナリトス、北部ニ於ケル三炭層ハ厚サ上部炭

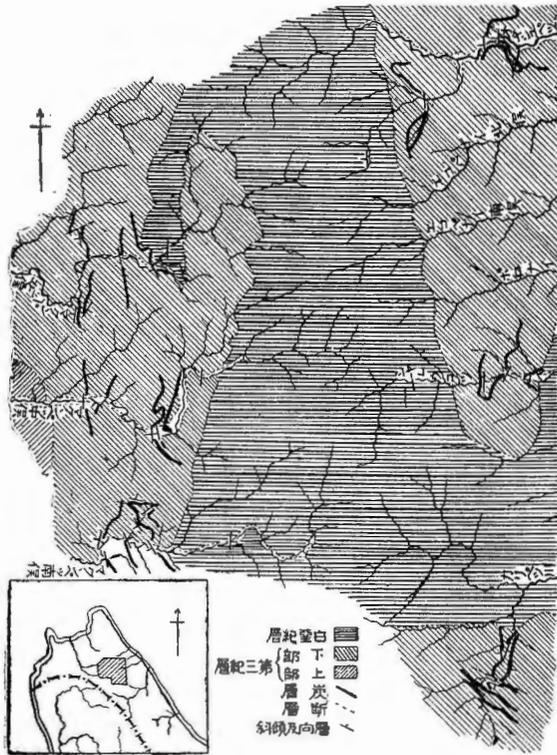
層六尺五寸、下部二炭層ハ六尺ナリトシ、延長ハ五百尺乃至千五百尺ナリ、斷層ノ南部ニアル二炭層ハ厚サ二尺及四尺五寸ニシテ延長五六百尺ナリ、西部ニハ炭層ノ數少ナキモ東部ニ於ケルモノ、現出セルモノナルヘク中部ニ斷層ニ切斷セラレ、斷層ノ北部ニハ炭層ハ約東方四五十度ニ傾斜スルモ西方ニ於ケル一炭層ハ北七十度ニ傾斜シ一向斜層ヲナセリ、是等炭層ハ北部ニ於テ再ヒ斷層ニ切斷セラレ、炭層ハ別テ二群トス、東部炭層群ハ重要ナル二炭層、西部炭層群ハ三炭層ヲ有ス、東部ニ於ケル二炭層ノ厚サハ各四尺ニシテ延長一基米ヲ超ユ、西部炭層群ノ炭層ハ上部ヨリ之ヲ數フレハ厚サ四尺五寸、六尺及二尺、延長二、四基米、二、四基米及一、一基米ナリ、斷層ノ南部ニハ背斜層ノ東方ニ東北東四五十度ニ傾斜スル四炭層アリテ厚サ上部ヨリ之ヲ數フレハ三尺五寸、四尺五寸、五尺及二尺ニシテ延長四千尺乃至五千五百尺ナリ、背斜層ノ西方ニハ二炭層アリテ厚サ五尺及九尺五寸ナルモ延長僅ニ六百尺乃至千尺ナリ、之ニ依リ炭量ヲ概算セルニ一億七千五百萬噸ナリ

石炭ハ更ニ南方ニ石狩、天鹽ニ互レル第三紀ニ介在シ殊ニ天鹽川ノ支流及石狩兩龍川ノ上流ニ其露頭多シ、然レトモ既知炭層ハ厚サ一般ニ薄クシテ炭質劣等ナリ、又所ニ依リ十層以上ノ數多ノ炭層ヲ檢スルコトアルモ厚サ一般ニ薄シ、是等地方ノ第三紀層ハ調査未タ充分ナラス

宗谷炭田

宗谷炭田(第十一圖參照)ハ北海道ノ北ニ突出スル半島ノ中部ニアリテ天鹽、北見ノ二國ニ跨レリ、北海道ノ中央山脈ハ宗谷岬ニ低下シテ遂ニ宗谷海峽ニ沒シ高サ一般ニ二三百米ノ波狀ノ臺地ヲナス、本炭田ニハ未タ開墾地ナク海岸ノ處々ニ人家アルノミニシテ交通容易ナラス、白堊紀層ハ頁岩、砂岩ヨリ成リ炭田ノ中部ニ南北ニ走レリ、第三紀層ハ白堊紀層ノ兩側ニアリテ不整合ニ之ヲ被覆シ上下ノ二部ニ區別ス、上部層ハ炭田ノ西部ニアリテ柔軟ナル砂岩、頁岩ヨリ成リ石炭ヲ埋藏セス、下部層ハ凝灰岩、頁岩、砂岩及蠻岩ヨリ成リ東部ニ二炭層、西部ニ二炭層以上ヲ埋藏ス、層向ハ一般ニ南北ニシテ數條ノ背斜層及向斜層アリ、地

第十圖
宗谷炭田
縮尺五萬分之一



質上ヨリ之ヲ見ルニ本層ハ樺太及北海道ニ於ケル上部含炭層ニ該當スルカ如シ

層ノ北方ニハ二三ノ炭層アリテ約南北ニ走り傾斜角ハ二十度乃至六十度ナリ、厚サハ甚タ區々ニシテ一般ニ上部炭層ハ四尺、下部炭層ハ七

白堊紀層ノ東部ニハ一二ノ背斜層アルモ南方ニハ一度白堊紀層ニ接シ再ヒ「カリペツ」川ニ露ハレ更ニ南方ニ連續ス、其總延長ハ二十五基米ナルモ北部及南部ハ未タ調査セラレス、白堊紀

尺ニシテ時ニ十尺以上ニ膨大ス、白堊紀層ノ南方ニハ地層ハ甚シク擾亂シ之ヲ追跡スルニ難キモ二層以上ノ炭層アリテ厚サ三尺乃至九尺ナリ、白堊紀層ノ西部ニハ炭層ハ更ニ南方ニ連續スルカ如ク既知區域ハ延長二十二基米、幅三基米ナリ、地層ハ甚シク擾亂セルモ一般ノ層向ハ南北ニシテ數條ノ背斜層及向斜層アリ、三四條ノ炭層アリテ厚サ二尺乃至五尺ナリトス

調査區域ハ其面積稍大ニシテ炭量概算約一億二千萬噸ナリト云フ、石炭ノ分析ノ結果次ノ如シ(百分中)

水	揮發物	固定炭素	灰	硫	黃	比	重	種	類
一二・七五	四〇・四三	三六・〇〇	一〇・八二	〇・五五	一・三八	一	三・八一	黑	褐炭

釧路國

釧路ニハ釧路、舌辛及尺別ノ三炭田アリ、就中尺別炭田ハ西方日高二連レリ、地ハ高サ平均二百米以下ノ丘陵地ニシテ海岸ヨリ北方ニ次第ニ

高ク所謂釧路高原ヲナス、含炭層ハ第三紀ノ頁岩、砂岩及變岩ヨリ成ル、其地質年代ハ未タ確定セラレサレトモ春鳥及尺別ニアル植物化石ハ中新期ヲ代表セルモノ、如ク釧路及昆布森ニ於ケル動物化石ハ鮮新时期ニ屬スルカ如シ、傾斜ハ海岸附近ニハ寧ろ緩ニシテ内地ニ進ムニ從ヒ次第ニ急ナルカ如シ、白糖ニ於ケル石炭ハ維新前ニ採掘セラレタリト云フ、明治十八年釧路炭田開發セラレタルモ炭層ノ厚サ薄ク炭質劣等ナルヲ以テ小規模ニ稼行セラル、ノミ、釧路炭田ハ明治四十三年ニハ六萬五千百四十四噸、同四十四年ニハ六萬五千三百三十三噸ヲ産出セリ、石炭ハ一般ニ黑色ニシテ粘結ス、分析ノ結果次ノ如シ(百分中)

水	揮發物	固定炭素	灰	硫	黃	種	類
七〇六	四〇、六一	三九七二	一一、六一	〇三三	低	度	瀝青炭

釧路炭田 ハ釧路ノ東ニアリテ之ヲ三區域ニ分テリ
 昆布森區域ハ釧路ノ東約十一基米ニアル昆布森ノ北東約十基米ニ位

ス、含炭層ハ波狀ヲナス、其傾斜角ハ炭層ノ露頭ニ沿ヒ之ヲ計ルニ僅ニ四度ナリトス、炭層ノ厚サハ約三尺ナリ、既知ノ區域ハ僅ニ〇、七平方基米ニシテ之ニ依リ概算セル炭量七十萬噸ナリ、然レトモ調査ノ進行ニ從ヒ面積ハ更ニ増大スヘク炭量隨テ増加セン

別方及大阪區域ハ釧路ノ東北東約十基米ニアリテ釧路川ノ支流別方川ニ沿ヒ別方及大阪ノ二炭坑相隣接シ小規模ニ操業ス、含炭層ハ砂岩及蠻岩ニシテ薄キ頁岩ヲ挾メリ、層向ハ一般ニ北々西ニシテ西南西四五度ニ傾斜ス、數多ノ斷層アリ、就中一大斷層ハ北方ヨリ南方ニ走レリ、現時二炭層アリ、上部炭層ハ厚サ僅ニ一尺又ハ一尺以下ニシテ北西部即チ別方炭坑ニ之ヲ見ルノミ、下部炭層ハ厚サ一般ニ二尺ナルモ時ニハ三尺ニ膨大シ又ハ一尺五寸ニ縮迫シ現ニ稼行セラル、別方炭坑ニ於ケル水準以上ノ石炭ハ既ニ採掘シ盡サレ南東部即チ大阪炭坑ニ於テハ水準上僅ニ〇、九平方基米ヲ餘スノミ、炭層ハ坑内ニハ縮迫スルカ如ク又數多ノ斷層ニ切斷セラル、ヲ以テ水準下千尺ヲ限リ炭量ヲ概算

シタリ、其概算炭量ハ第一種三百萬噸、第二種五百萬噸ナリ

春鳥區域ハ釧路ノ東約三基米ニアリテ春鳥炭坑稼行ス、本區域ハ北方春鳥湖ニ沿ヒ其沿岸ヨリ輕便鐵道アリテ釧路ト連絡ス、地ハ丘陵ヲナシ三十米乃至五十米ノ高サヲ以テ徐々ニ海岸ニ低下シ最高九十米ヲ超エス、含炭層ハ頁岩及砂岩ヨリ成リ一般ニ西南西四五度ニ傾斜スルモ數多ノ斷層アリテ地層ヲ切斷若クハ擾亂ス、既知三炭層中上層ハ薄ク稼行ニ堪ヘス、中層ハ厚サ四尺、良炭部二尺、下層ハ五尺、良炭部三尺ナリ、而シテ下部二炭層ノ上下ノ距離ハ二十二尺ナリトス、炭層ノ延長ハ三基米以上ニシテ炭量計算ニハ水準下千尺ヲ限レルモ海底下ヲ包括ス、斯クシテ概算シタル炭量ハ第一種四百五十萬噸、第二種八百五十萬噸ナリトス

舌辛炭田　ハ舌辛ノ北西約三基米ニアリテ釧路驛ノ次驛大樂毛停車場ノ北約二十基米ニ位ス、含炭層ハ頁岩、砂岩ナルモ砂岩厚ク北東ニ走リ北西三四度ニ傾斜ス、二炭層中上層ハ厚サ二尺五寸ニシテ品位劣等

ナリ、下層ハ上層ノ下約六十尺ニアリテ薄キ夾ミヲ有シ厚サ三尺時ニ五六尺ニ膨大スト云ヒ釧路炭坑現ニ之ヲ稼行ス、明治四十三年ノ産出額ハ三千五百三十八噸、同四十四年ハ三千五百八十噸ナリ、本區域ハ未タ調査セサル所多ク既知區域ハ僅ニ二平方基米ニシテ炭量ノ概算三百五十萬噸ナリ、而シテ調査進ムニ從ヒ其面積ハ増加シ隨テ炭量増大スヘシ

尺別炭田　ハ海岸ニアリテ尺別ノ北約十四基米ニ位ス、二炭層厚サ各三尺アリテ北二三十度東ニ走リ一般ニ東南東三十度ニ傾斜ス、既知區域ハ僅ニ二、五平方基米ニシテ炭量ノ概算五百萬噸ナリ、本炭田ハ西方十勝ニ連リ大面積ヲ占有スト稱セラレ炭量隨テ大ナルヘシ

地質調査未タ施行セラレサルヲ以テ釧路ニ於ケル各炭田ノ廣袤ヲ知ルコト能ハサルノミナラス各炭田ヲ比較スルコト難シ、炭層ノ露頭ハ甚タ多ク以上諸炭田間處々ニ散在ス、其他釧路ニ廣域ヲ占ムル第三紀層殊ニ南半ノ區域ニハ炭層ノ露頭多ク調査ヲ要ス

十勝國

浦幌炭田 十勝川ノ一支流浦幌川ハ十勝十勝郡ノ中部ヲ流下ス、石炭
ハ本郡ノ南半ニアリテ東ヨリ流下スル浦幌川ノ支流ニ之ヲ檢スヘシ、
炭田ハ浦幌停車場ノ北約十四基米ニアル「ルシン」、トコムオロ「區域ヲ除
ケハ未タ調査セラレタルコトナシ、而シテ「ルシン」區域ハ「トコムオロ」區
域ノ西ニ隣接ス、本炭田ハ高サ約二三百米ノ丘陵臺地ニシテ頁岩、砂岩
及蠻岩ヨリ成リ頁岩ハ殊ニ下部ニ厚シ、「ルシン」區域ニ於テハ層向ハ北
六十五度西ニシテ南部ニハ北東十度乃至三十度ニ、北部ニハ南西二十
度ニ傾斜シ一ノ向斜層ヲナス、「トコムオロ」區域ニ於テハ層向ハ一般ニ
北四十五度東ニシテ傾斜ハ南東ナリ、傾斜角ハ北方ニ次第ニ急ナリ、即
チ南西ニ於テハ三十度乃至三十五度、中部ニ於テハ四十五度、北東部ニ
於テハ七十度ナリトス、「ルシン」、「トコムオロ」兩區域間ニハ一條ノ大斷層
北東ニ走レルカ如シ、七八層ノ炭層アリテ其厚サハ上部ヨリ之ヲ數フ
レハ一尺四寸、一尺二寸、五寸、十尺、一尺二寸、一尺、二尺、三尺以上及五尺ナ

リトス、内第四炭層、第八炭層及第九炭層ハ重要ナリトス、第四炭層ハ「ト
 コムオロ」區域ニ發達シ薄キ夾ミヲ有スルモ厚サ十尺以上アリテ層向
 ニ沿ヒ約三、七基米間之ヲ追跡スルヲ得ヘシ、本區域ハ西方「ルシン」區域
 トハ一大斷層ニ依リ切斷セラル、ヲ以テ該炭層ノ「ルシン」區域ニ連續
 スルヤ否ヤ明ナラス、蓋シ「ルシン」區域ノ北部ニアル炭層ハ該炭層ト同
 一ナルカ如キモ向斜盆地ニ近キヲ以テ炭量多カラサルヘシ、第八炭層
 ハ唯「ルシン」區域ニ之ヲ見ルノミニシテ厚サハ三尺ヲ超ユルカ如シ、層
 向ハ北四十五度乃至五十五度西ニシテ北東三十度ニ傾斜シ延長約六
 千尺ナリ、第九炭層ハ最南ニアリテ「ルシン」區域ニ之ヲ檢スルノミ、厚サ
 ハ薄キ夾ミト共ニ五尺アリ、層向ハ北六十度乃至七十五度西ニシテ北
 東三十度ニ傾斜ス、炭層ノ延長約六千尺ナリト云フ、地下二千尺迄ヲ限
 リ炭量ヲ概算セルニ二千萬噸ヲ得タリ、石炭ハ有煙炭ニシテ常磐炭田
 ノ良質炭ニ類似ス

石炭ハ十勝郡ノ南半ニ廣大ナル面積ヲ占ムル第三紀層ニ介在ス、未タ

調査セラレタルコトナケレトモ後來多量ノ石炭ヲ供給スヘシト思惟セラル

日高國

日高ニハ石炭ハ南西ニ廣域ヲ領スル第三紀層ニ介在ス、幕別炭田ハ中部ニアリテ海岸ヲ距ルコト約十基米ノ地ニアリ、本炭田ハ明治三年ニ開發セラレタルモ交通不便ノ故ヲ以テ一年後廢棄セラレタリ、第三紀ノ層向ハ北四十五度西ニシテ四十五度ノ角度ヲ以テ傾斜ス、二炭層アリ、上層ハ厚サ三尺、下層ハ厚サ四尺ナリトス、炭量概算ハ千五百萬噸ナリト云フ、石炭ハ質比較的良好ナリ、分析ノ結果次ノ如シ(百分中)

水	揮發物	固定炭素	灰	硫	黃	種	類
一三、七四	三九、二〇	三九、〇六	八、〇〇	一、二八〇	黑	褐	炭

幕別炭田ニ殆ント隣接セル地域ニハ厚サ種々ナル數多ノ炭層アルモ未タ踏査セラレスシテ茲ニ記述スルノ材料ナシ

荷負、ホロカハエ、毛馬内、新冠、静内ニハ石炭ヲ産スト云フ

三 本 州

常磐炭田（第十二圖參照）

位置及沿革 常磐炭田ハ阿武隈高原ノ東側ニアリテ太平洋岸ニ沿ヒ南北ニ連亘シ延長約八十基米ニ達シ東京、仙臺間鐵道海岸ヲ通過ス、而シテ大炭坑ハ支線ヲ布設シテ之ニ連絡シ運搬便ナリ

本炭田ノ沿革ニ關シテハ記錄ナケレトモ石炭ハ已ニ數百年前ヨリ採掘セラレタリト云ヒ嘉永年間初メテ多賀郡ニ於テ採掘セラレ數年後白水炭坑開發セラレタリ、明治元年ニハ石炭ハ小規模ニ各所ニ採掘セラレ十年後ニ至リ交通ハ次第ニ發達シ產出額隨テ増加シ茲ニ資本家ノ注視スルトコロトナリ明治十七年始メテ現ニ大炭坑ノ一ナル小野田炭坑歐洲式ノ最新採掘法ニヨリ採掘ヲ開始シタリ、爾來工業并ニ交通ノ發達ニ依リ產出額ハ急激ニ増加シ殊ニ明治二十九年及同三十三年ニ於テ著シトス、產出額ハ次ノ如シ

地形及地質

地形ハ丘陵性波狀ノ臺地ニシテ一般ニ海岸ニ低下シ河

年	別	產出額	年	別	產出額	年	別	產出額
明治十二年		一、一〇八 <small>順</small>	明治二十三年		三六、五五七 <small>順</small>	明治三十四年		五六五、七九一 <small>順</small>
同十三年		—	同二十四年		四五、六六六	同三十五年		六八三、二六九
同十四年		三、四四八	同二十五年		三一、〇八二	同三十六年		六一九、四二八
同十五年		四、四三五	同二十六年		三四、四二一	同三十七年		七二五、六二〇
同十六年		三、九六七	同二十七年		五〇、五〇五	同三十八年		九二七、〇七〇
同十七年		五、七二二	同二十八年		六〇、八〇九	同三十九年		一、一二五、五二七
同十八年		一三、五一九	同二十九年		八一、八〇七	同四十年		一、二一四、五九一
同十九年		六、一九一	同三十年		一六八、三三〇	同四十一年		一、二八三、六五八
同二十年		九、六八八	同三十一年		三五五、九一二	同四十二年		一、四二六、四六〇
同二十一年		—	同三十二年		三六三、一九四	同四十三年		一、四六八、七三八
同二十二年		三三、七七〇	同三十三年		四九三、〇一一	同四十四年		一、六三三、〇八三

流ハ主ニ東流シテ本地域ヲ横斷ス、基盤ハ主ニ片麻岩及其他ノ變成岩ニシテ其他閃綠岩、花崗岩等アリ、第三紀層ハ以上ノ諸岩層ヲ不整合ニ被覆シ中部ニ最モ好ク發達ス、便宜上之ヲ上、中、下ノ三部ニ區別ス、下部層ハ頁岩、砂岩及蠻岩ヨリ成リ上部ハ凝灰質ナルコト多ク其最モ能ク發達シタルトキニハ厚サ約千五百尺アリ、中部層ハ主ニ頁岩及砂岩ヨリ成リ上部層ハ主ニ各種ノ凝灰岩ナリトス、層向ハ約南北ニシテ殆ント西方ノ山脈又ハ海岸線ニ平行ス、傾斜ハ東方二十度乃至二十五度ナリトス、隨テ下部層ハ炭田ノ西部ヲ領シ直ニ古岩層ヲ被覆シテ上部層ハ東方即チ海岸附近ニアリ、褶曲斷層甚タ多シ、斷層ノ方向ハ傾斜ニ一致セルコト多ク東西ナルコト多キモ南北ニ走レルモノ亦少ナカラス、而シテ傾斜角ハ一般ニ六十度乃至八十度ナリ、地層ノ喰違ハ大ナルトキハ約千五百尺ナルモ普通ハ之ヨリ甚タ小ナリ、主要ナル炭層ハ下部層中ニアリ、植物化石ノ研究ニ依リ本層ハ中新紀ニ屬スルカ如シ、然レトモ介殼化石ノ下部層ノ上部ニアルコトアリテ之ニ依レハ鮮新时期ニ

屬スルカ如シ、蓋シ中部層及上部層ハ鮮新期ニ屬スルモノアラシ
 炭層 炭層ハ其數甚タ多ク中部層ニアルモノハ主要ナラス、地層ハ中
 部ニ最モ好ク發達シ炭層亦最モ厚ク質良好ニシテ採掘盛ナリ、然レト
 モ炭層皆發達セルニアラスシテ或ハ薄ク稼行ニ堪ヘサルモノアリ、一
 般ニ厚サ三四尺ノ二炭層アリテ之ヲ追跡スルヲ得ヘキモ其發達ハ所
 ニ依リ差異アリ、本炭田ハ便宜上之ヲ北部、中部及南部ノ三ニ區別ス
 炭質 石炭ハ一般ニ黑色ニシテ粘結セス、分析ノ結果次ノ如シ(百分中)

水	揮發物	固定炭素	灰	硫黃	比重	發熱量	種類
一〇、八三	四一、七六	三五、九八	一一、四三	一、五八	一、三四九	五、四七六 英國熱單位	黑褐炭

炭量 小區域ヲ除ケハ石炭ハ實測ニ依リ其賦存ノ區域ヲ確定シタル
 コトナシ、湯本附近ニハ二千尺以下ニ試錐セラレタル所アリト雖モ所
 ニヨリ未タ主要炭層ニ會セサルモノアリ、茲ニ概算セル第一種炭量四
 千三百萬噸、第二種炭量二億七千萬噸ナリ

北部區域　ハ本炭田ノ北端ヨリ南方平ノ平原ニ終ハレル地域ヲ包括ス、炭層ハ北端ニ於テハ甚タ薄キモ主要炭層ハ南方ニ次第二厚ク平均二尺アリ、中部ニハ主要炭層ヲ採掘ス、茲ニハ該炭層ハ厚サ三尺五寸ニ膨大シ東方十五度乃至十八度ニ傾斜ス、主要炭層ノ上五百五十尺乃至二百尺ニ厚サ平均約三尺ノ一炭層アルモ品位劣等ナルヲ以テ未タ稼行セラレス、明治四十三年ニ於ケル産出額ハ三萬三千百十噸、同四十四年ニハ六萬七千八噸ナリ、石炭ハ更ニ南方ニ之ヲ追跡スルヲ得ルモ品位劣レリ、傾斜ハ東方五度乃至十度ナリトス、地層ハ平ノ平野ニ没ジテ中部區域ノ炭層ハ遙ニ西方ニ露出ス

中部區域　ノ石炭ハ最モ盛ニ稼行セラル、炭層ノ北端ハ甚タ薄キモ直ニ數尺ニ膨大シ夾ミヲ加ヘ約六尺アリテ南々東ニ走リ稼行スヘキ石炭ノ厚サ一般ニ二尺五寸、夾ミヲ加ヘ四尺乃至七尺アリ、傾斜ハ東南東ニシテ其角度ハ一般ニ十度ナリ、西小川ニ於テハ主要炭層ハ夾ミヲ加ヘ厚サ八尺アリ、此外二三尺ノ三炭層及九寸ノ一炭層溪谷ニアルモ品

位一般ニ劣等ナリ、石炭ハ一タヒ花崗岩ニ接シ又ハ第三紀層ハ西小川ノ南ニ於テ浸蝕作用ノ爲メ除去セラレテ切斷ス
 西小川ノ南部平ノ西方ハ炭層ノ最モ發達セル所ニシテ五大炭坑茲ニ稼行シ本炭田ノ產出額ノ四分ノ三ヲ產出ス、五大炭坑ノ產出額ハ次ノ如シ

	明治四十二年	明治四十三年	明治四十四年
入	二三八、九三〇 ^噸	二五一、七三六 ^噸	二七〇、七五九 ^噸
内	二三一、五一九	二五八、九二一	三一七、九二七
小	一五九、八八七	一六九、六七八	一八九、八〇四
好	一五六、六五九	一五八、一五〇	一八〇、九一四
三	四、三〇六	五四、一五三	一二五、二六九
其他ノ炭坑	三二六、〇四七	一九一、五〇六	一四一、一九七
合計	一、一七、三四八	一、〇八四、一四四	一、二二五、八七〇

地質構造ハ甚タ複雑ニシテ背斜層及向斜層ヲナシ斷層多キモ層向ハ一般ニ北々東ニシテ東南東ニ緩斜ス、傾斜角ハ十度以下ナリ、石炭ハ基岩ニ近ク又ハ直ニ基岩ニ接ス、六炭層アリ、上部ヨリ之ヲ數フレハ厚サ一般ニ二尺、三尺、五尺、二尺五寸、一尺及二尺五寸ニシテ第三炭層ヲ主要ナリトス、然レトモ隨所厚サ異ニシテ九尺以上ニ膨大スルコトアリ、北部即チ好間炭坑ノ稼行セル區域ニ於テハ主要炭層ハ品質寧ロ劣等ニシテ厚サ七尺アルモ四條ノ薄キ夾ミヲ有シ稼行スヘキ石炭ノ厚サハ五尺ナリ、上部即チ第二炭層ハ厚ク且ツ良質ニ、厚サ九尺五寸アリテ四條ノ夾ミヲ有シ稼行スヘキ石炭ハ厚サ八尺ナリ

南部ニハ内郷、三星、入山、小野田等ノ諸炭坑相隣接シテ最モ盛ニ稼行セラル、北方内郷、三星等ノ炭坑ニハ三炭層アリ、主要炭層即チ第三炭層ハ厚サ七尺五寸、上部炭層即チ第二炭層ハ六尺、下部炭層即チ第四炭層ハ厚サ二尺ニシテ共ニ薄キ夾ミヲ有ス、傾斜ハ一般ニ東十二度ナリ、綴停車場附近ノ三星炭坑ニハ主要炭層ハ八尺以上ニ膨大シ之ヲ稼行ス、内

郷炭坑ノ南方ニ接セル宮炭坑ニハ主要炭層ノ外厚サ各一尺ノ下部ノ二炭層ヲ採掘ス、而シテ稼行炭層ノ總厚ハ十三尺ナリ、南方入山、小野田等ノ有名ナル炭坑ニモ亦主要ナル三炭層アリテ四尺、六尺乃至八尺及二三尺ノ厚サヲ有シ中部炭層即チ主要炭層即チ第三炭層最モ良好ナリトス、而シテ炭層ハ屢薄キ夾ミヲ有ス、層向ハ一般ニ南北ニシテ東方十二度ニ傾斜ス、南方ニハ炭層ハ薄條トナリ又ハ大斷層ニ依リ切斷セラレ南部區域トノ連絡ハ未タ明ナラス

南部區域ニ於テハ五六層ノ炭層アリ、其中部區域トノ關係ハ明ナラス、北方鮫川及其支流ニ沿ヒ小規模ニ稼行セラル、炭層アリ、産出額ハ明治四十三年ニハ九萬千二百二十九噸、同四十四年ニハ七萬八千四百七十三噸ナリ、主要炭層ハ厚サ一般ニ三四尺ナルモ品位寧ロ劣等ナリ、第一炭層ハ所ニ依リ發達シテ三尺五寸ノ厚サヲ有シ南方勿來炭坑ニ於テ稼行セラル

中部ニハ茨城無煙炭、重内、山口無煙炭ノ三炭坑アリテ明治四十四年ニ

ハ五萬噸以上ヲ產出セリ、即チ次ノ如シ

山口無煙炭	茨城無煙炭	重内	明治四十二年	明治四十三年	明治四十四年
	六五、九六四	七七、八四四 ^噸		八〇、五四二 ^噸	七四、五三二 ^噸
	四二、二〇一	六六、二一九			六八、三二二

五炭層中二層ハ一般ニ稼行セラレ下層ハ質良好ニシテ厚サ二尺五寸

乃至五尺、上層ハ寧ロ劣等ニシテ厚サ

一尺乃至二尺五寸ナリ、地層ハ變動ヲ

受クルモ一般ノ層向ハ南北ニシテ東

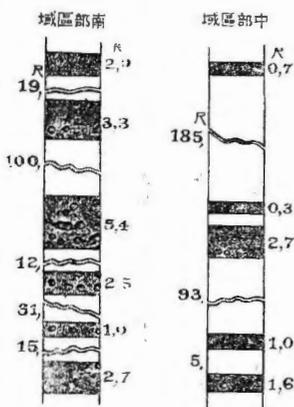
方十五度ニ傾斜ス

南方ニハ高萩、秋山等ノ炭坑アリ、明治

四十三年ニハ四萬七千九百五十八噸、

同四十四年ニハ五萬千五百六十六噸ヲ產出セリ、一主要炭層稼行セラ

圖三十第
圖面斷狀柱田炭磐常
一之分百二尺縮



レ厚サ二尺五寸乃至五尺ナルモ秋山炭坑ニ於テハ夾ミト共ニ十尺以上ノ厚サヲ有シ探掘スヘキ部分七尺アリ、南部ニハ花崗岩及變成岩ニ接シ又ハ洪積層ニ依リ被覆セラレテ其以南ニハ未ダ炭層ヲ見ス

油戸炭田

油戸炭田(第十四圖參照)ハ羽前酒田ノ南西ニアリテ日本海ニ沿ヒ延長約二十基米ノ狹長ナル區域ヲ占ム、北方ニハ石炭ハ油戸附近ニ露出シ

第十四圖 油戸炭田
縮尺四萬分之一



四十四年ニハ六千三百六十三噸ヲ產出シタリ、石炭ハ品位良好ナラサ

南西ニ向ヒ海岸ニ沿ヒ熱海ニ達シ其間處々ニ露出ス、本炭田ハ明治十二年政府ノ開發ニ係リ十年間稼行ノ後民間ノ稼行ニ歸セリ、油戸炭坑ハ現時稼行スル唯一ノ炭坑ニシテ明治四十三年ニハ六千七百七十四噸、同

ル有煙炭ニ屬ス、分析ノ結果次ノ如シ(百分中)

水	揮發物	固定炭素	灰	硫	黃	比	重	發熱量		種類
								カロリー	英國熱單位	
三九九	三二、三八	四八、六三	一五〇〇	〇、八六	一、三二七	七一五〇	一二、八七〇	第三類		

日本海ノ沿岸ニ廣域ヲ領スル第三紀層ハ上部ハ主ニ凝灰岩及凝灰疊岩ヨリ成リ中部ハ頁岩、下部ハ凝灰頁岩及砂岩ヨリ成ル、三炭層中部及下部層中ニ挾在ス、玄武岩ノ岩脈處々ニ本層ヲ貫通スルモ石炭ニハ直接ニ關係ナキモノ、如シ

炭田ノ北部即チ油戸附近ハ油戸炭坑ノ稼行スル所ニシテ油戸ノ南東ニ位シ最モ重要ナル區域ナリ、三炭層中上部炭層ハ最モ主要ニシテ現ニ稼行セラル、モノタリ、厚サハ夾ミト共ニ四尺乃至八尺ニシテ良炭部四五尺ナリ、中部炭層ハ上部炭層ノ上十四尺乃至十八尺ニアリ、厚サハ夾ミト共ニ三尺、良炭部一尺五寸ナリ、下部炭層ハ中部炭層ノ下八九尺ニアリ、厚サハ夾ミト共ニ三尺、良炭部一尺二寸ナレトモ品位甚タ劣

等ナリ、此外二炭層下部炭層ノ下部ニ存在スト稱セラル、モ重要ナラス、層向ハ北部ニハ北四十度東ナルモ南方ニハ次第ニ南北ニ轉シ傾斜ノ角度ハ平均三十度ナリ、地層ハ東方即チ山ノ頂上ニ於テ一ノ背斜層ヲナス、其東翼ニ於テハ第三紀層ノ上部ハ浸蝕作用ニ依リ除去セラレタルヲ以テ此部分ニ於ケル炭量ハ甚タ小ナルヘシ、西翼ニハ數多ノ斷層アルモ主ニ稼行セララル、所タリ、一般ニ炭層ハ東方ニ縮迫スルカ如ク將來稼行スヘキ區域ハ南部及西部ニシテ水準以下ナリトス、東方ヨリ油戸ニ流下スル河流ノ北方ニハ石炭ノ露頭ナシ、是レ或ハ一斷層ノ此溪谷ニ沿ヒ走レルモノアリテ石炭ハ地下ニ沈降シタルモノナルヘク更ニ精査ヲ要ス、調査未タ完成セザルヲ以テ炭量概算ノ區域ハ甚タ小ニシテ二、八平方基米ナリ、之ニ依リ概算スルニ第一種炭量五十萬噸、第二種炭量五百萬噸ナリ

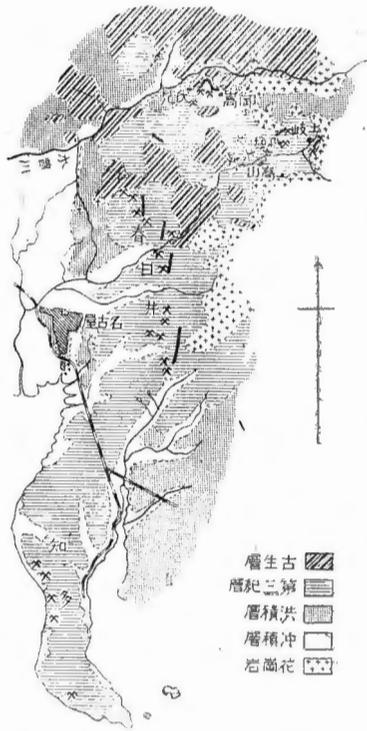
油戸ヨリ熱海ニ至ル間ニ石炭ハ處々ニ稼行セラレタリ、三瀬ノ北ニア
ルニ炭層ハ厚サ二尺内外ニシテ專ラ稼行セラレタリ、五十川附近ノ炭

坑ニハ厚サ一般ニ二尺内外時ニ四尺ニ膨大スル二三ノ炭層アリ、熱海附近ノ炭坑ニハ厚サ一尺乃至三尺ノ炭層嘗テ稼行セラレタリ、大岩川附近ニハ厚サ一尺五寸乃至二尺ノ二炭層海岸ニ露出シ西北西二十五度ニ走レリ、是等炭層相互ノ關係及油戸ニ於ケルモノトノ關係ハ未タ明ナラサルモ炭量大ナラサルヘク其總量或ハ油戸ニ於ケルモノヲ超エサルヘク即チ五百萬噸内外ナラン

濃尾炭田

濃尾炭田(第十五圖參照)ハ濃尾平原ノ東ニアル廣大ナル丘陵地及知多半島ヲ包括シ木曾川其北部ヲ流下ス、炭田ノ北方及東方ハ古生層及花崗岩ノ產地ニ圍繞セラレ知多半島ハ南方ニ突出シ高サ僅ニ百米内外ノ波狀ノ丘阜地ヲナシ主ニ砂層、礫層及粘土層ヨリ成リ凝灰岩又ハ火山灰ヲ挟ミ石炭ヲ埋藏ス、含炭層ハ古生層又ハ花崗岩ヲ不整合ニ被覆シ殆ント水平層ヲナシ若クハ僅ニ波狀ヲ呈ス、傾斜ノ角度ハ甚タ緩ニシテ稀ニ十五度ニ達スルコトアリ、北部ハ古生層及花崗岩ニヨリ隔テ

第五十圖
濃尾炭田
縮尺百萬分之一



中生代
第三紀
第四紀
沖積層
花崗岩

加シ主ニ製絲場其他ノ小工場ニ使用セラレ又ハ薪炭代用ニ供セラル、
産出額ハ次ノ如シ

年 別	産 出 額	年 別	産 出 額	年 別	産 出 額
明治十二年	三〇二 <small>期</small>	明治二十三年	一〇、六一 <small>期</small>	明治三十四年	一六、三七 <small>期</small>
同十三年	四七九	同二十四年	一、四六七	同三十五年	四〇、二四〇
同十四年	四六二	同二十五年	一、二六二	同三十六年	三七、五八四
同十五年	二、〇六五	同二十六年	一、六三八	同三十七年	三八、六六七

ラレ便宜上之ヲ三
區域ニ區別ス
石炭ハ其發見ノ時
代古ク約三百年前
ヨリ稼行セラレタ
リト云フ、明治維新
後産出額次第ニ増

同十六年	—	同二十七年	二三九一	同三十八年	四一九二五
同十七年	二六二	同二十八年	四一二九	同三十九年	五九四三二
同十八年	二四〇三	同二十九年	五七四四	同四十年	五八五四七
同十九年	七九一七	同三十年	七六九五	同四十一年	六八三三三
同二十年	九五七四	同三十一年	五七七七	同四十二年	八一四三三
同二十一年	—	同三十二年	五八二六	同四十三年	八三一八九
同二十二年	一〇、五一一	同三十三年	五三九八	同四十四年	七八三八二

石炭ハ品位甚々劣等ノ褐炭ナリ、粘結セス、分析ノ結果次ノ如シ(百分中)

水	揮發物	固定炭素	灰	硫	黃	種	類
一七、六二	三八、二四	三〇、九七	一三、一七	〇、三九	褐	炭	

土岐區域ハ高山ノ東部ニアリテ炭田ノ北東部ヲ占ム、土岐川ハ殆ント本區域ノ中部ヲ東方ヨリ西方ニ走レリ、含炭層ハ花崗岩ノ盆地ヲ不整合ニ被覆シ盆地ノ中央ニ向ヒ傾斜ス、傾斜ノ角度ハ五度乃至十度ナ

ルモ數箇所ニ二十五度ノ角度ヲナストコロアリ、稼行スヘキ炭層ハ一層ニシテ平均厚サ二尺五寸乃至三尺ナリ、炭量ハ第一種二百萬噸、第二種五百萬噸ナリト云フ

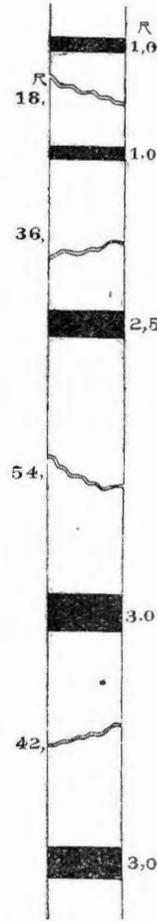
御嵩區域　ハ炭田ノ北部ニアリテ御嵩及木曾川支流可兒川ニ沿ヒ石炭ハ御嵩、伏見間ノ街道ノ北ニ主ニ稼行セラル、含炭層ハ北方ニハ古生層ヲ不整合ニ被覆シ一般ニ南方五度ニ傾斜ス、主要ナル炭層ハ一層ニシテ厚サ東方ニハ四尺五寸乃至八尺ナルモ西方ニハ縮迫シテ三尺五寸乃至五尺五寸平均四尺トナレリ、川ノ南方ニハ炭層ハ更ニ薄ク一炭坑ノ稼行スルノミニシテ厚サ二尺五寸ナリ、炭量ハ第一種百五十萬噸、第二種二百萬噸ナリ

春日井區域　ハ最も重要ニシテ炭田ノ中部ヲ占メ尾張平野ノ東ニ位シ南北ノ延長約二十基米アリ、含炭層ハ北方ニハ古生層ヲ、東方ニハ花崗岩ヲ被覆シ殆ント水平層ヲナシ若クハ波狀ヲ呈ス、三炭層アルモ最下炭層ハ稼行セラル、モノニシテ知多半島ノ上部炭層ニ該當スルモ

東春日井郡飯田井柱狀斷面圖

縮尺二百分之一

圖六十第



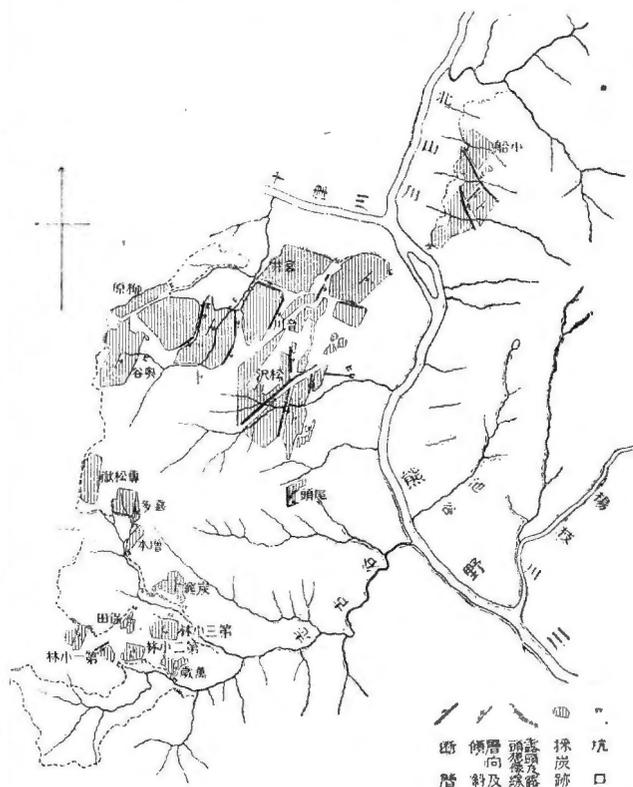
ノ、如シ、厚サハ五尺五寸ナルモ良好ナル部分ハ一尺五寸乃至五尺ナ

リ、然レトモ二炭層其下約五十尺ニ存在スルコト確實ニシテ厚サハ各三尺ナリト云フ、南方ニハ炭層ハ縮迫シ品位又劣等トナレリ、炭量ハ第一種九百五十萬噸、第二種二千百萬噸ナリ

知多半島 石炭ハ知多半島ノ南半ニアリ、含炭層ノ走向ハ殆ント海岸ニ并行シ一般ニ東方ニ傾斜ス、傾斜ノ角度ハ四五度ナルモ稀ニ十五度ニ達スルコトアリ、四炭層アルモ概ネ薄ク厚サ一尺未滿ナリ、下部三炭層ハ相接近シテ二十尺ノ間ニアルコト多ク最下炭層ハ一般ニ稼行セラレ厚サ一二尺ニシテ時ニ三尺ニ膨大ス、炭量ハ小ニシテ僅ニ百五十萬噸ナリト云フ

第七十圖
熊野炭田縮五萬分之一

熊野炭田



熊野炭田(第十七圖參照)ハ紀伊ノ南東部ニアリテ熊野川沿岸ニ位ス、重

要ナル區域ハ比較的小ニシテ南北約五基米、東西約三基米ナリ、地形ハ高峻ニシテ高サ六七百米ニ達シ溪谷ニ傾斜シ河岸ニ平地少ナク坑口ハ高サ時ニ四百米ノ山側ニアリ、運搬ハ熊野川ニ依リ太平洋沿岸ノ小港新宮ニ達ス、

新宮ハ本炭田ノ南東約二十五基米ニアリテ此地ヨリ石炭ヲ輸出ス、石炭ハ明治維新前ニ發見セラレタルモ其開發ハ明治二年ニアリ、然レトモ交通不便ニシテ需要少ナキ爲メ同十二年ニ廢棄セラレタリ、同十八年再開セラレ同三十一年最モ盛ニシテ七萬二千噸ヲ產出シ同三十年及同三十二年ニハ五萬四千噸ニ減少セリ、明治三十一年以來產額更ニ減シテ一年平均三萬六千噸トナレリ、其開發以來ノ總產出額ハ約九十九萬噸ナリト云フ、產出額ハ次ノ如シ

年 別	產 出 額	年 別	產 出 額	年 別	產 出 額
明治十二年	二〇二五 <small>噸</small>	明治十七年	六六 <small>噸</small>	明治二十二年	一五、九六六 <small>噸</small>
同十三年	—	同十八年	二、八八八	同二十三年	三〇、三一一
同十四年	三、四一二	同十九年	三、三六五	同二十四年	二六、九八三
同十五年	二、八四九	同二十年	一、二八九	同二十五年	三〇、三六七
同十六年	—	同二十一年	—	同二十六年	三五、七一四

同二十七年	四二、三〇三	同三十三年	三八、三一三	同三十九年	五一、九四四
同二十八年	三五、四二九	同三十四年	三七、六八三	同四十年	四〇、九九二
同二十九年	四一、七五八	同三十五年	三七、二九一	同四十一年	四一、一四三
同三十年	四〇、一五〇	同三十六年	四〇、四一八	同四十二年	三〇、九七九
同三十一年	五五、九〇七	同三十七年	三二、一八四	同四十三年	三五、一九八
同三十二年	三九、七一五	同三十八年	三二、七二五	同四十四年	四五、三一五

含炭層ハ頁岩、砂岩及蠻岩ヨリ成リ化石ヲ埋藏ス、本炭田ハ嘗テ天草炭田ノ如ク白堊紀層ニ屬スルモノト思惟セラレタルモ化石ノ研究ニ依リ中新期ニ屬スルコトヲ知レリ、層向ハ區々ナルモ一般ニ北三十度乃至六十度東ニ走リ南東十度乃至十八度ニ傾斜ス、斷層數多アリテ多クハ層向又ハ傾斜層ナリトス、三炭層頁岩中ニ介在シ炭田ノ北部及西部ニ露出ス、就中々部炭層最モ重要ニシテ上部炭層及下部炭層ハ薄ク品位劣等ナリ、中部炭層ノ厚サハ種々ナルモ平均二尺五寸ナリ、普川及宮

水	揮發物	固定炭素	灰	硫	黃	種	類
六六七	五一五	七八五七	九六一	二〇三	無	煙	炭

小野田炭田 (第十八圖參照)

位置及沿革 小野田炭田ハ長門ノ南部海岸ニアリテ低卑ナル丘陵地ヨリ成リ厚東川及有帆川南流シ交通至便ノ地ニアリ、南ハ海岸ニ接シ鐵道ハ殆ント中部ヲ横斷ス、石炭ハ明治維新前ニ發見セラレ明治八年ニハ既ニ主ニ地方人民ノ稼行スル所タリ、同二十三年以來鑛業ハ次第ニ發達セリ、產出額ハ次ノ如シ

年 別	產 出 額	年 別	產 出 額	年 別	產 出 額
明治十二年	六六、三九〇 <small>噸</small>	明治二十三年	一三六、六六八 <small>噸</small>	明治三十四年	一二二、四八七 <small>噸</small>
同十三年	—	同二十四年	一三八、六八三	同三十五年	一二四、三一八
同十四年	四〇、三八九	同二十五年	一四三、〇六二	同三十六年	一三四、一四八
同十五年	四三、六一一	同二十六年	一三六、四八九	同三十七年	一三一、七九八

同十六年	五九、〇〇一	同二十七年	一八八、〇三九	同三十八年	二〇三、四一四
同十七年	四八、四七三	同二十八年	二〇二、六九七	同三十九年	二一一、二四五
同十八年	四三、〇四八	同二十九年	一九四、九〇七	同四十年	二九三、三三五
同十九年	三六、五六二	同三十年	一九八、六七〇	同四十一年	三一、三二一
同二十年	三〇、三九三	同三十一年	一七三、〇一八	同四十二年	二九三、一一八
同二十一年	—	同三十二年	一八四、六四六	同四十三年	三九二、六九八
同二十二年	七一、三五九	同三十三年	一二二、〇七三	同四十四年	三九八、七五七

地質 含炭第三紀層ハ頁岩、砂岩及蠻岩ヨリ成リ古生層、中生層及花崗岩ヲ不整合ニ被覆シ南方ハ海中ニ沈降シ現ニ石炭ハ海底ニ於テモ亦稼行セラル、一般ニ地層ハ緩慢ナル波狀ヲナス、傾斜角ハ十度以下普通五六度ニシテ直ニ基盤ニ接スル處ハ稍急ナリ、炭田ハ便宜上分テ三區域トナス

炭質 石炭ハ褐炭ニ屬ス、分析ノ結果次ノ如シ(百分中)

水	揮發物	固定炭素	灰	硫	黃比	重種	類
八、二三	四二、六四	三六、五六	一二、五七	一、三九	一、三八〇	黑褐	炭

炭量 宇部區域ニテハ水準以上ノ石炭ハ殆ント探掘シ盡サレ將來ノ探炭區域ハ現ニ稼行スル海底下ニアリトス、其他ノ區域ニ於テハ良好ニシテ容易ニ稼行シ得ヘキ石炭ハ探掘シ盡サレ將來ノ鑛業ハ困難ナルコト少ナカラス、炭量第一種九百萬噸、第二種七千八百萬噸ナリ

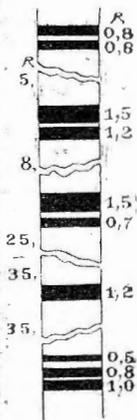
舟木區域 ハ舟木附近及有帆川西部ノ地域ヲ包括ス、含炭層ハ北方ニハ中生層ヲ被覆シ、花崗岩、石灰岩及中生層ハ又中部ニ露出ス、含炭層ノ基盤ニ接スル所ハ傾斜稍高クシテ約十度ナルモ次第ニ減少シテ五六度ニ變シ緩慢ナル波狀ヲナス、五炭層アリ、(第十

第十九圖 (甲)

小野田炭田舟木區域柱狀斷面圖

縮尺一百分之二

參照(甲) 下部四炭層ハ稼行スルヲ得ヘシ、厚サハ一尺二寸ヨリ三尺五寸ノ間ニアリ、炭坑ノ多數ハ現時一炭層ヲ稼行スルノミニシテ厚サハ西部ニ於テハ一尺五寸乃至二尺、東部ニ



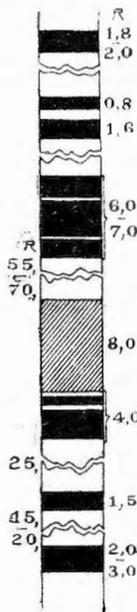
於テハ二尺乃至三尺ナリ
小野田區域ハ小野田海岸及厚東川間ノ地域ヲ包括ス、含炭層ハ南北
ニ走リ兩側ハ洪積層及沖積層ニ被覆セラレ、五炭層アリ、上部炭層ハ舟
木區域ノ第二炭層ニ該當ス、平地ニ於テハ上部炭層ハ既ニ除去セラレ
タリ、炭層ノ厚サハ甚タ區々ナルモ一尺五寸ヨリ五尺五寸ノ間ニアリ、
第一炭層ハ厚サ一尺八寸、第二炭層ハ二尺二寸ニシテ嘗テ稼行セラレ
タリ、第三炭層ハ厚サ五尺五寸ニシテ炭質頁岩ヨリ成レルモ宇部區域
ニ於テハ良質炭ニ變ス、第四炭層ハ最良ナルモノニシテ茲ニ稼行セラ
ル、唯一ノ炭層ナリ、厚サハ二尺乃至三尺五寸、平均二尺五寸ナリ
宇部區域ハ炭田ノ南東部ニアリテ厚東川ノ東沿岸區域ヲ包括シ含
炭第三紀層ヲ被覆スル洪積臺地ヨリ成ル、沖積平野ハ厚東川ノ南西海
岸ニ分布ス、本區域ハ小野田炭田中最モ重要ナルモノニシテ明治四十
四年ニ五萬噸以上ヲ產出セル神原及沖ノ山ノ兩炭坑アリ、其產出額次
ノ如シ

神原	明治四十二年	明治四十三年	明治四十四年
沖ノ山	四九二八六 <small>噸</small>	八二、七一二 <small>噸</small>	一二五、八九二 <small>噸</small>
	四六、二七四	九六、一二三	一一二、四〇五

第十九圖 (乙)

小野田炭田宇部區域柱狀斷面圖

縮尺二百分之一



薄クシテ品位劣等ニ其特ニ發達セルトキハ稼行セラル

六炭層中上部五層ハ小野田區域ノ炭層ニ該當ス、主要ナル炭層ハ第三炭層及第四炭層ニシテ厚サ前者ハ五尺、後者ハ四尺ナルモ時ニ七八尺ニ膨大ス、其他ノ炭層ハ

本州東北部ニ於ケル石炭

(一) 陸奥國

猿ヶ森附近ノ石炭 陸奥ノ北東半島ヲ形成スル丘陵地ハ主ニ第三紀頁岩ヨリ成リ砂岩、蠻岩ヲ挾ミ中新期ニ屬スヘシト云フ、石炭ハ太平洋

沿岸猿ヶ森ヲ距ル遠カラサル丘陵地ニ露出シ約四十五年前ヨリ時ニ
小規模ニ探掘セラレタルモ明治二十九年全ク廢棄セラレ其開發以來
ノ總產出額ハ僅ニ四百噸内外ナリト云フ、層向傾斜ハ區々ナルモ一般
ニ層向ハ北西又ハ約東西ニシテ北東又ハ南西十度乃至二十度ニ傾斜
シ一向斜層ヲナス、炭層ハ一層ニシテ厚サ三四尺アルモ夾ミ甚タ多ク
探掘シ得ヘキ部分ハ僅ニ一尺五寸ニ過キス、炭層賦存ノ區域小ニシテ
炭量小ナルヘシ、石炭ハ品位劣等ノ有煙炭ニシテ粘結セス、或ハ黑褐炭
ニ屬スルモノナラン

岩崎附近ノ石炭 日本海沿岸岩崎附近ノ第三紀層ハ頁岩、砂岩及凝灰
岩ヨリ成リ炭層ヲ埋藏ス、層向ハ區々ナリ、二炭層アルモ共ニ薄ク厚サ
概ネ一尺五寸乃至二尺ナリ、石炭ハ品位劣等ナルモ火山岩ノ爲メ無煙
炭ニ變スルトコロアリ、炭量小ナリ

弘前ノ南部ニアル石炭 弘前ノ南約四基米ニ當リ五炭層第三紀ノ頁
岩及砂岩ニ介在セラレ北方三十度ニ傾斜ス、炭層ハ厚サ皆薄ク嘗テ探

掘ノ企圖アリタリ

(二) 陸中國

尾去澤銅山附近ノ石炭 石炭ハ尾去澤鑛山附近ニ稼行セラレタリト云フ、炭層ハ羽後七日市炭田ニ於ケルト同一ノ地層中ニ介在セラレ厚サ五尺以上ニ達スルコト多シ、石炭ハ不粘結性ナル品位劣等ノ有煙炭ナリ、面積小ニシテ炭量少ナシ

久慈附近ノ石炭 太平洋沿岸久慈附近ニ丘陵地ヲナス第三紀層ハ頁岩、砂岩及蠻岩ヨリ成リ石炭ヲ埋藏ス、層向ハ區々ナルモ一般ニ北十五度乃至八十度西ニシテ東北東又ハ北々東十五度乃至二十度ニ傾斜ス、未タ化石ヲ發見セサルヲ以テ其地質年代ヲ定ムルコト能ハサレトモ

中新期ニ屬スヘシト云フ、炭層賦存ノ區域ハ南北ノ延長約十五基米、東西約八基米ニシテ久慈ハ殆ント其中部ニアリ、炭層數多アルモ一二層ノ外稼行ニ堪フルモノナク而モ品位劣等ナリトス、厚サハ數寸ヨリ六尺ノ間ニアルモ一般ニ稼行スヘキ部分三四尺ナリ、石炭ハ約六十年前

及四十五年前ニ稼行セラレタリト云ヒ明治二十七年ニ再開セラレタルモ直ニ廢棄セラレタリ、近時再興セラレ明治四十四年ニハ僅ニ百九噸ヲ產出セルノミ、炭層賦存ノ區域小ニシテ炭量少ナク概算三百五十萬噸ナリ、石炭ハ褐炭ニ屬ス

一戸ノ南東ニアル石炭 久慈ノ東方鐵道沿線一戸驛ノ南東ニアル石炭ハ厚サ約二尺ノ褐炭ニシテ品位劣等ナリ

門ニ於ケル石炭 門ハ陸中ノ中部ニ位シ沼宮内停車場ヨリ六十四基米ノ地ニアリテ交通不便ナリ、門炭坑ハ數年前ニ開發セラレ明治四十四年ニ二百六十四噸ヲ產出セリ、第三紀層ハ古生層ノ盆地ニ成層シ波狀ノ狹長ナル丘陵ヲナシ主ニ砂岩及蠻岩ヨリ成リ頁岩ヲ挾ミ下部ニ凝灰岩ヲ有ス、層向ハ北五六十度西ニシテ北東三十度ニ傾斜ス、數炭層第三紀中ニ介在ス、就中最下炭層ハ重要ニシテ現ニ稼行セラレ約二基米ノ間之ヲ追跡スルヲ得ヘシ、厚サハ二尺五寸乃至五尺五寸ナリ面積小ニシテ炭量小ニ概算六十萬噸ナリ、石炭ハ一般ニ品位劣等ナリ、分析

ノ結果次ノ如シ(百分中)

水	揮發物	固定炭素	灰	硫	黃	比	重	種	類
八、二七	二八、七六	三一、三〇	三一、六七	〇、四六	一七〇二	黑	褐	炭	

(三) 陸前國

高サ百米未滿ノ低卑ナル丘陵山脈ハ東方ニ漸斜シ北上川及其支流ノ涵域平野又ハ海岸ニ低下ス、石炭ハ中部及北上川ノ西方ニ散在ス、含炭第三紀層ハ柔軟ニシテ凝灰質ナル砂岩、頁岩ヨリ成リ火山灰ヲ挾メリ、化石多キモ地質年代ヲ定ムルニ足ルモノナシ、然レトモ蓋シ鮮新期ニ屬スヘキモノナリト云フ、地層ハ波狀ノ褶曲ヲナスモ一般ノ層向ハ北々東ニシテ東南東ニ緩斜ス、數多ノ炭層アルモ共ニ薄ク最厚二尺ニシテ稼行セラル、モノニ炭層ナリト云フ、石炭ハ品位劣等ノ褐炭ニ屬ス、文字附近ノ石炭 文字ハ陸前ノ北部ニアリテ仙臺、一ノ關間若柳驛ノ西方約二十四基米ニ位シ交通不便ナリ、石炭ハ約四十年前ニ發見セラ

レ七年後ヨリ探掘セラレ地方ノ需用ニ應スルニ至レルモ産出額小ニシテ明治四十三年ニハ三十九噸、同四十四年ニハ四十二噸ヲ産出セルノミ、一般ニ厚サ一尺以上ノ炭層ニアリ、其最モ好ク發達セルトキハ六炭層ヲ檢スヘシ、厚サハ一尺乃至五尺ニシテ薄キ夾ミヲ有ス、西方ニハ石炭ハ安山岩ニ覆ハレ僅ニ溪間ニ露出ス、炭層賦存ノ區域大ナラスシテ炭量小ナルヘク約三百萬噸ナリト云フ

岩崎ノ南約八基米ナル玉澤ニハ文字ニ於ケルト同一ノ地層ニ一炭層ヲ埋藏シ明治四十三年ニハ三百二十八噸、同四十四年ニハ三百三十四噸ヲ探掘セリ

三本木附近ノ石炭 三本木ハ仙臺ノ北約二十二基米ニアリテ古河平野ノ南ニ位シ便利ノ地ニアリ、石炭ハ三本木ノ南丘陵地ニアリテ二十四年前ニ始メテ探掘セラレタリ、現ニ稼行スル炭坑五アリテ明治四十三年ニ千六百五十三噸、同四十四年ニ千五百六十四噸ヲ産出セリ
三本木ノ東約八基米ニアル松山炭坑ハ明治四十四年ニ八十五噸ヲ産

出セリ、三本木ノ南約八基米吉岡ニ近キ松阪炭坑ハ明治四十四年ニ五十三噸ヲ産出シタリ

三本木ノ南丘陵地ハ柔軟ナル頁岩及砂岩ヨリ成リ石炭ヲ埋藏シ一般ニ東北東ニ走リ北々西五度乃至二十度ニ緩斜スルモ波狀ノ層位ヲナスコト多シ、主要炭層ハ夾ミト共ニ厚サ五六尺ナルモ良好ナル部分ハ平均四尺ナリトス、其他ノ炭層ハ薄クシテ品位劣等ナリ、松山及松阪兩炭坑ニ於テハ炭層ノ厚サハ減シテ二尺乃至二尺五寸トナレリ、炭層賦存ノ區域小ニシテ炭量大ナラサルヘク概算僅ニ二百五十萬噸ナリ

仙臺附近ノ石炭 仙臺ノ南方及西方ニアル丘陵地ハ柔軟ニシテ波狀ニ成層セル砂岩及頁岩ヨリ成リ石炭ヲ埋藏ス、數多ノ炭層中ニ炭層ハ重要ナルモノニシテ厚サ概ネ二尺乃至四尺ナルモ良炭部ハ僅ニ一二尺ナリ、炭量ハ小ニシテ概算四百萬噸ナリ、石炭ハ約三十年前ニ採掘セラレ現ニ十四ノ炭坑稼行ス、其産出額ハ明治四十三年ニハ五千百八十噸、同四十四年ニハ五千七百四十三噸ナリ

北上川下流ノ西部ニ散在スル石炭 北上川下流ノ西部ニ散在セル低
卑ナル丘陵ハ第三紀上部層ヨリ成リ石炭ヲ埋藏ス、地層ハ波狀ヲナシ
傾斜角ハ一般ニ五度内外ナリトス、一炭層ハ處々ニ稼行セラレ厚サ一
尺五寸乃至五尺ナリ、産出額ハ明治四十三年ニハ五百八十八噸、同四十
四年ニハ七百三十一噸ナリ

其他ノ地域ニ散在セル石炭 第三紀上部層ハ廣大ナル區域ヲ占メ處
々ニ石炭ヲ埋藏ス、築館ノ西方ニハ重要ナル二炭層アリ、上層ハ厚サ一
尺乃至二尺五寸ニシテ現ニ稼行セラル
仙臺ノ南西川崎ニハ薄キ炭層アルモ時ニハ二尺ニ膨大ス、此外薄キ炭
層ハ處々ニ露出スルモ特ニ記スルニ足ラス

(四) 羽後國

岩館附近ノ石炭 岩館ハ日本海沿岸ニアリテ能代ノ北約二十基米ニ
位ス、石炭ハ岩館ノ東小入川ノ溪谷ニ露出シ第三紀頁岩ニ介在シ西方
四十度ニ傾斜ス、二炭層アリテ厚サ三四尺ナリ

鷹巢附近ノ石炭 能代、大館間ノ鷹巢ヲ圍繞セル約八基米ノ區域ハ第
 三紀上部層ニ屬スル柔軟ナル砂岩、頁岩ヨリ成リ波狀ヲナスモ一般ニ
 南北ニ走レリ、厚サ一尺五寸乃至三尺ノ二炭層本層ニ介在ス、石炭ハ褐
 炭ニ屬シ炭量小ナリ
 七日市炭田 七日市ハ鷹巢ノ南約八基米ニアリ、炭田ハ村ノ南東ニア
 リテ七日市ヨリ鷹巢ニ流下スル溪流ニ沿ヘリ、石炭ハ明治二十八年ヨ
 リ小規模ニ稼行セラル
 本炭田ハ丘陵地ニシテ主ニ頁岩ヨリ成リ砂岩ヲ挾メリ、層向ハ甚々區
 區ニシテ傾斜ノ角度ハ三十度乃至七十度ナリ、含炭層ノ地質年代ハ明
 ナラサレトモ中新期ニ屬スヘシト云フ、稼行スヘキ炭層三アリ、厚サ一
 尺乃至二十尺平均五尺乃至七尺ナリ、石炭ハ無煙炭ニ屬ス、炭量ハ之ヲ
 計算スルニ難キモ概算九百五十萬噸ナリ
 大阿仁川溪間石炭 大阿仁川ハ能代川ノ一大支流ニシテ羽後ノ中部
 ヲ南流ス、石炭ハ比立内ヨリ阿仁鑛山ニ至ル溪間延長十二基米ノ間ニ

露出ス、現時交通甚タ不便ナリトス、石炭ハ明治元年ニ發見セラレタリト云ヒ主ニ阿仁鑛山ニ用ウル爲メ探掘セラレタリ、現時ハ探掘ヲ中止セルモ輕便鐵道ヲ布設シテ鐵道ニ連絡シ之ヲ探掘セントスルノ企アリ

大阿仁川ニ沿ヘル丘陵地ハ主ニ頁岩ヨリ成リ砂岩、蟹岩及凝灰岩ヲ挾メリ、層向ハ甚タ區々ナルモ一般ニ南北ニシテ東方二十度乃至四十度ニ傾斜ス、五炭層アルモ全區域内ヲ通シテ之ヲ追跡スルヲ得ス、二炭層稼行セラル、厚サハ概ネ二尺五寸乃至七尺ニシテ時ニ十尺以上ニ膨大ス、石炭ハ高度瀝靑炭及半無煙炭ニ屬ス、斷層及褶曲ト浸蝕作用ノ爲メ石英粗面岩并ニ安山岩ノ貫通セル爲メ各炭層ヲ比較スルコト困難ニ、炭量ノ計算亦困難ナレトモ概算六百萬噸ナリト云フ

本莊附近ノ石炭 本莊附近ニ廣域ヲ占ムル第三紀層ハ石炭ヲ埋藏ス、本莊ノ南東約二十基米ニハ厚サ一尺乃至三尺ノ一炭層アルモ未タ稼行セラレス、本莊ノ南日本海沿岸ニハ厚サ一尺ノ一炭層アリ、其他ノ産

地ハ重要ナラスシテ茲ニ之ヲ舉ケス

(五) 羽前國

最上川中流沿岸ノ石炭 最上川中流沿岸ノ第三紀層ハ上、下ノ二層ニ區別ス、下部層ハ主ニ硬キ凝灰岩ヨリ成リ上部層ハ柔軟ナル砂岩ニシテ頁岩ヲ挾メリ、上、下部層ノ關係ハ未タ明ナラス、上部層ノ砂岩、頁岩ハ時ニ凝灰岩ト互層シ又凝灰質ナルコト多シ、下部層ハ主要山脈ノ脊梁ヲナシ上部層ハ之ヲ被覆シ新鮮期ニ屬スヘシト云フ、上部層ハ僅ニ褶曲シ傾斜ノ角度ハ普通十度ヲ超ヘサレトモ時ニ三十度ニ達スルコトアリ、小斷層甚タ多シ、本層ノ最モ好ク發達セル所ハ清水ヨリ富並ニ至ル中部ニシテ數多ノ炭層ヲ挾メルモ其相互ノ關係ハ明ナラス、一般ニ一二層ノ厚サ一尺五寸乃至四尺ナルモノ稼行セラル、現時知ラレタル炭層ハ上部ニ位スルヲ以テ浸蝕作用ノ爲メ全ク或ハ一部分除去セラレ殊ニ溪谷ニ於テ然リトナス、其區域稍廣シト雖モ炭量ハ甚タ大ナルニ至ラスシテ概算二千萬噸ナリ、石炭ハ褐炭ニ屬シ明治二十九年ニ稍

盛ニ稼行セラレタルモ其品位劣等ナルト運搬不便ナル爲メ鑛業ハ直ニ衰頽シタリ、產出額ハ明治四十三年ニハ四千二百五噸、同四十四年ニハ五千百三十三噸ナリ
石炭ハ嘗テ酒田ノ南東約二十五基米ノ最上川一支流立谷澤川ニ於テ稼行セラレタリ、二炭層中厚サ三尺五寸ノ一層稼行ニ堪ユ、石炭ハ褐炭ニ屬ス

(六) 岩代國

桑折附近ノ石炭 桑折ハ福島ノ北約十基米ニアリ、石炭ハ桑折ノ北ニアル半田銀山附近ニアリテ丘陵地ヲナセル第三紀上部層ノ柔軟ナル砂岩中ニ介在シ約東西ニ走り南方十度ニ傾斜ス、三炭層中下部炭層ハ重要ニシテ厚サ三尺アルモ夾ミ多ク稼行スヘキ部分ハ僅ニ一尺五寸ナリ、石炭ハ始メテ四十年前ニ採掘セラレ爾來數年間稼行ノ後廢棄セラレタリ、石炭賦存ノ區域甚タ小ナルヲ以テ炭量大ナラス

(七) 磐城國

中村ノ西方ニ於ケル石炭 太平洋沿岸中村ノ西方ニアル炭層ハ皆薄ク唯一層ノ厚サ平均二尺ナルモノアリ、炭層ハ常磐炭田ノ連續セルモノト思惟スヘキモノニシテ同炭田ノ上部ノ地層ニ該當スルカ如シ、石炭ハ質劣等ナル黒褐炭ニシテ未タ稼行セラレス

北方國境ニ近キ毛萱ニ於テ厚サ二尺ノ一炭層アリ

白河炭田 ハ白河以東阿武隈高原ノ麓ニアル低卑ナル丘陵山地ヲ包括ス、本炭田ハ明治八年ニ開發セラレ小規模ニ稼行セラル、產出額ハ明治四十三年ニハ千六百十四噸、同四十四年ニハ千五百十一噸ナリ

第三紀層ハ片麻岩、古生層并ニ花崗岩ヲ被覆シ洪積層及沖積層ニ依リ被覆セララル、安山岩ハ炭田中ニ所々ニ露出ス、第三紀層ハ柔軟ナル凝灰質頁岩、砂岩及蠻岩ヨリ成リ數多ノ炭層ヲ埋藏ス、層向ハ一般ニ西北西ニシテ北々東二十五度ニ傾斜スルモ波狀ヲナスコト多シ、炭田ノ中部即チ白河、棚倉間ニハ主要ナル二炭層アリ、上部炭層ハ厚サ約一尺五寸ニシテ品位劣等ニ浸蝕作用ノ爲メ所在除去セラレタリ、下部炭層ノ厚

サハ一尺乃至二尺ニシテ品位亦劣等ナリ、石炭ハ黒褐炭ニ屬ス、炭層賦存ノ區域ハ七、五平方基米ニシテ炭量概算六百萬噸ナリ
阿武隈高原ノ西麓ヲ占ムル第三紀層ハ一二層ノ炭層ヲ埋藏シ更ニ西方ニ連リ廣大ナル低卑ノ丘陵地ヲナス、蓋シ本炭田ノ連續セルモノナルハシ、石炭賦存ノ區域ハ甚々廣大ナレトモ石炭ハ所在小規模ニ稼行セラル、ノミ、是レ蓋シ炭質ノ劣等ナルト厚サ薄キニ依ル

本州中部ニ於ケル石炭

赤谷附近ノ石炭 越後新發田ノ南赤谷ノ南西ニアル石炭ハ萬延年間ニ發見セラレ元治年間ヨリ小規模ニ稼行セラレ明治四十四年ノ產出額ハ六百六十二噸ナリ、第三紀層ハ花崗岩ヲ被覆シ砂岩及凝灰岩ヨリ成リ北七十度西ニ走り北々東六十度ニ傾斜ス、一炭層砂岩中ニ介在セラレ厚サ三四尺アリテ半基米間追跡セラレタリ、面積小ニシテ炭量多カラサルヘシ、石炭ハ品位劣等ノ有煙炭ニ屬シ粘結セス、分析ノ結果左ノ如シ(百分中)

水	揮發物	固定炭素	灰	硫	黃	比	重	種	類
五、二五	四二、四〇	四六、五八	五、七七	二、一八	一、二九六	低度瀝青炭			

信濃川沿岸ノ石灰 越後、信濃ニ廣ク分布セル第三紀層ハ石油ヲ含有
 シ中新期ニ屬スト稱セラル、石炭ハ石油ヲ含有スル地層ノ上部ニアリ
 テ其地方ノ需用ニ應スル爲メ約二十年前ヨリ採掘セラレ從來多ク油
 井掘鑿ノ燃料ニ使用シタルモ現時ハ重油ヲ代用スルニ至リ石炭鑛業
 ハ甚シク衰微シタリ、含炭層ハ頁岩、砂岩及蠻岩ヨリ成リ凝灰岩ヲ挾メ
 リ層向ハ甚タ區々ナルモ概シテ北東ナリトス、數多ノ炭層中唯一二層
 ノミ稼行ニ堪ユ、其厚サハ稀ニ二尺ヲ超エ普通ハ一尺以下ナリトス、石
 炭ハ黒褐炭ニ屬ス
 信濃川沿岸十日町ノ西方ニアル松田ノ石炭ハ甚タ小規模ニ稼行セラ
 ル、茲ニハ層位殆ント水平ナルニ炭層アリ、厚サ甚タ區々ナルモ概シテ
 一尺ナリトス

高田ノ東方ニアル棚廣ヨリ南方信濃ニ連接シ信濃川ノ西岸ニ沿ヒ長野ニ達シ尙犀川ニ沿ヒ南方ニ互レル廣大ナル第三紀層ハ石炭ヲ埋藏ス、石炭ハ其地方ノ需用ニ應スル爲メ數箇所ニ小規模ニ稼行セラル、層向ハ甚タ區々ナルモ一般ニ北々東ナリ、傾斜ハ東及西ニシテ背斜層及向斜層ヲナス、傾斜ノ角度ハ一定セサルモ一般ニ急ニシテ二十度乃至八十度ナリ、數炭層アルモ厚サハ一尺以下ナルコト多ク唯一二炭層ハ厚サ一尺以上時ニ三尺ニ膨大ス、分布ノ區域ハ廣シト雖モ炭量小ナルヘシ

西條附近ニ於ケル石炭 西條ハ信濃松本ノ北ニアリテ長野ト鐵道ニ依リ連絡ス、西條ヲ圍繞セル丘陵地ハ第三紀層ヨリ成リ西方犀川ノ溪谷ニ斜下シ南北延長約八基米ノ稍廣キ面積ヲ占ム、第三紀層ハ主ニ柔軟ナル頁岩ヨリ成リ砂岩、變岩及凝灰岩ヲ挾メリ、化石ニ依リ察スルニ本層ハ鮮新期ニ屬スルカ如シ、十層以上ノ炭層第三紀層ニ介在スルモ皆薄クシテ一尺ニ充タサルモノ多ク僅ニ一二層ノ一尺五寸ニ達スル

アルノミ、而シテ厚サ時ニ三尺ニ達スルコトアルモ直ニ縮迫ス、一般ノ層向ハ南北ニシテ波狀ヲナシ又ハ五度乃至十度ノ緩斜ヲナス、蓋シ石炭ハ有煙炭ニシテ低度瀝青炭ニ屬ス、石炭ハ明治十九年ニ發見セラレ同三十五年ヨリ探掘稍活潑トナリシモ同四十年ニ至リ衰微セリ、現時十以上ノ小炭坑小規模ニ稼行シ明治四十三年ニハ一萬八千四百十噸、同四十四年ニハ一萬八千六百七十八噸ヲ產出セリ、炭層薄ク炭質劣等ナルヲ以テ地下深ク賦存セル石炭ハ近キ將來ニ於テ之ヲ探掘スルニ難ク水平上良好ナル部分ハ既ニ殆ント探掘シ盡サレ殘ストコロ僅少ニ炭量概算三百五十萬噸ナリ

西條及高崎間ノ石炭　西條、高崎間ノ中央、筑摩川及其支流ニ沿ヘル第三紀層ハ石炭ヲ埋藏ス、厚サハ一尺以下ナルモノ多ク一二炭層ノ一尺乃至一尺五寸ノ厚サヲ有スルモノアルモ重要ナラス

高崎附近ノ石炭　上野高崎ノ南西ニアル低卑ナル丘陵地ハ高サ約六十米ニシテ關東山脈ノ北端ヲ圍繞シ北西ヨリ南東ニ走レリ、北方ニハ

榛名山ノ火山岩アリ、南東部ハ烏川ヲ限レリ、石炭ハ明治三年發見後小規模ニ稼行セラレ製絲事業ノ發達後產出額増加セルモ大ナルニ至ラス、蓋シ炭層ノ厚サ薄ク炭質良好ナラサルヲ以テ大規模ノ鑛業ヲ興スニ足ラス、且ツ坑内出水多ク採鑛困難ニシテ此地ニ稼行スル炭坑ハ興廢常ナラス、現ニ稼行ノ小炭坑ハ其數甚タ多ク明治四十三年ニハ四百九十二噸、同四十四年ニハ四千五百五十噸ヲ產出セリ、含炭層ハ頁岩、砂岩、蠻岩及凝灰岩ヨリ成リ蠻岩ハ上部ニ、頁岩ハ下部ニ發達ス、層向ハ南部及中部ニハ北西ナルモ北部ニハ西北西ニ彎曲ス、傾斜ハ北東ニシテ其角度ハ概ネ二十度乃至三十五度ナルモ南部ニハ之ヨリ緩ナリ、稼行スヘキ炭層ニアリ、頁岩中ニ介在シ礫部ノ北方ヨリ南東ニ向ヒ高崎ノ東小丘ヲ横キリ高崎ノ南吉井ニ互リ其延長二十四基米アリ、炭層ハ皆薄ク下部炭層ハ厚サ一尺五寸、時ニ二尺五寸ニ膨大ス、上部炭層ハ下部炭層ノ上約二百四十尺ニアリテ厚サ僅ニ五寸時ニ一尺ニ膨大シ時ニ稼行セラル、石炭ハ褐炭ニ屬シ容易ニ片狀ニ破碎及分離スルモ火山

岩ニ近キトコロニハ黒色ニシテ光澤ヲ有シ品質稍良好ナリ、炭層薄ク厚サ區々ニシテ地表下、八百尺ヲ限リ炭量ヲ計算シタルニ概算四百五十萬噸ナリ

高崎ノ南東ニアル第三紀層ハ古生層ヨリ成レル關東山脈ノ東縁又ハ古生層ノ盆地上ニ成層ス、石炭ハ厚サ一般ニ一尺ヨリ薄ク時ニ二尺ニ膨大ス、嘗テ大宮、皆野、小川、五日市等ノ處々ニ小規模ニ稼行セラレタルモ其ニ重要ナラス

桂川及其支流沿岸ノ石炭 甲斐桂川盆地ノ第三紀層ハ古生層上ニ狹長ナル區域ヲ占メ凝灰岩、砂岩及蠻岩ヨリ成リ安山岩ニ貫通セラシ、炭層ハ一般ニ頁岩中ニ介在シ昨年迄小規模ニ稼行セラレタリ、地層甚タ擾亂スルヲ以テ採掘困難ナルコト多ク層向從テ甚タ區々ナルモ東方ニハ北六十度乃至七十五度東ニ走リ西方ニハ北方ニ彎曲ス、傾斜亦區々ニシテ北西又ハ南東五十度内外ナリトス、數炭層アリテ皆薄キモ時ニ二尺稀ニ五尺ニ膨大スルコトアリ、石炭ハ褐炭ニ屬シ品位劣等ナル

モ安山岩ニヨリ接觸作用ヲ受ケタルモノハ良質ノ有煙炭ニ變ス、第三紀層ノ面積ハ廣シト雖モ炭量ハ小ナルヘシ

富山灣沿岸ノ石炭 富山灣ノ西岸ヨリ南方ニ廣域ヲ占ムル越中ノ第三紀層ハ凝灰岩、頁岩、砂岩及蠻岩ヨリ成リ處々ニ炭層ヲ挾メリ、炭層ハ薄ク一尺未滿ニシテ品位劣等ナリ、石炭ハ黑褐炭ニ屬ス

礫部附近ニ於テハ二尺乃至四尺ノ一炭層砂岩中ニ介在シ北西又ハ北東四十度ニ傾斜シ小規模ニ稼行セラル、其他ノ產地ハ悉ク記載セス
富山灣ノ東方越後ノ國境ニ近キ日本海沿岸ノ太平ニ於テ厚サ二尺乃至六尺ノ二炭層第三紀層中ニ介在シ小規模ニ稼行セラル

加賀國ニ於ケル石炭 日本海沿岸ノ千崎ニ於テ薄層ノ炭層第三紀ノ頁岩及砂岩中ニ介在ス、此外薄層ノ炭層日本海沿岸ノ第三紀層中ニアリ

福井ノ西方ニ於ケル石炭 鮎川ハ越前福井ノ西方日本海ノ沿岸ニアリ、第三紀層ハ鮎川附近ノ沿岸ヨリ西方ニ互リ頁岩、砂岩及蠻岩ヨリ成

ル、岩石ハ凝灰質ナルコト多ク北方ニハ火山岩ニヨリ被覆セララル、本層ニ介在セル厚サ一二尺ノ一炭層ハ薄キ夾ミヲ有シ嘗テ小規模ニ稼行セラレタリ

鈴鹿山脈兩側ニ於ケル石炭 伊勢ノ海西方ノ鈴鹿山脈ハ約南北ニ走リ北方ハ主ニ古生層、南方ハ花崗岩又ハ片麻岩ヨリ成リ其兩側ハ即チ第三紀層ノ被覆スル所ナリ、第三紀層ハ低卑ナル丘陵ヲナシ主ニ頁岩、砂岩及蠻岩ヨリ成リ石炭ヲ挾ミ洪積層ニ依リ被覆セラレ又ハ直ニ冲積層下ニ沒ス、第三紀層ハ向斜層及背斜層ヲナスモ山脈ノ東縁ニ廣域ヲ占ムルモノハ南北又ハ北々西ニ走リ一般ニ緩斜ヲ以テ東方ニ傾斜シ山脈ノ西縁ニ於テハ層向ハ南北ニシテ一般ニ緩斜ヲ以テ西方ニ傾斜ス、傾斜ノ角度ハ基盤ニ近ク急ニシテ三四十度ナリトス、地質年代ハ未タ明ナラサレトモ上部層ハ主ニ砂層、礫層及粘土層ヨリ成リテ鮮新时期ナルヘク下部層ハ是ヨリ古紀ニ屬スルモノナルヘク其一部ハ中新期ニ屬スヘシ、炭量概算四百五十萬噸ナリ

伊勢阿下喜附近ノ石炭ハ明治十五年ニ始メテ採掘セラレタルモ品位劣等ナルト厚サ薄キ爲メ二年後ニ廢棄セラレタリ、阿下喜ハ員辨川沿岸ニアリテ桑名ノ北西約二十五基米ニ位ス、一炭層第三紀ノ頁岩及砂岩中ニ介在シ東三十五度ニ傾斜シ一尺三寸ノ厚サヲ有ス、面積小ニシテ炭量小ナルヘシ、石炭ハ褐炭ニ屬ス

桑名ノ北西約十五基米古野附近ノ石炭ハ前者ト同一ノ地層ニアリテ炭質亦同一ナリ、嘗テ小規模ニ稼行セラレタリ

伊勢關附近ノ石炭ハ始メテ五十年前ニ採掘セラレ爾來時ニ採掘セラレタルコトアルモ近年ハ全ク廢棄セラレタリ、關ハ名古屋京都間ノ街道上ニアリテ鐵道此地ヲ通過ス、石炭ハ街道ヨリ四基米ノ内ニアリ、東方即チ關停車場ノ南約四基米ニアル東海炭坑附近ニハ層向ハ約南北ニシテ東方二十五度ニ傾斜スルモ西方ニハ次第ニ東ニ彎曲ス、一般ニ南方三十五度ニ傾斜シ小斷層多シ、二炭層頁岩、砂岩ノ互層中ニアリ、上部炭層ノミ稼行ニ堪エ厚サ三尺ナリ、石炭ハ比較的良好ナル黑褐炭ニ

屬ス、産出額ハ明治四十三年ニハ千二百七噸、同四十四年ニハ百三十七噸ナリ

東海炭坑ノ西方花崗岩ヲ隔テ、旭炭坑アリ、本炭坑ハ加太停車場ノ北西約四基米、關ノ西約五基米ニアリ、七炭層中上部四炭層ノミ採掘セラレ厚サ一尺乃至三尺五寸アリテ南方三十五度ニ傾斜ス、面積小ニシテ僅ニ四平方基米ニ過キス、炭量隨テ小ナリ

石炭ハ亦伊勢ニ處々ニ散在スルモ皆薄ク品位劣等ニシテ重要ナラス
 鈴鹿山脈ノ西側近江日野ノ南方及西方ノ石炭ハ二百年前ニ採掘セラレタリト云ヒ明治二十年ニ再開セラレタリ、産出額ハ小ニシテ明治四十三年ニハ二千九百四十二噸、同四十四年ニハ三十四噸ナリ、含炭第三紀層ハ地層波狀ヲナスモ基盤古生層ニ近ク傾斜ハ急ニシテ三十度乃至五十度ニ達スルコトアリ、炭層數多アルモ發達區々ニシテ連續セス、一二炭層ノ厚サ二尺乃至四尺ナルモノ現ニ稼行セラル、石炭ハ褐炭ニ屬ス

伊賀上野附近ノ石炭ハ明治三十年以來甚々小規模ニ稼行セラレ同四
十三年ニハ千三百二十四噸、同四十四年ニハ千五百四十四噸ヲ產出セ
リ、第三紀層ハ片麻岩及花崗岩ノ盆地上ニ成層シ低卑ナル丘陵地ヲナ
シ上野ハ盆地ノ略中央ニアリ、第三紀層ハ地層波狀ヲナシ傾斜ノ角度
ハ十度以下ナルコト多シ、二三炭層頁岩中ニ介在セラレ厚サ一尺五寸
乃至三尺ナリ、石炭賦存ノ面積小ニシテ炭量小ナルヘシ

畿内ニ於ケル石炭

京都、大阪、奈良地方ニ跨リ廣大ナル丘陵地ヲナス第三紀層ハ其上層及
下層ニ石炭ヲ挾メリ、石炭ハ薄ク品位良好ナラスシテ處々ニ小規模ニ
稼行セラル、ノミ、神戸ノ西方ニアル石炭ハ厚サ約三尺ニシテ下部層
中ニ介在セラル、岸和田ノ東方約十八基米ノ南面利ニアル石炭ハ砂礫
層中ニ介在セラレ厚サ二尺五寸アリ、萩原ノ南方ニアルモノハ厚サ約
三尺ニシテ頁岩、砂岩中ニ介在シ北東ニ急斜ス、石炭ハ褐炭ニ屬ス
大和長野附近ノ石炭ハ鈴鹿山脈ノ南端ナル第三紀層中ニアリテ片麻

岩ヲ被覆シ安山岩ニ覆ハル、二炭層アリテ厚サ各約一尺ナリ、運搬不便ニシテ採掘容易ナラス、炭層賦存ノ區域小ニシテ炭量隨テ小ナリ

中國及瀨戸内海諸島ニ於ケル石炭

湯村附近ノ石炭 日本海ニ近キ溫泉場湯村ハ但馬ノ北西部ニアリテ鳥取ニ至ル街道上ニ位ス、湯村附近ノ小丘陵地ハ第三紀層ニシテ頁岩、砂岩ヨリ成リ石英粗面岩ニ貫通セラル、層向ハ一般ニ北三十度西ニシテ東北東十五度ニ傾斜ス、一炭層アリテ厚サ數寸ヨリ五尺ニ達ス、石英粗面岩ノ爲メ石炭ハ無煙炭ニ變スルコト多シ

松江附近ノ石炭 出雲宍道湖附近ノ第三紀層ハ低卑ナル丘陵ヲナシ中海ノ沿岸ニ連リ下部ハ頁岩、砂岩ヨリ成リ上部ハ主ニ凝灰岩ヨリ成ル、石炭ハ松江ニ近ク其西方及北東ニアル小丘中ニアリ、又宍道湖及中海ヲ連續セル瀨戸ノ南ニアル矢田ニモ石炭ヲ産ス、松江附近ニハ層向ハ南部ニハ北西又ハ北々西ニシテ北部ニハ北東又ハ北々東ナリ、傾斜ハ東方ニハ北西ニシテ西方ニハ北東ヲ示シ其角度ハ普通十五度ナリ、

主要ノ炭層ハ二層ニシテ上部炭層ハ厚サ七寸乃至一尺、下部炭層ハ一尺五寸乃至三尺ナリトス、矢田ニ於テハ層向ハ東西ニシテ北方十三度ニ傾斜ス、一炭層厚サ區々ナレトモ平均二三尺ナリ、炭層賦存ノ面積ハ南北延長約一、五基米、東西約二、五基米ニシテ概算四百萬噸ナリト云フ、松江附近ノ石炭ハ明治二十年始メテ採掘セラレ同三十七、三十八年ニ稼行最モ活潑ナリシト云フ、明治三十八年以後鑛業次第ニ衰頽シ同四十三年ニハ二千七噸、同四十四年ニハ千七百三十五噸ヲ産出セリ、矢田ノ石炭ハ約四十七年前ニ採掘セラレタリト云ヒ十年後再興セラレタリ、爾來時々稼行セラレ明治三十八、九年ニハ稍活潑ニ稼行セラレタルモ現時ハ全ク廢棄セラレタリ、石炭ハ黑褐炭ニ屬ス

高窪附近ノ石炭 第三紀層ハ出雲平野ノ南部ニ花崗岩及斑岩ヲ被覆シ頁岩、砂岩及蠻岩ヨリ成ル、一炭層頁岩中ニアリテ北六十度西ニ走リ北々東十度ニ傾斜ス、厚サハ概ネ一尺五寸ニシテ小規模ニ稼行セララル、國分附近ノ石炭 日本海沿岸ノ國分ハ石見濱田ノ北東約七基米ニア

リ、國分附近ハ第三紀ノ頁岩、砂岩ヨリ成リ、蟹岩ヲ挾ミ、西方十度ニ傾斜ス、厚サ約一尺五寸ノ一炭層嘗テ稼行セラレタリ、石炭ハ品位劣等ナル黒褐炭ニ屬ス

勝山ノ南方ニ於ケル石炭 美作勝山ノ南方ニ小區域ヲ占ムル第三紀層ハ波狀ヲナシ古生層ヲ被覆シ主ニ砂質頁岩ヨリ成リ三炭層ヲ埋藏シ小規模ニ稼行セラル、炭層ノ厚サハ二三尺ナルモ亦五寸ニ縮迫シ多量ノ粘土質物ヲ含有ス、石炭ハ品位甚タ劣等ニシテ褐炭ニ屬ス

岡山附近ノ石炭 備前岡山附近ノ第三紀層ハ花崗岩ノ小盆地上ニ成層シ柔軟ナル頁岩、砂岩及蟹岩ヨリ成リ石炭ヲ挾メリ、岡山ノ北西約十基米ノ宮吉ニ於ケル一炭層ハ殆ント水平層ヲナス、其厚サハ七尺ニシテ夾ミヲ有シ稼行スヘキ厚サ四尺ナリ、石炭ハ明治二十年鑿井ノ際發見セラレ同三十八年稍盛ニ採掘セラレタリト云フ、爾來廢棄セラレ現時再興ノ企圖アリ、岡山ノ西南西約十基米ノ箕島ニ於テ厚サ約一尺五寸ノ一炭層丘陵ニ露出ス、石炭ハ蓋シ褐炭ニ屬ス

三次附近ノ石炭 備後三次附近ノ第三紀層ハ花崗斑岩及玢岩ヲ被覆シ頁岩、砂岩ヨリ成リ蠻岩ヲ挾メリ、層向ハ區々ニシテ傾斜ノ角度ハ一般ニ低ク十五度内外ナリ、數多ノ薄キ炭層ハ第三紀層ニ介在シ厚サ五寸乃至二尺ナリ、三次ノ南方約八基米ノ廻神ニ於テハ石炭ハ嘗テ稼行セラレタリ、備後ノ中部ニアル石炭ハ第三紀ノ頁岩中ニ介在シ厚サ三尺五寸ニシテ夾ミヲ有シ稼行スヘキ良炭部一尺五寸ナリ、石炭ハ品位劣等ノ褐炭ニ屬ス

本郷ノ北方ニ於ケル石炭 岡山、廣島間ノ鐵道線路上ニアル本郷ノ北約十基米ノ小盆地ニ成層セル第三紀層ハ、殆ント水平層ヲナシ柔軟ナル頁岩、砂岩及蠻岩ヨリ成ル、一炭層厚サ平均二尺アリテ一條ノ薄キ夾ミヲ有セリ、石炭ハ昨年迄小規模ニ稼行セラレ現時再開ノ企圖アリ、石炭ハ褐炭ニ屬ス

淡路島ニ於ケル石炭 第三紀層ハ北部ニハ花崗岩ヲ、南部ニハ中生層ヲ被覆ス、洲本及湊ノ約中間ニアル狹キ丘陵地ハ頁岩及砂岩ヨリ成リ

約東西ニ走リ北方五度ニ傾斜ス、一炭層厚サ四尺アルモ夾ミヲ有シ良好ナル部分三尺ニシテ炭量小ナリ、石炭ハ明治五年製鹽ノ爲メ始メテ採掘セラレ主ニ其地方ノ需用ニ應シ又ハ洲本ニ於ケル小工場ニ使用セラレタルモ近年全ク廢棄セラレタリ、西海岸尾崎及丸山ニモ亦石炭アリテ厚サ數寸ヨリ五尺ナリ、洲本、湊間ニ於ケル石炭ハ褐炭ニシテ尾崎ニ於ケルモノハ高度瀝靑炭ニ屬ス

小豆島ニ於ケル石炭 瀬戸内海小豆島ノ東部ニアル第三紀層ハ花崗岩ヲ被覆シ中部ニ火山岩ニ依リ貫通及被覆セラレ頁岩、砂岩ヨリ成リ石炭ヲ挾メリ、地層ハ波狀ヲ呈シ中部向斜層ヲナセル處ハ安山岩之ヲ被覆シ北方ニハ南十度ニ傾斜シ南方ニハ北西五度ニ傾斜ス、三炭層アルモ共ニ薄ク厚サ五寸乃至一尺ニシテ時ニ之ヨリ薄キコトアリ、石炭ハ明治十二年始メテ採掘セラレ製鹽ニ使用セラレタルモ厚サ薄キト品位劣等ノ爲メ採掘ヲ中止セルコト屢ナリ、產出額ハ明治四十三年ニハ三百四十四噸、同四十四年ニハ四百三十四噸ナリ、石炭ハ褐炭ニ屬ス

四 九州及琉球

筑豊炭田 (第參版參照)

位置及地形 筑豊炭田ハ筑前、豊前ニ跨レル廣大ナル面積ヲ占ム、其最モ重要ナル區域ハ遠賀川及其支流ノ沿岸ニシテ南北延長約五十五基米、幅十四基米乃至二十六基米ヲ有ス、其他ノ三區域ハ共ニ海岸附近ニアリテ前者ト山脈ニ依リ區別セラレ面積之ニ比スレハ甚タ小ニシテ且ツ重要ナラス、炭田ハ波狀ノ丘陵地ナリ、河流ハ古期岩層ヨリ成レル稍高キ山脈ヨリ流下シ概シテ南流ス、本炭田ハ海岸ニ近ク運搬甚タ便利ニシテ鐵道ニ依リ連絡ス、若松及門司ノ二港ハ本炭田ヲ距ルコト遠カラス、便宜上本炭田ヲ小倉、遠賀川、宗像及福岡ノ四區域トナス

沿革及産額 本炭田ノ沿革ニ關シテハ正確ナル記錄ナケレトモ二百年以前ニ開發セラレタルコトハ疑ナキカ如シ、然レトモ明治十四年マテハ石炭ハ幼稚ナル古法ニ依リ採掘セラレ隨テ産出額言フニ足ラサリシモ同年以降稍大規模ノ鑛業開始セラレ運搬ノ便亦次第ニ開ケ鑛

業急激ニ發達シ產出額著シク増加シ明治二十四年ニハ產出額約百萬噸ニ達スルニ至レリ、日清及日露戰役後鑛業ノ發達ハ殊ニ著シク產出額急ニ増加シ一新紀元ヲ開ケリ、明治四十二年以來一般鑛業ノ衰頽ニ依リ產出額ノ増加著シカラス
 本炭田ハ本邦ニ於テ最モ重要ナルモノニシテ本邦石炭總產出額ノ過半ヲ產出ス、產出額ハ次ノ如シ

年 別	產 出 額	年 別	產 出 額	年 別	產 出 額
明治十二年	一五九、〇八六 <small>噸</small>	明治二十三年	七七九、五〇三 <small>噸</small>	明治三十四年	五、一九三、三九五 <small>噸</small>
同十三年	—	同二十四年	四九五、八四六	同三十五年	五、四一八、六九九
同十四年	二〇〇、三八一	同二十五年	一、二〇七、八八七	同三十六年	五、五九一、八四五
同十五年	二一一、八六一	同二十六年	一、四二二、五六一	同三十七年	六、〇〇七、九〇五
同十六年	二三〇、四五二	同二十七年	二、〇七六、五三〇	同三十八年	六、三九七、四八〇
同十七年	三〇〇、二一一	同二十八年	二、四二一、四三五	同三十九年	六、九五八、三二〇

同十八年	三五二七〇四	同二十九年	二、六八八、四四八	同四十年	七、六五一、〇二八
同十九年	二九一二一八	同三十年	二、六七七、二三五	同四十一年	八、一五八、四九八
同二十年	四一四一〇四	同三十一年	三、八七八、四五七	同四十二年	八、三三二、九六一
同二十一年	—	同三十二年	三、七八五、六三九	同四十三年	八、六二三、一二九
同二十二年	一一二二四九	同三十三年	四、二三三、九九一	同四十四年	九、二〇三、九五四

地質 古生層及中生層ハ之ヲ貫キテ噴出セル花崗岩、閃綠岩、玢岩、輝綠岩等ノ火成岩ト共ニ約南北ニ互レル高峻ノ山脈ヲナス、第三紀層ハ是等岩層ノ盆地ニ成層シタルモノニシテ頁岩、砂岩及蠻岩ヨリ成リ重要ナル石炭ヲ埋藏ス、西方ヨリセル橫壓力ノ爲メ地層ハ褶曲スルト共ニ數多ノ斷層ニ切斷セラレ、斷層ノ落差若クハ轉位ハ時ニ數百尺ニ達スルモ一般ニ之ヨリ小ナリ、安山岩及玄武岩ハ唯坑内ニ於テ之ヲ發見スルノミニシテ地表ニハ多ク露出セス、其噴出ノ爲メ採掘困難ナルコト多シ、第三紀層ハ遠賀川沿岸區域ニ於テ最モ好ク發達シ上部及下部含炭層ニ區別ス

上部合炭層ハ北部ニアリテ遠賀川ノ東方ヲ占メ上、下ノ二部ニ區別ス、上部層ハ主ニ砂岩及蠻岩ヨリ成リ頁岩ヲ挾メリ、數多ノ炭層アレトモ其厚サ薄キト品位劣等ナルヲ以テ現時稼行スルモノナシ、下部層ハ頁岩及砂岩ヨリ成リ稀ニ蠻岩ヲ挾ミ數多ノ石炭ヲ埋藏ス、就中七炭層ハ稼行ニ堪ユレトモ小距離ニ於テ切斷セラレ又ハ縮迫スルコトアリ、數多ノ薄キ夾ミハ一層中ニ之ヲ見ルコトアリテ其膨大スルトキハ炭層ハ時ニ二三層ニ分岐ス、斷層ハ比較的少ナク且ツ小ニシテ火山岩ノ噴出ヲ見ス

下部合炭層ハ主ニ遠賀川ノ西方ニ於ケル廣大ナル區域ヲ占メ頁岩、砂岩及蠻岩ヨリ成リ數多ノ炭層ヲ埋藏ス、炭層中火山岩ノ噴出ノ爲メ燻石ニ變質セルモノアリ、炭層ハ別テ之ヲ四群トナス、就中第三炭層群ヲ最モ重要ナリトス、二大向斜褶曲ハ殆ント并行シテ約南北ニ走リ其褶曲軸ハ基盤ニ近ク東部ニアリ、隨テ傾斜ノ角度ハ東翼ニ於テハ西翼ニ於ケルヨリ急ナリ、斷層甚々多ク第三版ニ示スカ如シ、層向ハ一般ニ北

北西ニシテ傾斜ノ角度ハ十度乃至二十度ナルモ基盤ニ近ク常ニ之ヨリ急ナリ、含炭層ノ地質年代ニ關シテハ化石ノ調査未タ完カラサルヲ以テ之ヲ確言スルニ難ケレトモ層位上并ニ岩石上ノ見地ヨリ一般ニ中新期ニ屬スルモノナルヘシト云フ

含炭層ノ厚サハ隨所異ナレトモ試錐其他信賴スヘキ材料ニ依リ概算スルニ上部含炭層ノ厚サハ二千五百尺乃至三千尺、下部含炭層ハ四千尺乃至四千五百尺ナルヘシ

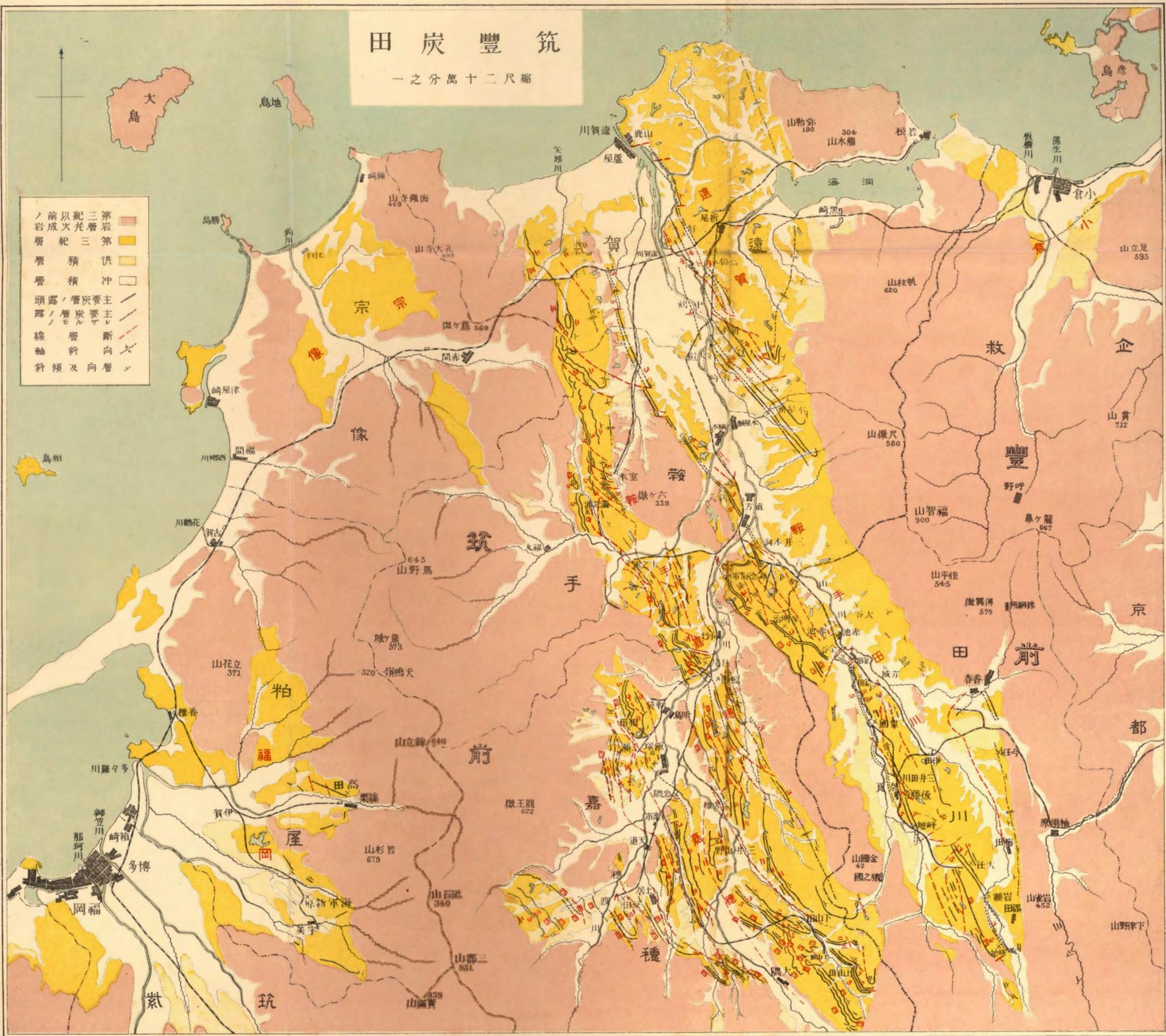
炭層 炭層ノ數ハ甚タ多ク其最モ發達セル所ハ遠賀川沿岸區域トス、上部含炭層ノ炭層ハ十五層アリテ内七炭層ハ二尺乃至五尺ノ厚サヲ有シ稼行ニ堪ユ、下部含炭層ノ第一炭層群即チ上部炭層群ハ頁岩ノ夾ミヲ有スルニ炭層ヨリ成ル、本炭層群ハ所ニ依リ既ニ全ク浸蝕シ去ラレ僅ニ南部ニ於テ之ヲ見ルヲ得ルノミ、一般ニ炭層ハ薄ク炭質ハ劣等ニシテ其發達セル所ニ於テ僅ニ稼行セラル、ノミ、第二炭層群ハ一般ニ六七層ノ炭層ヲ有シ中部ノ南半ニ最モ好ク發達ス、厚サハ區々ニシ

テ厚キトキハ八尺ニ達ス、第三炭層群ハ最も重要ニシテ十二層以上ノ炭層ヲ有シ所謂三尺炭及五尺炭最も廣ク探掘セラレ將來モ亦最も盛ニ探掘セララルヘキモノニシテ厚サニ變化少ナク炭質又良好ニシテ遠賀川區域ヲ通シ之ヲ追跡スルヲ得ヘシ、其他ノ炭層ハ厚サ八尺ニ達スルコト多キモ變化亦多ク時ニハ夾ミヲ有シ又ハ縮迫シテ稼行ニ堪エサルニ至ルコトアリ、第四炭層群ハ六炭層ヲ有シ南西部ニ於テ盛ニ探掘セララル、厚サ區々ナルモ一般ニ三尺乃至五尺ナリトス、此他ノ三區域ハ遠賀川區域ニ比スレハ重要ナラスシテ厚サ三尺乃至五尺ノ稼行スヘキ二三ノ炭層ヲ埋藏スルノミ、其相互ノ關係ハ未タ明ナラス、松岩ハ炭層中ニ多量ニ存在シ其多キトキハ其量石炭ト相半ハシ少ナキモ石炭ノ百分ノ二三ニ達ス、其形狀ハ不規則ニシテ太サニ種々アリ、其直徑ハ時ニ十尺ニ達スルコトアルモ一般ニ短シトス

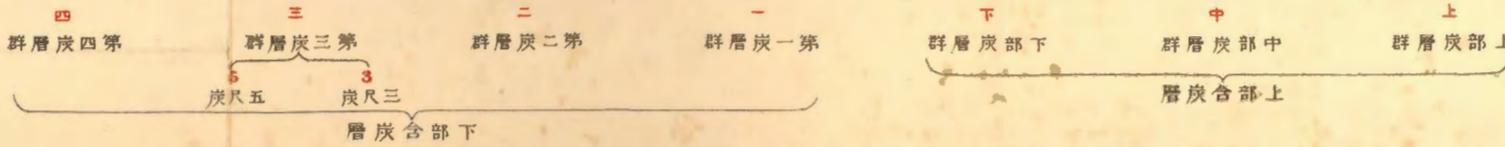
炭質 石炭ハ何レモ有煙炭ナルモ其產出スル區域ニヨリテ品位自ラ異ナレリ、小倉區域ニ產スルモノハ寧ロ黑褐炭ニ屬シ他ノ三區域ニ產

筑豊炭田

縮尺十二萬分之一



- 第三紀 第三層 岩成
- 第三紀 洪積層
- 沖積層
- 主要炭質管露頭
- 主要炭質層
- 斷層線
- 層向及傾斜



スルモノハ皆粘結シ良好ナル低度瀝青炭ナリ、就中遠賀區域ニ産スルモノ最モ良好ナリ、是等石炭ノ分析ノ結果ハ平均左ノ如シ(百分中)

水	揮發物	固定炭素	灰	硫黃比	發熱量		種類	
					カロリー	英國熱單位		
二、五一	四〇、六五	四七、九五	八八九	〇、九七	一三三二	七〇二六	一二、六四七	低度瀝青炭

炭量 地下ニ於ケル炭層ハ數多ノ試錐ニ依リ研究セラレタルモ正確ニ炭量ヲ計算スルニハ更ニ精密ナル調査及試錐ノ要アリ、茲ニハ現ニ稼行スル炭層及嘗テ稼行セラレタル炭層ヲ第一種炭量ニ計算シタリ、此外將來稼行ニ堪フヘキ厚キ數多ノ炭層アレトモ品質比較の劣等ナルヲ以テ未タ稼行セラレサルモノアリ、蓋シ是等炭層ハ之ヲ本邦ノ他ノ炭田ノ石炭ト比較シ敢テ劣等ナリト稱スヘカラスシテ將來注意スヘキモノナルハク現ニ之ヲ採掘セントスルノ企ナキニアラス、計算セル炭量ノ概算次ノ如シ

第一種炭量 (單百萬噸位) 第二種炭量 (單百萬噸位)

小倉	遠賀川	遠賀	鞍手川	鞍手嘉穂	嘉穂	宗像	福岡	合計
一、五	三八七、五	三三、	一四一、	一四四、	六九、五	一、五	一五、	四〇五、五
六、	一、二七、五	二〇〇、	四五〇、	四二九、	一、三八、五	一、五	三〇、	一、二五五、

(一) 小倉區域

小倉區域ハ面積狭小ニシテ北部ハ海ニ依リ限ラレ小倉市ハ殆ント其中心ニアリ、第三紀層ハ盆地狀ヲナシ緩傾斜ヲ以テ小倉市ニ向ヒ傾斜スレトモ東方及中生層附近ニハ傾斜ハ稍急ニシテ十五度乃至二十度

ニ達シ小斷層多シトス、三炭層アリ、下部炭層ハ稼行スヘキ石炭ノ厚サ四尺ヲ有シ現今稼行セラル、唯一ノ炭層ナリ、上部炭層ハ厚サ二尺、中部炭層ハ三尺ニシテ後者ハ品位劣等ナリ、新鷲峯炭坑ハ本區域ニ稼行セル唯一ノ炭坑ナリ、茲ニハ炭層ノ厚サ四尺アリテ北東十五度ニ傾斜ス、明治四十三年ノ產出額ハ八千五百二噸、同四十四年ニハ一萬六千四百五十五噸ナリ

(二) 遠賀川區域

遠賀川區域ハ最モ豐富ニシテ最モ重要ナル石炭ヲ埋藏シ本炭田ノ產出額ノ大部ハ本區域ヨリ產出ス、分テ四區トナス、遠賀、鞍手田川、鞍手嘉穗及嘉穗是ナリ、而シテ遠賀區ノミ上部含炭層ヨリ成ル

(a) 遠賀區

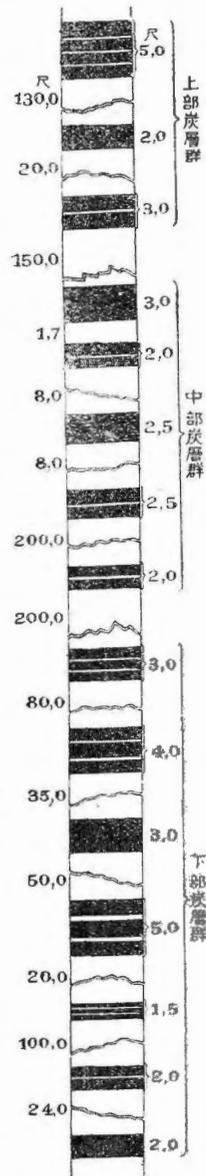
遠賀區ハ上部含炭層ヨリ成リテ東部基盤ニ接シ一向斜層ヲナシ殆ント北々西ニ走レリ、隨テ傾斜ノ角度ハ東方ニ急ニシテ基盤附近ニハ三十四度ニ傾斜シ斷層比較的多シトス、西方遠賀川流域ニ近ツクニ從ヒ

地層ノ變動次第ニ少ナク傾斜ノ角度モ緩ニシテ十度乃至二十度トナ
 レリ、數多ノ炭坑ハ相接近シテ此地ニ稼行ス、明治四十四年ニ五萬噸以
 上ヲ産出セル炭坑ハ次ノ如シ

高	大	新	中	木	三	岩	高	大
江	辻	手	鶴	屋	好	崎	松	谷
明治四十二年	明治四十二年	明治四十二年	明治四十二年	明治四十二年	明治四十二年	明治四十二年	明治四十二年	明治四十二年
—	四一二、三六〇 <small>噸</small>	六九、五五〇	七九、〇三三	一一、二四四	九九、三四〇	八九、一〇二	五一、二四九	四七、三七二
明治四十三年	明治四十三年	明治四十三年	明治四十三年	明治四十三年	明治四十三年	明治四十三年	明治四十三年	明治四十三年
—	三五四、八四八 <small>噸</small>	八七、四四八	一〇七、四七〇	六八、九六九	八一、三八二	五九、四七七	五六、七一七	五八、四四三
明治四十四年	明治四十四年	明治四十四年	明治四十四年	明治四十四年	明治四十四年	明治四十四年	明治四十四年	明治四十四年
二二一、八三二 <small>噸</small>	一九七、八五五	一三五、〇二九	一一〇、七七〇	一一〇、二四九	九一、七三九	六六、二九六	六四、七五六	五五、四二二

第二十圖ニ示セルカ如ク重要ナル炭層十五アリ、就中第一炭層、第三炭層、第四炭層、第八炭層、第十一炭層、第十二炭層及第十五炭層ハ探掘セラ

第二十圖 筑豊炭田柱狀斷面圖 縮尺二百分之一



ル、モ其他ハ一般ニ薄ク品位劣等ナルノ故ヲ以テ未タ探掘セラレタルコトナシ、便宜上分テ三炭層群トナス

上部炭層群ハ第一炭層、第二炭層及第三炭層ニシテ、北端ニ露出シ殆ント相并行シテ南々東ニ走り隨所數斷層ニ依リ切斷セラル、南部ニハ炭層ハ次第ニ彎曲シテ北ニ向ヒ向斜層ヲ形成ス、第一炭層ノ厚サハ三四尺ナルモ中部以南ニハ夾ミ多クシテ品位劣レリ、第二炭層ハ厚サ二尺ニシテ時ニ探掘セラレ第三炭層ハ平均厚サ二尺五寸ニシテ中部ニハ

五尺ニ發達ス、本炭層群ノ炭層ハ北部及中部ニ稼行セラレ大谷、三好、高松等ノ炭坑之ヲ採掘ス

中部炭層群ハ第四炭層及第八炭層間ノ五炭層ニシテ中部以南ニ追跡セラレ嘗テ北部ニ稼行セラレタルモノ、連續セルモノナリ、炭層ハ殆ント相并行シテ北東十二度乃至十八度ニ傾斜スルモ南部ニハ次第ニ彎曲シテ遂ニ北方ニ向ヒ向斜層ヲナス、第四炭層ハ大辻及高松兩炭坑ノ主要炭層ノ一ニシテ厚サ三尺乃至三尺五寸アリ、第八炭層ハ數多ノ小炭坑之ヲ採掘シ平均厚サ二尺ナリ、其他ノ三炭層ハ厚サ一尺五寸乃至二尺五寸ニシテ品位一般ニ劣等ナリ、其發達スルトキ小規模ニ稼行セラル

下部炭層群ハ最モ重要ニシテ七炭層ヲ有シ中部ヨリ南部ニ之ヲ追跡スルヲ得ヘシ、層向ハ北々西ニシテ傾斜ハ東北東十度乃至十五度トス、三炭層即チ第十一炭層、第十二炭層及第十五炭層ハ重要ニシテ上部ヨリスレハ厚サ良炭部三尺、四尺及二尺ニシテ數多ノ夾ミヲ有スルコト

多シ、第十五炭層ハ大辻、木屋瀬兩炭坑ニ於ケルカ如ク厚サ三尺五寸乃至四尺以上ニ膨大シ、第十一炭層及第十二炭層ハ四尺乃至六尺ニ膨大スルコト多ク大辻、新手、岩崎三炭坑ニ於ケルカ如ク盛ニ採掘セラル、其他ノ炭層ハ隨所稼行セラル、ノミニシテ重要ナラサレトモ第九炭層ハ岩崎、木屋瀬等ノ炭坑ニ依リ採掘セラレ厚サ三四尺アリ、第十二炭層ノ下ニアル一炭層ハ木屋瀬炭坑ニ於テ稼行セラレ厚サ二尺五寸アリ、其他ノ炭坑ハ茲ニ記述セス

(b) 鞍手田川區

鞍手田川區ハ遠賀川及其一大支流彦山川ニ沿ヒ北々西ニ狹長ナル盆地ヲナシ延長約四十五基米、幅約四基米乃至九基米ノ面積ヲ占メ本炭田中最モ重要ナル地域ニシテ數多ノ大炭坑現ニ盛ニ操業ス、明治四十四年五萬噸以上ヲ產出セル炭坑ハ次ノ如シ

明治四十二年

明治四十三年

明治四十四年

三 井 田 川

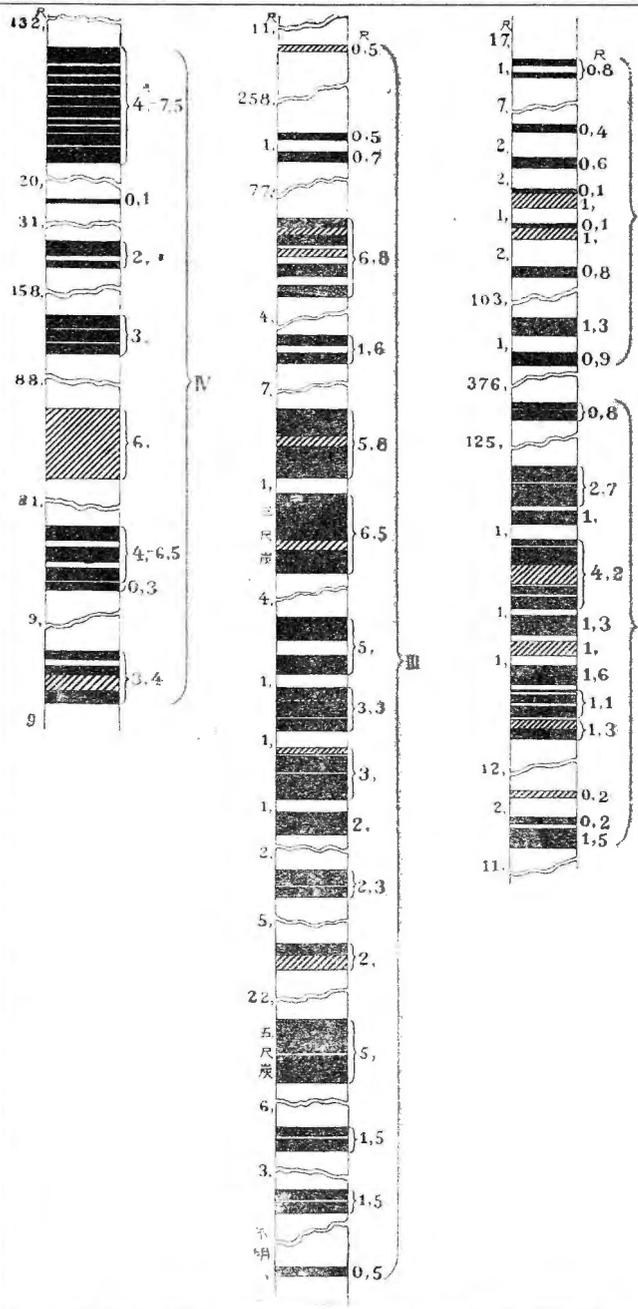
五六九、八六一噸

六六一、三三四噸

七八四、九四一噸

明	治	三九四、二四九	四三三、四〇一	五三八、二九二
新	入	三九九、六一二	四二四、七四三	三九八、八三八
三	井	二六三、一七一	三一六、五二六	三七八、二九三
豐	本	一八五、〇三二	二六一、八五五	三二四、八五四
金	洞	二九八、四七五	二九八、二四三	三一九、〇〇三
大	國	二〇二、八二九	二九八、〇三九	二三四、四九七
峯	任	一五〇、七五四	一六八、六二一	二二五、四三九
豐	地	一四八、九四〇	一七一、八七九	二〇二、一六〇
赤	第	一六三、四一四	一七六、八五六	一九二、四八六
海	二	一九五、〇六八	一八三、九七七	一三九、〇八五
岩	坑	七〇、二二〇	六五、八五一	一一八、九〇四
峯	第	五八、九一三	五五、五三七	六四、八八三
金	一	六四、一七三	四二、三三九	五八、三九九
	坑			
	谷			

北部ニハ地層ハ浸蝕ノ爲メ既ニ除去セラレ又ハ狹長ナル小區域トナ
 リテ殘存シ其構造寧ロ簡單ナリ層向ハ一般ニ北々西ニシテ東北東十
 第二十一圖 明治炭坑柱狀斷面圖 縮尺二百分之一



度乃至二十度ニ傾斜スルモ斷層ニ依リ切斷セラル、コト多シ、然レトモ直方ノ南方ヨリハ其最下層ヨリ之ヲ見ルヲ得ヘク構造ハ寧ロ複雑ニシテ褶曲斷層多シ、地層ハ嘉麻川ヲ越エテ中生層ニ沿ヒ西ニ彎曲シ一ノ向斜層及背斜層ヲナスモ再ヒ北西ニ轉シ北東十五度乃至二十五度ニ傾斜ス、金田ヨリ層向ハ再ヒ北々西ノ方向ニ復シ東北東十度乃至二十度ニ傾斜ス、斷層ノ結果同一炭層ノ數度露出スルコト少ナカラス、安山岩ノ噴出多ク石炭ハ爲ニ變質シテ燧石トナレリ、炭層殊ニ第三炭層群ノ三尺炭及五尺炭ヲ除キ其他ノ炭層ハ全地域ニ互リテ發達セスシテ上層ニ於ケル炭層ハ浸蝕作用ニ依リ除去セラレタルコト多シ、第二十一圖ハ明治炭坑ノ斷面ニシテ標準トスヘキモノナリ

北部區域ニハ第一炭層群ハ全ク浸蝕シ去ラレ第二炭層群ノ炭層處々ニ殘存スルモ厚サ薄クシテ稼行ニ堪ヘス、第三炭層群ノ炭層ハ南部ニ最モ好ク發達シ新入炭坑ニ於テ盛ニ稼行セラレ三尺炭ハ五尺ニ膨大シ五尺炭ハ三尺ニ縮迫ス、新入炭坑々内ノ西方ニハ三尺炭ノ一部ハ安

山岩ノ噴出ノ爲メ燧石ニ變質セリ、其他ノ炭層ハ一般ニ稼行セラレサルモ三尺炭ノ上ニアル一炭層ハ時ニ新入炭坑ニ於テ四尺ノ厚サヲ有シ採掘セラル、北方ニハ是等ノ炭層ハ次第ニ薄クシテ三尺炭ハ二尺五寸、五尺炭ハ僅ニ一尺二寸ニ縮迫シ三尺炭ノ上ニアル一層ハ厚サ一般ニ三尺ナリ、第四炭層群ハ重要ナラス

海軍御徳、明治及赤池等ノ炭坑ノ盛ニ稼行スル區域ニハ第一炭層群ノ炭層ハ皆薄ク稍厚キ夾ミヲ有シ一炭層ノ厚サ一尺五寸ナルモノ採掘ニ堪フ、第二炭層群ノ炭層モ亦皆薄ク延長大ナラスシテ時ニ稼行セラレ東方ニ一炭層厚サ二尺五寸ニ膨大シ時ニ採掘セラル、第三炭層群ニ於テハ重要ナル三尺炭及五尺炭ノ外三尺炭ノ上ニアル一炭層及三尺炭、五尺炭ノ間ニアルモノ亦重要ニシテ三尺炭ノ下ニアル一炭層時ニ稼行セラル、北方ニハ三尺炭ノ上ニアル一炭層特ニ重要ニシテ平均厚サ四尺アリ、三尺炭ハ中部ニハ厚サ四尺ニシテ北部ニハ六尺乃至七尺ニ膨大スルコト多ク南部赤池炭坑ニ於テハ厚サ五尺アリ、本洞炭坑ニ

於テハ南方ノ一部燧石ニ變質ス、五尺炭ハ西方ニハ約六尺ニ發達シ東方ニ縮迫ス、本洞炭坑ニハ厚サ三尺五寸、赤池炭坑ニハ尙之ヨリ薄シ、三尺炭及五尺炭ノ間ニアルモノハ厚サ二尺乃至四尺ナリ、第四炭層群ノ三炭層ハ時ニ稼行セラル、モ品位劣等ナリ、厚サハ上部ヨリ三尺五寸、三尺及四尺乃至四尺五寸ニシテ北方ニ縮迫スルノ傾向アリ

南部區域ニハ數多ノ大炭坑北方ニ密集シ炭層最モ好ク發達ス、北部即チ金田、金谷、豊國及明治等ノ炭坑ノ稼行スル地方ニ於テハ第一炭層群及第二炭層群ノ炭層ハ嘗テ稼行セラレ廢坑各所ニ散在ス、厚サハ二尺乃至四尺ニシテ品位比較的劣等ナリ、重要ナル第三炭層群ハ六炭層ヲ有ス、金谷炭坑ニ於テハ三尺炭ハ五尺ニ膨大シ南方金田炭坑ニハ六尺乃至八尺ナルモ五尺炭ハ薄ク北方ニハ一尺五寸、南方ニハ四尺ナリ、三尺炭ノ上僅ニ一尺未滿ニアル一炭層ハ厚サ五尺乃至八尺ニ達シ其上ニアルモノ亦三四尺ノ厚サヲ有シ處々ニ稼行セラル、三尺炭及五尺炭ノ間ニアル厚サ三尺乃至五尺ノ一炭層稼行ニ堪ヘ其下ニアルモノ亦

稼行スルヲ得ヘシ、第四炭層群ノ二炭層ハ厚サ二尺乃至三尺五寸ニシテ稼行スルヲ得ヘシ、安山岩ハ唯南方ニアリテ三尺炭ニ入り石炭ヲ變質セシム

中部即チ田川炭坑ノ盛ニ稼行セル地方ニハ重要ナル第三炭層群ハ斷層ノ結果二列ニ露出シ略南北ニ走レリ、第一炭層群中厚サ五六尺ノ一炭層田川炭坑ノ堅坑伊田ニ於テ稼行セラル、モ其南北ノ連續ハ未タ明ナラス、第二炭層群ノ炭層ハ重要ナラスシテ小規模ニ僅ニ數箇所ニ稼行セラル、ノミ、第三炭層群ノ三尺炭ハ厚サ六尺乃至九尺ナルモ斷層ノ東方ニハ殆ント燼石ニ變質シ西方ニハ露頭附近ハ燼石ニ變質スルモ坑内ニハ燼石少ナシ、五尺炭ハ厚サ五尺ニシテ夾ミヲ有シ南方ニハ燼石ニ變質ス、三尺炭及五尺炭ノ間ニアル一炭層ハ厚サ三尺五寸乃至四尺五寸ニシテ亦稼行スルヲ得ヘシ、田川炭坑ニ於テハ六炭層稼行セラレ其厚サハ上部ヨリ三尺、八尺(三尺炭)、五尺、五尺(五尺炭)、二尺及三尺ナリトス、第四炭層群ニ於ケル三四尺ノ一炭層ハ小規模ニ稼行セラル

南部即チ大任炭坑、峯地第二坑、ノ稼行スル地方ニハ斷層ノ結果同一炭層二列ニ東西ニ露出ス、南方ニハ炭層ハ彎曲シテ北ニ向ヒ向斜層ヲナス、第一炭層群ニ於ケル一炭層ハ厚サ十尺ニシテ夾ミヲ有シ第二炭層群ニ於ケル二炭層ハ厚サ二尺乃至五尺ニシテ共ニ小規模ニ稼行セラシ、三尺炭及其上ニアル一炭層ハ厚サ四尺乃至五尺ニ膨大スルモ三尺炭ハ南方ニハ十尺乃至十二尺ニ膨大シ大部分燧石ニ變質ス、五尺炭ハ厚サ四尺乃至五尺ナルモ燧石ニ變質スル部分多ク三尺炭及五尺炭ノ間ニアル一炭層亦然リ、第四炭層群ニ於ケル三尺及五尺ノ二炭層ハ處處ニ稼行セラル、モ燧石ニ變質スルコト多ク採掘困難ナリ、最下部ノ二炭層ハ嘗テ稼行セラレ現時廢坑處々ニ散在ス

本區ノ東部香春附近ニハ炭層約東方ニ傾斜シ向斜層ノ東翼ヲナス、傾斜ノ角度ハ基盤ニ近ク三四十度ナルモ西方ニハ十七度又ハ之ヨリ緩ナリ、第二炭層群ニ屬スル厚サ四尺ノ一炭層ハ南部今任炭坑ニ依リ稼行セラル、第三炭層群ノ三尺炭ハ良炭部厚サ五尺アリテ露頭附近ニハ

一部分燧石ニ變質シ、五尺炭ハ三尺乃至三尺五寸ニ縮迫ス、三尺炭上ニアル一炭層ハ厚サ僅ニ一尺ナリ

(c) 鞍手嘉穂區

鞍手嘉穂區ハ鞍手田川ニ亞キ重要ニシテ其西ニ狹長ナル盆地ヲナス、明治四十四年五萬噸以上ヲ産出セル炭坑ハ次ノ次シ

	明治四十二年	明治四十三年	明治四十四年
大之浦	六五三、八四五 <small>噸</small>	五八六、二八八 <small>噸</small>	七六三、七〇六 <small>噸</small>
目尾	三九三、七一〇	三九一、九三三	三八九、三八二
鯨田	二七四、二八一	三三五、三七一	三八九、一七〇
三井山野	二五五、七五四	二九七、六一二	三四五、八二五
芳雄	二二六、二四五	二三八、八四二	二五八、九七〇
下山田	九〇八、八四一	一四九、〇一六	一八一、九七八
上山田	一一九、一二一	一二二、八七五	一四〇、一八一

一向斜軸ハ基盤ニ接シ東部ノ境界ニ近ク走り隨テ地層ノ傾斜ハ東翼ニ於テハ西翼ヨリ急ナリ、斷層及褶曲多ク爲ニ同一炭層其兩側ニ露出スルコト多シ

北部即チ數多ノ小炭坑ノ稼行スル地方ニハ第一上部炭層群ノ炭層ハ浸蝕ノ爲メ除去セラレタルカ如シ、第二炭層群ノ炭層ハ北方ニ於テ重要ニシテ下部ニ於ケル三炭層採掘セラレ稼行スヘキ部分厚サ概ネ二三尺ナリ、第三炭層群ハ北部ニ於テハ重要ナラスシテ厚サ薄ク稼行ニ堪ヘス、南方ニハ厚サ次第ニ厚ク三尺炭及其上ニアル二炭層ハ厚サ各三四尺、五尺炭ハ四尺乃至五尺ナリ、以上炭層ハ室木炭坑及大之浦炭坑ニ屬スル滿之浦堅坑ニ依リ稼行セラル、第四炭層群ノ炭層ハ厚サ薄ク品質劣等ニシテ稼行ニ堪ヘス

中部即チ大之浦、目尾等ノ炭坑ノ稼行スル地方ニハ斷層殊ニ多ク同一ノ炭層ハ斷層ノ兩側ニ反覆露出ス、第一炭層群ハ東部ニ露ハルレトモ

炭層薄ク否ラサレハ品質劣等ナリ、第二炭層群ノ炭層亦重要ナラスシ
テ現時唯小規模ニ稼行セラレ嘗テ南方ニ探掘セラレタリ、第三炭層群
中ニハ重要ナル四炭層アリ、其厚サハ平均五尺ナルモ一般ニ南方ニ膨
大ス、四炭層ハ三尺炭、五尺炭、三尺炭ノ上ニアル炭層并ニ三尺炭、五尺炭
ノ間ニアル炭層ニシテ三尺炭及五尺炭ハ北方ニハ厚サ三四尺ナルモ
南方ニハ三尺炭ハ六七尺ニ膨大シ五尺炭ハ之ヨリ薄ク四五尺ナリ、火
山岩噴出ノ結果一部分ハ燧石ニ變ス、第四炭層群ハ北方ニハ重要ナラ
サレトモ南方ニハ夾ミト共ニ厚サ五尺ノ一炭層アリテ時ニ稼行セラ
ル

西方嘉麻川及山田川ニ限ラレ鯉田、芳雄炭坑ニ依リ稼行セラル、地方
ニハ炭層ハ皆河流ノ方向ニ一致セル大斷層ニ依リ切斷セラル、一向斜
軸ハ東部ヲ殆ント南北ニ走り東翼ノ傾斜ハ西北西三十度ニシテ西翼
ハ東南東十五度ナリトス、炭層ハ屢斷層ニ依リ切斷セラレ短距離ニ於
テ層向ノ變化スルコト多キモ構造寧ろ簡單ニシテ一般ニ北々東ニ走

レリ、第一炭層群ニハ厚サ二尺及五尺ノ二炭層稼行ニ堪フレトモ夾ミ多ク品質劣等ナリ、本層ハ唯南方ニ於テ稼行セラレ北方ニハ厚サ減少シ遂ニ稼行ニ堪ヘサルニ至ル、第二炭層群ノ炭層ニハ厚サ四尺乃至八尺ノ一炭層アリテ嘗テ稼行セラレタルモ夾ミ甚タ多ク良炭部ハ寧ロ薄シ、南方ニハ三炭層ノ稼行セラル、モノアリテ其厚サハ上部ヨリスレハ八尺、五尺及三尺乃至五尺ナリ、第三炭層群ハ北方ニ最モ重要ニシテ鯰田炭坑盛ニ之ヲ稼行スルモ、南方ニハ良炭部ハ火山岩ニ依リ貫通セラレタリ、北方ニハ三尺炭ハ其上ニ位スル炭層ト共ニ稼行セラレ厚サ約七尺アリ、三尺炭、五尺炭ノ間ニアル一炭層亦稼行セラレ厚サ五尺アリ、五尺炭ハ厚サ五尺以上ニ膨大シ品質頗ル優等ナリ、南方ニハ五尺炭ハ夾ミヲ有シ品質劣等ナルモ三尺炭ハ其上ニ位スル一炭層ト共ニ品質良好トナリ厚サ七尺ニ達ス、火山岩ハ三尺炭及五尺炭ノ間ニ貫入シ石炭ハ無煙炭又ハ煽石ニ變ス、東翼ニハ宮之浦炭坑稼行シ三尺炭ハ厚サ八尺、五尺炭ハ厚サ五尺ニシテ兩炭層ノ間ニアル一炭層ハ厚サ四

尺ナリ、三尺炭ノ上ニ位スル一炭層ハ厚サ三尺ニシテ時ニ稼行セラル、第四炭層群ニハ炭層ノ數多キモ二炭層ノミ重要ニシテ厚サ二三尺ナリ、其他ノ炭層ハ發達區々ニシテ良好ナル時ニ稼行セラル、厚サハ一般ニ薄ク然ラサレハ品位劣等ナリ

嘉麻川及山田川即チ二大斷層ニ依リ圍繞セラル、區域ハ狹長ニシテ北西ヨリ南東ニ走レリ、北方ニ山野炭坑ノ稼行スル所ニハ東方ニ傾斜スル第三炭層群及第四炭層群ノ炭層採掘セラル、南方ニ嘉麻川ヲ超エ更ニ南方ニハ第二、第三及第四ノ三炭層群ノ炭層ヲ追跡スルヲ得ヘキモ屢斷層ニ依リ切斷セラレ層向ハ北東ニ彎曲シ南東十度乃至二十度ニ傾斜ス、火山岩ノ噴出頻繁ニシテ石炭ハ爲ニ無煙炭又ハ燧石ニ變ス、第二炭層群ニハ二尺以上ノ炭層五アリ、中二炭層時ニ三炭層ハ厚サ各四尺ヲ有シ現ニ稼行セラル、其他ノ炭層ハ厚サ二三尺ナリ、第三炭層群及第四炭層群ノ炭層ハ重要ニシテ全區域ヲ通シテ稼行セラル、三尺炭層ハ山野炭坑ニ於テハ之ヲ見ルヲ得ス、即チ最上部ニアル炭層ハ三尺

炭ノ下ニアル厚サ四尺五寸ノ一炭層ニシテ現ニ稼行セラレ五尺炭ハ厚サ僅ニ三尺ナリ、南方嘉麻川ヲ越ユレハ三尺炭ハ其上ニアル一炭層ト共ニ厚サ夾ミト共ニ七尺、良炭部三尺アリ、五尺炭亦夾ミト共ニ八尺以上、良炭部四尺五寸アリ、上部炭層ハ下山田炭坑ニ於ケルカ如ク火山岩ノ爲メ無煙炭ニ變質セリ、三尺炭及五尺炭ノ間ニアル一炭層ハ夾ミト共ニ厚サ八尺以上ニ達スルモ下山田炭坑ニ於テハ燻石ニ變質ス、尙南方ニハ三尺炭ハ厚サ四尺ニ縮迫シ品質劣等トナレリ、三尺炭及五尺炭ノ間ニアル一炭層ハ厚サ六尺五寸乃至七尺ニシテ上山田炭坑ニ最モ好ク發達ス、火山岩ノ貫入ハ採掘ヲ困難ナラシメ石炭ハ燻石ニ變シ時ニ豫定ノ石炭ヲ採掘スルコト能ハサルコトアリ、第四炭層群ハ稼行ニ堪フヘキ四五層ノ炭層ヲ有シ二炭層ハ北方ニ、四炭層ハ南方ニ稼行セラル、厚サハ一般ニ良炭部三四尺ナリ

(d) 嘉穗區

嘉穗區ハ遠賀區ノ南西部ヲ占ム、明治四十四年ニ五萬噸以上ヲ產出セ

ル炭坑四アリ、即チ次ノ如シ

	明治四十二年	明治四十三年	明治四十四年
二瀬	三八六、九四六 ^噸	三七二、九六四 ^噸	四二七、八五八 ^噸
忠隈	二三八、五九四	三二四、五〇五	三四四、四九三
豆田	一三五、五〇七	一二二、四三九	一三六、一〇一
相田	八六、一五三	九二、四六四	六二、四四三

北部即チ二瀬、相田兩炭坑ノ稼行スル地方ハ花崗岩上ニ成層セル狹長ノ盆地ニシテ南東ハ穗波川ヲ以テ限レリ、地質構造ハ甚々複雑ニシテ大斷層南北ニ走レリ、第二炭層群ノ炭層中稼行スヘキモノ一二層ニシテ厚サ六七尺ナリ、品質ハ北方ニハ良好ナレトモ南方ニハ劣等ナリ、第三炭層群ノ炭層中三尺炭及五尺炭最モ良好ニシテ北方ニハ三尺炭ハ厚サ三尺五寸乃至四尺、五尺炭ハ四尺五寸乃至五尺ナリ、三尺炭ノ上部ニ位スル二炭層亦重要ナルモ上部炭層ハ厚サ五尺ニシテ品位劣等ニ、

下部炭層ハ三尺炭ト共ニ屢稼行セラル、三尺炭及五尺炭ノ間ニアル一炭層ハ厚サ二尺ニシテ時ニ稼行セラル、南方ニハ炭層膨大シ三尺炭ハ其上ニアルニ炭層ト共ニ稼行セラレ良炭部ノ厚サ九尺以上ニ達シ五尺炭ハ其下ニアル一炭層ト共ニ八尺ニ膨大ス、而シテ五尺炭ノ上下ニアル炭層ハ厚サ各四尺ナリ、第四炭層群ハ唯西方ニ露出シ三炭層稼行ニ堪フ、厚サハ稼行スヘキ部分二尺乃至四尺ナレトモ品質寧ろ劣等ナリ

東方大斷層ニ限ラレ西方土居附近ノ基盤ニ依リ圍マレタル區域ニハ北方ニ忠隈炭坑ノ稼行スルアリ、二大斷層本區ヲ南北ニ縱走シ炭層ハ其兩側ニ反覆露出ス、層向ハ約南北ニシテ東方ニ傾斜スルモ南方ニハ次第ニ北西ニ彎曲シ遂ニ直ニ花崗岩ニ接スルニ至ル、火山岩ハ殊ニ南方ニ於テ坑内ニ之ヲ目撃スルコト多ク石炭ハ爲ニ燧石ニ變ス、第二炭層群ニハ稼行スヘキニ炭層アリ、上部炭層ハ厚サ二尺、下部炭層ハ四五尺ナリ、第三炭層群ノ三尺炭ハ北方ニハ品位劣等ナルモ南方ニハ稍良

好ナリ、五尺炭ハ薄クシテ品質亦劣等ナルモ南方ニハ厚サ三尺アリ、三尺炭并ニ五尺炭ノ間ニアル二炭層最モ良好ニシテ上部炭層ハ厚サ三四尺、下部炭層ハ五尺乃至八尺アルモ中部ニハ薄クシテ品質劣等ナリ、三尺炭ノ上ニアル二炭層ハ厚サ三四尺アルモ品質劣等ニシテ北方ニ於テ稼行セラル、第四炭層群ハ北方ニ稼行ニ堪フヘキ炭層四五層アリ、内最上部炭層及最下部炭層稼行セラレ其他ノモノニハ夾ミ甚タ多シ、厚サハ良炭部三四尺ナルモ南方ニハ火山岩ニヨリ貫通セラル、西方ニハ本炭層群ハ中生層ニ接近セル北部樂市ヨリ之ヲ追跡スルヲ得ヘキモ茲ニハ僅ニ一層ノ稼行セラル、ノミ、土居ノ西方ヨリ本炭層群ハ南西ニ走リ北東二十五度乃至三十度ニ傾斜シ厚サ二尺乃至五尺ノ二炭層稼行セラレ南端ニ於テハ斷層ノ爲メ數度反覆露出ス、厚サ一般ニ三尺乃至五尺ノ二炭層時ニ三、炭層小規模ニ稼行セラル、火山岩ノ噴出ノ爲メ石炭ハ燼石ニ變シ及探掘困難ナルコトアリ

西部即チ豆田炭坑ノ稼行スル區域ハ土居ノ西方變成岩上ニ成層シタ

ル地方ニシテ東西ニ長キ長方形ヲナス、含炭層ハ洪積層ニ依リ被覆セラレ變成岩ハ所々ニ露出シ殊ニ溪谷ニ多シトス、層向ハ約北西ニシテ東方ニハ北東、西方ニハ南西ニ傾斜シ中部ニ背斜層ヲ形成ス、傾斜ノ角度ハ一般ニ十度内外ナリ、背斜軸ノ東翼ニハ第三炭層群ニ屬スル一炭層厚サ七尺ナルモノ嘗テ稼行セラレタリ、第四炭層群ノ三炭層ハ稼行ニ堪ヘ厚サ三尺乃至五尺ナリ、西翼ニ於テハ炭層ハ品質劣等ニシテ數多ノ夾ミヲ有シ第二炭層群ノ炭層ニ該當スルカ如シ、第三炭層群ノ二炭層ハ厚サ四五尺アリテ稼行スヘシ、第四炭層群ノ二炭層ハ厚サ五尺アリ、其他ノ炭層ハ品質劣等ナルモ局部ニ變化アリ、北部ニ花崗岩上ニ成層セル中屋ノ小地域ニハ一炭層ノ厚サ四尺ナルモノ稼行セラル

(三) 宗像區域

宗像區域ハ筑前ノ北部ニ海岸ニ沿ヘル丘陵地ニシテ第三紀ノ頁岩、砂岩及蠻岩ヨリ成リ花崗岩、玢岩ヲ被覆シ一般ニ北西ニ走レリ、池田附近ノ炭層ハ重要ニシテ現ニ稼行セラル、五炭層中三炭層ハ稼行スヘク上

部炭層ハ厚サ六尺以上、中部炭層ハ三尺、下部炭層ハ四尺ナリ、其他ノ二層ハ厚サ三尺アルモ品質劣等ナリ、層向ハ北四十五度西ニシテ北東十五度乃至二十度ニ傾斜スルモ北方ニハ四十五度ニ増大ス、其他ノ部分ニアル炭層ハ薄クシテ重要ナラス

(四) 福岡區域

福岡區域ハ福岡ヲ圍繞セル第三紀層ニシテ變成岩及花崗岩ヨリ成レル山脈ノ邊緣ニ丘陵地ヲナス、地質ハ頁岩及砂岩ニシテ基盤トノ境界線ニ沿ヒ分布ス、明治四十四年五萬噸以上ヲ産出セル炭坑ハ次ノ如シ

高	田	明治四十二年	明治四十三年	明治四十四年
新	原	一、一七、〇一五 <small>噸</small>	一、四九、五〇〇 <small>噸</small>	一、六八、一七二 <small>噸</small>
海	軍	一、五、七九六	五、六、七八六	七、二、九二二

北部即チ多々羅川ニ灌溉セラレ變成岩ニ依リ圍繞セラル、區域ニハ稼行ニ堪フヘキ炭層ハ唯南部ニ之ヲ見ルノミ、茲ニハ地層ハ殆ント變

成岩トノ境界ニ並走シテ向斜層ヲナス、傾斜ノ角度ハ十五度乃至二十五度ナリ、河流ハ恰モ向斜軸ニ該當ス、北翼ニハ四炭層アリ、内三炭層ハ稼行スヘク厚サ一般ニ三四尺ナリ、本區域ノ最大ナル高田炭坑ニ於テハ厚サ三尺、六尺及五尺ナリ、南翼ニ於テハ北翼ニ於ケル三炭層ノ外二三ノ炭層アリテ厚サ亦三四尺ナリ

福岡ノ東方ナル中部區域ニ於テハ新原海軍炭坑稼行ス、茲ニハ塔段洪積層ハ中部ニ廣域ヲ占ム、第三紀層ハ北西ニ走リ二ノ背斜層及向斜層ヲナス、石炭ハ處々ニ稼行セララル、中部最モ重要ニシテ五炭層アリ、内下部ニ炭層ハ厚サ三四尺アリテ主ニ稼行セララル、其他ノ炭層ハ厚サ二尺ニシテ時ニ採掘セラレ最上部炭層ハ品質劣等ナリ、北方ニハ一層稼行セララル、ノミ、炭質ハ良好ニシテ厚サ三四尺ナリ、其他ハ品質劣等ナルモ時ニハ發達シテ稼行ニ堪フルモノアリ、南方ニハ五炭層中ニ二炭層稼行セラレ厚サ二尺乃至五尺ナリ

福岡ノ南ナル南部ニ於テハ層向ハ北方又ハ北西ニシテ東方若クハ北

東ニ緩斜ス、二三ノ炭層嘗テ稼行セラレ厚サ一二尺ナリト云フ

三池炭田 (第二十二圖參照)

位置及沿革 三池炭田ハ有明海ノ沿岸ニアリテ九州鐵道本線炭田ノ西部ヲ通過シ交通運搬共ニ至便ナリ、其面積ハ南北約十六基米、東西約八基米ニシテ筑後、肥後ノ國境ニ跨リ尙海中ニ布疋ス、石炭ハ四百餘年前ニ發見セラレ爾來小規模ニ稼行セラレタリト云フ、明治六年政府ノ稼行スル所トナリ採掘運搬ニ關シ種々施設スルトコロアリテ產出額次第ニ増加シタリ、明治二十一年三井鑛山會社ノ有ニ歸シ爾來各種ノ改良ニ意ヲ注キ施設スルトコロ甚タ多ク最近築港完成シ三池炭坑ハ實ニ本邦ニ於ケル最大ノモノトナレリ、現時五鑿坑及一斜坑ニ依リ稼行ス、明治六年以後ノ產出額ハ次ノ如シ

年 別	產 出 額	年 別	產 出 額	年 別	產 出 額
明治六年	一三、六六五 <small>噸</small>	明治八年	九六、九〇九 <small>噸</small>	明治十年	六八、七八九 <small>噸</small>
同 七 年	六三、七六九	同 九 年	六一、四〇三	同 十 一年	九六、七六四

明治十二年	一四二、一八二 <small>甲</small>	明治二十三年	四九一、四四六 <small>甲</small>	明治三十四年	九一、八〇三 <small>甲</small>
同十三年	—	同二十四年	五九三、一四一	同三十五年	九六二、〇九〇
同十四年	—	同二十五年	四八四、五七〇	同三十六年	一、一〇六、六〇四
同十五年	一六九、〇七四	同二十六年	六〇二、〇二六	同三十七年	一、二五二、二三五
同十六年	一六六、〇八三	同二十七年	六七三、〇〇四	同三十八年	一、三一、〇三八
同十七年	二四五、八〇五	同二十八年	七〇八、一五四	同三十九年	一、四八二、一三〇
同十八年	—	同二十九年	七〇三、九二八	同四十年	一、四九七、四七六
同十九年	二九〇、六八三	同三十年	六二八、三〇七	同四十一年	一、五三七、六八四
同二十年	三三三、四九八	同三十一年	六三七、七二六	同四十二年	一、五五一、三四三
同二十一年	—	同三十二年	七一八、一二三	同四十三年	一、七九九、四八九
同二十二年	四六五、八八二	同三十三年	七二五、〇二八	同四十四年	二、〇五二、三一二

地形及地質 炭田ハ低卑ナル波狀ノ臺地ニシテ高サ四百米乃至六百
 米ノ花崗岩地ノ西側ニアリ、地勢ハ一般ニ花崗岩地ニ近キ東部ニ於テ

高ク殊ニ北東部ヲ然リトスルモ最高ノ萬田山モ僅ニ百四十五米ニ過
キス、是ヨリ地勢ハ次第ニ西方ニ陵夷シ高サ一般ニ四十米乃至六十米
ニシテ沿岸ノ狹長ナル平地ニ没シ又ハ階段層ニ被覆セラル、唯炭田ノ
殆ント中部ニアル萬田山ノ百米以上ノ高サヲ有スルアルノミ、河流ハ
小ナリ、最大ノ諏訪川ハ兩國ノ界ニ近ク約西方ニ流下ス、海ハ淺クシテ
船舶ノ海岸ニ碇舶スルコト容易ナラサレトモ近時築港ノ設備完成シ
テ是ヨリ直ニ石炭ヲ積載スルコトヲ得
含炭層ハ頁岩、砂岩及蠻岩ヨリ成リ各層ノ厚サハ區々ナリ、化石ハ甚タ
多キモ地質年代ヲ定ムルニ足ルモノナク近時發見セラレタルモノハ
始新时期ニ屬スヘシト云フ、層向ハ北部即チ大牟田ノ東方ニ於テハ約東
西又ハ北東ナルモ東方即チ不整合ニ花崗岩ヲ被覆セル附近ニ於テハ
約南北ニ變ス、地層ハ其附近ニ於テハ甚シク褶曲シ傾斜又急ニシテ時
ニ逆轉スルコトアリテ下部ノ地層ヲ檢スルヲ得、西方ニハ傾斜甚タ緩
ニシテ西南西五六度ナリトス、斷層ハ甚タ多キモ地層ノ甚シク變動セ

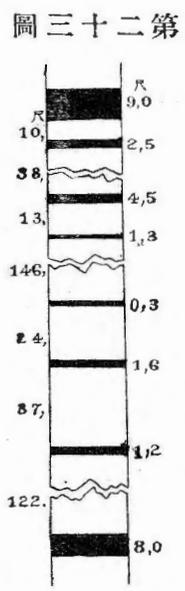
箱 二 十 二 圖
 三 池 炭 田
 縮 十 萬 分 之 一



ル東部ニアルモノヲ除ケハ皆小ニシテ採炭上困難ヲ感スヘキモノナシ、其方向ハ北東ニシテ殆ント並走ス、炭田ノ北西部ニ一大斷層東北東ニ走レルカ如ク其以北ニハ未タ炭層ヲ發見セス

炭層(第二十三圖參照)ハ八條アリト云フ、就中上部二炭層ハ重要ニシテ稼行スヘシ、最上部炭層ハ最モ重要ニシテ現時三池石炭ト稱セララルモノハ即チ本炭層ヨリ採掘セルモノニシテ殆ント一樣ノ厚サヲ以テ炭田ニ分布ス、厚サハ時ニ五尺ヨリ二十五尺ニ變スト云フ、本炭層ハ北端ヨリ南方ニ之ヲ追跡スルヲ得

三池炭田柱狀斷面圖 縮尺一千分之一



岐ス、前述ノ如ク地層ハ東方ニ甚タ擾亂シ炭層ノ露頭ハ茲ニ之ヲ檢スルヲ得ルノミニシテ約南北ニ走リ西方ニ急斜ス、然レトモ西方ニハ北

北端ヨリ南方ニ之ヲ追跡スルヲ得ヘク平均厚サ八九尺ニシテ八尺炭ト稱ス、南方ニハ地層ハ甚タ緩ナル背斜層ヲナシ炭層ノ厚サ四尺五寸ニ縮迫シ勝立ニ於テハ二炭層ニ分

部ニ西南西五度ニ傾斜シ、南部ニハ西方五度ニ傾斜ス、數多ノ小斷層ハ坑内ニ之ヲ檢シ近時火山岩ノ一小岩脈坑内ニ露ハレ炭層ヲ接觸變質セシム、第二炭層ハ八尺炭ノ下六尺乃至十尺ニアリテ平均厚サ五尺ナレトモ其發達ハ東部ニ限ラレタルカ如ク西部ニ於テハ未タ探究セラレス、最下部炭層ハ厚サ九尺、良炭部四尺アリテ近時比較的一様ナル厚サヲ以テ炭田ニ分布スルコトヲ發見シタレトモ未タ探掘セス、其他ノ炭層ハ厚サ一定セサルノミナラス分布モ亦一樣ナラスシテ近キ將來ニ於テ大規模ニ之ヲ探掘スルコト困難ナルヘシ

炭質 石炭ハ良質ノ有煙炭ニジテ粘結シ骸炭ノ製造ニ適ス、分析ノ結果次ノ如シ(百分中)

水	揮發物	固定炭素	灰	硫	黃	發熱量	種類
〇、六八	四〇、〇七	四八、〇八	一一、一七	三、六一	七、四六〇	英國熱單位	低度瀝青炭

炭量 炭層ノ分布ハ數多ノ試錐ニ依リ之ヲ檢セルモ海底ニ於テ尙試

雖スヘキ廣大ナル面積アリ、炭量ノ概算ハ第一種四千八百萬噸、第二種五億二千五百萬噸ナリ

三池炭田ノ南ニ廣ク分布セル第三紀層ハ薄キ炭層ヲ埋藏ス、石炭ハ嘗テ三池及高瀬間ニ稼行セラレタルモ地層甚シク擾亂セリ、其三池炭田ニ於ケル炭層トノ關係ハ明ナラス

唐津炭田 (第四版參照)

位置及沿革 唐津炭田ハ肥前ノ中部ニアリテ北西ニ長ク延長二十基米乃至二十七基米、幅約二基米乃至十三基米ノ區域ヲ包括ス、九州鐵道長崎線及唐津線ハ長崎、門司、唐津ノ三港ヲ連絡シ唐津ハ本炭田ノ主要ナル輸出港タリ、石炭ハ約二百年前ニ發見セラレタリト云ヒ明治維新前既ニ地方ノ工業ノ燃料ニ使用セラレ又ハ船舶ノ燃料トシテ輸出セラレタルモ其產出額ハ固ヨリ僅少ナリ、明治維新後鑛業ハ藩主ノ直轄ノ下ニ稼行セラレ後大部分海軍省ノ所有ニ歸セリ、幾クモナグシテ再ヒ會社又ハ個人ノ借區スル所トナリ明治十八年ヨリ大規模ノ鑛業企

圖セラレ探掘上改良セラレタルコト尠少ナラス、明治三十一年ニハ長崎、唐津ニ至ル鐵道完成シ日清、日露ノ戰役後ニハ石炭鑛業ニ於テ忘ルヘカラサル發達ヲナセリ、現時四大炭坑ノ外四十有餘ノ小炭坑稼行ス、產出額ハ次ノ如シ

年 別	產 出 額	年 別	產 出 額	年 別	產 出 額
明治二十二年	一五四、五一〇 <small>兩</small>	明治三十年	三九五、四〇七 <small>兩</small>	明治三十八年	九七三、八五五 <small>兩</small>
同二十三年	一七五、三四一	同三十一年	四九五、一七二	同三十九年	一、〇二九、二九七
同二十四年	二九四、六六三	同三十二年	五二八、六六二	同四十年	一、〇四〇、八四六
同二十五年	二五七、四七四	同三十三年	六五二、一五九	同四十一年	一、〇三八、一〇六
同二十六年	二四六、六一〇	同三十四年	七三七、一三一	同四十二年	九四三、六一九
同二十七年	三二九、七三一	同三十五年	九〇五、六六六	同四十三年	九四二、六四四
同二十八年	四〇一、九九七	同三十六年	九五〇、二九一	同四十四年	一、一七四、二五六
同二十九年	四二八、六六四	同三十七年	九七四、四七六		

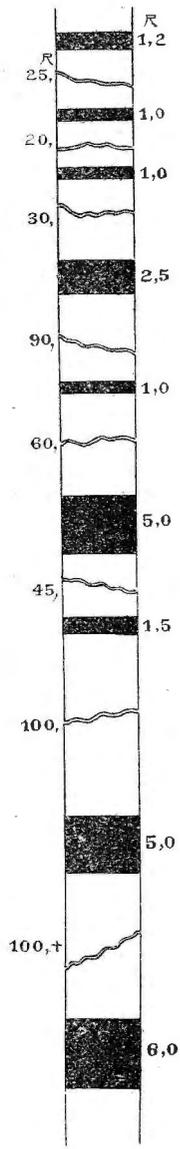
地形及地質 炭田ハ波狀ノ丘陵地ニシテ岸嶽ヲ最高トシ高サ三百三十八米アリ、安山岩及玄武岩ノ如キ火山岩ハ含炭層ヲ被覆シテ稍高キ山脈又ハ孤立ノ山嶽ヲナシ中部ニ最モ高ク八幡嶽ヲ最高トシ高サ七百三十七米アリ、多久川、武雄川、松浦川ノ三川ハ炭田ヲ流下シ其流路ニ狹長ナル平野アリ

基盤ハ結晶片岩ニシテ主ニ角閃片岩ヨリ成リ之ニ絹雲母石墨片岩ヲ挾メリ、其露出ノ區域ハ狹長ニシテ北東部ニ二箇所ニ之ヲ見ル、花崗岩ハ分布廣ク北部ヲ限レリ、第三紀層ハ不整合ニ是等ノ岩石ヲ被覆シ上部層、下部層ニ分ツコトヲ得、下部層ハ砂岩、頁岩ノ互層ニシテ炭層ヲ挾メリ、頁岩中ニアル化石ニ依リ中新期ニ屬スルナラント云フ、概言スレハ地層ハ約中部ニ一方向斜層ヲナセトモ變動ノ結果層向ハ甚タ區々ニシテ穹窿狀又ハ盆地狀構造ヲナシ斷層亦多シ、九大斷層アリテ約北東、北西又ハ東西ニ走り其最大ナルモノ、落差ハ千尺以上ニ達ス、層向ハ一般ニ北東及東西ノ間ニアリ、傾斜ノ角度ハ概ネ二十度以下ナルモ基

盤及花崗岩附近ニハ之ヨリ急ナリ、上部層ハ亦頁岩及砂岩ヨリ成リ巒岩ヲ挾メリ、砂岩ハ厚層ヲナシテ廣ク分布シ介殼化石ヲ有ス、本層ハ北西部ヨリ南東部ニ互リ廣キ面積ヲ有シ斷層ニ依リ下部層ニ接シ又ハ整合ニ之ヲ被覆ス、安山岩及玄武岩ハ炭田中大區域ヲ被覆スルノ外處々ニ第三紀層中ニ岩床又ハ岩脈ヲナシ或ハ小區域ニ散在ス

炭層ノ追跡シ得ヘキモノ十四五層アリテ厚サ二尺乃至六尺ナリ、就

第二十四圖 唐津炭田北部柱狀斷面圖 縮尺二百分之一



中三炭層ハ北部ニ於テ、一炭層ハ南部ニ於テ稼行ニ堪フ

北部區域ハ多久川及松浦川ノ涵域ヲ包括ス、明治四十四年五萬噸以上ヲ産出セル炭坑四アリ、即チ次ノ如シ

芳	谷	明治四十二年	二二九、一四二 ^噸	明治四十三年	二五〇、四七八 ^噸	明治四十四年	三一、九八九 ^噸
相	知		二二四、三五〇		二六一、五一九		三一九、〇四九
岸	嶽		九〇、三四二		九五、七三二		八八、〇五〇
岩	屋		三二七〇		四〇、二五六		八八、二五〇

十五炭層中九炭層ハ本區域内ニ約十九基米ノ間之ヲ追跡スルヲ得ハク五度乃至十度ノ角度ヲ以テ緩斜ス、平均厚サハ上部ヨリスレハ一尺二寸、一尺、一尺、二尺五寸、一尺、五尺、一尺五寸、五尺及六尺ニシテ其他ハ皆薄ク一般ニ二尺以下ナリ、重要ナルモノハ第四炭層、第六炭層、第八炭層及第九炭層ニシテ今日ニ至ルマテ稼行セラレ將來ニ於テモ亦稼行ニ堪フヘキモノナリ、其他ノ炭層ハ發達セルトキニ於テ稼行セラル、第四炭層ハ北方ニ薄ク僅ニ一尺ナルモ南方ニハ次第ニ厚ク南端ニハ五尺以上ニ膨大ス、本炭層ハ藥師谷、砂原炭坑ニ於ケルカ如ク中部及南部ニ

於テ稼行セラレ厚サハ中部ニハ二尺、南部ニハ四尺ニシテ南部ニ於テ將來有望ナルカ如シ、第六炭層ハ比較的多數ノ夾ミヲ有シ厚サ區々ナリ、本炭層ハ北部及南部ニ最モ好ク發達シ厚サ七尺アルモ中部ニハ薄シ、中部ニ於テハ野口、七曲等ノ炭坑ニ稼行セラレ厚サ僅ニ一尺五寸、南部ニ於テハ西郷、上野原、薄葉山、砂原等ノ炭坑ニ稼行セラレ厚サ二尺七寸アリ、第八炭層ハ厚サ五尺、良炭部二尺五寸アリ、第九炭層ハ厚サ六尺、良炭部四尺五寸ニシテ南方ニ厚シ、第八炭層及第九炭層ハ本炭田中最モ盛ニ稼行セラル、炭層ニシテ殊ニ北部ニ於テ相知、芳谷、岸嶽等ノ炭坑ニ於テ然リトス、南方ニハ第八炭層ハ岩屋、正院谷等ノ炭坑ニ稼行セラレ第九炭層ハ巖木炭坑ニ稼行セラル、是等二炭層ハ最モ重要ニシテ北部ニ於テ盛ニ稼行セラレ南部ニハ未タ之ヲ檢セサレトモ其賦存セラルコトハ試錐ニ依リ既ニ明ニシテ將來稼行セラル、ニ至ルヘシ南部區域ハ武雄川ノ區域ヲ包括シ延長六基米アリ、明治四十四年五萬噸以上ヲ產出セル二炭坑アリ、即チ次ノ如シ、

		明治四十二年	明治四十三年	明治四十四年
杵島 第一坑	七三、〇八〇 <small>順</small>	四二、四八三 <small>順</small>	六二、五三八 <small>順</small>	
杵島 第二坑	五八、三三二	七九、五六五	一六八、三九九	

四炭層ハ本區域ヲ通シテ之ヲ追跡スルヲ得、平均厚サハ上部ヨリスレハ三尺五寸、一尺、二尺五寸及三尺ナリ、其他ノ炭層ハ一般ニ薄ク二尺以下ナリ、層向ハ東西又ハ北西ニシテ北方又ハ北東ニ緩斜ス、傾斜ノ角度ハ十度以下ナリ、最上部炭層ハ最モ良好ニシテ稼行セラル、唯一ノ炭層ナリ、本炭層ハ東方ニ最モ厚ク大町附近ニ於テハ五尺以上ニ達スルモ西方ニハ次第ニ薄ク北方キタノ附近ニハ三尺五寸トナレリ、本炭層ハ嘗テ大町、北方間ニ稼行セラレタルモ其兩端ハ大斷層ニ依リ切斷セラレ茲ニ稼行セル赤坂口及北方ノ兩炭坑ハ廢棄セラレ杵島炭坑ノミ現存スルニ至レリ、大町ノ東方ニハ炭層ハ尙之ヲ厚ク認ムルヲ得ヘキモ北方ノ西方ニハ尖滅スルモノ、如ク且ツ火山岩ノ岩脈ニ切斷セララル、北

東ニハ本炭層ハ地下ニ没シ探鑛ノ必要アリ
 北部及南部區域ノ炭層相互ノ關係ハ未タ明ナラサレトモ南部ノ最上
 部炭層ハ北部ノ第四炭層ニ相當スルモノ、如シ
 炭質 石炭ハ有煙炭ニシテ粘結ス、分析ノ結果次ノ如シ(百分中)

水	揮發物	固定炭素	灰	硫	黃種	類
三、五六	四一、三六	四五、九九	九、〇九	二、〇六	低度瀝青炭	

硅化木ハ時ニ炭層中殊ニ北部區域ニ於ケル第九炭層ニ埋藏セラレ、南
 部區域ニ於テハ石炭ノ一部ハ火山岩ノ爲ニ燻石ニ變質スルモ其量甚
 タ多カラス
 炭量 第一種炭量ヲ計算スルニハ尙正確ナル調査ヲ要スルモ茲ニ在
 來ノ調査ニ依リ概算セルニ第一種炭量ハ千七百萬噸、第二種炭量ハ一
 億千二百萬噸ナリ

佐世保炭田

位置及沿革 佐世保炭田ハ肥前ノ西部ヲ占メ南北約三十五基米、東西約二十八基米ニ互レル廣大ナル面積ヲ包括ス、佐世保軍港ハ炭田ノ南部ニアリテ鐵道ノ布設アリ、本炭田開發ノ時代ハ明ナラサレトモ石炭ハ明治維新前既ニ採掘セラレタルコトハ疑ヲ容レス、本地方ノ石炭鑛業ハ本邦ノ他ノ炭田ニ於ケルカ如ク明治八年以來次第ニ盛大トナリ數多ノ炭坑海岸附近ニ開發セラレタリ、然レトモ炭層薄ク鑛業永續セスシテ數多ノ廢坑殊ニ海岸附近ニ多シトス、現ニ稼行セル炭坑ハ其數百以上アルモ規模大ナルモノナク唯松浦炭坑ノミ一年五萬噸以上ヲ產出スルノミニシテ明治四十四年ノ產額ハ六萬三千四百三噸ナリ、產出額ハ次ノ如シ

年 別	產 出 額	年 別	產 出 額	年 別	產 出 額
明治二十二年	六一八、八〇七 <small>噸</small>	明治二十四年	六〇二、六四二 <small>噸</small>	明治二十六年	三二六、一九三 <small>噸</small>
同二十三年	六五二、八九五	同二十五年	六〇六、一七四	同二十七年	三二五、〇七二

明治二十八年	三一七、四九八	明治三十四年	三五八、〇七〇	明治四十年	二七六、五九七
同二十九年	二九三、一五六	同三十五年	三一九、二九七	同四十一年	三三三、〇〇九
同三十年	四二〇、八六七	同三十六年	三〇九、八三二	同四十二年	三八九、八八七
同三十一年	三八八、二五七	同三十七年	二一六、五六三	同四十三年	三一七、一八五
同三十二年	二五四、五六〇	同三十八年	二三四、〇一五	同四十四年	三八九、五三七
同三十三年	三〇四、六〇〇	同三十九年	三一一、七四三		

地形及地質 本炭田ハ丘陵地ニシテ玄武岩之ヲ被覆シ臺地狀ヲナス、東部ニ屹立セル國見嶽最モ高ク高サ七百九十五米アリ、玄武岩臺地ハ國見嶽ヨリ西北西ニ連リテ炭田ノ分水嶺ヲナシ次第ニ海岸ニ低下シ其邊端ハ一般ニ斷崖ヲナス、河流ハ細小ニシテ海岸ハ出入ニ富ミ島嶼ハ沿岸ニ散在シ地質變動及浸蝕ノ甚シカリシヲ示セリ

炭田ハ主ニ第三紀層及玄武岩ヨリ成リ狹長ナル冲積平野ハ河流及海岸ニ沿ヒ發達ス、第三紀層ハ頁岩及砂岩ノ互層ニシテ炭層ヲ挾メリ、其

唐津炭田ニ於ケルモノトノ相互ノ關係ハ未タ明ナラス、層位上ヨリ之ヲ見レハ本層ハ唐津炭田ノ上部ニ該當スルカ如キモ本層中ニアル化石ハ其地質年代ヲ定ムルニ不充分ナリ、層向及傾斜ハ隨所異ナレトモ北東部ニハ層向ハ一般ニ約南北又ハ北西ニシテ西方又ハ南西ニ五度乃至二十度ノ角度ヲ以テ傾斜ス、南西部ニ於テハ層向ハ東西若クハ北東ニシテ北方又ハ北西ニ三度乃至二十度ノ角度ヲ以テ傾斜シ外觀向心構造ヲナセルカ如シ、斷層甚タ多ク内十條ハ大ニシテ北々西又ハ北西ニ走ルモノ多ク落差ハ時ニ三百尺以上ニ達ス、玄武岩ハ炭田ノ中部ニ廣域ヲ領シ此外炭田ノ處々ニ散在ス

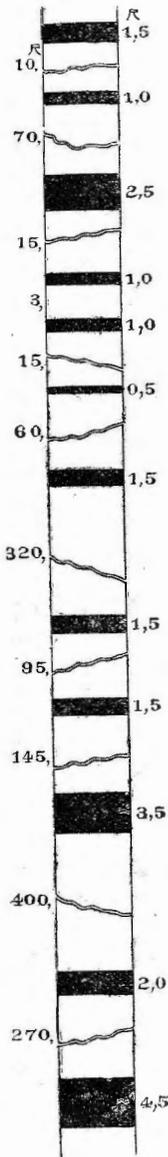
地質上ヨリ察スルニ西部區域ニ於ケル炭層ハ最上層、北東部ニ於ケルモノハ最下層ナルカ如シ、含炭層ノ總厚ハ二千三百尺ナリト云フ

炭層ハ其數甚タ多ク能ク發達セルトキハ十二層ヲ數フヘシ、厚サハ區々ニシテ多クハ五寸乃至六尺ノ間ニアリ(第二十五圖參照)

北東部區域ニ於ケル炭層ハ沿岸又ハ海岸ニ近ク露出ス、層向ハ伊萬

第二十五圖 佐世保炭田柱狀斷面圖

縮尺二百分之一



里灣ノ西海岸ニハ約南北ニシテ西方五度乃至二十度ニ傾斜シ北西ニハ層向ハ區々ニシテ一般ニ北西ヲ指シ南西五度乃至十八度ニ傾斜ス、五炭層中第三炭層及最下部炭層ヲ良好ナリトス、第三炭層ハ久原、楠久等ノ炭坑ニ稼行セラレ平均厚サ四尺七寸アリ、最下部炭層ハ北部ニ於テ波瀨ヨリ稻荷山炭坑ニ互リ同炭坑ニ稼行セラレ尙遙ニ之ヲ追跡スルヲ得ヘシ、本炭層ハ又福島ノ南海岸ニ稼行セラレ、厚サハ一尺五寸乃至二尺ナリ、伊萬里灣ノ東海岸ニハ二炭層アリ、厚サ一尺乃至二尺ニシテ小規模ニ稼行セラル、其西海岸ニ於ケルモノトノ關係ハ未タ明ナラサレトモ斷層ノ存在ニヨリ推測スルニ西海岸ニ於ケルモノ、上層ニ該當スルカ如シ

伊萬里灣ノ北西ニ當リ北岸ニ露出スル炭層ハ皆薄ク其發達セルトキニ於テモ厚サ一尺二寸ニ過キスシテ時ニ稼行セラル、ノミ

南部區域 佐世保ノ北ニアル相浦川ノ中流ニ沿ヒ薄層ノ五炭層アリ、第四炭層ハ厚サ二尺二寸ニシテ小炭坑之ヲ稼行ス、第五炭層ハ厚サ三尺ナルモ品位劣等ナリ、傾斜ハ河流ノ北方ニハ北方五度乃至十五度ニシテ河流ノ南方ニハ北西五度乃至十度ナリ、大斷層河流ニ沿ヒ南方ニ傾斜シ落差三百尺ヲ超ユ、佐世保ノ北東ニアル烏帽子山ノ頂上附近ニ厚サ一尺二寸ノ一層稼行セラレ北西ニ緩斜ス、佐世保ノ東方ニアル四炭層ハ北東ニ走リ彎曲シテ穹窿狀ヲナス、厚サハ二尺以下ニシテ最上部炭層ノ厚サ二尺ナルモノ主ニ稼行セラル、モ變動多ク又玄武岩脈ニ依リ變質ス、佐世保ノ西方約二百二十米ノ山腹ニ四炭層露出シ北西三度乃至十度ニ傾斜ス、第三炭層ハ主ニ稼行セラル、モノニシテ厚サ最モ厚キモ僅ニ一尺五寸ナリ

中部區域 ニハ十二炭層アリテ北部ニ於テ福井及槍卷間ニ玄武岩ノ

境界附近ニ露出シ下部四炭層ハ稼行ニ堪ヘ其厚サハ上部ヨリ一尺五寸、一尺五寸、一尺五寸及二尺ナリ、數多ノ炭坑之ヲ稼行ス、傾斜ハ北方又ハ北西ニ緩ナリ、佐々川ノ西方ニハ炭層ハ玄武岩ノ境界ニ沿ヒ北東ニ走リ北方ニハ北西三十五度、南方ニハ西北西十五度ニ傾斜ス、六炭層中第四炭層ハ主要ニシテ厚サ二尺五寸アリ、大野、平田山、佐々等ノ炭坑之ヲ稼行ス、南方永島、燒島等ノ如キ諸島ニハ七炭層北西十三度ニ傾斜ス、炭層中最下部炭層ハ厚サ六尺以上アリテ三組炭坑之ヲ稼行ス、其上ニアル二炭層ハ厚サ二三尺ナルモ炭質劣等ナリ

西部區域　ニハ炭層ハ海岸ニ近ク殆ント之ニ并行シ北々東ニ走リ西北西十二度乃至二十度ニ傾斜ス、炭層十一アルモ第二炭層ノ稼行セラレ、アルノミ、桐木、深浦、大名切等ノ炭坑之ヲ稼行ス、北部即チ江迎ニ於テハ炭層ハ薄キモ南部即チ桐木炭坑等ニハ厚ク厚サ二尺五寸アリ、一般ニ厚サハ一尺五寸ナリ、其外同厚ノ三炭層アルモ夾ミ多シ

炭質　石炭ハ有煙炭ニ屬シ粘結ス、分析ノ結果次ノ如シ(百分中)

水	揮發物	固定炭素	灰	硫	黃	發熱量	種類
二、三二	三四五〇	四五、九七	一七、二二	一、三七	六、二九〇	英國熱單位	低度瀝青炭

炭量 炭層ハ皆薄ク調査又不完全ニシテ炭量ヲ計算スルコト難キモ其面積及厚サニ依リ概算スルニ九千萬噸ナリ

崎戸炭田

崎戸炭田(第二十六圖參照)ハ、虻ノ浦島、崎戸島、御床島等ノ島群ヲ包括シ松島ノ北約四基米ニアリ、崎戸島ノ石炭鑛業ハ三年前開始セラレ産出額未タ少量ニシテ明治四十三年ニハ千七百七十五噸、同四十四年ニハ五萬七千四十八噸ナリ、崎戸群島ハ丘陵ヲナシ北部及東部ニ高ク次第ニ南部及西部ニ緩斜シ頁岩、砂岩ヨリ成リ上部ニ稀ニ凝灰岩ヲ挾メリ、一條ノ玄武岩脈ハ北東部ニ露出ス、斷層甚タ多ク隨テ層向區々ナルモ北部ニハ一般ニ南北、南部ニハ東西ナリトス、傾斜ハ北部ニハ西方ニシテ南部ニハ北方ナリ、傾斜角ハ甚タ低クシテ屢五度以下ナリ、最大斷層

圖 六 十 二 第

一 之 分 萬 五 尺 縮 田 炭 戶 崎

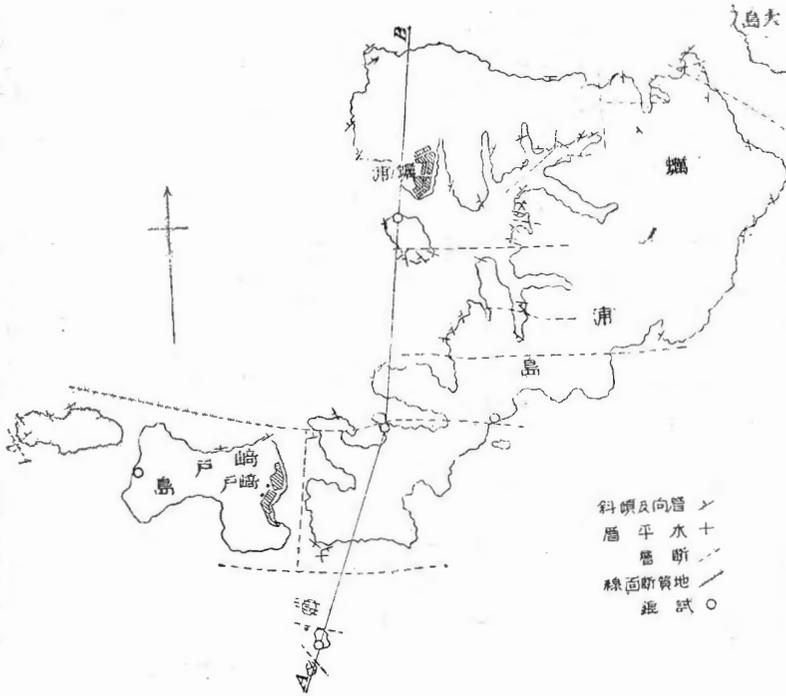
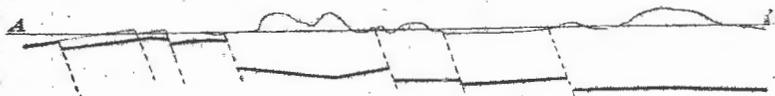


圖 面 斷

一 之 分 萬 五 平 水 尺 縮
一 之 分 千 五 万 二 立 直



ハ島ノ北東端
ニアリテ之ニ
依リ大島ト分
レ落差千尺以
上ニ達スルカ
如シ、他ノ四斷
層ハ東西ニ走
リ其他ノ四斷
層之ニ亞ク、其
落差ハ八十尺
ヨリ三百尺以
上ニ達ス、海底
ニ向ヒ採掘ス
ルコトハ松島

炭坑ニ於ケルト同様ノ状態ニアリ、本島ニハ石炭ノ露頭ナク試錐ニ依リ其存在セルコトヲ證セリ、即チ厚サ十五尺乃至二十尺ノ炭層アリテ二三ノ夾ミヲ挾有ス、堅坑掘下ニ際シ主要炭層ノ上部ニ厚サ三尺五寸、三尺及一尺ノ三炭層アリ、是等三炭層ハ試錐中ニハ之ヲ檢セサリシヲ以テ恐クハ一部分ニ發達セルモノナルヘキモ更ニ調査スルノ必要アリ、第一種炭量ハ千六百萬噸ニシテ第二種炭量ハ四千萬噸ナリ、石炭ハ有煙炭ニ屬シ分析ノ結果左ノ如シ(百分中)

水	揮發物	固定炭素	灰	發熱	種類
一、二八	三八、四五	四九、六九	一〇、五八	カロリー 英國熱單位 六、九八九	低度瀝靑炭

大島ハ蛸ノ浦島ノ北東ニ隣接シ石炭ハ地下ニ埋藏スルナルヘキモ炭層ノ好露出ナク東海岸ニアル露頭ハ炭質劣等ナリ、石炭ハ亦大島附近ノ小群島ニ發見セラル、モ未タ探究セラレス、崎戸島ヨリ西方五島群島ニ至ル數多ノ小島中ニ石炭ヲ産スト云フ

松島炭田

松島(第二十七圖參照)ハ肥前ノ西海岸ニ接シ長崎、佐世保間ノ略中央ニアリ、地形ハ低卑ナル臺地ニシテ中央ニ屹立セル二百二十米ノ遠見嶽ヲ最高トス、石炭ハ約百三十年前ニ發見セラレタリト云ヒ六十年前稍盛ニ採掘セラレタリ、明治十六年採掘困難トナリ中止ノ悲運ニ會セリ、四年後再興セラレタルモ三年間稼行ノ後坑内水ノ爲メ再ヒ中止セリ、明治三十九年松島炭坑島ノ北部ニ採掘ヲ開始シ爾後次第ニ盛大トナリ明治四十二年ニハ八萬六千三百噸、同四十三年ニハ十二萬七千三百五十六噸、同四十四年ニハ十五萬六千八百二十七噸ヲ產出セリ
本島ハ第三紀層ヨリ成リ中部ニハ玄武岩ニ依リ被覆セラシ、第三紀層ハ頁岩、砂岩及變岩ニシテ炭層ヲ挾ミ上、中、下ノ三部ニ區別スルヲ得ヘク總厚千五百尺ニ達ス、地層ハ甚タシク擾亂セラレ一般ノ層向ヲ知ルコト困難ナリ、傾斜亦處ニ依テ異ナルモ其角度ハ一般ニ緩ニシテ十度以下ナルコト屢ナリ、六大斷層アリテ其落差百尺以上ニ達ス、砂岩ニハ

シテ時ニ之ヲ探掘ス、松島炭坑ニ於テハ第二炭層ハ第三炭層ト合一シ
 五尺炭ト稱シ稼行セラル、第三炭層ハ最モ重要ニシテ夾ミト共ニ厚サ
 十尺以上ニ達シ良炭部四五尺アリ、本炭層ハ厚サ時ニ十五尺五寸ニ膨
 大シ良炭部十四尺ニ達スルコトアリ、最下ノ二炭層亦稼行セラレ厚サ
 四尺乃至六尺、良炭部二尺五寸乃至四尺ナリトス、第一種炭量千萬噸ニ
 シテ第二種炭量二千八百萬噸ナリ、石炭ハ有煙炭ニ屬シ粘結性ナリ、分
 析ノ結果左ノ如シ(百分中)

水	揮發物	固定炭素	灰	硫 責		比 重	種 類
				カ ロ リ	英 國 熱 單 位		
一、三三三	三八、四六	四八、九〇	一一、三三	二、二三	六、八五九	一、三九〇	低度瀝 青炭

瀬戸ハ肥前ノ西海岸ニアリテ松島ト相對ス、茲ニ露出セル第三紀層ハ
 松島ノ連續ト思惟スヘキモノニシテ海岸ニ沿ヒ狹小ナル區域ニ露出
 ス、層向ハ北々東ニシテ東方又ハ西方ニ傾斜ス、傾斜ノ角度ハ屢十度以
 下ナリ、然レトモ茲ニハ石炭ノ露頭ナシ、蓋シ地層ハ松島ノ第三紀層ノ

上部ニ該當スルモノ、如ク試錐ニ依リ探究スルノ必要アリ
福島ハ瀬戸ノ南ニ近接シ砂岩、頁岩ヨリ成ル、傾斜ハ東南東十五度乃至
二十度ナリ、厚サ二尺ノ一炭層西部ニ露出セルモ品位劣等ナリ、蓋シ上
部層及中部層ノ上部茲ニ露出セルモノ、如ク更ニ探究スルヲ要ス

高島炭田（第五版參照）

位置及沿革 高島炭田ハ長崎ノ南々西ニ當リ肥前ノ西海岸ニ近キ數
多ノ島嶼ヲ包括ス、有名ナル高島ノ石炭ハ二百年前ニ發見探掘セラレ
タリト云ヒ文化年間以來藩主ノ稼行ニ係レリ、明治元年歐式ノ探鑛法
始メテ高島炭坑ニ採用セラレ英國人之ヲ監督セリ、是レ實ニ本邦ニ於
ケル歐式ノ探掘法ノ嚆矢トス、本炭坑ハ六年後政府ノ有ニ歸セシモ翌
年民業ニ移リ明治十四年以來三菱會社ノ稼行ニ歸セリ、香燒島ノ石炭
ハ九十年前ニ發見セラレ小規模ニ探掘セラル
地形及地質 炭田ハ丘陵地ヲナセル數多ノ小島ヲ包括シ第三紀ノ頁
岩、砂岩ヨリ成ル、高島ハ地質構造甚タ錯雜シ一般ニ層向ハ北々東ニシ

テ西北西二十五度ニ傾斜スルモ北東部ニハ二大斷層ニ切斷セラル、其北東ニハ海底下ニ半向斜盆地ヲナシ斷層處々ニ之ヲ切斷ス、高島ノ西方海底ト本島トノ間ニハ一大斷層アリ、海底ニ於テハ層向ハ一般ニ北西ニシテ南西ニ傾斜シ傾斜ノ角度ハ十五度乃至二十五度ニシテ一大斷層北西ニ此地ヲ通過ス、小斷層亦甚々多ク概シテ南北又ハ北西ニ走レリ、端島ニ於テハ層向ハ北々東ニシテ西北西ニ傾斜シ傾斜ノ角度ハ北部ニハ二十度ニシテ南方ニハ六七十度ナリ、中ノ島ニ於テハ傾斜亦西北西ヲ示セルモ端島ニ於ケルカ如ク北西ニ走レル一大斷層アルカ如シ、香燒島ニ於テハ層向ハ一般ニ東北東ニシテ北々西ニ傾斜ス、傾斜ノ角度ハ五度乃至二十度ナリ

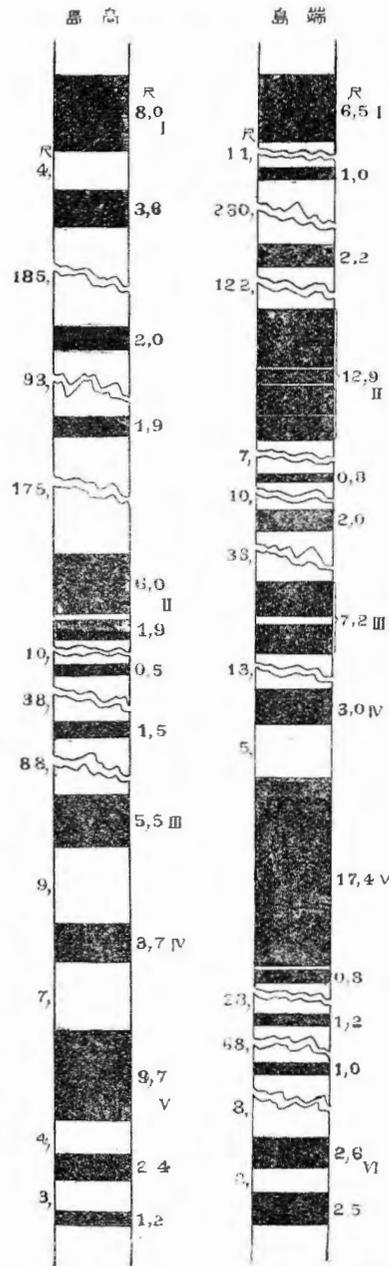
高島炭坑(第二十九圖參照)ハ高島ノ南ニアル小島ヲ包括シ現時高島及端島ニ於テ稼行セラル、產出額ヲ擧クレハ次ノ如シ

年	別	產	出	額	年	別	產	出	額	年	別	產	出	額					
明治二十三年		一	二	七	順	明治三十一年		六	五	五	順	明治三十九年		一	四	七	三	四	二

同二十四年	—	同三十二年	一六六、五二一	同四十年	一八五、八三九
同二十五年	—	同三十三年	一五九、四八一	同四十一年	一八七、七八四
同二十六年	一二九、一三八	同三十四年	一七一、九五七	同四十二年	一八二、五九三
同二十七年	一二六、五五一	同三十五年	一八九、一三五	同四十三年	二一四、三七七
同二十八年	一〇二、三二二	同三十六年	一九九、二五九	同四十四年	二三九、三八二
同二十九年	九七、三一九	同三十七年	二三一、四二九		
同三十年	—	同三十八年	二〇五、六五八		

炭層甚々多キモ六層重要ニシテ殆ント炭田ヲ通シテ賦存シ性質亦良好ナリ、陸地ニ賦存セル石炭ノ大部分ハ既ニ殆ント探掘シ盡サレ現時探掘ハ海底下ニアリ、高島ニハ六炭層アルモ斷層ノ結果并ニ海底ニ近ツクノ恐アルヲ以テ層向傾斜ニ向ヒ探掘スルコトハ現時中止ス、厚サハ上部ヨリスレハ六尺五寸、十尺、五尺、三尺、十七尺及五尺ナリトス、端島ニ於テ最下部炭層ハ未タ之ヲ檢セス、五炭層ヲ上部ヨリ數フレハ厚サ

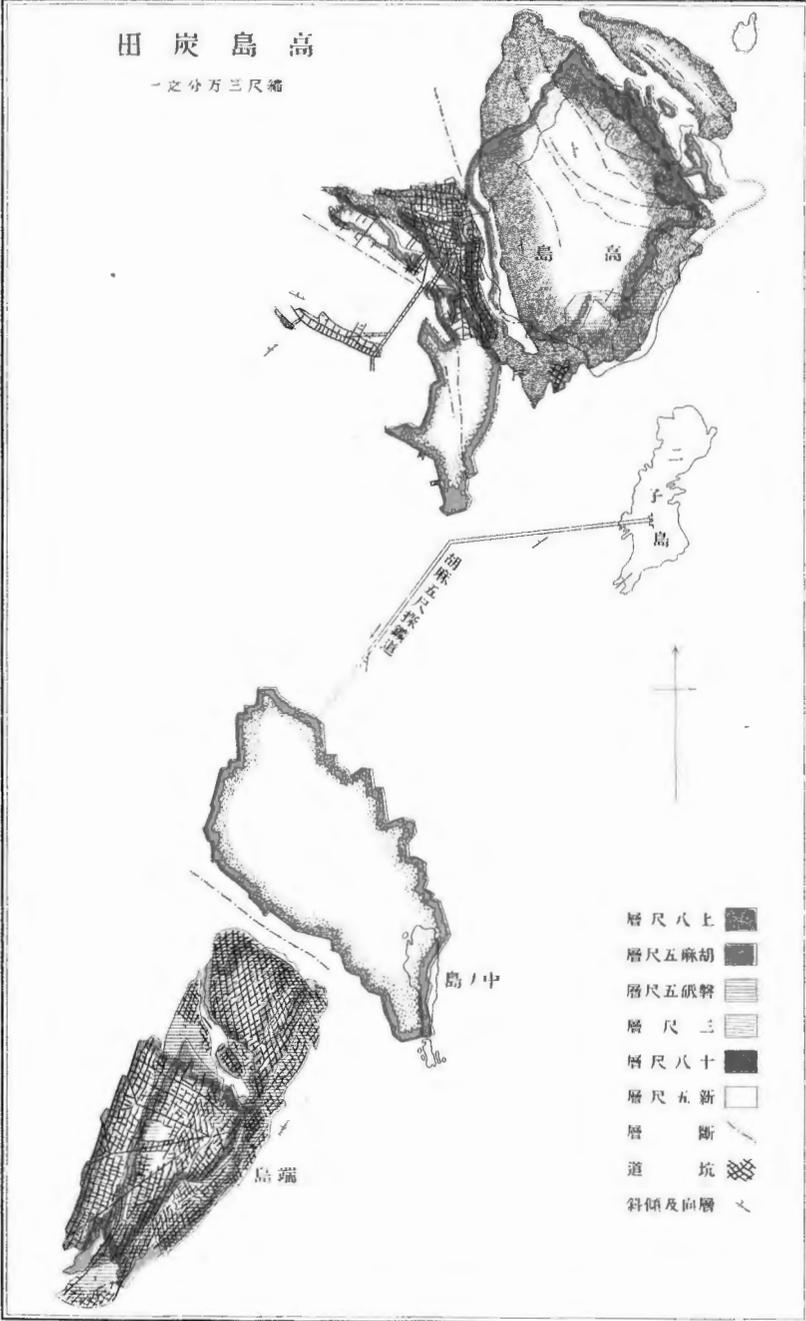
第二十九圖 高島及端島炭田柱狀斷面圖 縮尺二百分之一



八尺、七尺、五尺、三尺及九尺ナリトス、就中第四炭層ハ第五炭層ト共ニ稼
 行セラル、通風及坑内水排出ノ困難ナル爲メ層向傾斜ニ向ヒ探掘スル
 コトハ亦中止セリ、中ノ島ニ於テハ最上部炭層稼行セラレタルモ坑内
 水多キ爲メ中止セリ、而シテ第二炭層ノ存在スルコトハ試錐ニ依リ明
 ナリ、調査ノ結果、石炭ハ是等諸島間ノ海底下ニ存在スルコト明ナルモ
 通風、坑内水并ニ斷層ノ關係ヨリ探掘困難ナル、モノアルヘシ、現時ニ子

高島炭田

縮三尺分之一



島ヨリ斜坑ニ依リ海底下ノ石炭ヲ採掘スル企圖アリテ既ニ着炭セリ
ト云ヒ本炭坑ノ產出額ハ増加スルニ至ルヘシ
香燒島 石炭ハ香燒島ノ南部ニ稼行セラル、炭層ハ最モ好ク發達セル
トキハ十五層アリ、之ヲ上部ヨリ數フレハ厚サ四尺、三尺、五尺、二尺、四尺、
三尺、二尺、四尺、三尺、五尺、三尺、二尺、七尺、一尺五寸及三尺ナリ、南東部ニ於
テハ地層ハ北方六度ニ傾斜シ上部炭層ハ浸蝕作用ノ爲メ除去セラレ
茲ニ稼行セラル、モノハ第六炭層、第七炭層、第八炭層及第九炭層ニシ
テ厚サハ三尺、二尺、五尺及二尺ナリトス、其北西ニ隣接セル所ニ於テハ
地層ハ北々西二十度ニ傾斜ス、茲ニハ上部炭層ノ良好ナル部分ハ既ニ
稼行セラレ第十一炭層、第十三炭層現ニ稼行セラル
横島 ハ香燒島ノ南方ニ接近スル小島ニシテ試錐ノ結果三炭層ノ存
在セルヲ知レリ、厚サハ上部ヨリスレハ五尺、三尺及三尺五寸ナリ、明治
二十八年豎坑ヲ掘下シ翌年完成シ出炭アリシモ遂ニ中止シタリ、層向
ハ東西ニシテ北二十五度ニ傾斜ス

炭質 石炭ハ有煙炭ニ屬シ粘結シ本邦ニ於ケル最モ良好ナル石炭ノ一ナリ、分析ノ結果次ノ如シ(百分中)

水	揮發物	固定炭素	灰	硫黃	比重	發熱量	種類
一、一九	三八、三四	五二、四四	八、〇三	〇、六七	一、三四八	カロリー 英國熱單位	低度 瀝青炭
						七、二一〇	
						一二、七九八	

炭量 石炭ハ海底下ニ賦存セルヲ以テ正確ニ其炭量ヲ知ルコト難キモ在來ノ材料ニ依リ推測スルニ高島炭坑ノ第一種炭量二千五百萬噸、第二種炭量一億二千百萬噸ニシテ香燒島ニ於ケル第一種炭量八百萬噸、第二種炭量二千五百萬噸ナリ

日向ノ南東部ニ於ケル石炭

日向ノ南東部ニ當レル東海岸ニ沿ヒ低卑ナル波狀ノ丘陵地アリテ主ニ第三紀ノ頁岩及砂岩ヨリ成ル、石炭ハ本層中ニ介在セラル、モ一般ニ薄シ、大堂津ハ東海岸ニアリ、石炭ハ嘗テ此地ニ於テ稼行セラレタリ、一炭層厚サ一尺乃至四尺アリテ夾ミヲ有ス、地層ハ甚シク擾亂セルヲ

以テ遠距離ニ炭層ヲ追跡スルコト能ハス、蓋シ炭層ハ縮迫シテ扁豆状ヲナセルモノナラン、南海岸ニアル福島附近ニハ二炭層嘗テ稼行セラレタリ、厚サハ區々ニシテ一般ニ一二尺ナルモ時ニ夾ミト共ニ四五尺ニ膨大ス、地層變動セルヲ以テ炭層ヲ追跡スルコト難シ、蓋シ扁豆状ヲナセルモノナラン、其他ノ炭層ハ茲ニ之ヲ記述セス
石炭ハ有煙炭ニ屬シ粘結ス、分析ノ結果次ノ如シ(百分中)

水	揮發物	固定炭素	灰	硫	黃種	高度瀝青炭
一、六八	二二、〇六	五七、三五	一八、〇一	三、五〇	高度瀝青炭	

日向ノ南方ニアル種ヶ島ニハ日向ニ於ケルト同一ノ石炭ヲ産シ嘗テ稼行セラレタリ、炭層ノ厚サハ一尺以下ナリ

八重山炭田

八重山ハ琉球ノ南西端ニアル群島ナリ、石炭ハ入表島、小濱島及與那國島ニ露出スルモ小濱島及與那國島ニアルモノハ薄クシテ重要ナラス、

入表島ハ主ニ第三紀層ヨリ成リ古生層東海岸ニ小區域ヲ領シ珊瑚礁殆ント本島ヲ圍繞ス、第三紀層ハ主ニ砂岩ヨリ成リ薄キ頁岩ヲ夾ミ一般ニ北々東ニ走リ西方ニ緩斜ス、七炭層アリト稱スルモ第二炭層主要ニシテ海岸ニ近ク小規模ニ稼行セラル、厚サハ中部ニ於テ厚ク三尺乃至四尺五寸ナルモ北方ニハ一尺ナリ、其他ノ炭層ハ薄ク僅ニ一尺又ハ一尺以下ナリ、石炭ハ有煙炭ニ屬シ粘結ス、分析ノ結果次ノ如シ(百分中)

水	揮發物	固定炭素	灰	硫	黃種	類
〇、六八	二二、〇六	五七、三五	一八、〇一	三、五〇	高度瀝青炭	

産出額ハ明治四十三年ニ於テハ一萬三十六噸、同四十四年ニハ一萬千三百九十六噸ナリ、炭量小ニシテ概算三百萬噸ナリト云フ

(五) 臺灣

石炭(第三十圖參照)ハ臺灣ノ北部ニ産出シ第三紀層ニ介在セラル、洪積紀層中ニアルモノハ品位甚タ劣等ニシテ所々ニ産出スルモ重要ナラ

ス

臺灣炭田

臺灣炭田ハ臺灣ノ北部ニ廣大ナル面積ヲ占メ北東ノ海岸ヨリ南西苗栗ノ北東ニ達シ總延長約百四十五基米ニ互リ幅二基米乃至八基米アリ、發見ノ時代明ナラサレトモ嘉永年間ニハ既ニ基隆附近ニ於テ探掘セラレタリト云フ、約四十年前基隆附近ノ石炭探掘セラレ殊ニ八斗炭坑稍大規模ニ支那政府ニ依リ探掘セラレタリ、臺灣ノ本邦ニ併合後鑛業ハ次第ニ盛大トナリ産出額増加シタリ、併合前ノ産出額ハ明ナラサレトモ明治二十四年ヨリ同二十七年ニ至ル輸出額ハ概略二萬噸内外ナルヘシ、是ニ依リ推測スルニ總産出額ハ五萬噸ヲ超過セサルヘシ、明治二十八年ニハ日清戰爭ノ爲メ産額減少セリ、産出額ハ次ノ如シ

年	別	産	出	額	年	別	産	出	額	年	別	産	出	額
明治三十年		一九、四二五	噸		明治三十二年		三〇、〇五一	噸		明治三十四年		六四、八二〇	噸	
同三十一年		四二、五九一			同三十三年		四二、三三二			同三十五年		九七、三三九		

明治三十六年	八一、一八一 <small>噸</small>	明治三十九年	一〇三、一八三 <small>噸</small>	明治四十二年	一八三、三七五 <small>噸</small>
同三十七年	八二、六六〇	同四十年	一三五、二三三	同四十三年	二三一、五九五
同三十八年	九四、九五一	同四十一年	一五四、二九三	同四十四年	二五四、八七〇

石炭ハ有煙炭ニシテ一般ニ粘結ス、分析ノ結果次ノ如シ(百分中)

水	揮發物	固定炭素	灰	硫黃	發熱量	種類
五、七六	三八、〇二	五〇、〇三	六、一九	二、一六	六、七五九	英國熱單位 低度瀝青炭

炭田ハ中央山脈ノ北西部ヲ圍繞シテ狹長ナル區域ヲ占メ北方及西方ニ緩斜シ西方ニハ洪積臺地ニ終リ北方ニハ或ハ海岸ニ終リ或ハ火山岩ニ接ス、含炭第三紀層ハ主ニ砂岩及頁岩ノ互層ヨリ成リ數多ノ化石ヲ埋藏シ之ニ依リ中新期ニ屬スルコトヲ推測セリ、炭層ハ其數甚タ多ク一般ニ頁岩中ニ介在シ時ニ頁岩、砂岩中ニ稀ニ砂岩中ニ插間セラル、炭層ハ之ヲ十二群ニ分ツヲ得ヘク各群ニハ五層乃至九層アリ、内稼行ニ堪フヘキモノ二三層アリ、是等ノ稼行スヘキ炭層間ノ距離ハ三尺乃

至四百五十尺ノ間ニアリテ一般ニ二十尺乃至百六十尺ナリ、各群ノ距離ハ數百尺ニ達ス、地層ハ甚シク變動シ褶曲、斷層多シ、安山岩、玄武岩等ハ之ヲ貫通シテ噴出ス、炭層ハ百基米以上追跡スルヲ得ルモノ稀ナラス、厚サハ一般ニ六寸乃至三尺五寸ニシテ稀ニ七尺乃至九尺ニ達ス、傾斜ノ角度ハ二十度乃至三十五度ナルモ時ニ七八十度ニ急斜シ又ハ三度乃至十五度ニ緩斜スルコトアリ、炭層ハ臺北ノ北ニ於テ最モ發達シ南方ニハ屢洪積層ニ被覆セラル、本炭田ハ調査未タ不完全ナルヲ以テ炭量ヲ計算スルコト難ク且ツ炭層薄キヲ以テ地下深ク之ヲ探掘スルコト困難ナルヘク隨テ炭量ノ計算ニハ地下千尺乃至二千尺ヲ限レリ、概算セル炭量三億八千五百萬噸ナリ

各炭層群ニ就テ下部ヨリ上部ニ記述スヘシ

第一炭層群　ハ最下部ニアリテ金包里ノ北方ニ背斜層ヲナス、背斜層ノ北翼ニハ二炭層アリ、上部炭層ハ厚サ一尺二寸、下部炭層ハ八寸ニシテ二基米間之ヲ追跡スルヲ得ヘク北五十度東ニ走リ北西六十五度ニ

傾斜ス、南翼ニハ一炭層アリテ厚サ八寸ナリ、本炭層群ハ一タヒ大屯火山ニ依リ切斷セラレ再ヒ北投ノ北西ニ露出ス、石炭ハ金包里ノ西北西ニ稼行セラル、モ産出額僅少ナリ

第二炭層群　ハ金包里ノ南約四基米ニアル印潭仔ノ溪谷ニ露出ス、二炭層アリ、厚サ一尺二寸及八寸ニシテ嘗テ稼行セラレタリ、層向ハ約東西ニシテ南方二十度ニ傾斜ス、東方ニハ本炭層群ハ八斗仔ニ於テ海中ニ没シ茲ニ現ニ稼行セラル、モ産出額小ナリ、西方ニハ火山岩ニ依リ切斷セラル、モ再ヒ北投ノ南東三角埔及其里岸庄ニ露出シ北八十度東ニ走り南方十二度ニ傾斜ス、總延長ハ三基米ナリトス

第三炭層群　ハ瑪鍊港ノ西約八基米ニアル崁脚ノ溪谷ニ最モ能ク之ヲ檢スルヲ得ヘシ、二炭層アリ、下部炭層ハ厚サ四尺、上部炭層ハ五六寸ニシテ約南北ニ走り東方八度乃至十度ニ傾斜ス、東方ニハ炭層ハ北東ニ彎曲シ南東十度乃至二十度ニ傾斜シ遂ニ海ニ没ス、西方ニハ火山岩ニ切斷セラレ遙ニ西方ニ双溪及士林ニ露ハル、茲ニハ二炭層アリテ上

部炭層ハ厚サ三尺、下部炭層ハ五寸乃至二尺ナリ、石炭ハ小規模ニ處々ニ稼行セラレ總延長ハ二十基米ニ達スト云フ、炭脚ノ鑛區ハ約十三平方基米アリテ炭田中多量ノ石炭ヲ埋藏セル區域ノ一ナリ

第四炭層群 ハ瑪陵港ニ露出シ北六十度東ニ走リ南東二十度ニ傾斜ス、三炭層アリ、上部炭層ハ厚サ五寸、中部炭層ハ一尺三寸、下部炭層ハ一尺八寸ニシテ約十基米間層向ニ沿ヒ之ヲ追跡スルヲ得ヘシ

以上舉クルトコロノ四炭層群ハ皆淡水溪ニ依テ切斷セラレ又ハ其涵漑平野ニ沒ス、其西方ニハ炭層ハ地下深ク賦存スルモノ、如ク露頭ヲ發見セス

第五炭層群 ハ基隆ノ北方約四基米ノ外木山ノ海岸ニ露出シ北四十二度東ニ走リ南東二十五度ニ傾斜ス、本炭層群ハ南西ニ向ヒ約東西ニ彎曲シ南方ニ急斜シ遂ニ臺北ノ平野ニ沒ス、其延長約十六基米ナリ、三炭層アリ、上部炭層ハ厚サ一尺二寸、中部炭層ハ六尺、下部炭層ハ一尺二寸ニシテ時ニ三尺ニ膨大ス、三炭層中々部炭層及下部炭層ハ稍盛ニ稼

行セラレ石炭ハ骸炭ノ製造ニ適ス、石炭ハ處々ニ稼行セラレ最大ナル
大竿林炭坑ハ基隆ノ北約四基米ニアリ、大竿林炭坑ニハ三炭層アリ、上
部炭層及下部炭層ハ厚サ一二尺、中部炭層ハ二尺以上アリテ北四十二
度東ニ走リ南東二十七度ニ傾斜ス、産出額ハ明治四十一年ニハ四千九
百八十四噸、同四十二年ニハ五千二百二十七噸、同四十三年ニハ七千五百
五十四噸、同四十四年ニハ一萬六千八百九十九噸ナリ

本炭層群ハ一タヒ臺北ノ平野ニ没シテ更ニ臺北平野ノ西、三角湧ノ北
ニアル丘陵地ニ露出ス、北方ニハ層向ハ一般ニ北五十度東ニシテ南東
四十度ニ傾斜スルモ南方ニハ彎曲シテ不規則ナル瓢箪形ノ穹窿狀ヲ
ナシ屢八十度ノ角度ヲ以テ急斜ス、炭層ハ十二基米間之ヲ追跡スルヲ
得ヘク上部炭層ハ厚サ一尺二寸、中部炭層ハ二尺五寸、下部炭層ハ四寸
ナリ、中部炭層ハ厚サ并ニ品質最モ良好ニシテ粘結シ骸炭ノ製造ニ適
シ小規模ニ稼行セラル

第六炭層群　ハ薄層ノ二炭層ヨリ成リ八斗仔ノ南ヨリ基隆ノ東ニ走

リ田寮港ヲ通過シ延長約四基米アルモ重要ナラス
 五份山ヲ中央トシ一ノ伸長セル不規則ノ穹窿狀ヲナセル炭層群ハ背
 斜ノ結果第六炭層群ニ該當スルモノ、如シ、炭層三アリ、上部炭層ハ厚
 サ一尺、中部炭層ハ一尺五寸、下部炭層ハ八寸ナリ、南翼ニ於テハ露頭少
 ナキモ北翼ニハ石炭ハ處々ニ稼行セラレ一般ニ骸炭製造ニ供用セラ
 ル、南港山ノ北麓及公館街ノ北西ニアル露頭亦本炭層群ニ該當スルモ
 ノ、如シ

第七炭層群 ハ炭田中甚タ重要ニシテ八斗仔ノ海岸ニ露出シ北七十
 度東ニ走リ南方十八度ニ傾斜ス、西方ニハ本炭層群ハ次第ニ東方ニ彎
 曲シ一般ニ三十度ノ角度ヲ以テ南方ニ傾斜シ遂ニ臺北ノ平野ニ沒ス、
 其總延長約二十八基米アリ、四炭層中上部炭層及下部炭層ハ薄クシテ
 厚サ五寸乃至一尺二寸ニ過キス、中部ノ二炭層ハ一般ニ二尺乃至三尺
 ノ厚サヲ有ス、本炭層群ノ石炭ハ現時最モ盛ニ稼行セラレ田寮港、基隆、
 深澳(八斗)、石厝坑、國見、五份等ノ炭坑著名ナリ、基隆ノ東約一基米ニアル

田寮港炭坑ニハ三炭層アリ、厚サハ上部ヨリ六寸、一尺二寸及三尺ニシテ下部炭層主ニ稼行セラレ約東西ニ走り南方二十五度ニ傾斜ス、基隆炭坑ハ田寮港炭坑ノ東ニ隣接シ深澳炭坑ハ基隆ノ東約八基米ニアリテ共ニ田寮港ト同一ノ炭層ヲ稼行ス、深澳炭坑ニテハ層向ハ北六十八度東ニシテ南東十八度ニ傾斜スルモ基隆炭坑ニ於テハ斷層ノ結果層向、傾斜區々ナリ、石厝坑、國見ノ兩炭坑ハ七堵停車場ノ北三基米及北西六基米ニアリ、茲ニハ三炭層中厚サ三尺ノ中部炭層ヲ稼行ス、層向ハ北七十度東又ハ約東西ニシテ南方二十度ニ傾斜ス、五份炭坑ハ南港停車場ノ北東約六基米ニアリ、二炭層アリ、厚サハ上部炭層一尺三寸、下部炭層二尺八寸ニシテ北八十二度東ニ走り南方二十一度ニ傾斜ス、近年ニ於ケル以上炭坑ノ産出額次ノ如シ

田寮港	明治四十一年	明治四十二年	明治四十三年	明治四十四年
一、八四一 <small>噸</small>	一、九二六 <small>噸</small>	一九、四二三 <small>噸</small>	一七、三八五 <small>噸</small>	
一三、〇八九	二四、九一四	三二、九四四	四〇、三六	
基隆				

深澳	石厝坑	國見	五份
六、九一 <small>噸</small>	四、二一九	一、八〇〇	二、二五〇
八、五四七 <small>噸</small>	二、〇六一	一、〇六二	四、四三四
七、五二八 <small>噸</small>	三、五〇七	四、一八六	四、七八七
一七、六四二 <small>噸</small>	二、七四三	二、〇五〇	四、二三六

南港山ノ南西腹ヨリ三張犁及六張犁ヲ經テ公館街ノ南ニ至リ臺北ノ平野ニ没スル炭層群ハ三炭層ヨリ成リ上部炭層ハ厚サ一尺、中部炭層ハ一尺七寸、下部炭層ハ三尺ナリ、本炭層ハ其關係未タ明ナラサレトモ第七炭層群ニ該當スルカ如ク褶曲ノ結果茲ニ露出セルモノナルヘシ本炭層群ハ一タヒ臺北ノ平野ニ没シ更ニ第五炭層群ト共ニ臺北ノ西ニ露出シ半穹窿狀ヲナシ總延長約十六基米アリ、傾斜ハ南東翼ニ於テハ南東五十五度又ハ南方四十度ニシテ北西翼ニハ一般ニ急斜シ七八十度時ニ直立スルコトアリ、八炭層中三炭層ハ重要ニシテ厚サ上部ヨリ一尺二寸、二尺五寸及二尺ナリ、上部炭層及下部炭層ノ石炭ハ質良好ニシテ厚サニ變化少ナキモ中部炭層ハ厚サ一尺乃至七尺ニ變シ石炭

ハ粉碎セラレ良好ナラサルヲ以テ多ク採掘セス、石炭ハ處々ニ稼行セラレ山仔脚停車場ノ西約一基米ニアル山仔脚炭坑有名ニシテ明治四十一年ニハ四千四百七十七噸、同四十二年ニハ三千九百五十八噸、同四十三年ニハ四千七百八十九噸、同四十四年ニハ六千九百五十二噸ヲ産出セリ、本炭坑ニハ炭層三アリテ上部炭層ハ厚サ一二尺、中部炭層ハ三尺、下部炭層ハ二尺ナリ、層向ハ北五十度東ニシテ南東五十度ニ傾斜ス、數多ノ斷層アリ、南西翼ニ於ケル炭層ハ變動ノ結果採掘困難ナリ、下部炭層ハ質良好ニシテ厚サニ變化ナク最モ盛ニ稼行セラレ其他ノ二炭層亦稼行セラレ

第六炭層群ノ外側ニ伸長セル穹窿狀ヲナセル炭層群ハ第七炭層群ニ該當スルカ如ク延長五十基米アリ、良好ナル石炭ハ北翼ニ於テハ瑞芳ノ西方ニ露出シ稍盛ニ稼行セラル、西方ニ本炭層群ハ急斜シ又屢變動ヲ受ケ石炭ハ粉碎セラレ遂ニ火山岩ニ依リ切斷セラル、猴洞ハ南翼ノ東ニアリテ地層緩斜スルモ西方ニハ甚タ急ニシテ七十度ノ角度ヲナ

ス、二三ノ炭層アリテ厚サ七寸乃至三尺ナリ、三瓜子及瑞芳第一坑ノ兩炭坑著名ナリ、三瓜子炭坑ハ瑞芳ノ南西一、七基米ニアリ、地層ハ北六十八度東ニ走リ南西五十度ニ傾斜ス、三炭層中上部炭層ハ厚サ一尺二寸、中部炭層ハ三尺、下部炭層ハ一尺五寸ニシテ中部炭層獨リ稼行セラル、三貂嶺ノ北西翼ニアル瑞芳第一炭坑ニハ地層ハ北六十度東ニ走リ南西四十度ニ傾斜ス、二炭層アリテ上部炭層ハ厚サ一尺、下部炭層ハ二尺ニシテ共ニ稼行セラル、近年ニ於ケル産出額次ノ如シ

	明治四十一年	明治四十二年	明治四十三年	明治四十四年
三 瓜 子	七三三 <small>噸</small>	四五六 <small>噸</small>	三二四 <small>噸</small>	三三五 <small>噸</small>
瑞芳第一坑	一、一五四	三、六三二	四、五八三	二、五〇〇

第八炭層群 ハ基隆ノ東約六基米ナル深澳坑附近ニ最モ好ク露出シ且ツ稼行セラル、一般ノ層向ハ北六十度東ニシテ南東二十度ニ傾斜ス、基隆ノ南方ニアル大水堀ノ南ニハ地層甚シク擾亂シ炭層ヲ追跡ス

ルコト能ハス、本炭層群ハ再ヒ水邊脚ノ東五堵附近ニ露ハレ一背斜層、二向斜層ヲナシ又斷層ニ依リ切斷セラレ、本炭層群ハ尙西方ニ連續シ景尾街ノ北方ニ於テ沖積平野ニ没ス、其最モ好ク發達セルトコロハ東方ニシテ三炭層アリ、厚サハ上部炭層一尺二寸、中部炭層三尺三寸、下部炭層一尺ナリ、一般ノ層向ハ北七十度東ニシテ東南東十度乃至十五度ニ傾斜ス、興福附近ニ於テハ下部炭層ヲ發見セサレトモ上部炭層ハ厚サ一尺三寸、中部炭層ハ二尺三寸ナリ、基隆ノ南東三、四基米ニアル四脚亭炭坑ハ最モ重要ニシテ向斜盆地ヲ占ム、傾斜ハ緩ニシテ屢二十度ナリ、三炭層アリ、上部炭層ハ厚サ一尺二寸、中部炭層ハ三尺三寸、下部炭層ハ一尺ナリ、褶曲ノ結果本炭層群ハ南部ニ現ハレ第七炭層群ノ外側ニ伸長セル穹窿狀ヲナシ其北翼ニハ石炭ハ各所殊ニ東部ニ稼行セラレ北方又ハ北々西五十度ニ傾斜ス、本炭層群ハ西方ニハ屢火山岩ニ依リ貫カレ南港山ノ南東ニ終リ南翼ニ移レリ、南翼ニ於テハ石底ヨリ東方基隆川上流ニ沿ヘル區域ハ將來稼行スヘキ區域ニシテ三炭層アリ、厚

サ五寸乃至三尺三寸ニシテ約東西ニ走リ南方十度ニ傾斜ス、東方ニハ本炭層群ハ火山岩ニ依リ切斷セラレ茲ニ傾斜ハ北方ニ轉シ南翼トナレリ、石炭ハ火山岩ノ爲メ接觸變質作用ヲ受ケ無煙炭ニ變スル處アリ、炭層ノ延長ハ約六十基米ナリ、瑞芳第二坑、四份仔炭坑著名ナリ、瑞芳第二炭坑ハ瑞芳ノ北東約二基米ニアリテ二炭層ヲ埋藏ス、上部炭層ハ厚サ一尺、下部炭層ハ二尺乃至七尺ニシテ平均二尺五寸ナリ、其層向ハ北五十度東ニシテ北西五十八度ニ傾斜ス、南港停車場ノ南約四基米ニアル四份仔炭坑ハ厚サ一尺乃至三尺ノ二炭層ヲ埋藏ス、本炭坑ハ西端ニアルヲ以テ兩翼ニヨリ傾斜異ニシテ北方ニハ北々西四十度、南方ニハ南々東二十五度ナリ、近年ニ於ケル以上三炭坑ノ產出額ハ次ノ如シ

	明治四十一年	明治四十二年	明治四十三年	明治四十四年
四脚亭	一四、〇〇七 <small>噸</small>	一八、六九九 <small>噸</small>	四一、三二七 <small>噸</small>	五〇、三二七 <small>噸</small>
瑞芳第二坑	二、二六二	三、二八三	三、〇三六	四、〇七五
四份仔	三、七四二	三、四五八	四、二〇〇	四、一四八

南勢角ノ背斜層ノ兩翼ニ露ハレ遙ニ南西ニ連レル炭層群ハ第八炭層群ナルカ如シ、背斜層ハ遙ニ苗栗ノ南方ニ連リ炭層ハ兩翼ニ處々ニ露出シ其延長ハ八斗ヨリ之ヲ計ルニ百二十基米ヲ超ユ、鹿藨ニハ三炭層アリ、厚サ上部炭層一尺八寸、中部炭層一尺五寸、下部炭層一尺八寸ニシテ北四十五度東ニ走リ南東二十三度ニ傾斜ス、三角湧ノ東成福ヨリ南方ニハ炭層次第ニ薄ク鑛業微々トシテ振ハス、唯處々ニ甚々小規模ニ稼行セラル、ノミナルモ大南埔ニハ厚サ四尺ノ炭層北三十度東ニ走リ西北西六十五度ニ傾斜シ又厚サ九尺ノ一炭層北河ニ露出ス、牛埔、清水坑ノ兩炭坑ハ著名ナリ、牛埔炭坑ハ枋橋停車場ノ南東約五基米ニ位ス、三炭層アリ、上部炭層ハ厚サ七寸、中部炭層ハ一尺、下部炭層ハ一尺五寸ナリ、一背斜層本區域ヲ通過シ隨テ傾斜ハ南北ニ於テ異ナレリ、傾斜ノ角度ハ十五度乃至二十度ナリ、清水坑炭坑ハ同名ノ停車場ノ南約六基米ニアリ、三炭層ハ本區域ヲ通過セル背斜層ノ兩翼ニ露出ス、層向ハ北四十五度東ニシテ傾斜角ハ二十度乃至六十度ナリ、炭層ノ厚サハ上

部ヨリスレハ一尺八寸、一尺五寸及一尺八寸ナリ、火山岩ノ噴出ノ爲メ石炭ハ多少變質ス、以上炭坑ノ產出額次ノ如シ

清水坑	牛埔	明治四十一年	明治四十二年	明治四十三年	明治四十四年
	四、三二一 <small>噸</small>	七、一九九 <small>噸</small>	六、〇四一 <small>噸</small>	五、四三九 <small>噸</small>	
	五二	五〇九	三、三八六	三、二九九	

第九炭層群 ハ基隆山ノ東約四基米ナル南仔吞庄ノ海岸ニ露出シ茲ニ稼行セラル、本炭層群ハ之ヨリ南西ニ向ヒ層向次第ニ東西ニ近ク遂ニ深坑街及景尾街ニハ殆ント東西ニ變シ景尾街ニ於テ沖積層下ニ沒ス、東方ニ本炭層群ハ背斜層及向斜層ヲナシ約二十基米ノ間之ヲ追跡スルヲ得ヘシ、本炭層群ハ再ヒ南勢角ノ南ニ露ハレ南西ニ走り處々ニ稼行セラル、即チ三角湧ノ南ニアル十三庄、大崙崙ノ南ニアル三層庄、田尾、南庄等ニ稼行セラル、田尾及南庄ニハ亦小背斜層并ニ向斜層アリ、其總延長ハ約百二十基米ニ達ス、二炭層アリ、南仔吞社ニ於テハ厚サ上部

炭層七寸、下部炭層一尺八寸ニシテ北二十度東ニ走り東南東二十度ニ傾斜ス、景尾街附近ニハ層向約東西ニシテ南方三四十度ニ傾斜ス、炭層ハ上部炭層一尺五寸、下部炭層二尺ナリ、田尾ニハ層向北三十度東ニ轉シ東南東四十五度ニ傾斜ス、厚サハ上部炭層一尺五寸、下部炭層二尺ナリ、即チ本炭層群ハ山脈ト共ニ彎曲シ二炭層ヲ埋藏ス、炭層ハ寧口薄ク交通運搬容易ナラサルヲ以テ鑛業微々タリ

第十炭層群　ハ湧底ノ海岸附近ニ露出シ西南西ニ走り頂双溪ノ北、石底及深坑ノ南ヲ通過シテ新店ニ達ス、本炭層群ハ新店ヨリ南西ニ彎曲シ第九炭層群ト殆ント平行シ南庄ノ南ニ達シ茲ニ其形跡ヲ失ス、總延長約百二十基米ナリ、傾斜ハ南々東若クハ南東ニシテ傾斜ノ角度ハ一般ニ五十度ナレトモ田尾及南庄附近ニハ小背斜層及向斜層アリテ樹杞林ノ南ニ終ハリ一ノ伸長セル穹窿狀ヲナス、二炭層アリ、上部炭層ハ厚サ七寸乃至一尺二寸、下部炭層ハ二尺乃至二尺五寸ニシテ處々ニ甚タ小規模ニ稼行セラル

第十一炭層群　ハ頂双溪ノ南ヨリ東方鹽齏ノ海岸ニ達ス、茲ニ二炭層アリテ上部炭層ハ厚サ八寸、下部炭層ハ一尺八寸ニシテ北十度西ニ走リ南西三十度ニ傾斜ス、頂双溪ノ西方ニハ炭層處々ニ露出スルノミ、層向ニ依リ推測スルニ本炭層群ハ第十炭層群ト殆ント平行シテ南西ニ走レルカ如ク其總延長約百基米アリ

第十二炭層群　ハ頂双溪ノ南方ヨリ約西方ニ向ヒ屈尺ノ南ヲ通過シテ大嶺岾ノ南ニ走リ一ノ背斜層ヲナシ傾斜ノ角度ハ三十度乃至六十度ナリ、其總延長ハ約八十基米トス、二炭層アリテ上部炭層ハ厚サ四寸、下部炭層ハ一尺五寸乃至二尺ナリ

大正二年十二月二十日印刷

大正二年十二月二十三日發行

(定價金高九十錢)

著作權所有

農 商 務 省

印刷者 田 中 市 之 助
東京市神田區通新石町三番地

印刷所 東 陽 堂
東京市神田區通新石町三番地
電話(本局九七〇)

發行所 東 陽 堂
東京市神田區通新石町三番地
振替口座東京二三四三六番